

# 京都府遺跡調査概報

## 第 50 冊

丹後国営農地関係遺跡(東部地区)

- (1) 遠所古墳群
- (2) 太田古墳群
- (3) 通り古墳群

1 9 9 2

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版第1 遠所古墳群



遠所古墳群全景 (航空写真：南東から)

巻頭図版第2 遠所古墳群



(1) 遠所古墳群全景 (北東から)



(2) 遠所16～22号墳 (南西から)

巻頭図版第3 通り古墳群



(1) 通り古墳群全景 (航空写真)



(2) SX02 遺物出土状況 (西から)

## 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昨年開設から満10年を迎えました。当センターでは、これを記念し、特別展覧会や特別講演会の開催及び論文集の刊行等の事業を実施してきたところでありますが、これらの諸事業の遂行にあたりまして皆様方の御協力を賜りましたことを、厚くお礼申し上げます。ふりかえりますと、当センターの設立以後10年間に、公共事業は年々増加の一途をたどり、それに伴い、発掘調査は単に件数の増加だけでなく、近年は特に大規模化する傾向にあります。こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織・体制の強化を進め、調査・研究を図ってまいりました。このような発掘調査成果については、『京都府遺跡調査報告書』をはじめ、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を逐次刊行してまいりました。また、毎年、「小さな展覧会」・「研修会」を開催し、出土遺物や調査の概要を広く府民に紹介して、一般への普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成3年度に実施した発掘調査のうち、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した、遠所古墳群・太田古墳群・通り古墳群の各発掘調査を収めたものであります。本書が、学術研究の資料として、また、埋蔵文化財を理解する上で、なにがしかの役にたつところがあれば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された農林水産省近畿農政局をはじめ、京都府教育委員会・弥栄町教育委員会・大宮町教育委員会などの関係諸機関、並びに調査に直接参加・協力いただいた多くの方々に厚くお礼申し上げます。

平成4年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理 事 長 福 山 敏 男

## 凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。  
 (1)遠所古墳群 (2)太田古墳群 (3)通り古墳群
2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者	
丹後国営農地関係遺跡(東部地区)			農林水産省 近畿農政局	増田孝彦 岡崎研一	
(1)遠所古墳群	竹野郡弥栄町木橋 小字遠所147他	昭62.8.18～ 昭63.10.23 昭63.6.1～ 平元.2.23 平3.8.1～ 平4.3.7			
(2)太田古墳群	竹野郡弥栄町和田 野	平3.5.1～ 6.7			岡崎研一
(3)通り古墳群	中郡大宮町口大野 小字古土井418他	平3.5.8～ 10.25			石崎善久

3. 本冊の編集には、調査第1課資料係が当たった。

# 目 次

丹後国営農地(東部地区)関係遺跡昭和62・63、平成3年度発掘調査概要-----	1
(1) 遠所古墳群-----	3
(2) 太田古墳群-----	82
(3) 通り古墳群-----	85

# 挿 図 目 次

## 丹後国営農地関係遺跡(東部地区)

### (1)遠所古墳群

第1図	周辺遺跡分布図	4
第2図	丘陵古墳トレンチ配置図	6
第3図	遠所古墳群地形図	7
第4図	周辺古墳分布図	10
第5図	遠所1・2号墳地形図	13
第6図	遠所1号墳石室実測図	14
第7図	遠所1号墳石室断面図	15
第8図	遠所1号墳奥壁断面図	16
第9図	遠所1号墳出土遺物実測図(1)	18
第10図	遠所1号墳出土遺物実測図(2)	19
第11図	遠所1号墳出土遺物実測図(3)	20
第12図	遠所1号墳出土遺物実測図(4)	20
第13図	遠所2号墳石室実測図	22
第14図	遠所2号墳石室断面図	23
第15図	遠所2号墳石室奥壁断面図	23
第16図	遠所2号墳遺物出土状況	24
第17図	遠所2号墳出土遺物実測図(1)	25
第18図	遠所2号墳出土遺物実測図(2)	26
第19図	遠所2号墳出土遺物実測図(3)	26
第20図	遠所2号墳出土遺物実測図(4)	27
第21図	遠所2号墳出土遺物実測図(5)	28
第22図	遠所2号墳出土遺物実測図(6)	28
第23図	遠所3号墳地形図	29
第24図	遠所3号墳第1主体部実測図	30
第25図	遠所3号墳第2主体部実測図	30
第26図	遠所3号墳出土遺物実測図	31



第27図	遠所4・5号墳地形図	32
第28図	遠所4号墳主体部実測図	33
第29図	遠所4号墳出土遺物実測図	33
第30図	遠所5号墳主体部実測図	34
第31図	遠所5号墳出土遺物実測図(1)	34
第32図	遠所5号墳出土遺物実測図(2)	34
第33図	遠所5号墳出土遺物実測図(3)	34
第34図	遠所8号墳地形図	35
第35図	遠所8号墳主体部実測図	35
第36図	遠所8号墳出土遺物実測図	36
第37図	遠所9・13号墳地形図	37
第38図	遠所9号墳主体部実測図	38
第39図	遠所9号墳出土遺物実測図(1)	39
第40図	遠所9号墳出土遺物実測図(2)	40
第41図	遠所13号墳第1主体部実測図	41
第42図	遠所13号墳第2主体部実測図	42
第43図	遠所13号墳出土遺物実測図(1)	42
第44図	遠所13号墳出土遺物実測図(2)	43
第45図	遠所16・17・18号墳地形図	45
第46図	遠所16号墳主体部石列実測図	46
第47図	遠所16号墳出土遺物実測図(1)	46
第48図	遠所16号墳出土遺物実測図(2)	47
第49図	遠所18号墳主体部実測図	51
第50図	遠所18号墳出土遺物実測図	52
第51図	遠所19・20号墳地形図	53
第52図	遠所19号墳主体部実測図	54
第53図	遠所19号墳出土遺物実測図(1)	55
第54図	遠所19号墳出土遺物実測図(2)	56
第55図	遠所21・22号墳地形図	57
第56図	遠所21号墳主体部実測図	58
第57図	遠所21号墳出土遺物実測図	59
第58図	遠所22号墳主体部実測図	60

第59図	遠所23・24号墳地形図	61
第60図	遠所24号墳第1・2主体部実測図	62
第61図	遠所24号墳出土遺物実測図	63
第62図	遠所15・25・26号墳地形図	64
第63図	遠所27号墳地形図	65
第64図	遠所27号墳石室実測図	66
第65図	遠所27号墳石室断面図	67
第66図	遠所27号墳石室奥壁断面図	67
第67図	遠所27号墳閉塞石実測図	68
第68図	遠所27号墳遺物出土状況	69
第69図	遠所27号墳出土遺物実測図(1)	69
第70図	遠所27号墳出土遺物実測図(2)	70
第71図	遠所27号墳出土遺物実測図(3)	71
第72図	遠所27号墳出土遺物実測図(4)	71
第73図	遠所31号墳地形図	72
第74図	遠所31号墳石室実測図	73
第75図	遠所31号墳石室断面図	74
第76図	遠所31号墳石室奥壁断面図	74
第77図	遠所31号墳遺物出土状況	75
第78図	遠所31号墳出土遺物実測図(1)	76
第79図	遠所31号墳出土遺物実測図(2)	76
第80図	遠所32号墳地形図	77
第81図	遠所32号墳出土遺物実測図	78

## (2) 太田古墳群

第82図	太田古墳群位置図	82
第83図	太田古墳群周辺遺跡分布図	83
第84図	調査地地形測量図	84

## (3) 通り古墳群

第85図	調査地位置図及び周辺主要古墳時代遺跡分布図	86
第86図	調査地周辺地形図及び古墳分布図・トレンチ配置図	87
第87図	通り古墳群調査前地形図及び遺構配置図	88
第88図	1号墳地形測量図	90

第89图	1号墳主体部実測図-----	91
第90图	1号墳出土遺物実測図-----	92
第91图	2号墳地形測量図-----	93
第92图	2号墳第1主体部実測図-----	94
第93图	2号墳第2主体部実測図-----	95
第94图	2号墳第2主体部断面図-----	96
第95图	2号墳第3主体部実測図-----	96
第96图	2号墳出土遺物実測図-----	97
第97图	2号墳第2主体部出土玉類実測図-----	98
第98图	3号墳地形測量図-----	100
第99图	3号墳第1主体部断面図-----	100
第100图	3号墳第1・2主体部実測図-----	101
第101图	3号墳出土遺物実測図-----	102
第102图	3号墳第1主体部出土玉類実測図-----	102
第103图	S X 01・S X 02上部集石実測図-----	103
第104图	S X 01実測図(閉塞石検出状況)-----	104
第105图	S X 01実測図(閉塞石除去後)-----	104
第106图	S X 02実測図(閉塞石検出状況)-----	105
第107图	S X 02実測図(閉塞石除去後)-----	105
第108图	S X 01出土遺物実測図-----	106
第109图	S X 02出土遺物実測図-----	106

## 図 版 目 次

### (1) 遠所古墳群

- 図版第 1 遠所古墳群空中写真(北西から)
- 図版第 2 遠所古墳群空中写真(西から)
- 図版第 3 (1) 遠所 1・2・3 号墳調査前全景(南から)  
(2) 遠所 1 号墳天井石落ち込み状況(南から)
- 図版第 4 (1) 1 号墳石室全景(南から)  
(2) 遠所 1 号墳奥壁北東角細部(南東から)
- 図版第 5 (1) 遠所 1 号墳墳丘東側盛り土中遺物出土状況(西から)  
(2) 遠所 1 号墳西側溝全景(南から)
- 図版第 6 (1) 遠所 2 号墳石室全景(南から)  
(2) 遠所 2 号墳遺物出土状況(南から)
- 図版第 7 (1) 遠所 2 号墳墳丘南側裾土坑遺物出土状況(南から)  
(2) 遠所 3 号墳第 1・2 主体部全景(北西から)
- 図版第 8 (1) 遠所 3 号墳主体部全景(北東から)  
(2) 遠所 3 号墳転用枕出土状況(南東から)
- 図版第 9 (1) 遠所 4・5・6・7 号墳調査前全景(南西から)  
(2) 遠所 4・5 号墳全景(西から)
- 図版第 10 (1) 遠所 4 号墳主体部全景(北東から)  
(2) 遠所 4 号墳転用枕出土状況(北東から)
- 図版第 11 (1) 遠所 4 号墳溝全景(南から)  
(2) 遠所 5 号墳主体部全景(北東から)
- 図版第 12 (1) 遠所 8・9・13 号墳調査前全景(南西から)  
(2) 遠所 8 号墳主体部全景(北東から)
- 図版第 13 (1) 遠所 9 号墳調査前全景(南西から)  
(2) 遠所 9 号墳主体部全景(西から)
- 図版第 14 (1) 遠所 9 号墳遺物出土状況(西から)  
(2) 遠所古墳群遺物出土状況(西から)

- 図版第15 (1) 遠所9・13号墳調査前全景(南から)  
(2) 遠所13号墳主体部全景(西から)
- 図版第16 (1) 遠所13号墳主体部全景(北西から)  
(2) 遠所13号墳北西側小口部分遺物出土状況(北西から)
- 図版第17 (1) 遠所13号墳第2主体部全景(西から)  
(2) 遠所9・13・15・23・24・25・26・27・28号墳全景(西から)
- 図版第18 (1) 遠所16・17・18号墳調査前全景(西から)  
(2) 遠所16号墳主体部石列全景(南東から)
- 図版第19 (1) 遠所16号墳主体部遺物出土状況(南西から)  
(2) 遠所16号墳石列全景(南から)
- 図版第20 (1) 遠所17・18・19号墳調査前全景(北東から)  
(2) 遠所18号墳主体部全景(南東から)
- 図版第21 (1) 遠所18号墳遺物出土状況(西から)  
(2) 遠所18号墳遺物出土状況(北東から)
- 図版第22 (1) 遠所19号墳主体部全景(西から)  
(2) 遠所16・17・18・19・20・21号墳全景(北西から)
- 図版第23 (1) 遠所21号墳主体部全景(北西から)  
(2) 遠所21号墳遺物出土状況(北東から)
- 図版第24 (1) 遠所21号墳墓壇内出土状況(北から)  
(2) 遠所22号墳主体部全景(南西から)
- 図版第25 (1) 遠所16～22号墳全景(西から)  
(2) 遠所24号墳第1・2主体部全景(東から)
- 図版第26 (1) 遠所24号墳第1主体部土師器転用枕出土状況(東から)  
(2) 遠所24号墳第2主体部全景(北から)
- 図版第27 (1) 遠所27・28・29・30号墳調査前全景(東から)  
(2) 遠所26・27号墳全景(東から)
- 図版第28 (1) 遠所27号墳石室全景(西から)  
(2) 遠所27号墳墳丘斜面石材散乱状況(西から)
- 図版第29 (1) 遠所27号墳石室全景(西から)  
(2) 遠所27号墳石室全景(西から)
- 図版第30 (1) 遠所27号墳小口部閉塞状況(東から)  
(2) 遠所27号墳閉塞状況(西から)

- 図版第31 (1) 遠所27号墳遺物出土状況(北から)  
(2) 遠所27号墳奥壁付近遺物出土状況(南西から)
- 図版第32 (1) 遠所31号墳石室全景(西から)  
(2) 遠所31号墳溝全景(南東から)
- 図版第33 (1) 遠所31号墳小口部分(北から)  
(2) 遠所31号墳奥壁付近遺物出土状況(南西から)
- 図版第34 (1) 遠所31号墳全景(北西から)  
(2) 遠所31号墳石材検出状況(南東から)
- 図版第35 出土遺物(1)
- 図版第36 出土遺物(2)
- 図版第37 出土遺物(3)
- 図版第38 出土遺物(4)
- 図版第39 出土遺物(5)
- 図版第40 出土遺物(6)
- 図版第41 出土遺物(7)
- 図版第42 出土遺物(8)
- 図版第43 出土遺物(9)
- 図版第44 出土遺物(10)
- 図版第45 出土遺物(11)
- 図版第46 出土遺物(12)
- 図版第47 出土遺物(13)
- 図版第48 出土遺物(14)
- 図版第49 出土遺物(15)
- 図版第50 出土遺物(16)

(2) 太田古墳群

- 図版第51 (1) 太田5・6・7号墳試掘状況(南西から)  
(2) 太田7号墳近景(南西から)

(3) 通り古墳群

- 図版第52 古墳群全景(上空から)
- 図版第53 古墳群全景(西から)
- 図版第54 (1) 1号墳調査前全景(東から)  
(2) 1号墳調査後全景(東から)

- 図版第55 (1) 1号墳主体部全景(北から)  
(2) 1号墳鼓形器台検出状況(北から)
- 図版第56 (1) 2号墳調査前全景(西から)  
(2) 2号墳調査後全景(北から)
- 図版第57 (1) 2号墳第1主体部全景(東から)  
(2) 2号墳第1主体部歯牙検出状況(東から)  
(3) 2号墳墳丘小形丸底壺出土状況(西から)
- 図版第58 (1) 2号墳第2主体部全景(西から)  
(2) 2号墳第2主体部東小口石積状況(西から)  
(3) 2号墳第2主体部西小口石積状況(東から)
- 図版第59 (1) 2号墳第2主体部遺物出土状況(南から)  
(2) 2号墳第2主体部遺物出土状況細部(1)(高杯、南から)  
(3) 2号墳第2主体部遺物出土状況細部(2)(刀子、北から)
- 図版第60 (1) 2号墳第3主体部検出状況(東から)  
(2) 2号墳第3主体部上半除去後(東から)
- 図版第61 (1) 3号墳調査後全景(北から)  
(2) 3号墳第1・2主体部全景(東から)
- 図版第62 (1) 3号墳第1主体部遺物出土状況(東から)  
(2) 3号墳溝内遺物出土状況(南から)
- 図版第63 (1) S X01上部集石検出状況(北から)  
(2) S X02上部集石検出状況(西から)
- 図版第64 (1) S X01閉塞状況(1)(南から) (2) S X01閉塞状況(2)(西から)  
(3) S X01完掘状況(西から) (4) S X01遺物出土状況(西から)
- 図版第65 (1) S X02土層断面(北から) (2) S X02閉塞状況(西から)  
(3) S X02完掘状況(西から) (4) S X02遺物出土状況(西から)
- 図版第66 出土遺物(1)
- 図版第67 出土遺物(2)
- 図版第68 出土遺物(3)

## 付 表 目 次

### (1)遠所古墳群

付表1	昭和61・63年度、平成3年度国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表-----	1
付表2	国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表-----	2
付表3	遠所2号墳出土玉類観察表-----	28
付表4	遠所5号墳出土玉類観察表-----	35
付表5	遠所16号墳出土玉類観察表-----	48
付表6	遠所27号墳出土玉類観察表-----	71

### (3)通り古墳群

付表7	2号墳第2主体部出土ガラス玉類法量表-----	99
-----	-------------------------	----



## 国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡 昭和62・63、平成3年度発掘調査概要

### はじめに

本概要報告は、農林水産省近畿農政局が計画、推進している丹後国営農地開発事業(丹後東部地区)に伴い、昭和62・63年度、平成3年度の3年度にわたり調査を実施した京都府竹野郡弥栄町遠所古墳群、平成3年度末までに調査が終了した弥栄町太田古墳群、中郡大宮町通り古墳群の発掘調査概要である。

調査は、農林水産省近畿農政局丹後開拓建設事業所の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した。国営農地開発事業に伴う調査は、当調査研究センターでは、昭和60年度から開始し、付表2に示すように多大な成果があがっている。<sup>(注1)</sup>

現地調査は、昭和62年度には当調査研究センター調査第2課調査第1係長辻本和美、同調査員増田孝彦があたり、昭和63年度には、調査第2課調査第1係長辻本和美、同調査員増田孝彦、中川和哉があたり、平成3年度には、調査第2課調査第1係長水谷壽克、同主任調査員増田孝彦、同調査員岡崎研一、石崎善久が担当した。

概報の執筆に当たっては、各担当のほか、佐伯英樹氏((財)栗東町文化体育振興事業団)・林田登之氏(京都教育大学学生)に原稿をいただいた。また、通り2号墳出土の菌の鑑定は、京都大学理学部自然人類学研究室教授片山一道氏に依頼し、玉稿を賜った。

調査期間中、地元有志の方々や学生諸氏には、作業員及び補助員・整理員として作業に従事していただいた。<sup>(注2)</sup>また、調査にあたっては、弥栄町教育委員会、大宮町教育委員会をはじめとする関係諸機関の御協力を得ることができ、現地においても多くの方々の御協力と御指導を賜った。<sup>(注3)</sup>あらためて感謝の意を表したい。なお、調査に係る経費は、全額農林水産省近畿農政局が負担した。

(増田孝彦)

付表1 昭和62・63年度、平成3年度国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査期間	担当者
1	遠所古墳群	京都府竹野郡弥栄町 木橋小字遠所	昭和62年8月18日 ～昭和62年10月23日 昭和63年6月1日	調査第1係長 辻本和美 調査員 増田孝彦 調査第1係長 水谷壽克

			～平成元年2月23日 平成3年8月1日 ～平成4年3月7日	調査員 増田孝彦 調査第1係長 水谷壽克 主任調査員 増田孝彦 調査員 岡崎研一
2	太田古墳群	京都府竹野郡弥栄町 和田野小字太田	平成3年5月1日 ～平成3年6月7日	調査第1係長 水谷壽克 調査員 岡崎研一
3	通り古墳群	京都府中郡大宮町 大野小字通り	平成3年5月8日 ～平成3年10月25日	調査第1係長 水谷壽克 調査員 石崎善久

付表2 国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査期間	概要
1	有明古墳群・ 横穴群	大宮町三坂	昭和60年10月 ～昭和61年3月	古墳2基(4世紀後半～5世紀) 横穴3基(6世紀末～7世紀中葉)
2	桃山古墳群	峰山町内記	昭和60年11月 ～昭和61年3月	古墳2基(6世紀中葉)
3	宮の森古墳群	弥栄町鳥取	昭和61年4月 ～昭和61年7月	古墳4基(5世紀～6世紀中葉)
4	ゲンギョウの山 古墳群	弥栄町鳥取	昭和61年4月 ～昭和61年10月	古墳9基(4世紀後半・7世紀)
5	高山古墳群・ 高山遺跡	丹後町徳光	昭和61年7月 ～昭和62年9月	古墳6基(6世紀後半～7世紀前半) 中・近世墓30基、堅穴式住居跡1
6	普甲古墳群・ 稲荷古墳群	弥栄町井辺	昭和62年6月 ～昭和62年12月	古墳11基(5世紀前半～6世紀前半)
7	新ヶ尾東古墳群	弥栄町吉沢	昭和62年12月 ～昭和63年1月	古墳3基(6世紀中葉・後半)
8	鳥取城跡	久美浜町浦明	昭和62年5月 ～昭和62年6月	城跡(柱穴・土坑)13世紀
9	アバタ古墳群	久美浜町新床	昭和62年7月 ～昭和62年11月	古墳2基(6世紀末～7世紀前半)
10	スクモ塚古墳群	峰山町内記 弥栄町荒木	昭和63年4月 ～昭和63年7月	古墳4基(4世紀末～5世紀)
11	アバタ東1号墳	久美浜町新床	昭和63年4月 ～昭和63年7月	古墳1基(6世紀中葉)
12	アサバラ遺跡	久美浜町新	昭和63年5月 ～昭和63年7月	堅穴式住居跡5(5世紀後半～6世紀) 溝
13	鳥取城跡	久美浜町浦明	昭和63年6月 ～昭和63年8月	城跡(土坑・溝)15世紀 土坑(弥生時代中期末～後期初頭)
14	太田古墳群・ 下後古墳群	弥栄町和田野	平成元年8月 ～平成元年10月	古墳3基(6世紀初頭～中頃) 土坑5基(1基は弥生時代後期末)
15	川向1号墳	久美浜町大井	平成元年4月 ～平成元年7月	古墳1基(6世紀後半)
16	阿婆田窯跡群	大宮町大野	平成元年8月 ～平成2年1月	窯跡6基(8世紀初頭～後半)
17	下後古墳群・ 大田南古墳群	弥栄町和田野	平成2年4月 ～平成2年8月	古墳3基(5世紀代)
18	横浦古墓	久美浜町栃谷	平成2年4月 ～平成2年7月	近世墓1
19	山形古墓	久美浜町大井	平成2年4～6月	中世墓15・茶毘跡1・建物跡1

## (1) 遠所古墳群

## 1. 位置と環境

遠所古墳群は、京都府竹野郡弥栄町大字木橋小字遠所の標高約41～81mの丘陵上に立地する。弥栄町は、丹後半島のほぼ中央部に位置し、町域を北流する竹野川は、半島を縦断する最大の河川で、その竹野川が形成する沖積低地周辺には多くの遺跡が存在する。そして弥栄町においては、最大幅1.5km・長さ6kmと南北に長い沖積地を形成しており、その周辺の低丘陵地や、竹野川に合流する小河川である鳥取川、溝谷川、奈具川等の流れる谷部を中心に遺跡が分布している。

縄文時代の遺跡は、弥栄町においては明確に確認されていない。弥生時代中期になると奈具遺跡<sup>(注4)</sup>や、奈具岡遺跡<sup>(注5)</sup>等の主要遺跡が営まれるが、前期の遺跡では、竹野川を6kmほど下った河口部の丹後町竹野遺跡<sup>(注6)</sup>、上流の峰山町途中ヶ丘遺跡<sup>(注7)</sup>がある。また、これに続く峰山町扇谷遺跡<sup>(注8)</sup>は、二重の環濠をもつ大規模な高地性集落として著名である。弥生時代の墳墓については、大宮町帯城墳墓群<sup>(注9)</sup>、峰山町七尾遺跡<sup>(注10)</sup>、丹後町大山墳墓群<sup>(注11)</sup>で中期以降の台状墓群が丘陵地につくられており、弥栄町では、坂野遺跡<sup>(注12)</sup>で800個の玉類が出土した木棺直葬墓が確認されている。

古墳時代になると、扇谷遺跡と同一丘陵上に直径70mの円墳であるカジヤ古墳<sup>(注13)</sup>が築造され、中期初頭には竹野川河口に全長190mの前方後円墳である神明山古墳が築造される。そして、中期前半には弥栄町域の沖積地の狭隘部を抑えるかのように、全長105mの前方後円墳黒部銚子山古墳が存在する。これに続く中期中葉の首長墓はニゴレ古墳<sup>(注14)</sup>で、20～30mの方墳と考えられており、出土遺物には、武器や武器等の鉄製品、円筒形・朝顔形埴輪のほか、甲冑形・船形・椅子形・家形埴輪がある。また、この位置は弥栄町の沖積地から網野町(日本海)に続く道の間地点でもあり、全長198mの前方後円墳である網野銚子山古墳にも2.5kmの距離にある。中期中葉以降、小規模な木棺直葬墳が数多く造られるようになる。遠所古墳群は木棺直葬墳と6世紀中頃の竪穴系横口式石室墳が4基築かれているのが特徴で、丹後町高山古墳群<sup>(注15)</sup>に代表されるように丹後半島で横穴式石室が盛行する以前に、竪穴系横口式石室を採用するのは、新ヶ尾東古墳群<sup>(注16)</sup>とともに特徴的な例といえよう。

なお、古墳群周辺では古墳時代から奈良時代を中心とする、大規模な製鉄遺跡群が現在調査されており、その成果が期待されている。

(佐伯英樹)



第1図 周辺遺跡分布図(1/50,000)

- |            |            |              |               |            |
|------------|------------|--------------|---------------|------------|
| 1. 遠所遺跡群   | 2. ニグレ古墳   | 3. 鳥取古墳群     | 4. ゲンギョウの山古墳群 | 5. 宮ノ森古墳群  |
| 6. 桑田古墳群   | 7. 小宮谷古墳群  | 8. 普甲古墳群     | 9. 稲荷古墳群      | 10. 穂曾長古墳群 |
| 11. 国原古墳群  | 12. 弓木古墳群  | 13. 黒部銚子山古墳群 | 14. 西小田古墳群    | 15. 高山古墳群  |
| 16. 新谷古墳群  | 17. 新宮古墳群  | 18. 福西古墳群    | 19. 奈具遺跡      | 20. 奈具岡遺跡  |
| 21. 奈具古墳群  | 22. 坂野岡古墳群 | 23. 坂野遺跡     | 24. オテジ谷古墳    | 25. 寺谷古墳群  |
| 26. 愛宕山古墳群 | 27. 古天皇古墳群 | 28. 丸山古墳     | 29. 竜淵寺古墳     | 30. いもじや古墳 |
| 31. 太田古墳群  | 32. 大田南古墳群 |              |               |            |

## 2. 調査経過

遠所古墳群は、昭和47年度版の「京都府遺跡地図」では、横穴式石室墳2基を含む14基の古墳が記載されており、周辺ではニゴレ古墳が知られていた。その後、「国営農地開発事業」に先だち、昭和56年度に京都府教育委員会が実施した分布調査によると、遠所古墳群は、横穴式石室墳2基を含む計16基、ニゴレ古墳、新たに鳥取古墳群15基が加わり、その実数がかなり増加したことが明らかとなった。

古墳群の調査は、前述したように昭和62・63年度、平成3年度の3年にわたり実施した。

昭和62年度調査では、雑草が繁茂する8月から調査を開始したことや、丘陵全体の伐採を行うことができず、未確認古墳が存在することが懸念されたが、分布状況を充分把握することができなかつた。そのため、雑草の枯れる冬場を待ち、丘陵全域の踏査を行った。その結果、横穴式石室墳2基を含む古墳・古墳状隆起・台状墓状を呈するものなどが21か所確認された。昭和63年度には丘陵全体の伐採を行った結果、これらは39か所にも及び、丘陵最高所の稜線上には新たに石室墳が2基存在することが明らかとなり、古墳群全体で4基の石室墳を数えることとなった。古墳番号は、いずれも確認順に付したものである。

調査では、古墳の埋葬施設を確認するとともに、その築造方法を明らかにし、周辺の遺構の有無を確認することを主な目的として古墳周辺も掘削を行った。

### ①昭和62年度調査

昭和62年度調査は、1～3号墳、16～21号墳までが調査対象となったが、1号墳のみ発掘調査を行い、残る古墳は伐採、地形測量のみ行った。

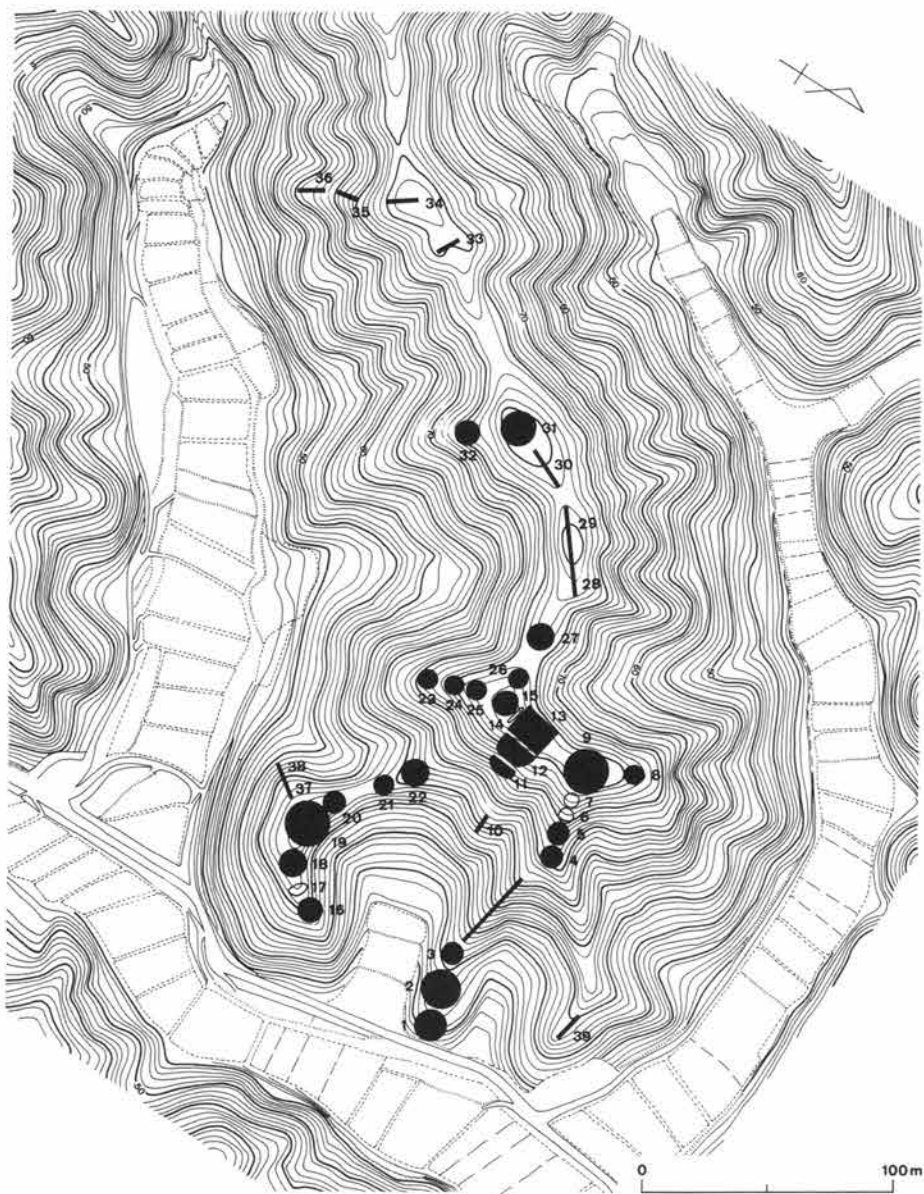
現地調査は、伐採作業から着手し一部伐採の終了した8月3日から地形測量を開始した。地形測量は、団地造成用測量杭を基準として行った地形測量(1/50、25cm等高線)である。掘削作業は8月10日に器材を搬入し18日から作業を開始した。1・2号墳については、昭和28年頃とニゴレ古墳が調査された昭和33年頃の二度にわたり石室の調査が行われたとされているが、詳細は不明である。そのため、墳丘中央部は大きく凹み、墳丘南半分は盛り土がなくなり、南裾にはその土砂が多量に堆積していた。

調査は、まず墳丘の表土を排除し、過去の調査時の排土をすべて除去することから着手した。石室が検出された時点では、予想以上に石室の遺存状況が悪く、天井石の落ち込みや側壁の倒壊が見られ、調査上危険となる石材の除去にかなりの時間を費やした。石室内部も過去の調査によりかなり凹凸があり、遺物も細片化した馬具、土器類が若干しか出土しなかつた。一方、2号墳と区画する溝南端付近からは、須恵器の一括資料が出土し追葬時期の決定資料となった。また、この1号墳の位置する丘陵と16号墳の位置する丘陵との間の谷部には、多量に遺物が散布することも明らかとなった。調査した1号墳石室は、丹

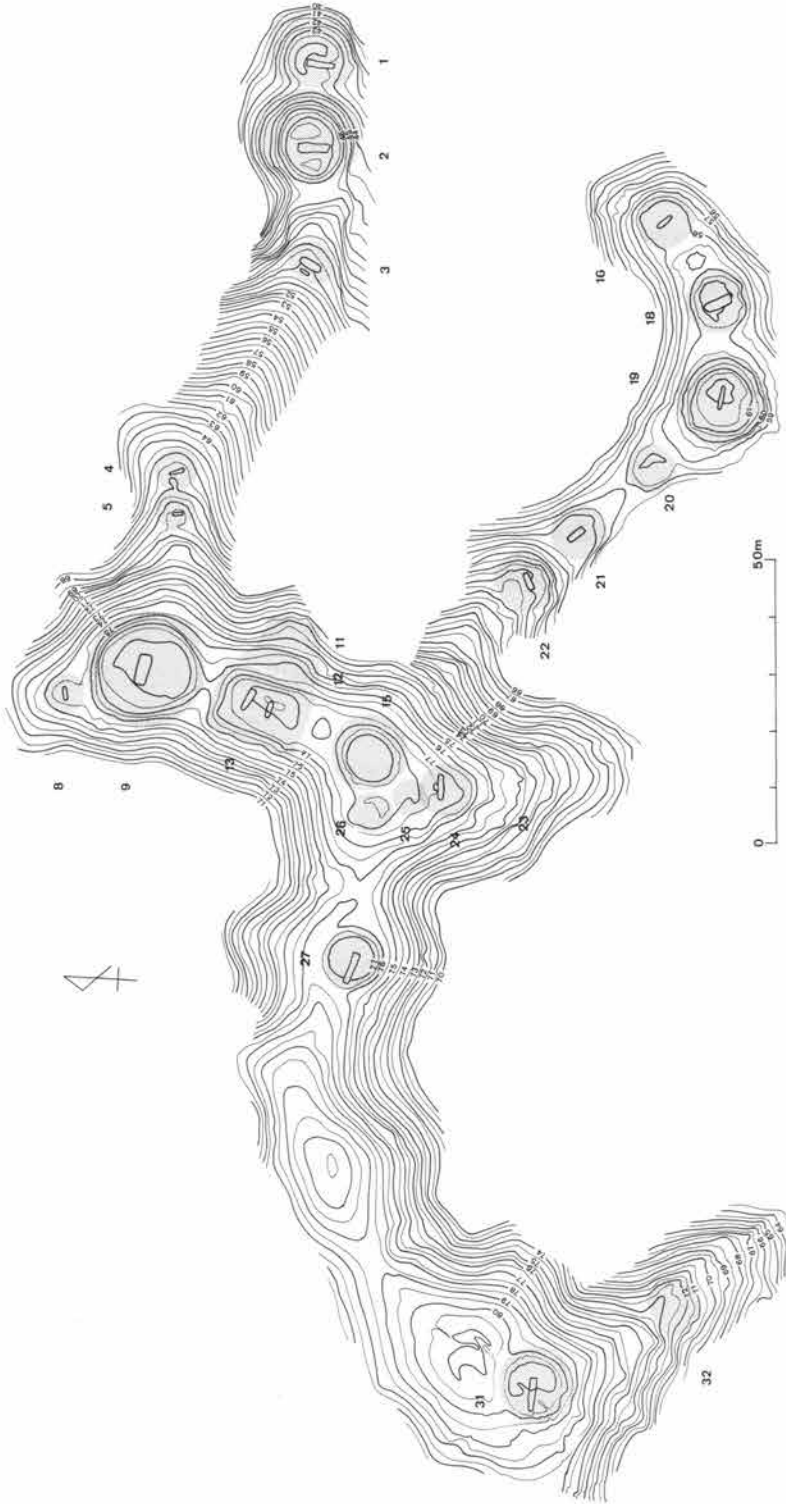
後半島では初の竪穴系横口式石室墳の調査例となった。実測作業、写真撮影はその都度行い、昭和62年10月23日にはすべての現地作業を終了した。現地説明会は、次年度調査と合わせて行うこととしたため、本年度は行わなかった。

### ②昭和63年度調査

昭和63年度調査は、1号墳を除くすべての古墳、古墳状隆起がその調査対象となった。調査は、昭和62年度に2・3号墳及び16～21号墳を伐採・地形測量を実施しているため



第2図 丘陵古墳トレンチ配置図(1/3,000)



第3図 遠所古墳群地形図

6月1日から掘削作業を開始した。この掘削作業と並行し3号墳、21号墳より高位側に位置する古墳の伐採作業を行った。伐採作業が一部終了した7月18日から団地造成用測量杭を基準とした杭打ち、地形測量(1/100、25cm等高線)を行った。

その結果、2号墳は1号墳同様ニゴレ古墳が調査された前後に石室内の調査が行われているため、墳丘中央部は大きく凹み、墳丘斜面にはその排土とともに多くの遺物が散乱し、石室内には埋葬当時の床面はごく一部しか残されていなかった。これに反し、27号墳は全く手が入っておらず埋葬時の状況をよくとどめていた。石室は、1号墳同様竪穴系横口式石室である。これら以外の稜線上に位置する古墳については、木棺直葬を内部主体とするものであったり、古墳築造時にとり残された丘陵の残丘となったものや、古墳ではあるが主体部が認められなかったものがある。また、古墳状隆起・台状墓状を呈していた6・7号墳、14～17、33～39号墳はいずれも自然地形であることが明らかとなった。

調査も半ばを過ぎた9月中旬頃に、ニゴレ古墳の調査に参加されていた池辺洋至氏(現あしぎぬ織物株式会社代表取締役社長)から、ニゴレ古墳調査時に遠所谷(遠所古墳群北側の谷)より出土した須恵器を調査団長であった樋口隆康氏に見せたところ、「遠所谷には須恵器登窯がある」と言われたという教示をうけた。そのため、遠所谷一帯の遺物散布状況の確認を行ったが、ニゴレ古墳調査時には水田として耕作されていたものが、現状では原野となっており遺物の散布を認められなかった。その後、12月になった段階で重機による丘陵裾部分の試掘調査を行った結果、須恵器登窯、製鉄炉、竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、炭窯や集落跡と思われる多量に遺物が散布する場所が確認された。それにより、新たに確認された古墳群周辺の遺構、古墳群も含めて遠所遺跡群と遺跡名称を変更した。

これらから、団地造成予定地内全域に遺構が存在する可能性が高くなったので、古墳の調査を一時中断し、造成予定地内の試掘調査を優先し、平成元年度以降の調査計画、造成計画の指針を出すこととなった。そのため、古墳群の調査は31・32号墳を除く古墳の埋葬施設の調査と、古墳状隆起・台状墓状を呈するものの試掘調査のみ行った。墳丘調査は、2・3・16～19号墳まで行い、造成計画の変更で保存されることになった4・5・20～22号墳は、墳丘の調査しなかった。以上から、平成元年度以降は丘陵最高所に位置する古墳墳丘の調査、31・32号墳の調査が残されることになった。調査が中断する形となったが、平成元年2月23日には平成元年度調査に向け一応の区切りをつけ、現地作業を終了した。

しかし、平成元年度以降の調査では古墳群周辺の遺構が造成予定地内全域に及んだため、造成計画との関連により古墳群の調査は、平成3年度に行うことになった。

なお、現地説明会は昭和62年度調査と合わせて12月15日に行ったが、昼前から降り始めた雪が説明会開始時には25cmの積雪になり、中止を余儀なくされた。



### ③平成3年度調査

平成3年度調査は、遠所遺跡群の調査の中で開始したため、継続した調査ができず長期間に及んだ。

昭和63年度調査の残りとなっていた尾根最高所に位置する8～15、23～27号墳の墳丘の調査を8月1日から開始した。遠所遺跡群の調査の合間をみて実測、写真撮影を行い、それらがすべて終了した10月1日より、31・32号墳の表土除去作業に着手した。

その結果、31号墳は1・2・27号墳同様、竪穴系横口式石室を内部主体としていたが、盗掘や採石により玄室中央部が破壊されており、石室自体は奥壁付近と横口部分がわずかに残存していたにすぎなかった。

32号墳は古墳と認められたが、盛り土流出に伴い主体部も崩壊したのか存在しなかった。

平成3年11月29日に遠所遺跡群と合わせて、古墳群全体の現地説明会を開催し、平成4年3月5日には器材の撤収を行い、すべての古墳群の調査を終了した。

### 3. 遠所古墳群と周辺の遺跡(第4図)

遠所古墳群は、弥栄町の西端、網野町との町境の標高40～81mの丘陵上に分布する。ここは、昭和33年に発掘調査され、冑や短甲や、舟形埴輪等が出土して注目を集めたニゴレ古墳(5世紀中頃)が位置する谷の南奥へ200mのところでもある。

このニゴレ古墳の北側すぐ横には、弥栄町と日本海を最短距離で結ぶ府道網野岩滝線が通じており、この道路は丹後半島を南東から北東に縦断する幹線道路でもある。ニゴレ古墳から遠所古墳群側にのびる道路は、遠所遺跡群中央部を縦貫し、鳥取と木橋の境の丘陵を取り囲むように谷あいを抜け再び網野岩滝線に通じている。この道路からは、古墳群北側では、網野町島津へ抜ける道と、南側では峰山町橋木、弥栄町和田野へと抜ける道路に分岐している。また、ニゴレ古墳北側では、丹後町徳光を経て砂方(日本海)へと通じている。いずれも、山越え谷越えの道路であり、現在のように道路網が整備される以前の生活幹線道路であったようであり、昭和40年頃までは頻繁に利用されており、自動車の普及とともにその半数は利用されなくなったようである。

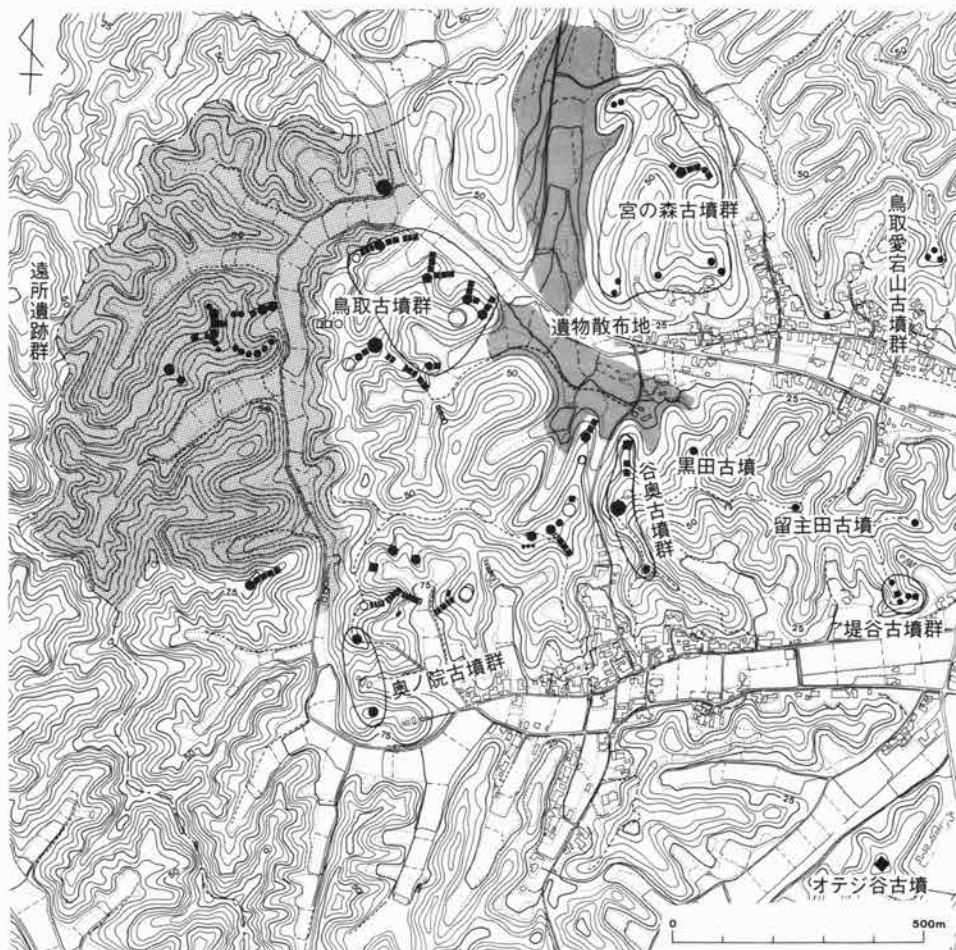
これらの道路は古代においても、幹線道路として利用されていたと考えられ、以下に述べる古墳の分布状況や製鉄遺跡分布とも密接な関係があるものと思われる。

古墳群は、谷の奥まったところにあるため、大半の古墳は周辺の丘陵に視野を妨げられ、平野部(竹野川流域)を見渡せないが、尾根最高所に位置する古墳からは、平野部はもとより日本海(網野町浅茂川海岸)を望むめる景勝地に築造されている。丘陵上には、1927年の丹後大震災の時にその影響でできたと思われる地すべり、地割れが各所にみられた。

遠所古墳群は、前述したが昭和63年度の古墳群周辺の試掘調査により、広大な範囲(約48ha)に広がる製鉄遺跡の中に位置することがわかり、遺跡名称も古墳群を含めて遠所遺跡群と変更した。遠所遺跡群全体としては、5世紀末～13世紀にかけての遺物が造成予定地内全域に散布している。遺構自体も丘陵稜部・斜面、谷部等に広範囲にわたっている。

昭和63年度の試掘調査から平成3年度までの調査結果によると、製鉄遺跡とそれに伴う集落跡からなっている。遺構の種類のみ列挙すると、製鉄炉・鍛冶炉・炭窯・窯状遺構・須恵器登窯・流路・溝・池状遺構、それらに伴う竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・柱穴、墓壙・土坑・祭祀用土坑・砂鉄埋納穴・砂鉄埋納土坑等、多種多様の遺構が検出されている。現在も調査中であり、調査が終了すると遺構の実数はかなりの数にのぼるものと思われる。

遺跡群の特徴としては、日本最古級に比定される6世紀後半の製鉄炉、登窯状炭窯が検出されており、奈良時代後半においては、原料から製鉄、精練鍛冶を経て製品まで仕上げ



第4図 周辺古墳分布図

る一貫した生産体制であった。また、出土した土器や鉄滓の供伴関係から、5世紀末～6世紀初頭頃に製鉄を行っていた可能性を示唆するところもあった。鍛冶工房は終始一貫して谷の入り口部分にあたる場所が利用されている。この鍛冶工房として利用された谷は、原料の集荷場であり、製品の出荷場でもあったようである。

周辺の遺跡分布状況を見ると、遠所遺跡群北東方の谷には鉄滓の出土が報告されている場所がある。また、宮ノ森1・2号墳南側の谷にも鉄滓の出土が知られており、最低2か所の製鉄炉が存在していたようである。この製鉄炉が存在していたと思われる谷は、6世紀前半～奈良時代後半までの遺物が多量に散布している。

遺跡群北方では、水田下層より多量に木炭が出土する場所も確認されている。西方では、網野町側で円形の炭窯数基も検出されている。南方側においては、鴨谷団地造成工事に伴う道路工事で補助燃焼口(横口)付炭窯が1基確認されている。このように、遺跡群周辺は遺跡群同様の利用状況が認められ、付近一帯が広大な製鉄遺跡群となるようである。

古墳も、前述したように、遠所古墳群は谷の奥まったところに位置しており、通常古墳の立地形態と異なっている。通常、平野部(竹野川)の見える丘陵上に多くの古墳が造られているが、平野部はもとより古墳前面がすぐ山となっており、展望がきく場所ではないところに造られていることになる。ただ、古墳群周辺には古墳群と同時期の集落跡があることからすると、古墳と集落という関係からみた場合、集落のすぐそばに古墳が造られたことになる。このことは、遠所遺跡群周辺でも共通しており、谷の奥まったところでも多くの古墳が立地している。いずれも、集落のすぐそばに造られ特異な分布状況を呈しており、製鉄遺跡との関連があるようにも想像させられる。

遠所遺跡群周辺の古墳の分布状況をみた場合、北東方では、横穴式石室を内部主体とする石穴古墳、石棚を持つ横穴式石室(7世紀初頭)や4世紀後半～5世紀前半の木棺直葬墳9基の計10基からなるゲンギョウの山古墳群<sup>(注19)</sup>、その南側には木棺直葬墳13基からなる宮ノ森古墳群<sup>(注20)</sup>(うち4基調査、4世紀後半～5世紀前半、6世紀前半)がある。北側の遠所遺跡群入り口部分には、ニゴレ古墳(5世紀中頃)が位置する。

一方、東側では木棺直葬墳15基からなる鳥取古墳群が知られていたが、開発に先立ち京都府教育委員会と弥栄町教育委員会が合同で行った分布調査によると、古墳・古墳状隆起・台状墓状を呈するものなどが、91か所も確認された。他の古墳同様、かなり谷奥部分にまで築造されている。ここでは、鉄滓も出土し、製鉄遺跡が存在することが明らかとなっており、周辺では広範囲にわたって遺物が散布する部分も認められる。さらに東側の鳥取集落の北側には、鳥取愛宕山古墳群・大將軍古墳群がみられる。

南側の木橋集落との間の丘陵上には奥ノ院古墳群、谷奥古墳群、堤谷古墳群、黒田・留

主田・赤井谷古墳群が立地している。

また、木橋集落入り口部分の南側の丘陵上には素環頭大刀が出土したオテジ谷古墳(5世紀前半～中頃)、坂ノ丘古墳群(14基)が立地している。

遠所古墳群南側部分についても、古墳・古墳状隆起を呈するものが5基確認されている。集落遺跡についても、鳥取・木橋地区に分布する古墳群周辺の谷部や緩傾斜の丘陵裾部からは、多くの土器類の散布が認められ、採集された土器類は5世紀末～12・13世紀にかけてのもので、遠所遺跡群の年代とも合致する。広範囲に遺構が分散することからすると、製鉄関連遺跡の可能性が強いと考えられる。しかし、遠所遺跡群では製鉄と古墳の年代が合致しても、古墳に供献・副葬された遺物の中に、鉄生産に関連するような遺物は認められなかった。このように、狭い範囲の中に多くの古墳、集落跡が存在することは、何らかの原因があったと考えられるが、古墳群の分布をみると、比較的大きい谷を中心に立地する傾向があり、古墳を挟んで両側ないしは3～4の谷を中心に展開することに気がつく。遠所古墳群でも同様な傾向があり、この付近に立地する古墳はいくつかのグループに分けられそうである。なかには、中期古墳と考えられる一群もあり、明らかに中期と考えられるものを除くと興味深い分布を示す。すなわち、2～3の古墳群の中心ないしその付近には、製鉄遺跡が存在することにも気がつく。古墳を造るには適した場所とは到底いえないところでもある。現時点では、日本の鉄生産開始時期が不明であるため断定はできないが、遠所遺跡群内には5世紀末ないしは6世紀初頭に製鉄を行っていた可能性を示唆する場所も確認されており、これらの古墳も鉄生産に関係のある古墳であった可能性も考えられる。

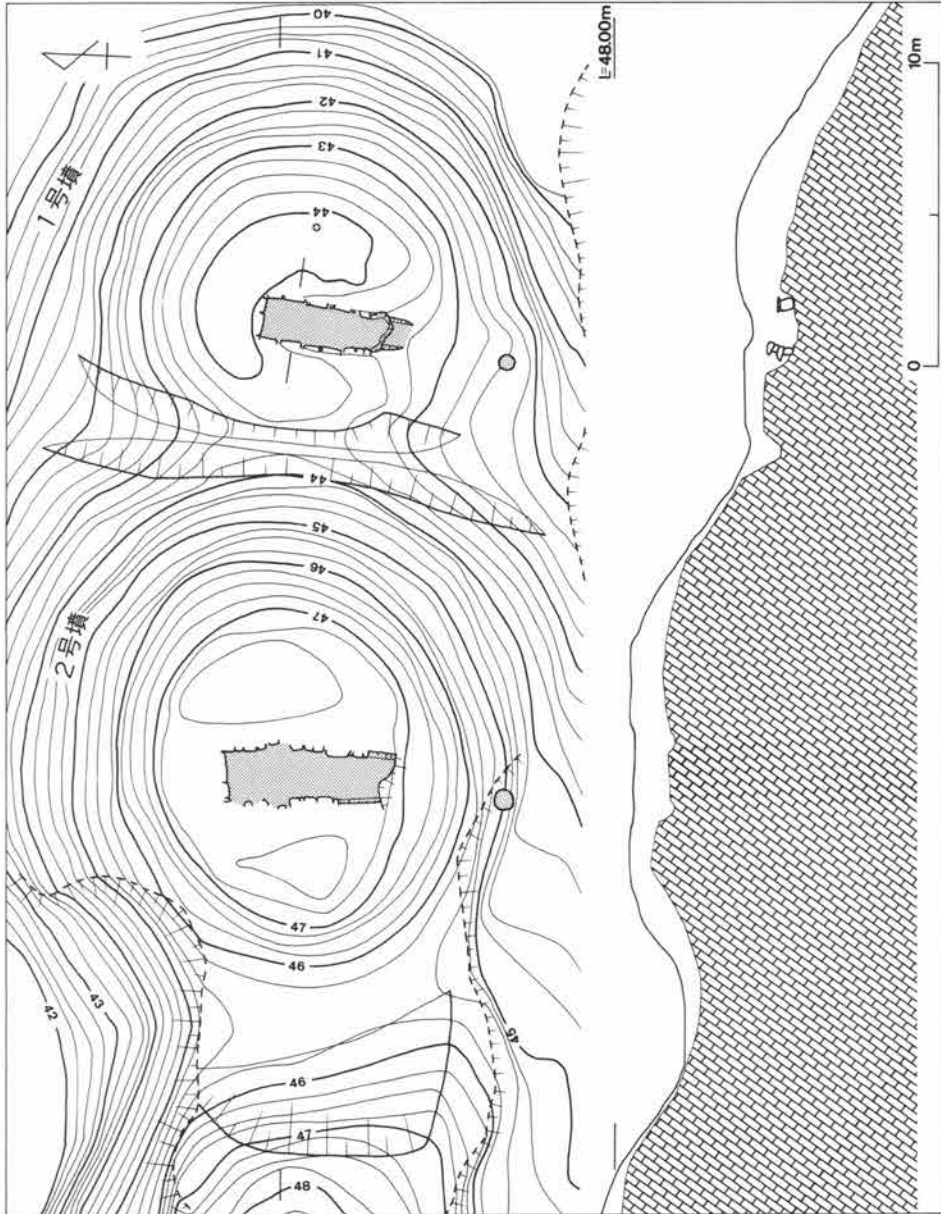
いずれにしろ、この木橋・鳥取地域は古墳、集落遺跡、生産遺跡と、多種多様の遺跡が分布する丹後半島でも有数の遺跡密集地となっている。

#### 4. 調査概要

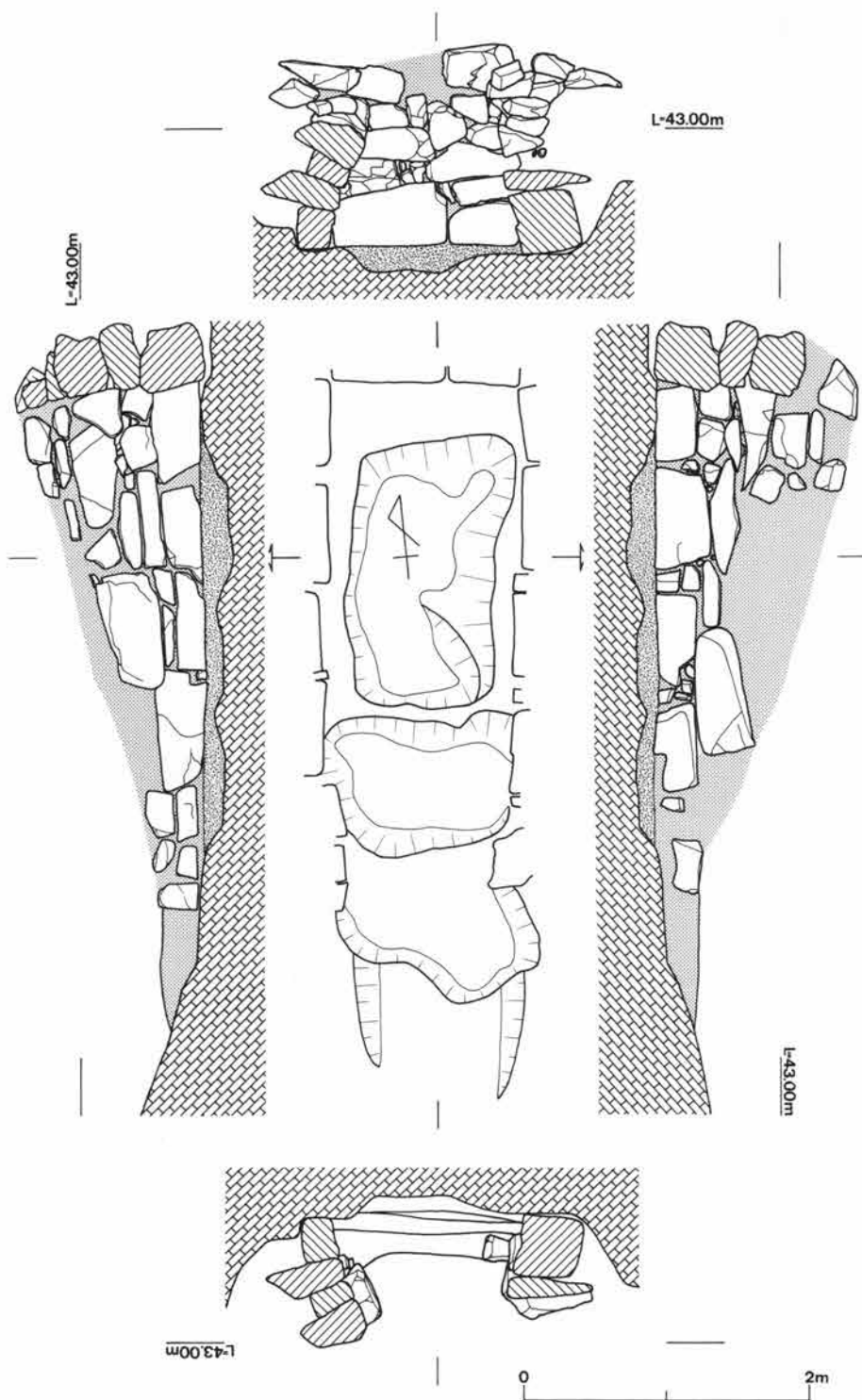
##### ①遠所1号墳

墳丘(第5図) 4号墳より南に分岐した尾根先端に位置する。古墳群中もっとも低位に造られた古墳で、標高44m付近に位置する。墳丘は、昭和28・33年頃の調査により墳丘中央部が大きく凹み、南側には調査による排土が堆積しており、それらとともに多くの石材の散乱が認められた。墳丘東・北側は築造時の状況をよく留めており、調査は南側から行われたようである。墳丘自体はよく整った円形を呈しており、東側には2号墳と区画する幅1.5mの「V」字状の溝が設けられている。尾根先端の比較的傾斜の強いところにあるため、墳丘が大きくみえる。墳丘東側裾は、農道造成により一部削られているが直径15m、尾根先端側からの高さ4mの規模を有する。

墳丘の盛り土は、石室の構築とともに行われているが、尾根高位側を削り低位側の旧表土面に盛り土した後、石室掘形を穿つが、この時点で祭祀が行われたようで石室東側から、土師器壺に須恵器蓋をかぶせ立位で埋めていた(第10図32・33)。掘形が検出されないため、墳丘の盛り土とともに行われたものとも考えられる。その後は、石室天井石がのせられた状態で奥壁北側で、さらに、天井石まで盛り土ができた段階で奥壁北東側で(第10図37・38)、最終盛り土を行う直前に奥壁北側に(第10図34・35・36)、土師器高杯を1～2個体



第5図 遠所1・2号墳地形図



第6図 遠所1号墳石室実測図

破碎し盛り土している。また、石室中軸線を南側にのばした墳丘裾部の左側には、浅い土坑状凹みが認められ、内部には破碎された土師器甕が納められていた(第10図29・30)。

なお、過去の調査時に棄てられた排土中からは、細片化した土器類、鉄器が多数出土したが、石室内には遺物はほとんど残されていなかった。変わって2号墳と区画する溝南側より須恵器の一括資料が出土しており、何らかの祭祀が行われていた可能性が考えられる。

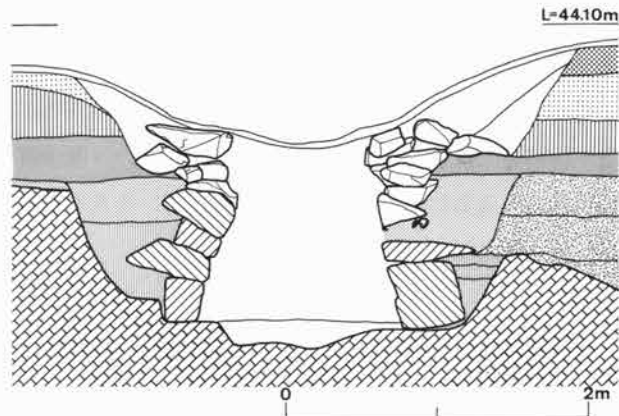
**埋葬施設(第6～8図)** 本古墳の埋葬施設は、無袖式の竪穴系横口式石室である。石材は、古墳群南側の谷奥に露出する花崗岩を使用しているようである。石室は、天井石が1石残存していたが、過去の調査で内部に落ち込んでおり、調査上危険となるため除去した。

石室は南に開口し、主軸は磁北によればN6°Eをさす。石室の全長は3.6m、玄室長約2.7m、奥壁幅1.3m、石室前端幅1.0mで奥壁側が広がる。奥壁での高さは約1.4mを測る。

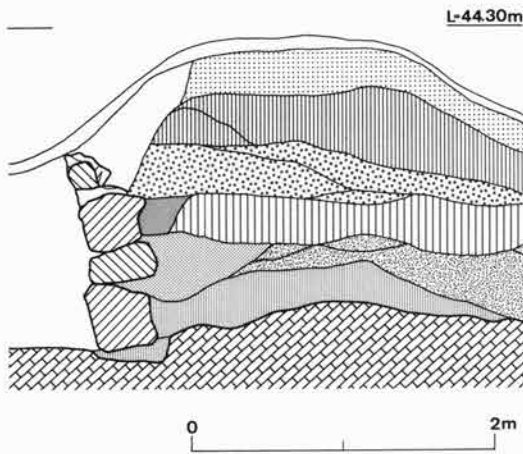
石室を構築するにあたっては、丘陵先端に位置することから、石室奥壁、西側壁側は地山を削り整地し、東側壁側は旧表土である黒褐色土上に盛り土してから「コ」の字形の尾根に直交する墓壇を掘る。この旧表土中には、炭が含まれており古墳築造に際して山焼きを行っていた可能性がある。墓壇掘形は、奥壁・両側壁とも緩やかであるが、底面は水平であり掘形底面が玄室床面となっている。部分的ではあるが、基底石を安定させるため、その部分だけ浅く掘り込まれているものもある。掘形裏込めの状況は、淡黄褐色粘質土・地山の黄褐色粗砂(花崗岩パイラン土)・赤褐色粘質粗砂が交互に入る縞状堆積で薄くつき固めている。羨道部は、削り出し面が墓壇掘削面となるため、掘形は有さず削り出し面に直接石材を置く。

玄室奥壁は、最下段は扁平な石材2石を据え、二段目以上は基底石より小さめの石材を横積みし、隙間には小石を詰める。

玄室側壁は、東・西側壁とも4石を横置きして基底を構成するが、西壁に対して東壁のほうがやや石材が小さいため、長さを合わせるため奥壁寄り3石めと4石めには小石を詰め調整する。二段目以上は、基底石と同じような石材を横積みし、隙間には小石をつめる。過去の調査時か採石によるためか奥壁寄りほど残りがよく、玄室中央から羨道にかけては、基底石ないしは二段



第7図 遠所1号墳石室断面図



第8図 遠所1号墳奥壁断面図

目までしか残存していない。一見すると乱雑であるが、横目地が四段通るのがうかがわれる。

玄室床面は、過去の調査のためか凹凸が激しく、床面はかろうじて奥壁・側壁周辺に残っていたにすぎない。

横口部付近には、小口石が置かれていたと思われる石材の抜き取り痕を確認した。この部分が小口部分に相当することは玄室基底石がこの部分までは大きく、これから前面にかけては急に

小さくなることや、玄室基底石と石室前端基底石レベルの違いからも明らかである。この石室前端から前面にかけては、石室とをつなぐ南上りの緩やかな傾斜をもつ墓道状の施設がとりつく。また、墓道状掘形の南端は、石室掘形と同じ高さに揃えている。さらに、小口部分と墓道状遺構の間には約15cmの地山を削った段差が認められる。この段差部分の側壁基底石をみると、このことは、両側壁とも石室北側から基底石を据えた後、地山を削り込んで小口石をおき、さらにその小口石の高さに羨道の側壁を積み上げたものと考えられる。羨道側壁は、残りのよい西壁のみ場合基底石は3石、二段残存するが削り出された部分をみると、もう1石存在していたようである。1石のみ縦置きされている。この小口を設けることにより、石室平面形は、小口部分を境に羨道部に向け急にすぼまる。小口部に石敷を設けることにより、羨道部から玄室には階段状に降りる構造であったものと考えられる。なお、調査前に石室内に落ち込んでいた天井石右の大きさからすると、玄室上には4石架構されていたものと思われる。石室入り口となる墓道状遺構の南端は、墳丘基底部より約1.0m上方となる。

**遺物出土状況** 石室は先にも述べた通り過去に調査されているため、細片化した須恵器・土師器・鉄製品が少量出土したにすぎない。調査時に南側に棄てられた排土中からは細片化した遺物に混じって鉄鏃・刀子・刀・馬具片が出土している。大半の土器類は2号墳と区画する溝南端から一括して出土した。

(増田孝彦)

**出土遺物** 1号墳から出土した遺物には、須恵器・土師器の土器類、鉄刀・刀子・鉄鏃・馬具等の鉄製品がある。

**a土器**(第9・10図、図版第35~37) 石室内出土遺物は、杯蓋(2・3・5・10)と、杯



身(11・12・15・16・17)と、短頸壺(21)と、提瓶(31)である。墳丘周囲の溝内出土遺物は、杯蓋(4・6・7・8・9)と、杯身(13・14・18・19・20)と短頸壺(23)と、甗(25)と高杯(28・35)である。杯蓋(32)と土師器壺(33)は、墳丘築造時に埋められた状態で出土している。これ以外の土器は、墳丘築造後に流土及び表土中に埋まっていたものである。

以下、石室と溝内出土遺物を中心に概観する。

杯身は、その形態から大きく3つのグループに分けられる。17~20と11・13と12・15である。いずれも立ち上がりをもつが、立ち上がりの傾きや長さ、器の丸みが異なる。

17~20は、底部はやや深く丸みを持ち、立ち上がりは内傾し、口縁端部は丸い。底部はヘラ削りを行う。

11・13は、底部は浅く、立ち上がりは内傾し、短い。底部は、簡単にヘラ削りを施す。墳丘周囲の溝の埋土から出土した杯身(14)も同じ形態である。

12・15は、底部は浅く、立ち上がりはかなり内傾し短い。底部にヘラ削りを施さない。

杯蓋は、その形態や天井部のヘラ削りの有無から2つのグループに分けられる。2・3と4~10である。

2・3は、杯身12・15に伴うもので、器高は低く、天井部はヘラ削りを施さない。口縁部は、外下方を向き、端部は外反する。

4~10は、器高が高く丸みを持ち、口縁部にわずかな沈線をめぐらす。口縁端部は丸いものと平坦なものがある。これらの蓋は、杯身17~20や11・13に伴うものである。

杯身17~20や杯蓋4~10は、田辺編年TK43型式、中村編年Ⅱ-4段階に併行するものと考えられ、杯身12・15や杯蓋2・3は、TK217型式、中村編年Ⅱ-6段階に併行するものとする。

丸い底部と逆「ハ」字状に開く口頸部をもつ甗(25)や、長脚二段スカシの高杯(28)は、その形態から田辺編年TK43型式、中村編年Ⅱ-4段階に併行すると考える。

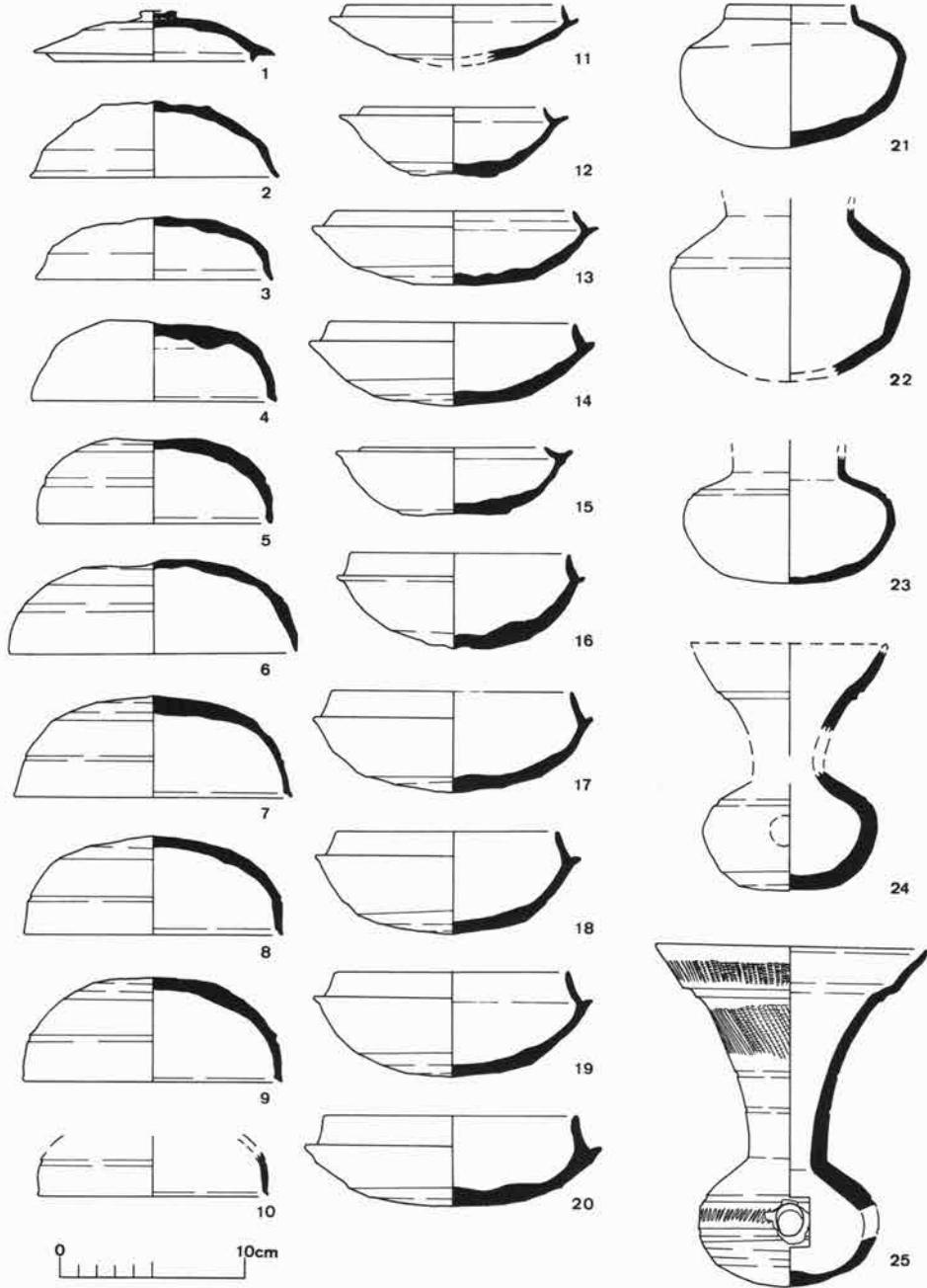
提瓶(31)は、把手と口頸部を欠いていた。

表土から出土したものとして、つまみが付きかえりをもつ蓋(1)がある。田辺編年のTK217型式、中村編年Ⅲ-1段階に併行する。底部平坦で口頸部が「S」字状に屈曲し外上方に開く甗(24)も、同時期のものとする。

杯蓋(32)と土師器壺(33)は、セットで出土した。祭祀にかかわるものと思われる。杯蓋の形態から、田辺編年のTK43型式、中村編年Ⅱ-4段階に併行すると考えられる。その他に、さまざまな土師器が出土している。中でも土師器高杯(38)は、脚部中央を欠いており、高杯を器台的に使用したのではないかとと思われる。

1号墳出土遺物は、大きく3時期に分かれる。出土遺物から6世紀中頃に古墳は築造・

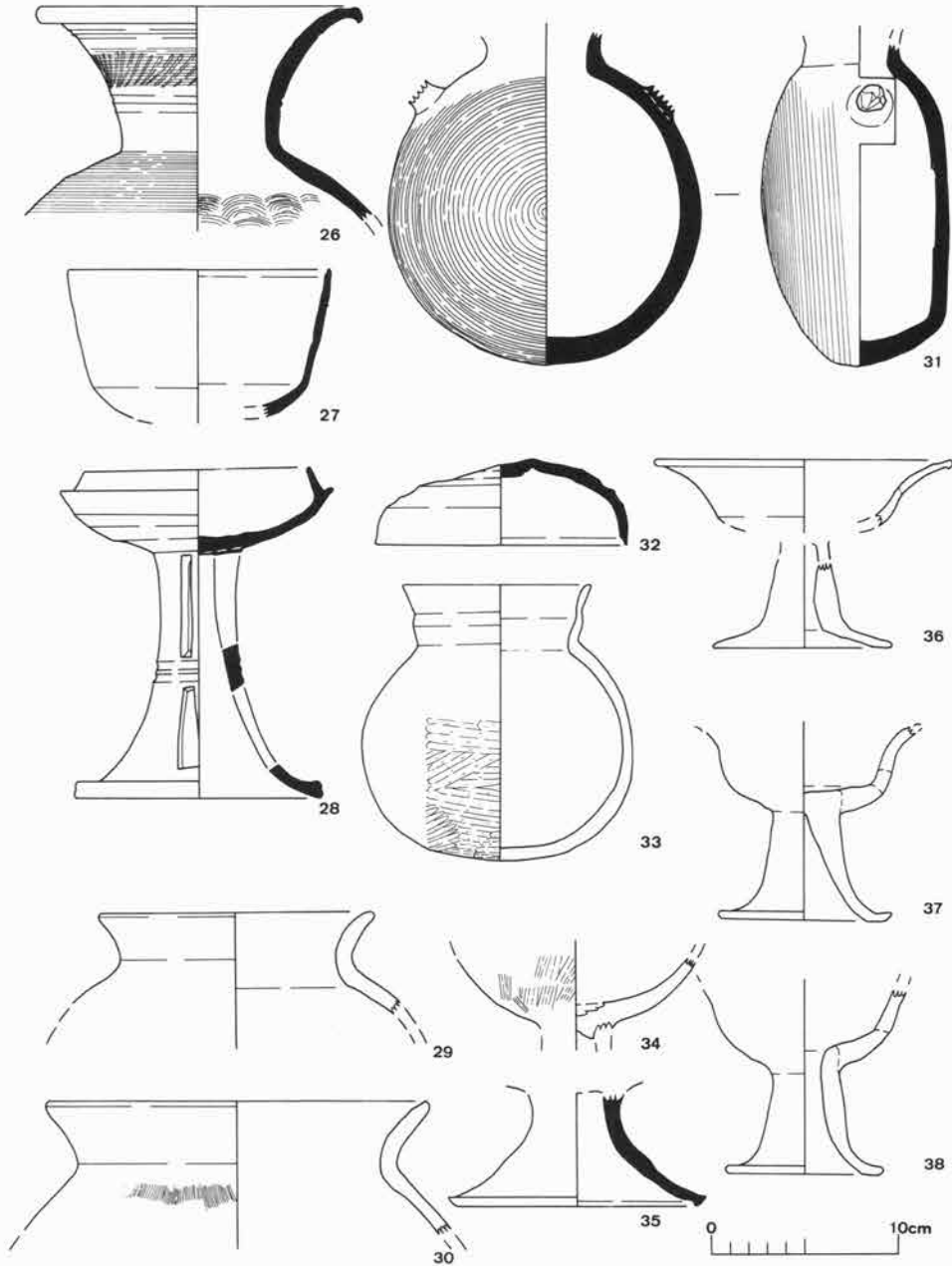
埋葬され、6世紀後半に追葬された。古墳周囲の溝からの杯身(14)の出土は、追葬時にはすでに埋まっており、溝を掘りかえすことなく追葬がなされたと考えられる。その後、何らかの原因で7世紀初頭の土器が混入したと思われる。(岡崎研一)



第9図 遠所1号墳出土遺物実測図(1)

b 鉄製品(第11・12図、図版第47・49) 鉄製品には、鉄刀・刀子・鉄鎌・馬具がある。過去に調査されているため、ほとんどが細片化しており原形をとどめるものはない。

39は、直刀である。刀身断面はやや膨らむ二等辺三角形を呈し、関付近で幅3.0cm・厚さ1.0cmを測る。関は棟側がやや凹み、刃側は斜めの削り関である。茎部分だけの破片は



第10図 遠所1号墳出土遺物実測図(2)

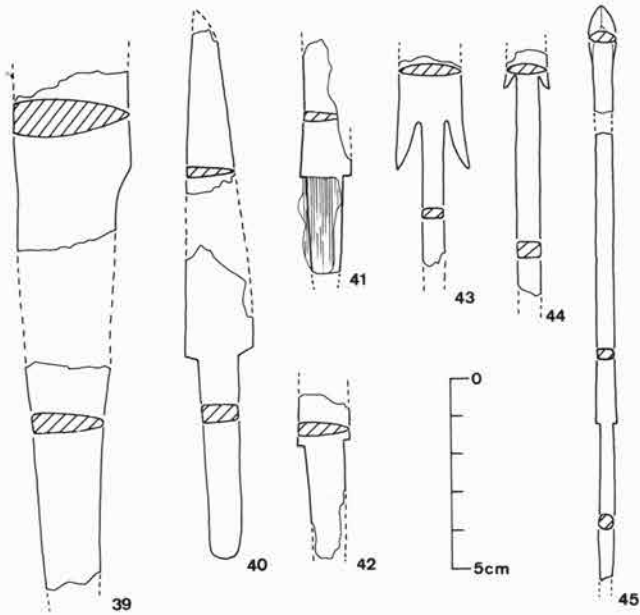
これ以外に3点出土している。

40・41・42は、刀子であり、茎部分でみた場合7点あるが、全体の形態がわかるものはない。関は両関であるが、小さく切り込まれるものと、大きく切り込むものの2種類が存在する。

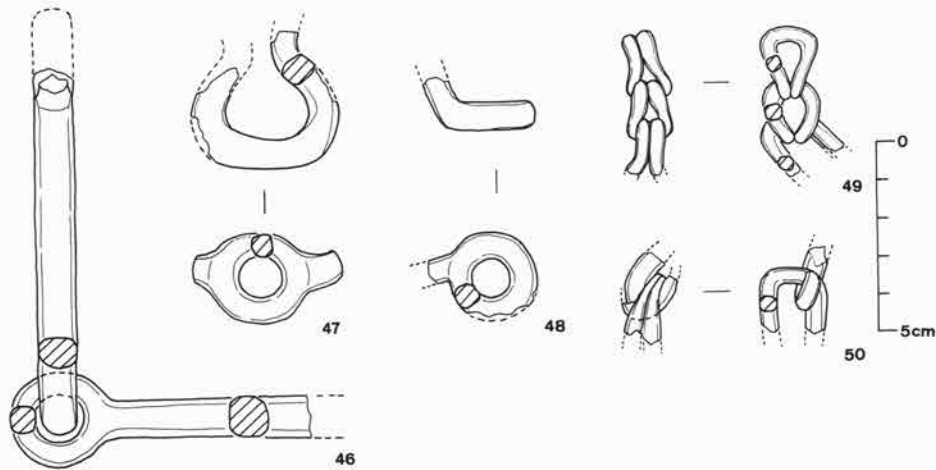
鉄鏃は、破片数はかなり認められるが、図化できたものは3点である。鏃身の形態からみて3種類に分けられる。43は、やや細身の腸袂柳葉式の短頸鏃と思われるもので、断面形は両丸造りである。44は長頸鏃で、鏃身は腸袂柳葉式の鏃身部をもつ。三角形式の鏃身部をもち、腸袂がなく関だけのものもみられる。

45は、長頸鏃で鏃身の両側に刃をもち、関はなく鏃身断面は台形状を呈している。

馬具類(第12図、図版第49) 46・47・48は轡の破片であり、49・50は鍔金具のない兵庫鎖のみの破片である。兵庫鎖は、直径1.0cmの鉄棒を曲げ作られている。



第11図 遠所1号墳出土遺物実測図(3)



第12図 遠所1号墳出土遺物実測図(4)

## ②遠所2号墳

墳丘(第5図) 1号墳の西隣りの尾根稜部に位置する。墳丘は、1号墳同様、ニゴレ古墳調査時前後に調査を受けており、中央部が大きく凹んでいるものの、墳頂部は削平されたためか平坦化していた。墳丘北側には、過去の調査時の排土が堆積しており、細片化した土器類・鉄器類が多く出土した。

墳丘北側には、3号墳と区画する幅7m・深さ2mの溝状の切り込みが設けられている。墳丘はよく整った円形をなし、1号墳との高低差が著しいため、かなり大きな古墳に見える。現状で直径17m、1号墳との区画溝からの高さ5.5mを測る。石室がほとんど残存していないことからすると、築造時はさらに1～1.3mほどは高かったと考えられ、石室を内部主体とする古墳中最大規模を誇り、墳丘高については古墳群中最大規模を誇る。

1号墳と同様、石室中軸線を南側にのばした墳丘裾部の左側には土坑があり、内部から土師器小型壺・丸底壺が出土している。

墳丘の盛り土は、石室の構築とともに行っているが、石室掘形検出面以下は、削り出し整形により外形を整えているため、盛り土の規模は1号墳に比べて規模が小さい。

なお、削平された墳頂部北東・東斜面では、1号墳溝埋土中から破碎された大甕片(第18図21)が多量に出土しており、墳頂部で何らかの祭祀が行われていた可能性がある。

埋葬施設(第13～15図) 本古墳の埋葬施設は、1号墳と同様、無袖式の竪穴系横口式石室である。古墳群南側谷奥で露出する花崗岩を使用しているようである。

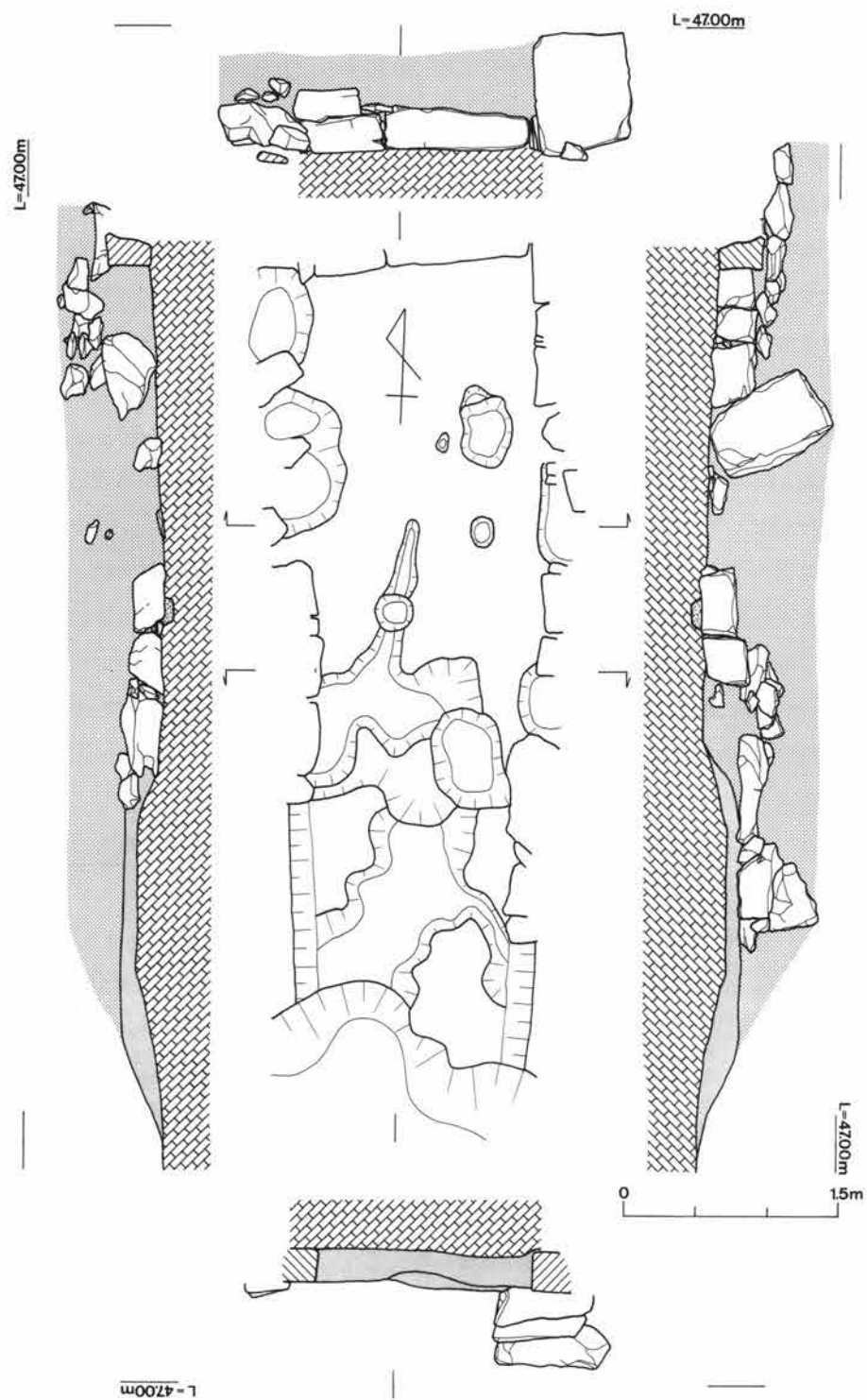
石室は、過去の採石や調査により、石材がなくなったり床面が荒されたりしていたが、基底石が部分的に残っており、それにより概要を知ることができた。

石室は、墳頂部中央に造られ、南に開口する。玄室の主軸は磁北によれば $N3^{\circ}W$ をさす。全長4.7m・玄室長約3.2m・奥壁幅約1.5m・閉塞部(小口)幅1.3mで奥壁側が広がる。

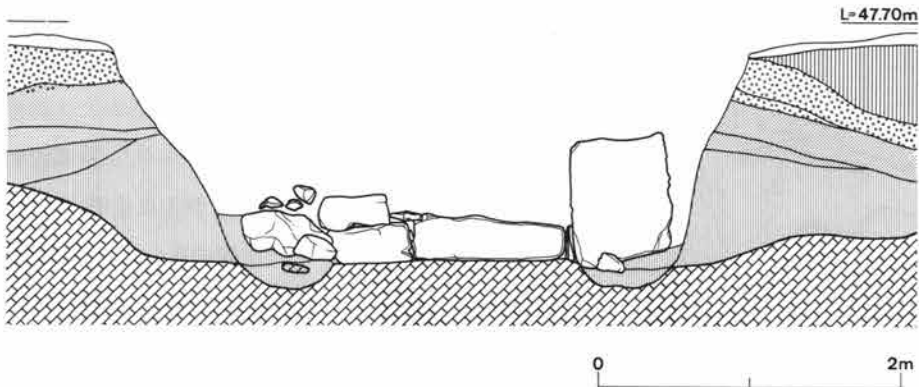
石室を構築するにあたっては、丘陵高位側を削平し低位側に盛り土し整地した後、尾根に直交する「コ」の字形の墓壙を掘るが、丘陵高位側は地山削平面より、低位側になる東側に盛り土面から墓壙を穿つ。墓壙掘形は、両側壁・奥壁とも直角ぎみに掘り込まれるが、石材安定のため、部分的に玄室床面よりさらに一段掘り込むところもある。掘形内裏込めの状況は、縞状堆積で薄くつき固められている。羨道部は、削り出し面が、墓壙掘削面となるため掘形は有さず、削り出し面に直接石材を置く。

石室自体がかなり荒されているため、基底石しか残っていなかったが、部分的に完全になくなったところもあった。

玄室奥壁基底は2石で構成されるが、石材自体は側壁使用のものとかかわらないものの、厚さに対して長いものが用いられている。

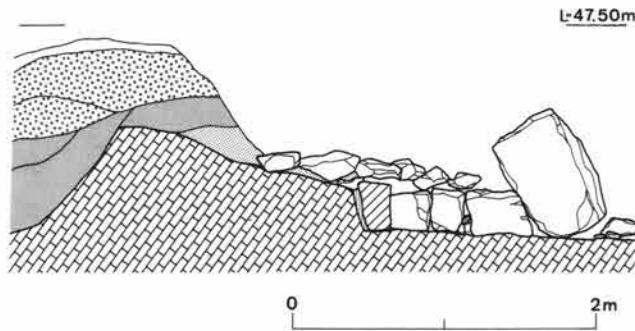


第13図 遠所2号墳石室実測図



第14図 遠所2号墳石室断面図

玄室側壁は両側とも、高さのそろった横長の石材を据える。東側壁中央部には、他の側壁石材に対してかなり大きい石材が使用されているが、若干動かさ



第15図 遠所2号墳石室奥壁断面図

れている。基底石しか残存しないため、石室本来の高さを推定することはできない。

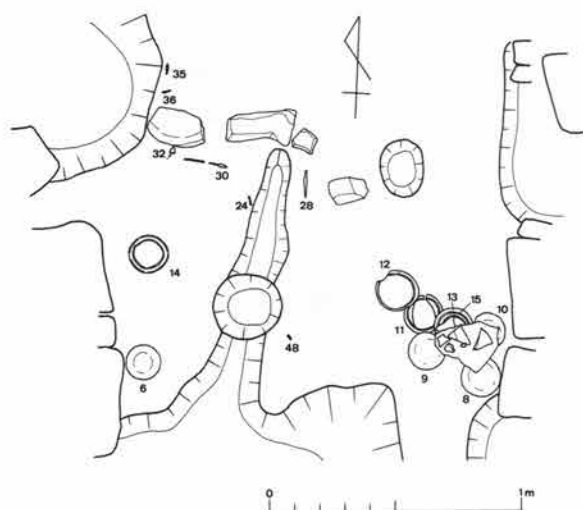
奥壁3.5m付近から、側壁に使用されている石材が小さくなる。小口石を掘り据えていたと思われる掘形が検出された。1号墳同様、玄室には階段状に降りる構造であったと思われる。小口石を置くことによって、玄室側壁の南端の石材は一部隠れてしまうことになる。また、この小口を境に石室平面形は急にすぼまる。

玄室床面は、1号墳同様かなり凹凸があり埋葬時の面を残している部分は少なかった。

奥壁の後方約4.7mのところに横口部がある。横口部から前面にかけて、石室とをつなぐ墓道状の施設がとりつく。石室入口となる墓道状遺構の南端は、墳丘基底部より約2m上方となる。

**遺物出土状況(第16図)** 2号墳出土遺物の大半は、過去の調査時の排土中より出土したものであるが、石室内でもわずかに残されていた埋葬時の面から少量の土器が出土した。

土器は、玄室中央よりやや横口部寄りの両側壁と玄室中央部の3か所から出土した。東側壁側からは、須恵器杯身4点が正位で置かれ、うちやや口径の小さいものは大きいものの中に、重ねて入れられていた(第17図13・15)。杯蓋(13・15)は、杯身のそばに伏せられ



第16図 遠所2号墳遺物出土状況

た状態で3点(8・9・10)出土した。さらに、これらの須恵器の上には、破碎された土師器甕が乗せられていた。西側側壁からは、杯身が1点正位に置かれ、その南側約0.6mのところには杯蓋が伏せられた状態で出土している。玄室中央部からは、細片化した鉄鏃6点・刀子1点が出土している。また、これらの鉄器、土器に挟まれた石室中心線付近からは、管玉1点の出土

もみられた。

(増田孝彦)

**出土遺物** 2号墳から出土した遺物には、須恵器・土師器の土器類、鉄刀・刀子・鉄鏃・馬具等の鉄製品、玉類の装身具がある。

**a 土器**(第17・18・19図、図版第38・39) 石室内出土遺物は、杯蓋(7・8・9・10)と杯身(5・6・11~15)と台付甕(12・14)である。墳丘周囲の溝内からは、杯蓋(2)と、短頸壺(16)と甕(20)が出土している。その他の土器は、墳丘斜面及び表土中より出土したものである。

以下、石室内出土遺物を中心に概観する。

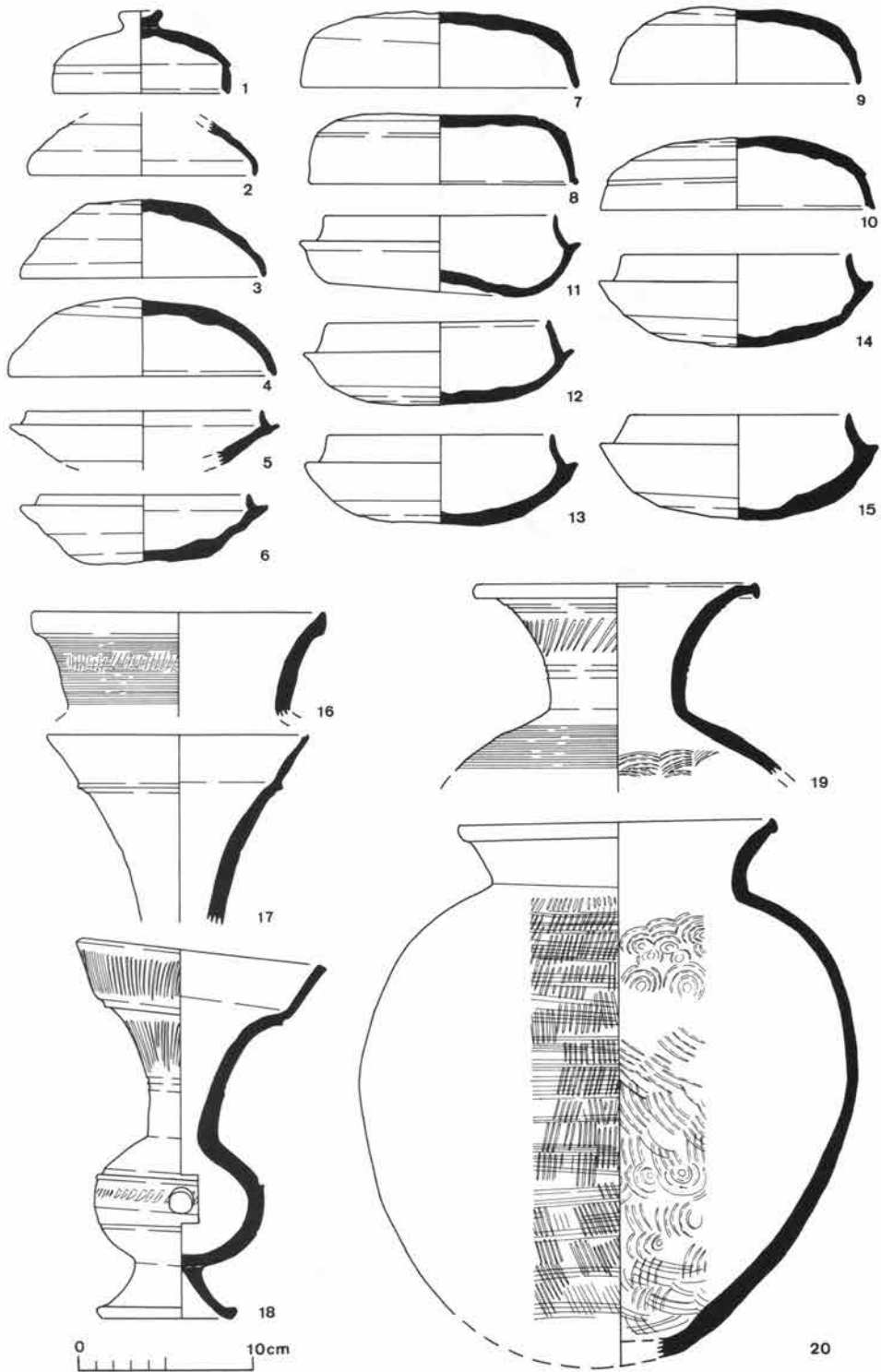
**杯身** 石室内から出土した杯身は、その形態から大きく2つのグループに分けることができる。5・6と11~15である。いずれも立ち上がりをもつが、立ち上がりの傾きと長さがわずかに異なる。11~15は、底部がやや深く丸みもち立ち上がりは内傾し、底部にヘラ削りを施す。

5・6は、底部が浅く平坦で、立ち上がりは内傾し、短い。底部にヘラ削りを施していない。

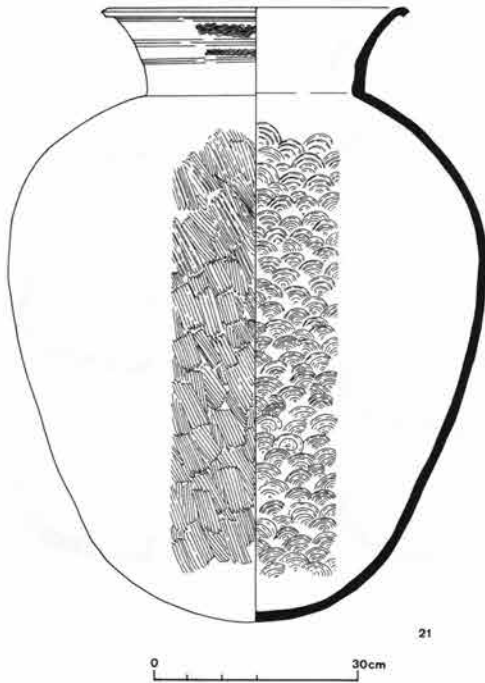
甕17は、口頸部のみであるため、その形態については不明である。台付甕18は、「ハ」の字状に開く台を貼り付けており、端部は斜め上方に丸くおさめる。口頸部がわずかに屈曲しながら外上方に開く。

杯身11~15と台付甕18は、田辺編年TK43型式、中村編年Ⅱ-4段階に併行するものと考えられる。杯身5・6は、TK209型式、Ⅱ-5段階に併行すると考えられる。





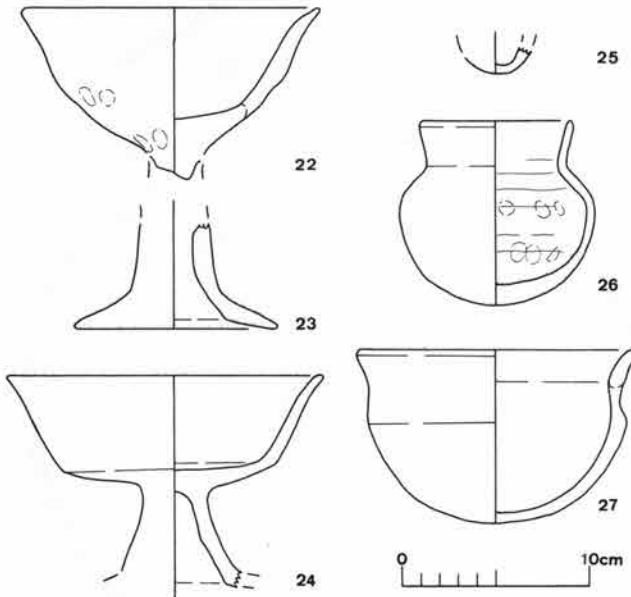
第17図 遠所2号墳出土遺物実測図(1)



第18図 遠所2号墳出土遺物実測図(2)

杯蓋は、墳丘周囲の溝内と墳丘築造時に混入したもので、石室出土の杯身とセットになるものはない。形態から2・3と7~10の2つのグループに分かれ、杯身の二時期と同じと考える。甕20は、比較的小型のものであり、古墳周囲の溝から出土している。底部は欠いており、外面には平行タタキ後カキ目調整を施している。このような甕は、両時期にわたって見られることからどちらの時期に該当するものかはわからない。

これらの土器以外に、墳丘から土師器高杯や壺や甕と、ミニチュア土器が出土している。祭祀に関係するものと考えられる。



第19図 遠所2号墳出土遺物実測図(3)

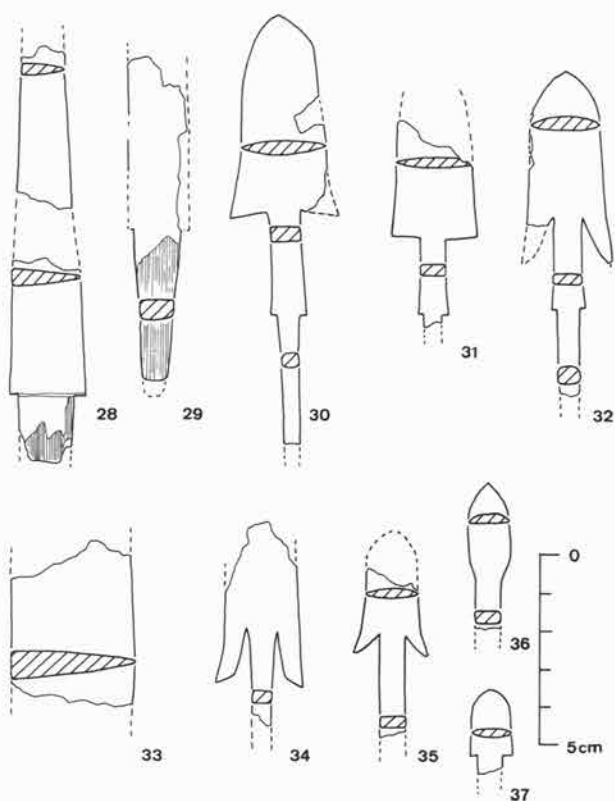
出土遺物からみて、2号墳は6世紀中頃に築造され、6世紀後半には追葬が行われたと考えられる。隣接する1号墳との築造順序については、出土遺物から明確にすることができないほどの時期差をもって築造されたものとする。

(岡崎研一)

**b 鉄製品**(第20・21図、図版第47・49) 出土した鉄製品には、鉄刀・刀

子・鉄鏃・馬具がある。1号墳と同様、過去の調査で遺物が細片化したため、原形を保つものはない。

33は直刀であるが、ほとんど残存しない。断面二等辺三角形を呈し、刀身幅3.3cm・厚さ0.8cmを測る。茎部分は出土しなかった。28・29は刀子で玄室床面から出土した。関は小さく切り込むものと、大きく切り込むものと2種類ある。鉄鏃は破片数は多く出土したが、原形のわかるものはほとんどない。30・31は、柳葉式に近い短頸鏃で逆刺のあるもの(30)と、直角に切り込むもの(31)がある。各1点ずつ出土した。



第20図 遠所2号墳出土遺物実測図(4)

32・34・35は、腸挟柳葉

式の短頸鏃である。32・34は35に比べ大きいやや細身の鏃身部をもつ。35の逆刺は短く外に開く。36・37は長頸鏃で、三角形の鏃身部をもち、逆刺のない36と関だけの37がある。

馬具類(第21図、図版第49) 石室内の攪乱土中から出土したものである。

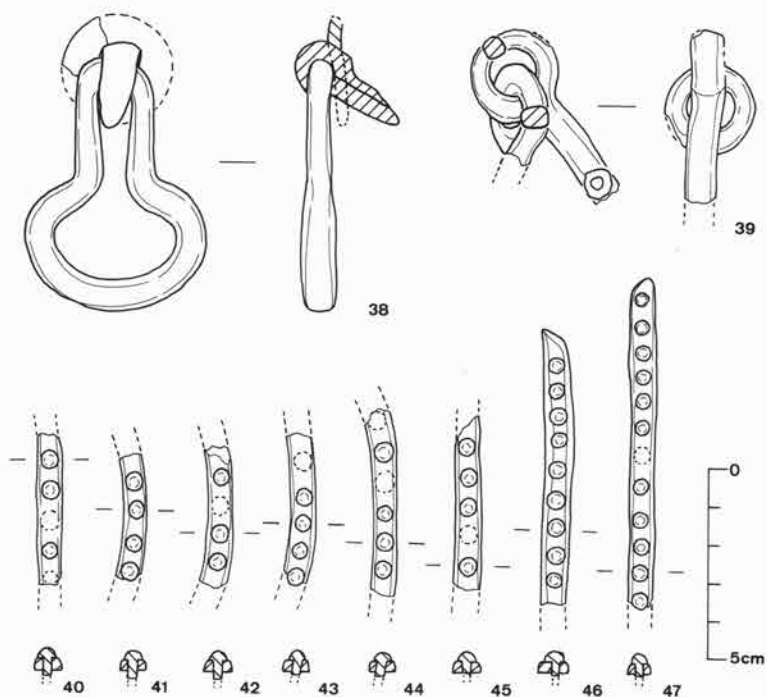
38は鞍で、凸字形の輪金、足、円形笠形座金具からなる。円形笠形金具は、鉄地金銅張で、直径3cmを測る。輪金の全長6.7cm・環部幅5cm。39は、轡の環状の連結部分のみの破片である。40~47は、鞍の前輪か後輪の飾り金具と思われ、幅0.7cm・厚さ0.3cmの台形状の鉄板に直径0.5cmの円形の鋌で鞍に固定されていたと考えられる。鋌・鉄板とも鉄地金銅張である。

(増田孝彦)

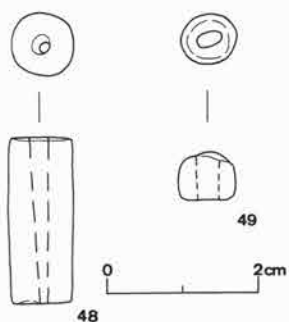
c. 玉類(第22図、図版第50) 玉類は、玄室床面から管玉が1点、過去の調査時の排土中からガラス小玉1点が出土した。

管玉(48)は碧玉製で、色調は濃緑色を呈する。ガラス小玉(49)は形はいびつであるが、他の古墳出土のものより大形である。色調は、空色を呈する。

(佐伯英樹)



第21図 遠所2号墳出土遺物実測図(5)



第22図 遠所2号墳出土遺物実測図(6)

③遠所3号墳

墳丘(第23図) 2号墳の西側に位置し、これより西側の丘陵高位側は傾斜が急になる傾斜変換点付近に築造された古墳である。墳丘築造方法は、尾根稜部を削り出し、側面側・低位側の旧表土面に直接盛り土を行い、円錐台形に整形する。主体部埋葬後、約0.5mの盛り土を施す。尾根高位側には、自然地形と区画する幅1.5m・深さ0.5mの溝が設けられている。直径約8m・

東側からの見かけの高さ2.2mの規模を有する円墳である。

墳丘東側の基底部分においては、2号墳の溝削り出し面との間に6m×4mの平坦部が認められ、基底部分と平坦部の境には、その中央部分に土師器壺(第26図4)、北側と南側端に

付表3 遠所2号墳出土玉類観察表

No	種	長(mm)	径(mm)	孔径(mm)	色調	備考	図
1	ガラス小玉	5.9	7.2~6.15	1.8短 3.2長	空色	透明度低い。孔は楕円形。	49
2	管玉	21.5	8.2	2.5~1.15	青緑色	碧玉製。	48

は土師器甕(第26図3・5)がそれぞれ1個体分ずつ、破碎された状態で置かれていた。墳丘祭祀に関わるものと考えられる。

**埋葬施設** 墳丘中央とやや西寄りのところで、2か所の墓壙を検出している。

**a 第1主体部(第24図)** 墳頂部中央に位置する木棺墓であり、主軸は、 $N25^{\circ}E$ で尾根に直交している。墓壙は、隅丸長方形を呈し、盛り土中より穿つ。二段掘形を有しており、長辺 $4.15m$ ×短辺 $1.45m$ 、木棺部分は長辺 $2.85m$ ×短辺 $0.55m$ 、検出面からの深さ $0.38m$ をそれぞれ測る。木棺部分側壁の形態は「 $\sqcap$ 」の字形をなし、底面は水平面を保つ。南側に小口板の固定に使用したと思われる石材が、2石置かれていた。組合式木棺の使用が考えられる。

遺物は、木棺部南端底面より須恵器転用枕として、杯身・杯蓋が伏せ並べられた状態で出土した。出土状況からすると、頭位は南枕と推定される。

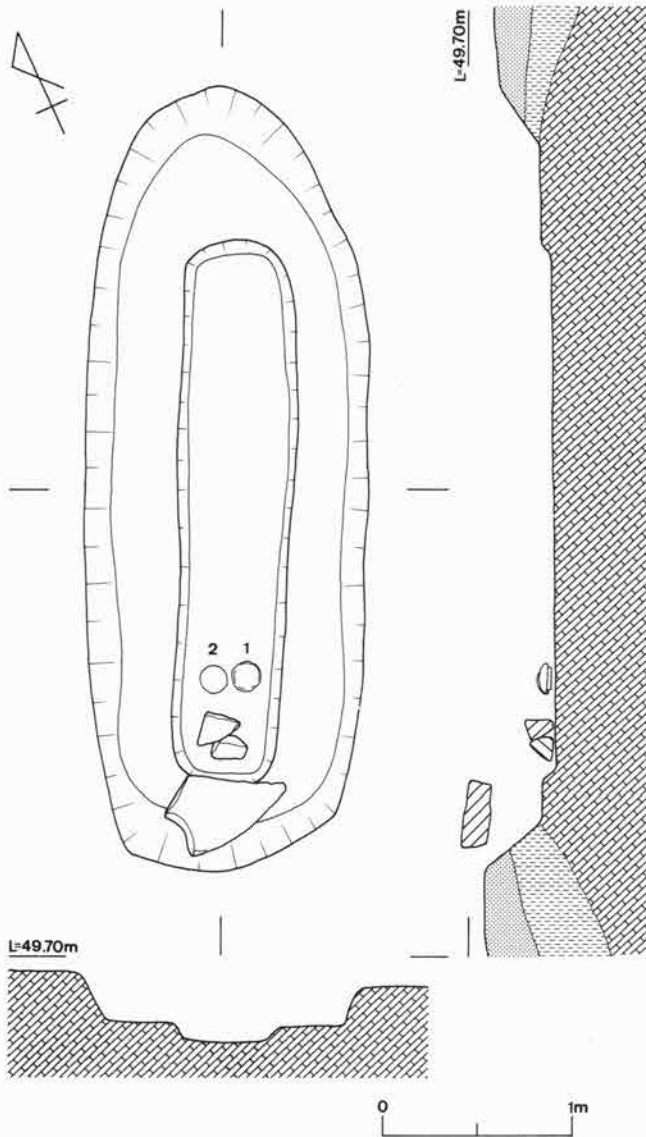
**b 第2主体部(第25図)** 第1主体部の西側に位置し、第1主体部と平行して存在し、尾根に直交する土坑である。主軸は、 $N27^{\circ}E$ である。土坑は素掘りで、形態は隅丸長方形を呈しており、地山削平面より穿っている。長辺 $1.8m$ ×短辺 $0.55m$ で、検出面からの深さ $0.15m$ を測る。

検出面上には、土師器甕が破碎された状態で検出されたが、土坑内からはその他の遺物の出土はみられなかった。第1主体部に隣接することと、破碎された甕が置かれていることや、東側墳丘の裾部平坦面での土器出土状況からみるならば、第1主体部に伴う祭祀用土坑の可能性もある。

(増田孝彦)



第23図 遠所3号墳地形図

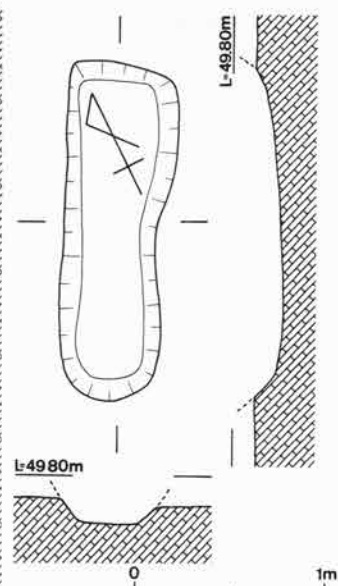


第24図 遠所3号墳第1主体部実測図

天井部は、ヘラ削りを施す。

杯身2は、底部は深く丸みもち立ち上がりは内傾する。ミズビキ整形後底部外面をヘラ削りする。

出土遺物はわずかであるが、杯蓋・杯身は形態からみて、田辺編年のTK43型式、中村編年のⅡ-4段階に併行するものと考えられる。3号墳の築造時期は、6世紀中頃と思われる。

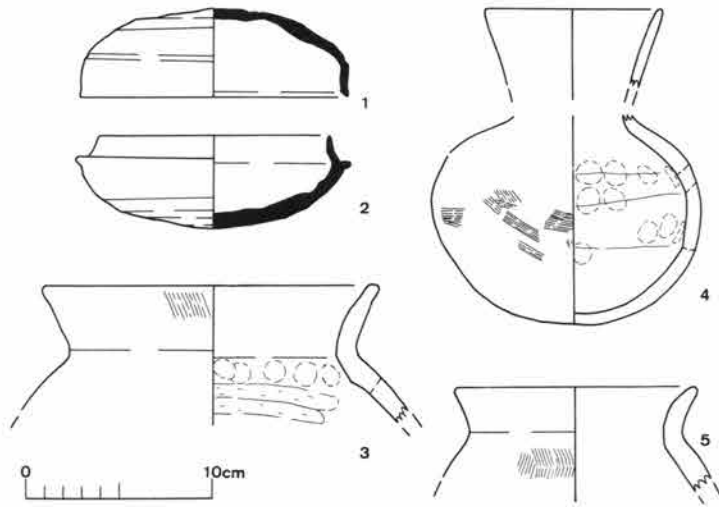


第25図 遠所3号墳  
第2主体部実測図

出土遺物 3号墳出土遺物には、須恵器杯身・杯蓋、土師器壺、甕がある。

a 土器(第26図、図版第40)  
須恵器1・2は、第1主体部より転用枕としてセットで出土したもので、土師器壺と甕は墳丘東側裾部で出土した。杯蓋1は器高は高く丸みもち、口縁端部は平坦である。

(岡崎研一)



第26図 遠所3号墳出土遺物実測図

## ④遠所4号墳

**墳丘(第27図)** 3号墳の高位側50mの位置にあり、3号墳側にのびる尾根と39号墳側にのびる尾根の分岐点に位置する。墳丘は、尾根稜部を削り出し、尾根側面と低位側を盛り土して円錐台形を造ったと思われるが、保存されることになったため調査を行っていない。詳細は不明である。主体部埋葬後約0.3mの盛り土を施す。西側には5号墳の墳丘斜面を一部削り、幅2m・深さ0.5mの溝を設ける。直径7m、東側からの高さ1mの規模を測る。

**埋葬施設(第28図)** 墳頂部中央に位置する木棺墓1基を検出した。主軸はN30°Wで尾根に直交する。墓壙は隅丸長方形を呈し、長辺2.8m×短辺0.65m、検出面からの深さ0.3mを測る。墓壙側壁は、「L」の字形をなし、底面は南に傾斜する。

遺物は、墓壙南端底面より転用枕として、須恵器杯身・杯蓋(第29図1・2)が伏せ並べられた状態で、さらにこの南側には土師器杯が伏せられており、三角形をなすような状態で置かれていた。また、墓壙中央付近底面から、刀子1点、鉄鏃1点も出土している。

木棺痕跡は認められなかったが、形状から箱形木棺の使用が考えられる。頭位は、転用枕の出土から南枕となる。

(増田孝彦)

**出土遺物** 4号墳出土の遺物には、須恵器杯身・杯蓋、土師器杯の土器類と、刀子・鉄鏃の鉄製品がある。

**a 土器(第29図、図版第40)** 主体部内より転用枕として出土したものは、杯蓋(1)・杯身(2)と土師器杯(3)である。

杯蓋1は、平坦な天井部から外下方に屈曲し端部が外方を向く。天井部はヘラ削りして

いねいに仕上げる。杯身2は、底部が深く丸みを持ち、立ち上がりは内傾する。底部外面はヘラ削りする。形態から田辺編年TK10型式、中村編年Ⅱ-2段階に併行すると考える。

土師器杯3は、底部外面にハケ目調整がわずかに残る。

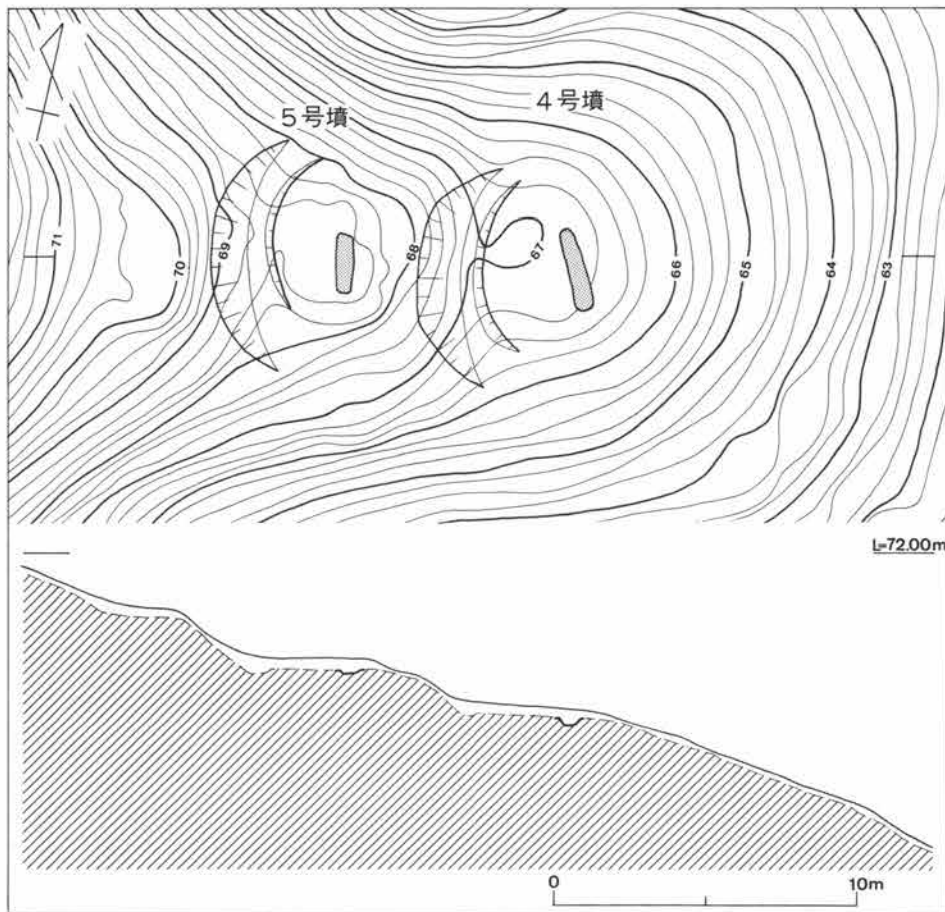
壺4は、形態から見るかぎりかなり時期の異なる土器であり、出土地点も4号墳と5号墳の間の溝であるため、古墳とは関係のない混入遺物と考えておきたい。

4号墳は、杯蓋・杯身の土器からみると、6世紀中頃に築造されたと思われる。

(岡崎研一)

**b 鉄製品(第29図)** 刀子1点と鉄鏃片1点の出土がみられた。刀子5は、切先の一部と刀身・茎の一部を欠く。刃部の断面は、二等辺三角形を呈し、刀身幅は1cmであるのに対し関部分では1.4cmとなり、斜めに刃部が形成されている。研ぎ減りによるものであろうか。関は、両関で直角に切りこむ。

6は、長頸鏃と思われるが、鏃身を欠く。茎部分には樹皮が残り、棘状突起を有する。



第27図 遠所4・5号墳地形図



⑤遠所5号墳

墳丘(第27図) 4号墳の西隣に位置し、4号墳と同様な築造方法と思われるが、保存の対象となったため、墳丘の調査は行わなかった。直径7m・高さ1.5mの規模を有する円墳である。尾根高位側には自然地形と区画する幅2m・深さ0.7mの浅い溝が設けられている。

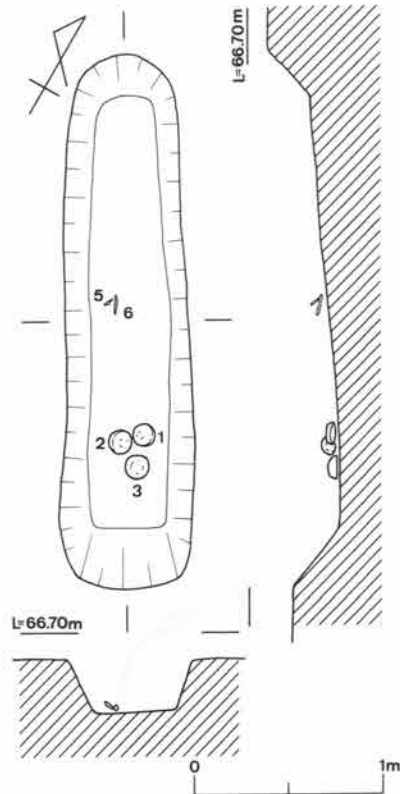
埋葬施設(第30図) 墳頂部中央で、墓壙1基を検出した。主軸は、 $N11^{\circ}W$ で尾根に直交する。墓壙は、表土直下の地山削平面で検出した。隅丸長方形を呈し、長辺1.95m×短辺0.6m、検出面からの深さ0.07mを測る。墓壙が浅いのは、削平されたためであり、4号墳と5号墳の間の溝中より出土した壺(第29図4)と関係があるものと思われる。墓壙底面は、水平面を保つが、木棺が使用されたか否かは不明である。

遺物は、墓壙中央部底面より切先を北に向ける刀子1点、その周辺で土玉7点が出土した。出土状況から、頭位は南枕と考えられる。

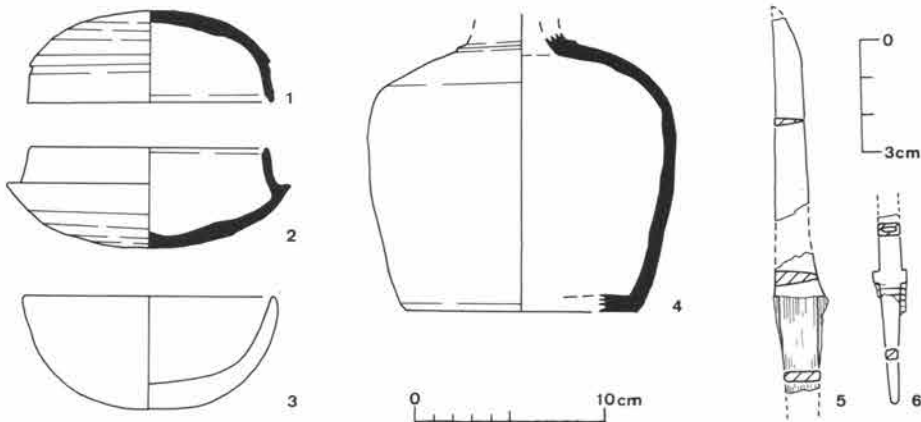
(増田孝彦)

出土遺物 5号墳主体部内出土の遺物には、刀子1点、土玉7点がある。

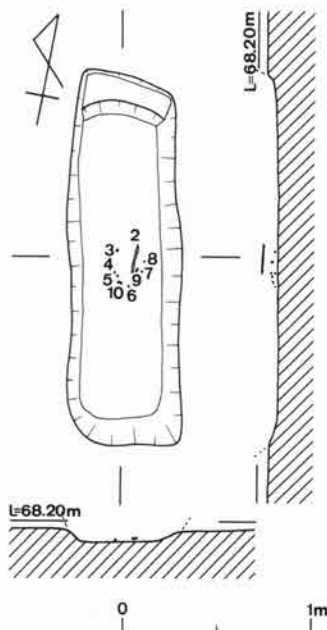
a土器(第31図、図版第39) 5号墳出土遺物は蓋1点で、主体部出土でないため、土器の時期が必ずしも古墳築造時期とはいえない。



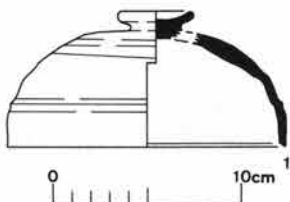
第28図 遠所4号墳主体部実測図



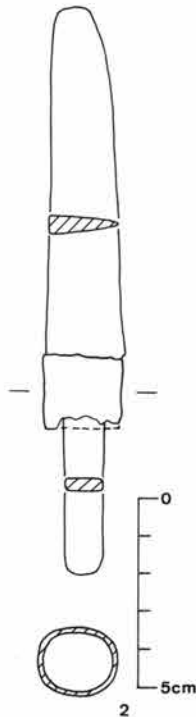
第29図 遠所4号墳出土遺物実測図



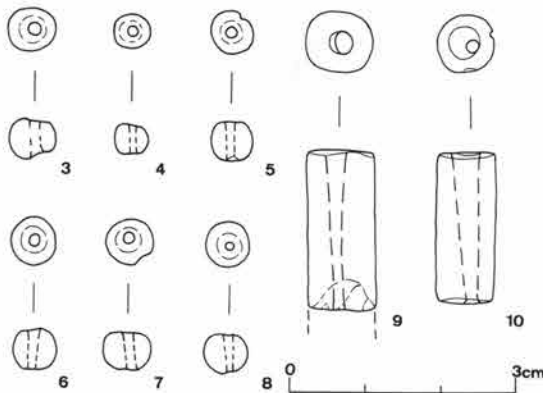
第30図 遠所5号墳  
主体部実測図



第31図 遠所5号墳  
出土遺物実測図(1)



第32図 遠所5号墳  
出土遺物実測図(2)



第33図 遠所5号墳出土遺物実測図(3)

蓋はつまみをもち、器高は高く丸みをもつ。ミズビキ調整後天井部外面をヘラ削りしつまみを貼り付ける。口縁端部は平坦に仕上げる。口縁部の形態から、田辺編年のTK43型式、中村編年のⅡ-4段階に併行すると考える。(岡崎研一)

**b 鉄器**(第32図、図版第46) 主体部内より刀子1点が出土した。切先が丸くなっているが、現存長15cm、刀身中央部での厚さ2cm、刃部断面は二等辺三角形を呈する。関付近での幅は、2.2cmを測る。両関と思われ、関から外に出た刃部の長さは、9.2cmを測る。柄は幅2.1cm・厚さ0.2cm柄縁金具で締められる。目釘等は認められない。

(増田孝彦)

**玉類**(第33図、図版第50) 管玉(9・10)は、碧玉製で、色調は濃緑色を呈する。9は片側小口部を欠損する。

土玉(3~8)は、野焼きの土玉であるが、焼成は良好である。色調は暗茶褐色を呈する。ほぼ円形に仕上げられたものと、ややびつなものとに分けられる。図示していないが約1/2欠損したのも1点ある。

(佐伯英樹)

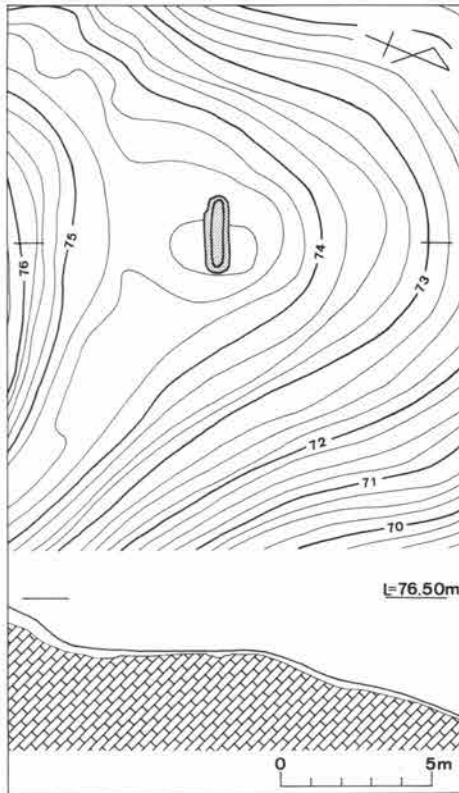
付表4 遠所5号墳出土土玉類観察表

No	種	長(mm)	径(mm)	孔径(mm)	色調	備考	図
1	土玉	5.25	6.4	1.4	暗茶褐色		3
2	管玉	20.5	9	3.1~2.3	青緑色	碧玉製	9
3	土玉	3.85	4.75	1	暗茶褐色		4
4	管玉	19.5	7.9	3.9~1.4	青緑色	碧玉製	10
5	土玉	5.2	5.65	1.3	暗茶褐色		5
6	土玉	5.3	6.1	1.6~1.15	黄茶褐色		6
7	土玉	5.3	6.1	1.2	暗茶褐色		7
8	土玉	5.5	5.9	欠損のため不明	ク		
9	土玉	5	5.3	1	ク		8

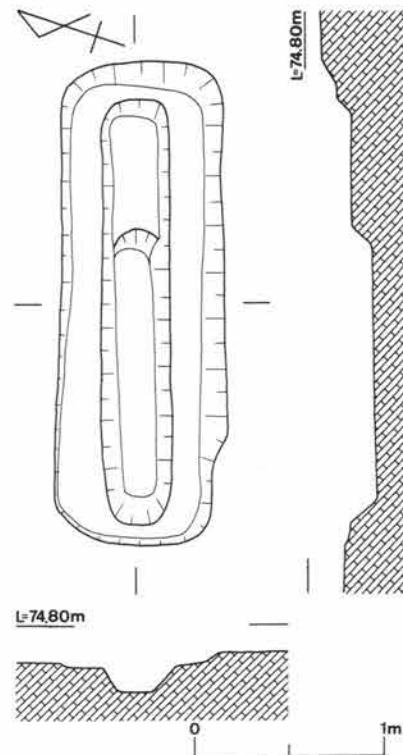
## ⑥遠所8号墳

墳丘(第34図) 9号墳の北側に位置し、直径約7.5m・高さ約1mの規模を測る円墳である。規模が小さいため、墳丘の大半を削り出し整形し、主体部埋葬後、若干の盛り土を施す。南側には、墳丘を1/4周ほどする幅1m・深さ0.3mの溝を設け、9号墳と区画する。

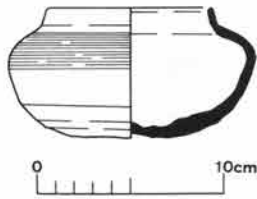
埋葬施設(第35図) 墳頂部中央で1基の墓壙を検出した。主軸はN72°Eで尾根に直交



第34図 遠所8号墳地形図



第35図 遠所8号墳主体部実測図



第36図 遠所8号墳  
出土遺物実測図

し、二段掘形を有する。墓壙は、隅丸長方形を呈し、地山削平面より穿つ。長辺2.55m×短辺0.86m、二段目掘形は、長辺2.25m・短辺0.36mを測るが、この二段目掘形は、中央付近より西側が、1.55mにわたってさらにもう一段掘り込まれている。この部分の側壁は、「L」の字形をなし、検出面から深さ0.2mを測り、底面は水平面を保つ。木棺痕跡も認められず、墓壙の規模、その特異性から木棺は使用されなかった可能性がある。頭位方向は不明である。

主体部内から遺物は出土しなかったが、南側墳丘溝肩付近の盛り土中で短頸壺1が出土した。(増田孝彦)

出土遺物(第36図、図版第39) 出土遺物は短頸壺1点のみである。平坦な底部と「S」字に屈曲する体部からなる。口縁部はわずかに内傾し、端部は丸い。底部外面はヘラ削りを施す。器形からTK209型式、Ⅱ-5段階に併行するものと考ええる。

(岡崎研一)

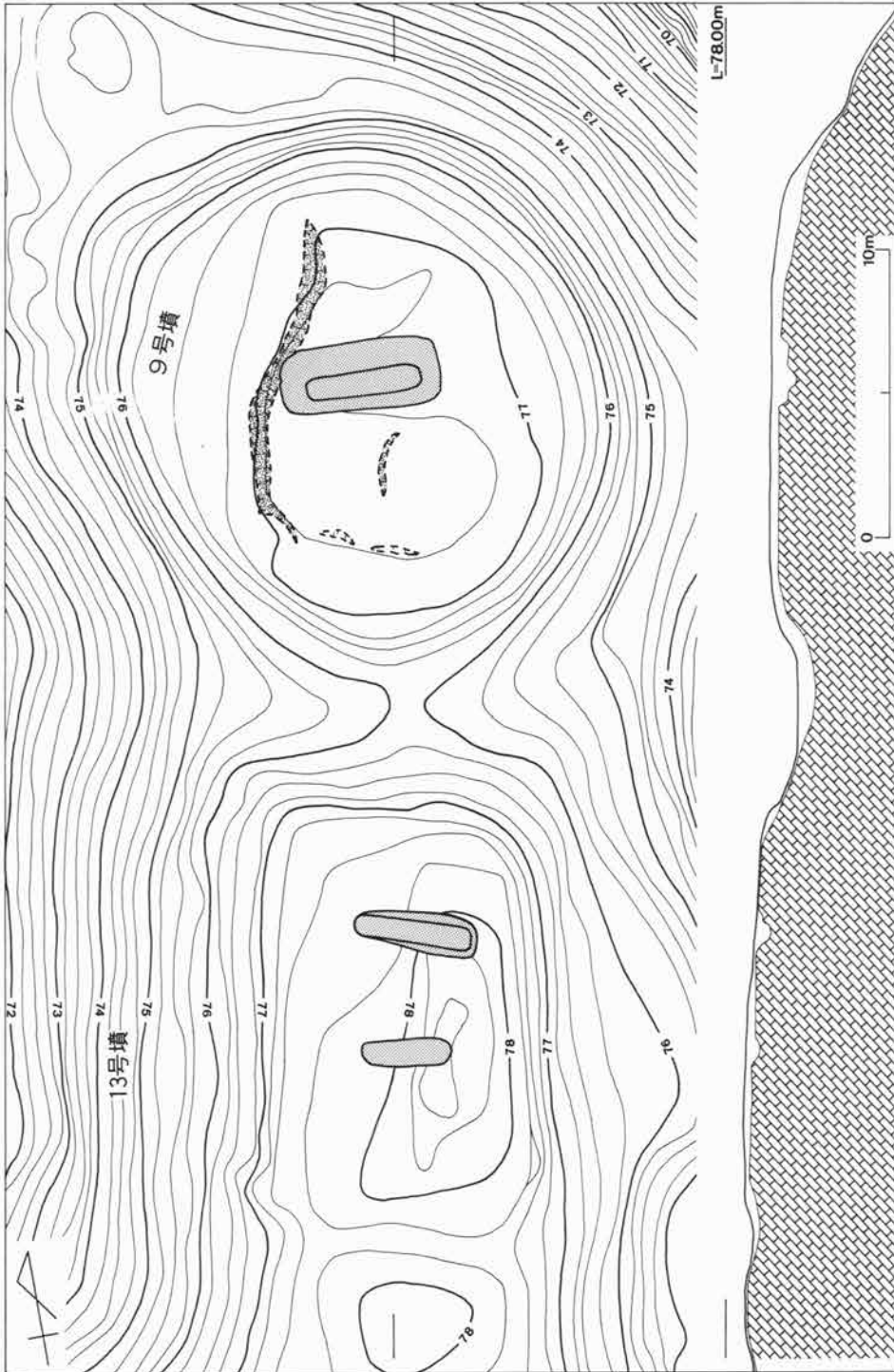
#### ⑦遠所9号墳

墳丘(第37図) 主尾根が、北と東に派生する標高77m付近の分岐点に位置する。墳丘西側には、1927年の丹後大震災によりできたと思われる地割れ、地滑りの痕がみられる。また、中央部には木棺の腐朽に伴い生じたと考えられる凹みもみられた。

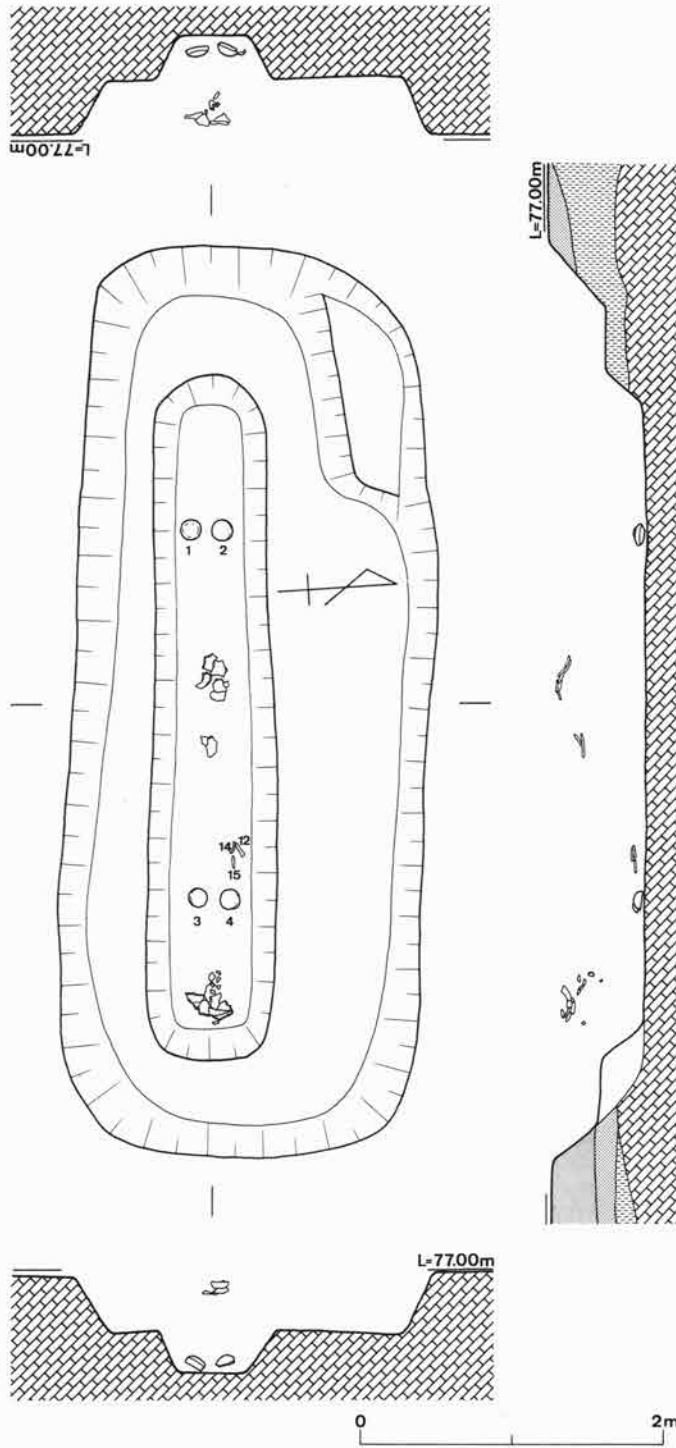
遠所古墳群中、最大規模を誇る直径20m・高さ2.5mを測る円墳である。墳丘は、南側・北側は削り出し整形を行い、東側と西側は旧表土面である暗褐色土に直接盛り土し、墳丘を成形する。この旧表土面には、炭が混じっており古墳築造に際して山焼きを行った可能性がある。盛り土の量は、東側ほど多く西側ほど少ない。墳頂部には盛り土がほとんどなく、墓壙上で0.4mを確認したにすぎない。南側の13号墳との間は、大きく削り出した直線的な幅3.5m・深さ1mの溝により区画される。丘陵最高所に造られているため、遠くに竹野川(弥栄町溝谷)を望むことができる。

墳丘中央部の表土直下や東側斜面からは、破砕された須恵器が多数出土しており、墳丘上で祭祀が行われていた可能性がある。

埋葬施設(第38図) 墳丘中央部よりやや北寄り、墓壙1基を検出した。主軸はN87°Wで尾根に直交する。墓壙は、隅丸長方形を呈し、南・北側は地山削平面より、東・西側は盛り土中より穿つ。二段掘形であり、長辺6.4m×短辺2.4m、木棺部分は長辺4.5m×短辺1.0m、検出面からの深さ0.7mを測る。木棺部分側壁は「L」の字形をなし、底面は水平である。木棺の腐朽に伴い、墓壙上に置かれていた遺物が墓壙内に落ち込んできており、木



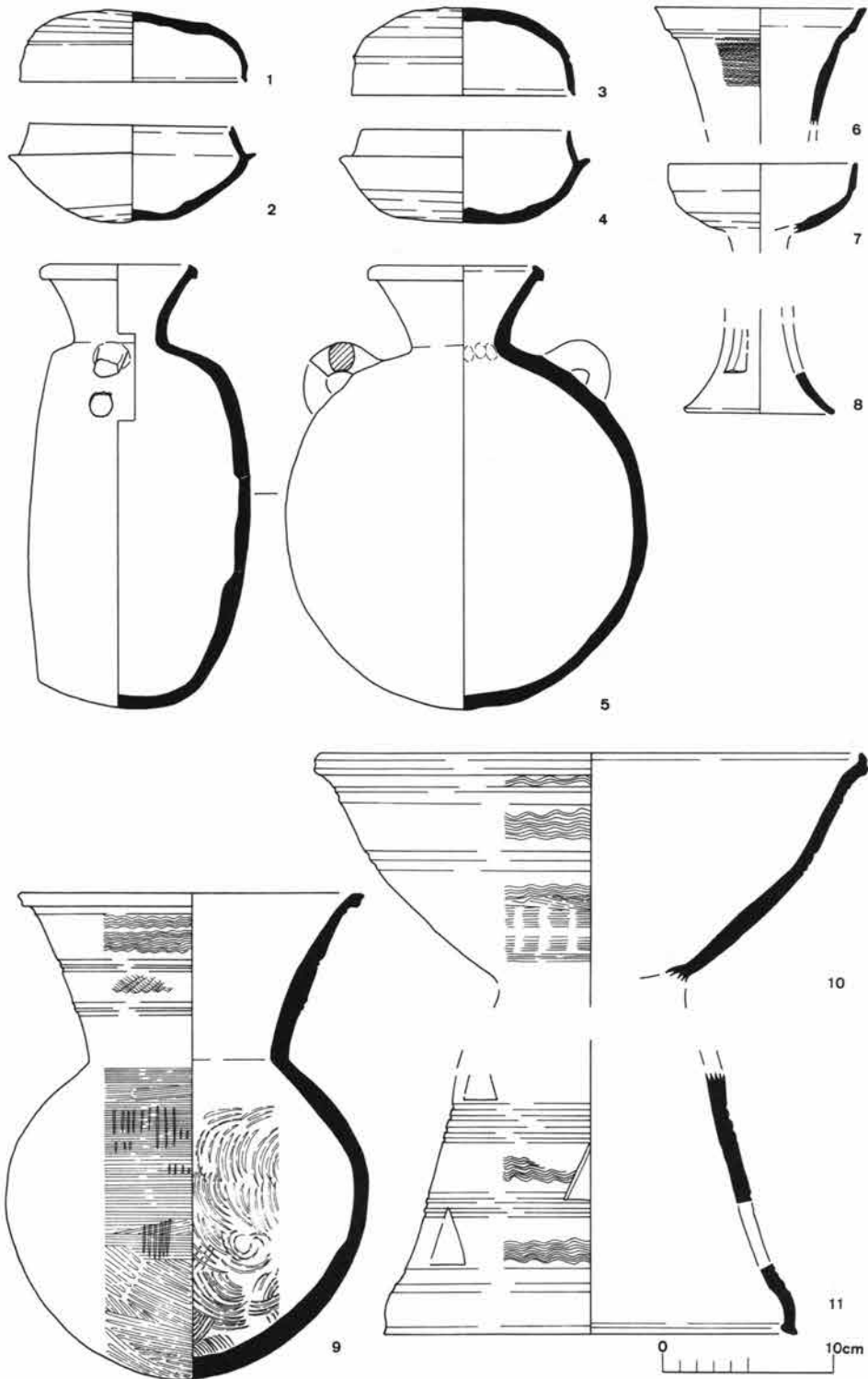
第37図 遠所9・13号墳地形図



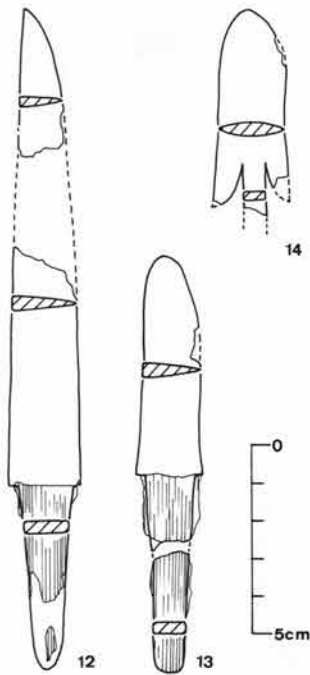
第38図 遠所9号墳主体部実測図

棺が使用されていたことは明らかであるが、木棺の種類を特定することはできなかった。

遺物は、墓壙検出面より二段目掘形検出面までの間の、墓壙長軸方向中心線付近を中心に、須恵器杯身・杯蓋・甗・提瓶・短頸壺・広口壺・甕・器台が破碎された状態で出土した。出土するレベルがまちまちであり、いずれも二段目掘形内にまでは入り込んでいないことからすると、被葬者埋葬後、墓壙を埋めていく過程で祭祀に使用された土器を破碎し投棄していったものであろう。大半の土器は、墓壙検出面より20cm下層で出土しており、本来墓壙検出面付近にあったものが、木棺の腐朽に伴い墓壙内に落ち込んだと考えられる。また、破碎したものを投棄したことを裏付けることとして、墓壙内出土遺物だ



第39図 遠所9号墳出土遺物実測図(1)



第40図 遠所9号墳出土遺物  
実測図(2)

けでは復原できず、墳丘盛り土中・斜面等から出土したものと接合し、初めて復原可能になることからもうかがえる。

二段目掘形内から、東側・西側両端近くから須恵器転用枕として杯身・杯蓋がセットで伏せ並べた状態で出土した。いずれも、南側には杯身が置かれている。東側転用枕のそばでは北側側壁に沿い刀子・鉄鎌が出土した。

転用枕が二方向にあるため、頭位については矛盾が出てくるが、二段目掘形の東側と西側の幅の違いからみると、東側であった可能性が強い。

(増田孝彦)

出土遺物 須恵器・土師器の土器類、鉄製品がある。

a 土器(第39図、図版第42) 主体部から出土した土器は、杯蓋(1・3)と杯身(2・4)と提瓶(5)である。甕(6)の口頸部や高杯(7・8)、広口壺(9)、器台(10・11)については、墳丘斜面から裾部にかけて破片で散らばっていた。

以下、主体部出土土器を中心に概観する。

1・3は、器高が高く丸みをもつ。口縁部は下方を向き端部は平坦である。天井部外面はヘラ削りを施す。

2・4は、底部は深く丸みをもち、立ち上がりは内傾する。端部は平坦である。底部外面はヘラ削りを行う。

杯身・杯蓋の形態から田辺編年TK10型式、中村編年Ⅱ-2段階に併行すると考える。

広口壺9は、丸い体部と逆「ハ」字状に開く口縁部からなる。口縁部には波状文を施し、体部上半はカキ目調整を行い、体部下半はタタキ痕を残す。

器台10・11は同一個体である。スカシは三角形で三段にわたって施す。スカシ間には波状紋を施し、2～3条の沈線をめぐらすことによって一段を区画する。

提瓶5は、丸い体部と「ハ」字状に開く口縁部からなる。把手の一部は欠損しており、体部肩部に自然釉が付着している。これらの土器は、いずれも杯身・杯蓋と同時期と思われる。9号墳の築造年代は、6世紀前半と考えられる。

(岡崎研一)

b 鉄製品(第40図、図版第46・47) 体部内から刀子3点、鉄鎌2点が出土したが、図化できたものは刀子2点と鉄鎌1点である。

刀子12は、刀身の一部を欠損するが、断面二等辺三角形を呈し、関付近での幅2cmを



測り、切先にかけて徐々に細くなっていくようである。13は、刀身と茎がほぼ同じ長さのもので関付近での幅1.8cmを測り、棟・刃側とも切先にかけてやや反る。12・13とも関は直角に浅く切り込まれ、茎には木質が付着する。

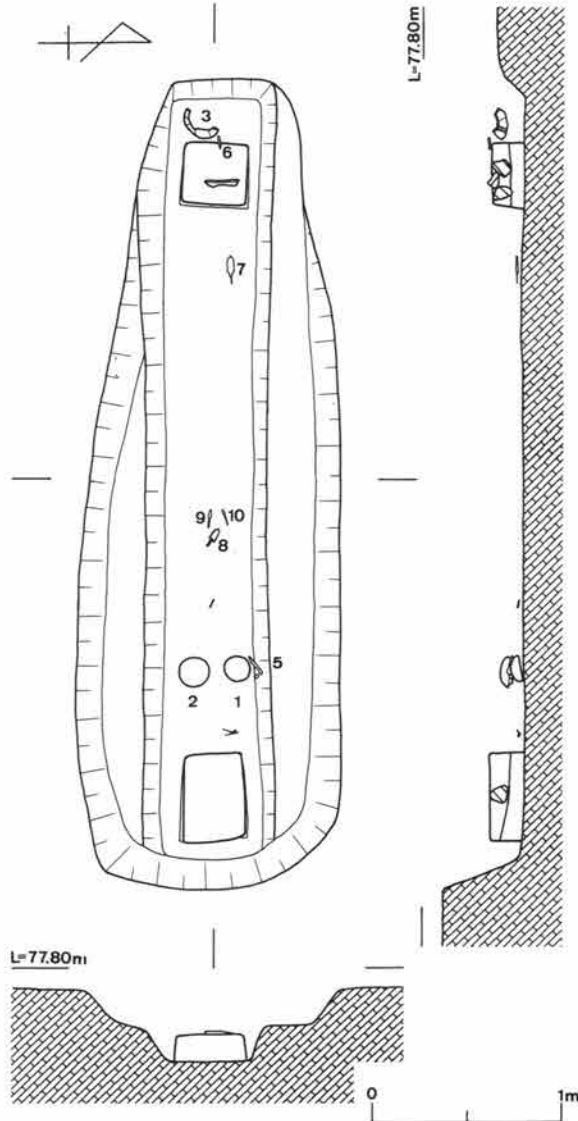
14は、やや細身の腸袂柳葉式の短頸鎌と思われるが、鎌身のみ破片である。断面形は両丸造り。鎌身長5cm・厚さ0.4cmを測る。

⑧遠所11・12号墳

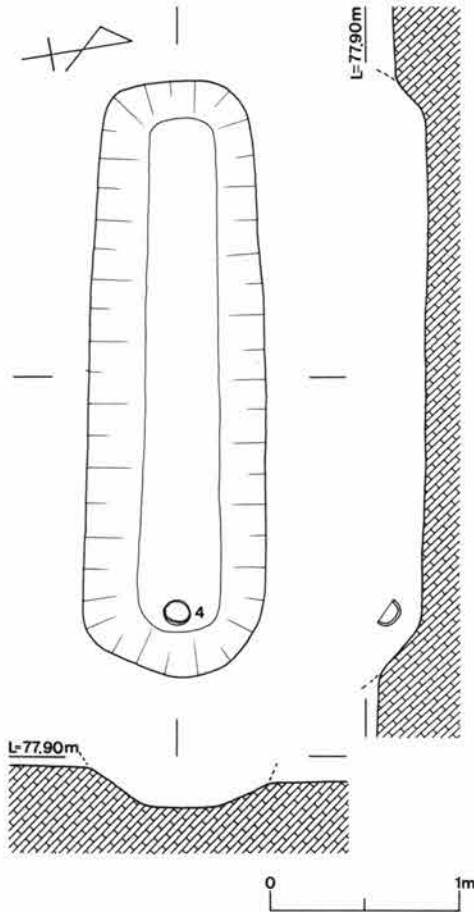
墳丘(第3図) 13号墳東側裾部の張りだし部分に位置するもので、いずれも舌状に削り出された人為的な平坦面が認められたが、埋葬施設は検出されなかった。古墳として造成される途中で放棄されたものであろうか。12号墳では3号墳同様、13号墳裾部と削り出し平坦面の境には土師器甕片が数点出土しており、13号墳に関わる何らかの儀礼が行われた場であったとも考えられる。古墳とは断定できなかったが、人為的な削り出し面を有するため、古墳番号をそのまま用いた。

⑨遠所13号墳

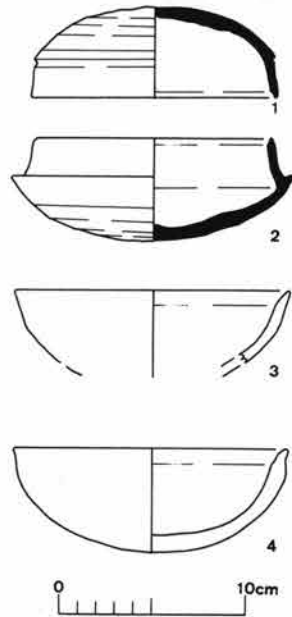
墳丘(第37図) 9号墳の南側に位置し、他の古墳が円墳であるのに対して、長辺18m×短辺13m、12号墳からの高さ2.3mの規模を誇る古墳群中唯一の長方形墳である。墳頂部西側は盛り土が1/2流出し、表土直下が地



第41図 遠所13号墳第1主体部実測図



第42図 遠所13号墳第2主体部実測図



第43図 遠所13号墳出土遺物実測図(1)

山面となっていた。東側で見る限り、盛り土は約0.3mが残存していた。北側の9号墳とは大きく削り出した溝で区画され、南側は幅3m・深さ0.5mを測る直線的な溝で区画される。

墳丘東側裾の12号墳の削り出し平坦面との境からは、土師器甕片の出土がみられ、3号墳同様、何らかの儀礼が行われていた可能性がある。

**埋葬施設** 墳頂部中央付近で、平行して並ぶ墓壇2基を検出した。

**a 第1主体部(第41図)** 第2主体部の北側に位置し、主軸はN89°Wで尾根に直交する。墓壇は、隅丸長方形を呈し、地山削平面より穿つが、検出状況からすると本来は墓壇の西側1/2は盛り土面より穿たれていたようで、墳丘盛り土の流出とともに消失したようである。二段掘形を有し、長辺4.25m×短辺1.4m、木棺部分長辺4.1m×短辺0.65m、検出面からの深さ0.4mを測る。木棺木口部分は、両側とも粘土と花崗岩の小礫で固定する。組合式木棺の使用が推定される。

遺物は、木棺部西側木口付近より須恵器転用枕として杯身・杯蓋がセットで伏せ並べた状態で出土した。この転用枕の東・西側では針状鉄器の出土も認められた。転用枕と北側壁との間からは刀子が出土し、西側木口部分からも切先を西に向ける刀子が出土した。

西側木口と墓壙掘形の間からは、土師器杯が1点破碎された状態で出土している。頭位方向については、転用枕から東枕と考えられる。

**b 第2主体部(第42図)** 墳頂部はほぼ中央部に位置し、主軸はN81°Wで尾根に直交する。墓壙は、素掘りで隅丸長方形を呈し、地山削平面より穿つ。長辺3.25m×短辺0.95m、検出面からの深さ0.22mを測る。

遺物は、墓壙西側壁底面近くより、口縁部を上に向けた土師器碗が1点出土した。

頭位方向については、墓壙掘形を東側と西側を比べた場合、東側が広いことや、遺物の出土位置からも南枕が想定される。木棺が使用されていたか否かは不明である。

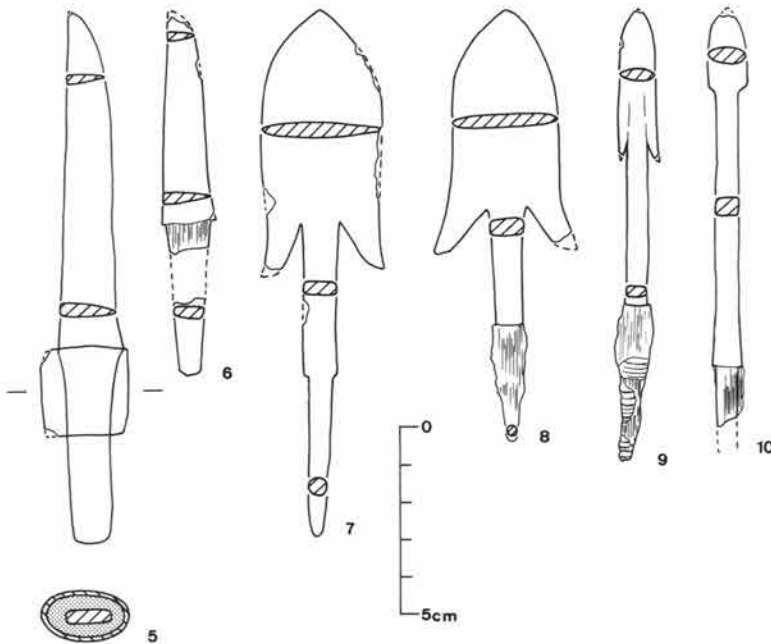
**出土遺物** 出土遺物には、須恵器・土師器・鉄製品がある。第1主体部から須恵器杯身・杯蓋、土師器杯、鉄鏃、刀子、第2主体部から土師器杯がそれぞれ出土した。

**a 土器(第43図、図版第43)** 第1主体部から出土した土器は、土師器杯(4)で、第2主体部から出土したものは、転用枕である杯蓋(1)と杯身(2)と土師器杯(3)である。

杯蓋1は、器高が高く丸みをもち、口縁部は下方を向き端部は平坦である。天井部外面はヘラ削りを施す。

杯身2は、底部は深く丸みをもつ。立ち上がりはわずかに内傾し高い。口縁端部は、平坦である。底部外面にヘラ削りを施している。

杯身・杯蓋の形態から、田辺編年MT15型式、中村編年Ⅱ-1段階に併行すると考える。



第44図 遠所13号墳出土遺物実測図(2)

出土状況から同じ時期のと考えられる土師器杯は、底部は欠損しているが、底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部でわずかに「S」字状に屈曲する。端部は外上方を向く。

第1主体部から出土した土師器杯は、底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部でわずかに「S」の字状に屈曲する。第2主体部出土の杯と同じ形態である。須恵器は出土していないが、土師器杯の形態が類似することから、第2主体部の時期と同じと考える。

これらの出土遺物からみて、13号墳は、6世紀初頭に築造され、相前後する時期で第1・2主体部に埋葬されたと思われる。

(岡崎研一)

**b 鉄器**(第44図、図版第46・47) 第1主体部内から、刀子2点・鉄鏃4点が出土した。この他に、針状鉄器が見られるが風化が著しく図化できなかった。5・6は刀子で、5は全長14cm、関付近での幅1.7cm、関から切先までの長さ9cmで、刀身断面は二等辺三角形を呈する。関は、棟・刃側とも斜めに削り込まれた斜関で、柄は幅2.3cm・厚さ0.15cmの鉄板を曲げた柄縁金具で締める。茎は幅1.2cm・厚さ0.4cmを測る。目釘等は認められない。

7・8は、腸袂柳葉式の鏃身部をもつ短頸鏃で切先がやや角ばるもので、8は7に比べて鏃身がやや短い。棘状突起は有さない。断面形は平造り。8は逆刺が大きく外側に開いている。矢柄の外に出る部分は、7が9.7cm、8は8.3cmを測る。

9・10は長頸鏃で、形態は柳葉式で逆刺のある9と、逆刺をもたず斜関の10がある。いずれも棘状突起は有さない。矢柄より外に出る部分は9が7.8cm、10が約9.5cmを測る。

#### ⑩遠所15号墳

**墳丘**(第62図) 主尾根が東・南に分岐する標高79m付近に位置する。墳丘は非常によく整った円墳で直径13.5m・高さ2mの規模を誇る。墳丘下半1/3は地山削り出し整形により、大半は盛り土により墳丘が造られる。北側の14号墳とは、幅2m・深さ0.5mの浅い溝により区画される。14号墳は古墳築造に際してとり残された残丘であることが明らかとなった。また、近接して築造されている25・26号墳との間にも、幅1m・深さ0.3mの浅い溝により区画される。丘陵高所に築造されているため、遠くに竹野川流域や日本海(網野町浅茂川)を望むことができる。

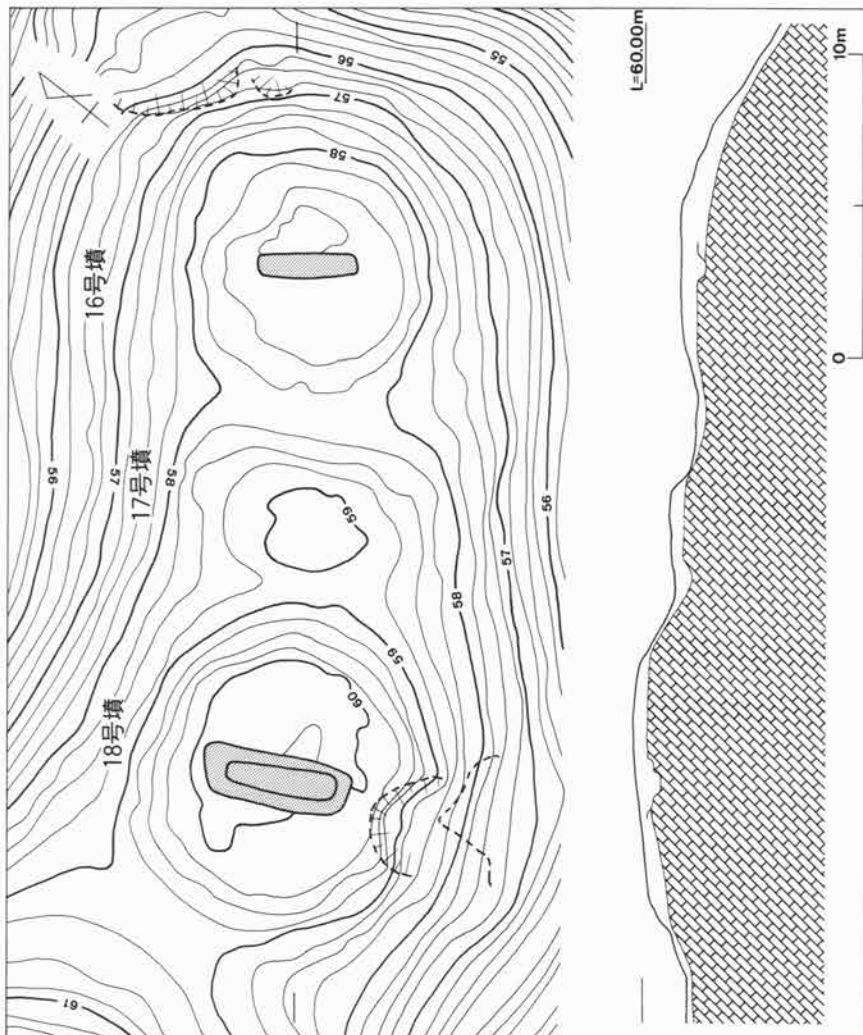
**埋葬施設** 地山上に約1mの盛り土が認められたが、精査を行ったにもかかわらず、盛り土中、地山削平面上とも主体部は検出されなかった。古墳として造営はしたが、埋葬施設は何らかの原因で設けられなかったものと考えられる。墳丘北側の、表土下0.3mのところから風化の著しい須恵器横瓶が出土したが、図化できなかった。

①遠所16号墳

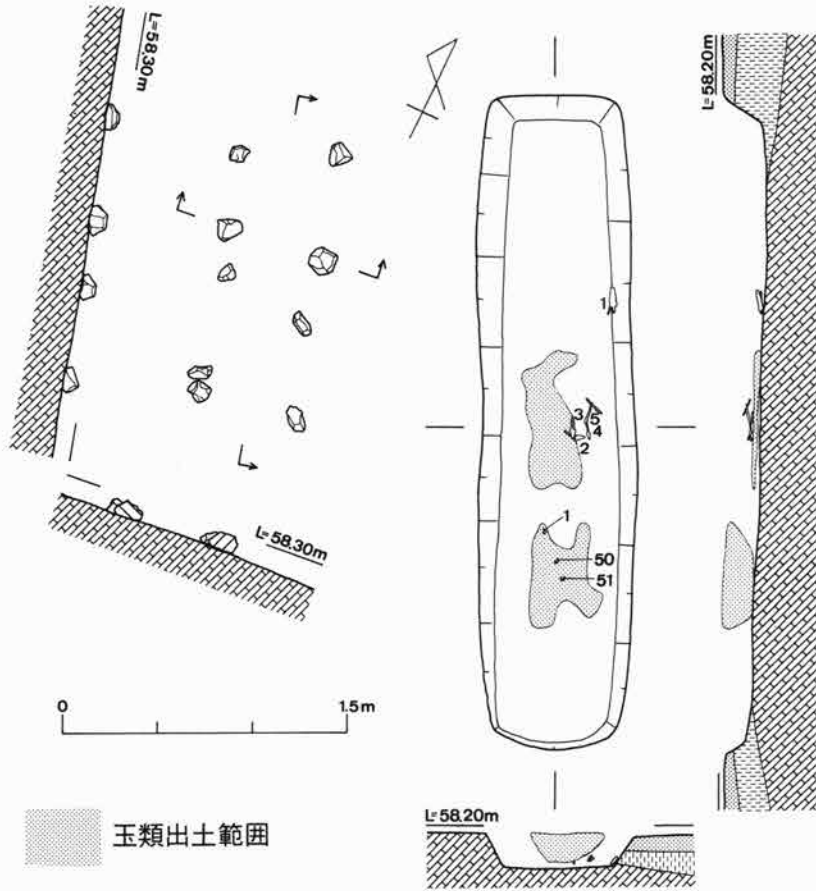
墳丘(第45図) 1号墳が立地する丘陵の南側、15号墳から派生した支尾根の先端に位置する。直径10m、東側からの見かけの高さ2.8mの規模を測る円墳である。尾根高位側の墳丘約1/2は削り出し整形により、低位側は盛り土により円形台を成形する。主体部埋葬後、約0.6mの盛り土を施す。丘陵高位側には、幅2.5m・深さ0.7mの溝により区画される。墳丘のところどころに地震による地滑りの痕が認められた。

埋葬施設(第46図) 墳頂部中央より、墓壙1基と石列を検出した。

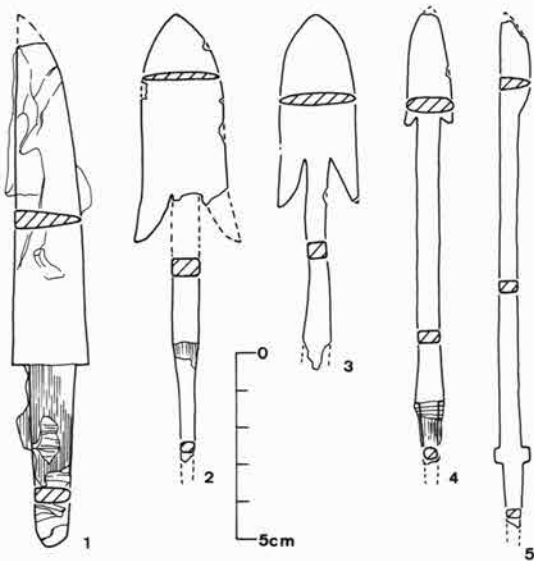
墓壙主軸は、N27°Wで尾根に直交する。隅丸長方形を呈し、西辺のみ地山削平面より、



第45図 遠所16・17・18号墳地形図



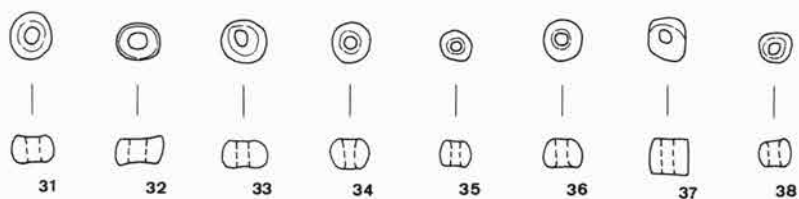
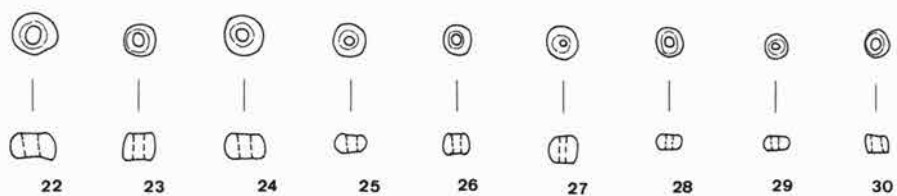
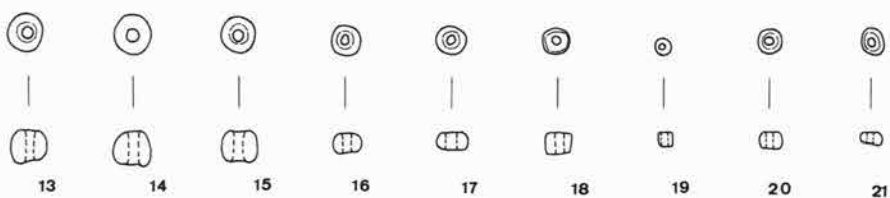
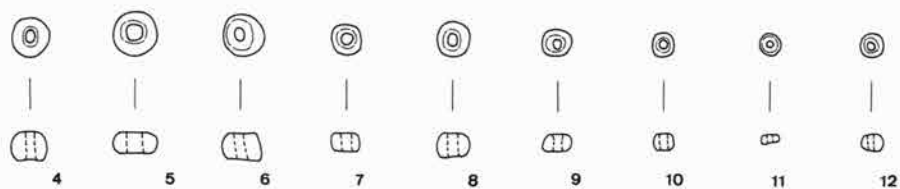
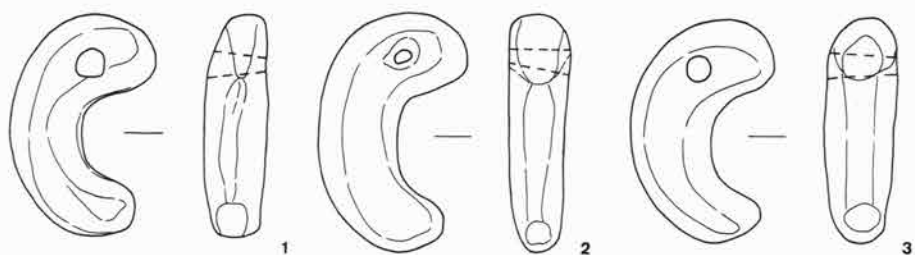
第46図 遠所16号墳主体部石列実測図



第47図 遠所16号墳出土遺物実測図(1)

その他は盛り土面より穿っている。長辺3.5m×短辺0.8m、検出面からの深さ0.2mを測る。墓壙掘り込み側壁は、「L」の字形をなし、底面は緩い北下りの傾斜面をもつ。

遺物は、墓壙中央部と南東側に二群に分けて、勾玉3個・ガラス玉約250個が出土した。中央群のものは墓壙底面から出土したものであるが、南東群のものは、底面と底面から約16cm上方にまで分散して出土しており、埋葬に際してばらまかれた可能性もある。この中央群の玉と



第48図 速所16号墳出土遺物実測図(2)

付表5 遠所16号墳出土土玉類観察表(単位はmm)

No	器種	長	幅	孔径	色調	備考	図
1	勾玉	29.5	7.7	3.6~1.55	淡乳黄色	瑪瑙製	1
2	ガラス小玉	3.2	4.85	1.85	青緑色		22
3	〃	3.7	5.05	1.6~1.2	紺色		
4	〃	3.15	4.8	1.1	淡青色		
5	〃	3.15	4.8	1.4	淡青色		
6	〃	2.5	3.9	1.2	紺色		7
7	〃	3.55	4.95	1.3	濃紺色		
8	〃					破損	
9	〃					実測不能	
10	〃	4.15	5.5	1.5	空色		31
11	〃	3.5	5.6	2.5~2.2	紺色		
12	〃	3.1	5.4	1.9	青緑色		
13	〃	1.25	3.2	1.15	淡青色		
14	〃	1.9	3.1	0.75	淡青色		20
15	〃	3.6	5.05	1.5	淡青色		
16	〃	2.5	5.3	1.8	紺色		
17	〃	2.05	3.8	1.1	淡青色		
18	〃	2.3	3.9	1.15	淡青色		
19	〃	4.2	4.9	1.15	青緑色		
20	〃	3.85	4.6	1.35	淡青色		
21	〃	2.9	5.25	1.8	紺色		
22	〃	2.8	4.15	1.3	淡青色		
23	〃	1.7	3.3	1	紺色		
24	〃	2.8	5.05	1.6	紺色		
25	〃	3.1	4	1.25	紺色		
26	〃	2.95	3.35	1.1	淡青色		
27	〃	2.4	3.7	1.1	淡青色		
28	〃	2.2	3.7	1.1	紺色		
29	〃	1.95	4	1.2	淡青色		16
30	〃	2.3	4	1.05	淡青色		
31	〃	2.9	3.35	1.25	紺色		
32	〃	2.1	3.45	1	青緑色		28
33	〃	2.6	5.6	1.7	紺色		5
34	〃	3.8	5.2	1.15	濃紺色		36
35	〃	2.2	4.15	1.4	青緑色		25
36	〃	3.3	3.4	1.3	青緑色		
37	〃	3.25	4.85	1.7	紺色		
38	〃	3.05	5	1.55	淡青色		
39	〃	4.15	5.3	1.2	淡青色		
40	〃	2.3	3.7	1	紺色		
41	〃	2.4	3.85	1.2	淡青色		
42	〃	4.1	4.9	1.5	紺色		
43	〃	4	5.3	0.9	淡青色		
44	〃	4	4.7	1.9	紺色		
45	〃	2.7	4.25	1.25	紺色		8
46	〃	4.15	4.85	1.3~1.15	淡青色		13
47	〃	2.7	3.5	1.25	淡青色		
48	〃	2	3.35	0.8	紺色		
49	〃	2.45	3.5	0.9	紺色		
50	勾玉	31.5	7.3	3.2~1.2	淡黄褐色	瑪瑙製	2
51	勾玉	30	8.6	3.55~2.3	青緑色	瑪瑙製	3
52	ガラス小玉	2.2	3.75	1.2	淡青色		
61	〃	2.05	4.1	1.25	淡青色		
62	〃	1.55	2.7	1.05	紺色		11
63	〃	3.55	5.1	1.1	紺色		
64	〃	2.95	5.3	1.8	紺色		
65	〃	2.9	3.55	1	紺色		
66	〃	4.35	5	1.6~1.35	淡青色		
67	〃	3.35	5.1	2.95	紺色		
68	〃	2.15	3.2	0.95	淡青色		
69	〃	3.2	3.8	1.4	紺色		
70	〃	1.55	3	0.9	紺色		
71	〃	1.8	5.05	2	紺色		
72	〃	1.75	3	0.9	紺色	両小口平坦	
73	〃	2	3.4	1.55	紺色		
74	〃	1.6	3	1.05	紺色		
75	〃	2.7	4.95	1.4	淡青色		
76	〃	3.7	5.8	1.8~1.2	紺色		
77	〃	3.4	3.5	1.15	紺色	片側小口未調整	
78	〃	2.85	3.9	1.4	淡青色		
79	〃	2.7	5.25	2	紺色		
80	〃	2	3.7	1.3	淡青色		
81	〃	1.45	2.85	0.95	青緑色		29
82	〃	3.08	4.45	1.3	淡青色		
83	〃	3.01	5.4	2.3	紺色		
84	〃	2.25	4	1.15	淡青色		
85	〃	3.5	4.4	1.5	青緑色		
86	〃	2.2	3.5	1.1	紺色		
87	〃	4.2	4.9	1.7	濃紺色	両小口平坦	37
88	〃					実測不能	
89	〃	2.6	5.2	2.15	紺色		
90	〃	2.1	3.05	1	紺色		
91	〃	3.8	4.4	1.4	濃紺色		38
92	〃	2.3	3.35	1.5	青緑色		26
93	〃	2.2	3.2	0.95	淡青色		
94	〃					実測不能	
95	〃	3	5.1	2	紺色		
96	〃	1.9	4	1.4	淡青色		17
97	〃	3.8	5.05	1.8~1.4	淡青色		
98	〃	2.85	5.3	1.9	淡青色		
99	〃	2.7	4.8	1.9	紺色		
100	〃	3.7	5	2.1~1.4	淡青色		
101	〃	3.3	5	1.55	紺色		
102	〃	2.55	5	2.15	紺色		
103	〃	3.25	4.1	1.1	淡青色		
104	〃					実測不能	



丹後国営農地関係遺跡(丹後東部地区)

105	◇	2.35	3.7	1	淡青色		
106	◇	2.25	4.3	1.6	淡青色		
107	◇	2.2	3.9	1.3	淡青色		
108	◇	2.15	3.4	0.95	紺色		
109	◇	2.4	3.9	1	淡青色		
110	◇	2.8	3.75	1.4	淡青色		
111	◇	3.5	5.1	1.5~1.1	淡青色		
112	◇	2.5	3.85	1.15	淡青色		
113	◇	3.9	4.95	1.5	淡青色		14
114	◇	3.1	5.25	1.45		両小口 平坦	6
115	◇	3.2	5.25	1.55	紺色		
116	◇	2.75	5.05	1.7	紺色		
117	◇	2.1	3.2	1.45	淡青色		
118	◇	2.4	5.55	2.25	紺色		
119	◇	4.3	4.5	1.5	淡青色		15
120	◇	3.3	4.75	2.35	紺色	両小口 平坦	
121	◇						
122	◇	3	4.9	1.3	淡青色		
123	◇	3.2	3.75	1.5	青緑色		
124	◇	1.2	3	1	淡青色		21
125	◇	4	5.15	1.65	淡青色		
126	◇	3.25	4.05	1.4	紺色		
127	◇	3.6	5.2	2.15~1.9	淡青色		
128	◇	3.2	3.9	1.2	青緑色		
129	◇	3.2	5.15	2.1	空色		32
130	◇	2.75	5	1.2	淡青色		
131	◇	2.75	3.35	1	紺色		
132	◇	3.35	4.1	1.05	青緑色		23
133	◇	3.2	4.55	1.3	紺色		
134	◇	2.3	3.6	1.1	淡青色		
135	◇	2.45	3.8	1.2	紺色		9
136	◇	4	4.45	1.25	青緑色		
137	◇	2.5	5.3	2.6	紺色		
138	◇	2.25	3.1	1.1	青緑色		30
139	◇	2.75	3.9	1.45	淡青色		
140	◇	3	4	1	淡青色		
141	◇	3.3	3.4	1.5	青緑色		
142	◇	2.75	5.1	1.65	紺色		
143	◇	2.8	3.4	1.4	淡青色		18
144	◇	2.8	5.3	1.7	紺色		
145	◇	3.1	5.3	1.7	青緑色		24
146	◇	2.2	3.95	1.2	淡青色		
147	◇	1.6	3	0.9	淡青色		
148	◇	2.7	3.7	1.15	紺色		
149	◇	2.1	3.8	1.2	紺色		
150	◇	3.05	5.7	1.75	空色		33
151	◇	2.8	5.2	1.55	紺色		
152	◇	3.9	4.6	1.4	紺色		
153	◇	2.3	4.55	1.35	紺色		
154	◇	3.2	4.55	1.4	紺色		
155	◇	3.2	4.2	1.4	青緑色		27
156	◇	3.2	4.55	1.4	紺色		
157	◇	2.5	4.7	2.1	紺色		
158	◇	3.9	5.1	1.5	淡青色		
159	◇	2.95	5.2	1.6	紺色		
160	◇	1.9	2.8	0.9	紺色		12
161	◇	2.5	3.1	1.2	紺色		
162	◇	2.05	3.25	1.2	青緑色		
163	◇	2.2	3.8	1.6	淡青色		
164	◇	2.5	3.4	1.1	淡青色		
165	◇	2.7	3.9	1.2	淡青色		
166	◇	2.15	3.1	1	紺色		
167	◇	2.2	3.3	1.15	淡青色		
168	◇	2.2	3.3	1.1	淡青色		
169	◇	2	3.3	1.35	淡青色		
170	◇	2.85	4.9	1.4	紺色	半分欠損	
171	◇	2.35	4	1.35	青緑色		
172	◇	2.8	不明	不明	紺色		
173	◇	2.05	3.65	1.35	淡青色	半分欠損	
174	◇	2	3.4	1	紺色		
175	◇	2.3	3.7	1.2	淡青色		
176	◇	2.4	3.3	1.05	紺色		
177	◇	2.9	4.7	1.45	青緑色		
178	◇	3	4.75	1.45	紺色		
179	◇					実測不能	
180	◇	1.8	3.3	1.05	淡青色		
181	◇	2.6	5.2	1.9	紺色		
182	◇	2.5	5.05	1.9	紺色		
183	◇	2.7	3.3	1.1	青緑色		
184	◇	2.4	3.75	1.3	青緑色		
185	◇	1.75	3.5	1.2	紺色		
186	◇	1.95	3.15	1.3	青緑色		
187	◇	2.1	3.4	0.95	紺色		
188	◇	2.3	3.7	1.1	淡青色		
189	◇	2.9	5	1.7	紺色		
190	◇	2.3	4.8	2.3	紺色		
191	◇	4	5.05	2.15	青緑色		
192	◇	2.9	4.05	1.55	紺色		
193	◇	2.6	4.5	1.8	紺色		
194	◇	2.7	4.15	1.7	青緑色		
195	◇	4.3	5.05	1.1	紺色		4
196	◇	2.4	4	1.3	淡青色		
197	◇	3.2	4	1.2	淡青色		
198	◇	3.5	5.05	1.8	紺色		
199	◇	2.3	3.7	1.3	淡青色		
200	◇	2.8	4.6	1.7	紺色		
201	◇	2.85	4.2	1.2	淡青色		
202	◇	3.9	5	1.5	紺色		
203	◇	2.55	4.7	1.65	空色		34
204	◇	1.8	2.95	0.9	淡青色		
205	◇	3.1	4.4	1.3	青緑色		
206	◇	2.9	3.75	1.2	空色		35
207	◇	1.9	3.05	1.15	淡青色		
208	◇	2.3	4	1.5	淡青色		
209	◇	2.85	4.05	1	紺色		
210	◇	1.25	3	1.05	淡青色		
211	◇	2.7	4.9	1.35	紺色		
212	◇	4.4	4.85	1.35	淡青色		
213	◇	2	3.8	1.4	淡青色		
214	◇	3.6	5.1	1.1	青緑色		
215	◇	2.4	3.9	1.2	淡青色		
216	◇	4	4.8	1.4~1.15	淡青色		

217	◇	2.45	4.9	1.45	紺色						
218	◇	1.8	3.6	1.1	淡青色						
219	◇	3.2	4.9	1.65	紺色						
220	◇	2.65	5	2.2	紺色						
221	◇	2.05	3.1	0.95	淡青色						
222	◇	3.8	5.15	1.15~0.95	淡青色						
223	◇	2	3.4	1.1	紺色						
224	◇	2	3.3	1.05	淡青色						
225	◇	2.7	4.1	1.45	紺色						
226	◇	2.8	3.9	1.3	紺色						
227	◇	2.55	3.4	1.2	淡青色						
228	◇	3.55	5.25	1.95	紺色						
229	◇	2.8	4.4	1.25	青緑色						
230	◇	2.25	3.7	1.45	淡青色						
231	◇	2.95	4	1.2	青緑色						
232	◇	3.95	4.85	1.75	紺色						
233	◇	3	5	1.55	紺色						
234	◇	2.5	5.1	1.9	紺色						
235	◇	3.5	4.6	1.4	紺色						
236	◇	2	3.65	1.3	淡青色						
237	◇	2.55	3.75	1.3	青緑色						
238	◇	1.55	2.6	0.95	淡青色						
240	◇	2.35	4.7	1.6	紺色						
241	◇	2.4	3.75	1.1	紺色						
242	◇	2.9	3.4	1.6	青緑色						
243	◇	2.2	3.9	1.45	青緑色						
244	◇	3.6	4.7	1.3	紺色						
245	◇	3.8	4.7	1.25	淡青色						
246	◇	4.75	3.2	1.15	淡青色						
247	◇	3.85	4.75	1.2	淡青色						
248	◇	2.3	3.75	1.05	淡青色						
250	◇	2.9	3.3	0.9	淡青色						
251	◇	2	3	1	淡青色						
252	◇	2.65	3.75	1.2	紺色						
253	◇	1.8	3.7	1.4	淡青色						
254	◇	3	4.8	2.75	紺色						
255	◇	1.75	3.4	1.2	紺色						
256	◇	1.5	5.05	2.05	紺色						

ともに、底面より鉄鍬5本が出土しているが切先方向もまちまちで、まとめられて副葬されたようである。掘形北東壁寄りから切先を北西に向ける刀子1、その下より鉄鍬1も出土した。鉄製品とともに多量の玉類を副葬するという例は遠所古墳群中ではみられないため、他の古墳の被葬者とはその性格が異なるものと思われる。

頭位方向については、玉類の出土状況から南東枕が想定される。

この墓壙の西側において、拳大の花崗岩を一行に4石、平行して2列並べた石列が検出された。石列は長さ約1.55m、石列幅は約0.65mを測る。石列上面のレベルは同一レベルであり、石材は地山削平面に直接置かれていた。被葬者埋葬にあたって何らかの儀礼を取り行われた際の祭壇として使用されたものであろうか。

出土遺物 16号墳から出土した遺物には、鉄製品と玉類がある。

a 鉄製品(第47図、図版第46・48) 主体部内より刀子1点、鉄鍬6点が出土した。

刀子1は、切先の一部を欠くが、現存長13.3cmを測り、刀身断面は二等辺三角形をなし、関部分の幅2cmで切先に向かうに従い徐々に細くなる。刀身には被皮の痕跡が残る。関は、直角に深く切り込まれる。

鉄鍬は6点出土しているが、図化できたものは4点である。

2・3は、腸袂柳葉式の短頭鍬でやや大きい逆刺をもち、2は逆刺が外側に開く。

4は、長頭鍬で腸袂柳葉式の鍬身部をもつ。逆刺は短く棘状突起は有さない。筥被部は関の部分で最大となる。矢柄の外に出る部分は約10.5cmである。

5は、長頭鍬で鍬身の片側に両面から刃をつけるもので切先の一部を欠くが、斜関で棘状突起を有する。矢柄の外に出る部分は約11.5cmである。

(増田孝彦)

b 玉類(第48図、図版第50) 玉類は、勾玉3点、ガラス玉250点の総数253点が出土した。勾玉は、瑪瑙製が2点、碧玉製が1点で、色調は、瑪瑙製が淡乳黄色と淡黄褐色を呈し、碧玉製は青緑色である。碧玉製勾玉は、他の2点と比べて丸みをもち、比較的ていねいに仕上げている。

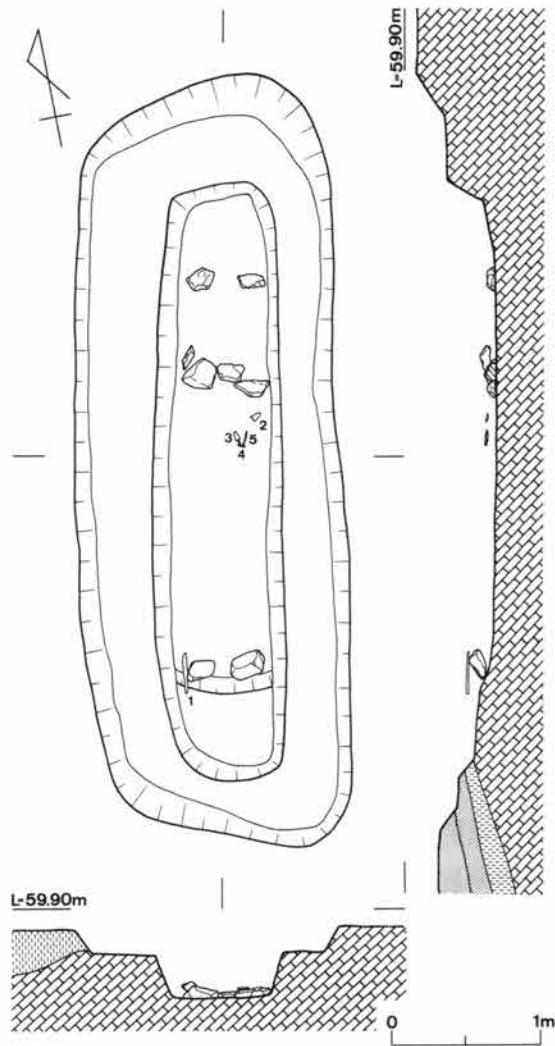
ガラス製小玉は、紺色に発色するものが106点、淡青色が97点、青緑色が32点、空色が5点、濃紺色が3点出土した。これらは、直径5mm以上の大形品と直径4mm前後の中形品、直径3mm前後の小形品とに分けられる。また、形も断面でみると、扁平なもの、ほぼ円形、両小口をていねいに平坦に仕上げた方形の3者に大別することができる。

なお、濃紺色は紺色に含めて考えてもよく、空色は青緑色のものに近い発色と思われる。これらのガラス製小玉の計測値は付表5に示したが、実測図は空色、濃紺色以外の数の多い紺色、淡青色、青緑色については、その一部を図示した。

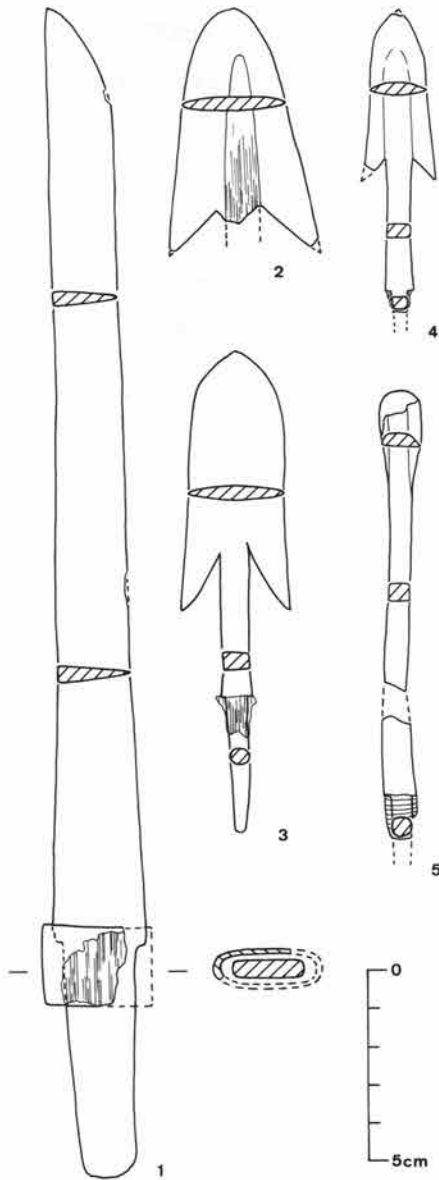
(佐伯英樹)

#### ⑫遠所18号墳

墳丘(第45図) 16号墳の西側に位置し、16号墳との間には残丘として残された17号墳がある。直径12m・高さ2mを測る円墳である。墳丘の大半を削り出し整形により円形台を形成するが、高位側にあたる西側は、盛り土により整形する。主体部埋葬後約0.5mの盛り土を施す。東側は幅1.5m・深さ0.6mの溝により区画され、西側は、19号墳築造後に18号墳が築造されているため、それぞれ築造の際に削り出した基底部分が溝状の区画として残存し、それにより区画されている。



第49図 遠所18号墳主体部実測図



第50図 遠所18号墳出土遺物実測図

埋葬施設(第49図) 墳頂部中央で1基の墓壇を検出した。主軸はN11°Eで尾根にほぼ直交する。墓壇は、隅丸長方形を呈し、東・北側は地山削平面より、西・南側は盛り土面から穿つ。二段掘形を有し、長辺が5.0m×短辺1.75m、木棺部分は長辺3.95m×短辺0.85m、検出面からの深さ0.45mを測る。木棺部分側壁は「U」の字形をなし、底面は両端に比べ中央部がやや低くなっている。また、南側端約0.5mは一段高くなっている。この段付近と中央部より北側には、花崗岩の石材が3か所墓壇に直交する形で置かれていた。北側のもの2列は近接しているが、段付近のものとは距離を隔てている。これらの石材上面のレベルは、ほぼ同一であり大半の石材が地山面に直接置かれている。これらの石材が配置された理由として考えられることは、木棺の底面レベルを合わせるために使用された可能性がある。

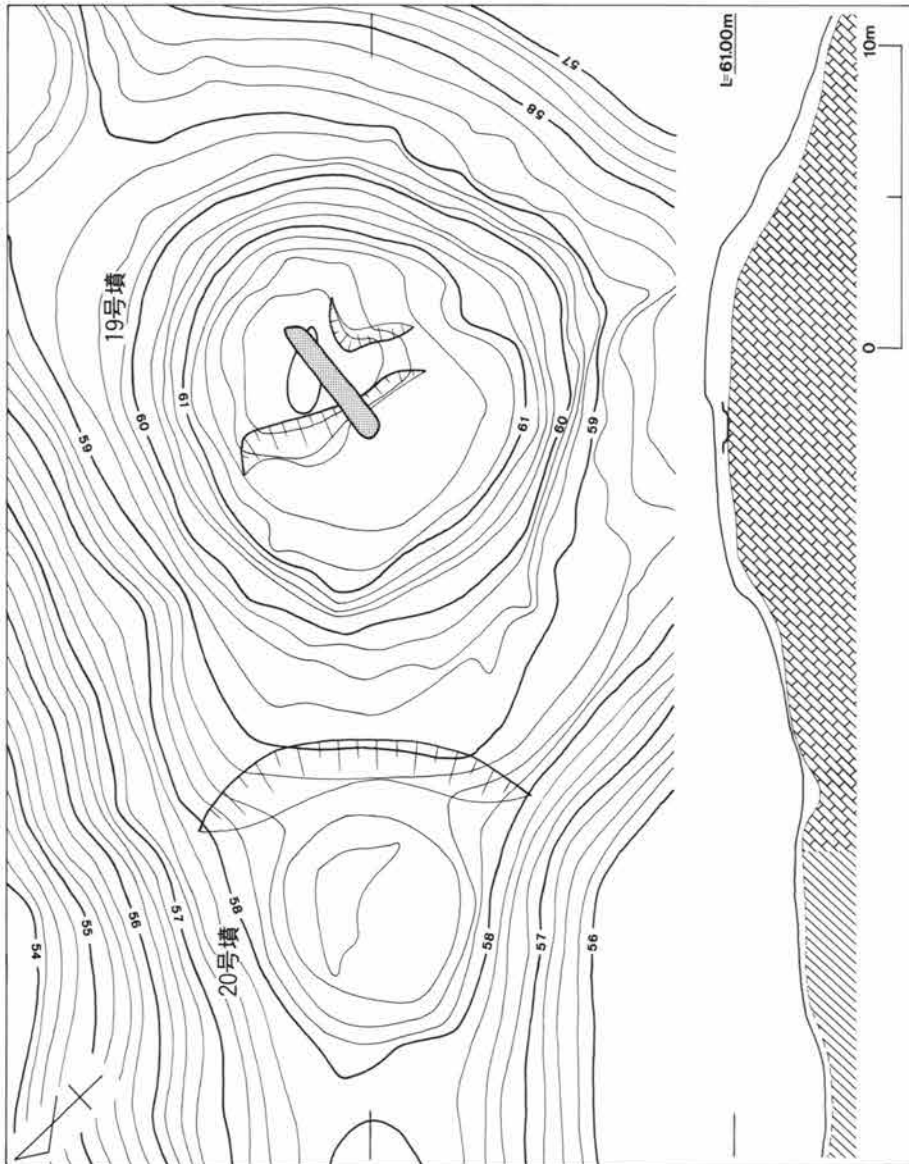
遺物は、南側石列西側壁側より切先を北に向けた刀1、中央付近で切先を北にした鉄鏃4が出土した。この中央付近の鉄鏃は石列上面レベルより下位になるため、棺底に副葬されていたと考えられる。頭位方向は、副葬品の切先方向などから南枕と推定される。(増田孝彦)

出土遺物 遺物は、墓壇内から鉄製品が出土したのみで、土器類は出土しなかった。

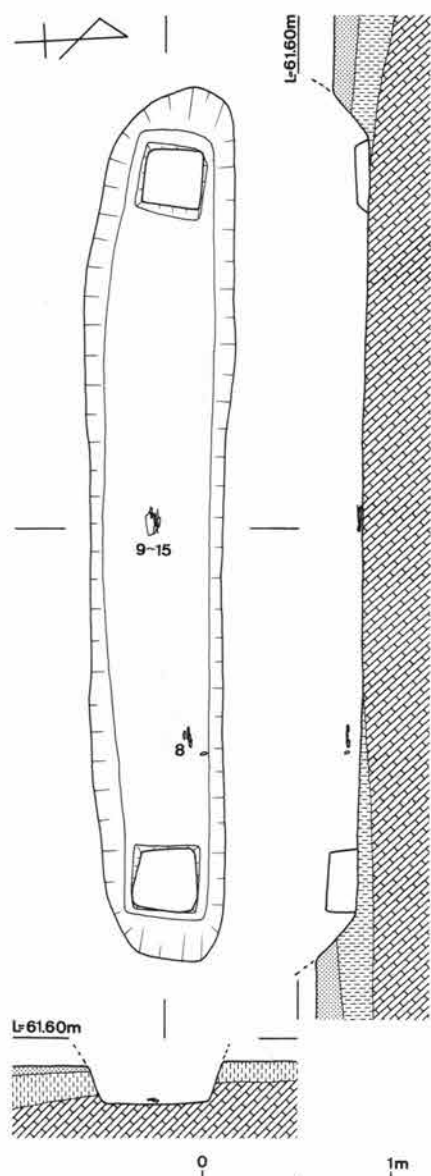
a 鉄製品(第50図、図版第46・48) 小刀1は、刃部の一部を欠くが全長30.6cmを測り、刀身断面は二等辺三角形を呈し、関部分での幅2.5cmを最大とし切先に向かうに従い徐々に細くなる。関は、ややにぶく浅く切り込まれる。柄は、幅3cm・厚さ0.2cmの鉄板を曲げた柄縁金具で締められる。

2は、三角形を呈する無頭鏃で、中央部に矢柄の木質が残る。鏃身長6.5cm・幅4cmを

測る。3は、腸袂柳葉式の短頸鍬で切先がやや角ばるもので、逆刺は大きく切り込まれる。断面形は平造り。全長12.5cm、矢柄より外に出る部分は9cmである。4は、短頸鍬で鍬身の形態は柳葉式で逆刺をもっている。鍬身の幅が2cmと広く、筥被部にて欠損する。矢柄の外に出る部分は、10.5cmである。5は、長頸鍬で鍬身の両側に刃をもつもので、関はなく、鍬身の断面は台形を呈する。



第51図 遠所19・20号墳地形図



第52図 遠所19号墳主体部実測図

### ⑬遠所19号墳

**墳丘(第51図)** 18号墳の西隣りに位置し、北西からのびてきた尾根が東へと方向を転じるころでもある。墳丘は、西側1/2を大きく削平されたような状況を呈するが、調査の結果、西側の削平した土砂は東側に排土したようで、墳丘東斜面には多くの土砂の堆積が認められた。また、墳丘東1/2の高まり部分は本来の墳頂部上が若干削平されたものであることも明らかとなった。墳丘はその大半を削り出し整形により円形台を形成するが、盛り土が約1.0m施されているため、かなり腰高の古墳になっている。直径17m・高さ2.5mの規模を有する。18号墳との間はそれぞれ築造に際し削り出した基底部分が溝状の区画として残存するが、尾根高位側は若干の削り出しによる平坦面を設けるにすぎない。平坦面は、3号墳や13号墳のように土器類が出土しないことから削り出しにより自然に形成されたと考えられる。溝状の区画内に排土された土砂中からは、土師器壺・甕(第53図6)が混入しており、墳丘上で何らかの祭祀が行われていた可能性がある。また、墳丘北東側肩部付近から有蓋高杯3及びその蓋2点が出土した。

**埋葬施設(第52図)** 墳頂部中央で1基の墓壙を検出した。主軸はN87°Wでほぼ東西方向である。

墓壙は、本来二段掘形を有すると思われるが、墓壙掘形を盛り土面から穿つことや、墳丘が削平されていることから、木棺部分のみ確認した。木棺部分は、地山削平面より穿たれ、長辺4.55m×短辺0.7mの規模で、検出面からの深さ0.25mを測る。木棺部底面は水平面を保ち、地山削平面が底面となる。検出面での小口付近の幅を比べると、西側が広い。また、小口部分は粘土により固定される。形状から組合式木棺の使用が想定される。

遺物は、棺上に置かれていたと考えられる刀1が精査中に出土し、棺内から中央部で切

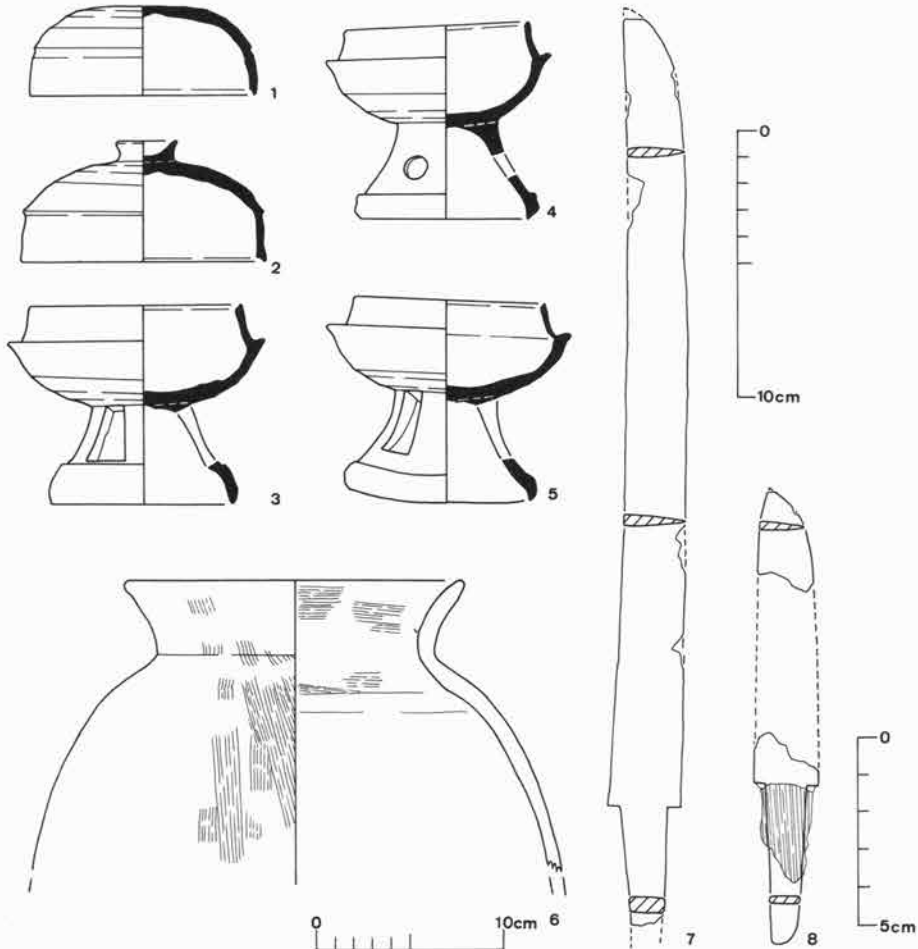
先を東に向ける鉄鎌7と、東側小口付近の北壁寄りで細片化した刀子が約3個体分出土した。頭位方向は、遺物出土状況や棺の形状から西枕が想定される。

(増田孝彦)

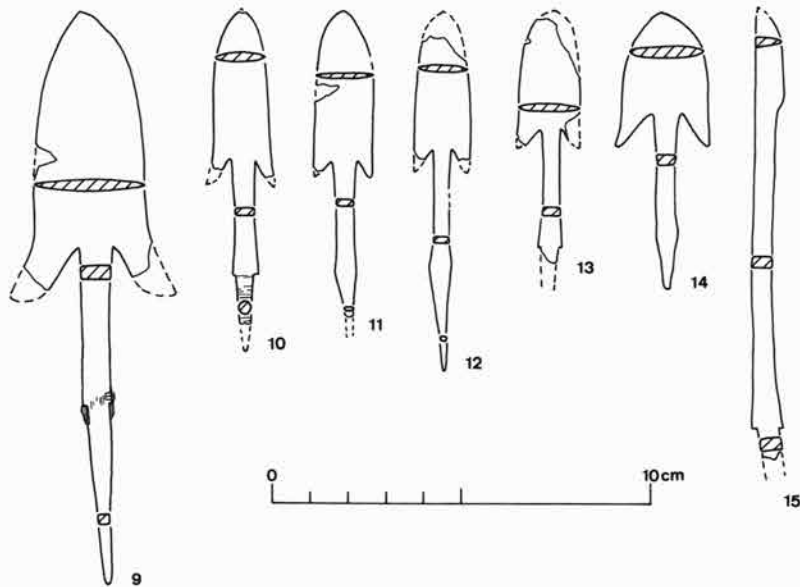
出土遺物

a 土器(第53図、図版第43) この古墳から出土した土器は、墳丘盛り土内出土の有蓋高杯の蓋(1・2)、有蓋高杯(3・4・5)と、隣接する18号墳との間から出土した土師器甕(6)である。主体部内から出土した土器はない。土器の出土状況を見る限り、21号墳の出土状況に近い形であったものと考えられるが、後世の削平がひどく、原位置をとどめていない。しかし、21号墳の出土例を考えると墳丘盛り土内出土の蓋2点、高杯3点については、埋葬に伴う土器と考えたい。

蓋(1・2) つまみをもつ蓋である。有蓋高杯の蓋で、蓋1と高杯5、蓋2と高杯3が



第53図 遠所19号墳出土遺物実測図(1)



第54図 遠所19号墳出土遺物実測図(2)

セット関係になる。器高は高く丸みをもつ。口縁部は下方を向き端部は平坦である。天井部外面をヘラ削りした後、つまみを貼り付けている。蓋1はつまみが欠損している。

有蓋高杯(3・4・5)は、杯部は丸みをおびており、立ち上がりは内傾する。口縁端部は平坦なものと同丸仕上げたものがある。脚部は「ハ」字状に大きく開き、端部で「S」字状にまるみをもって屈曲する。スカシは、円形と方形の2種類が施してある。

土師器甕(6)は、底部は欠けており、体部より丸みをおびながら立ち上がり、口縁部で大きく屈曲する。口縁端部は外上方を向き、丸い。体部外面には縦方向のハケ目調整を行っており、体部内面上部は横方向、下部は斜め方向のヘラ削りを施している。この土器は、18号墳との間から出土しており、18号墳の副葬品である可能性もある。

蓋と有蓋高杯の形態から、田辺編年TK47型式、中村編年I-5段階に併行するものとする。19号墳は、5世紀末に築造・埋葬された古墳と思われる。(岡崎研一)

**b 鉄製品**(第53・54図、図版第46・48) 主体部内より小刀1点・刀子約3個体分・鉄鎌7点が出土した。小刀7は、現存長23.8cmで刃部・棟側・茎の一部を欠く。関から切先にかけて棟側は、やや反る。刀身断面は二等辺三角形を呈し、関部分は直角に深く切り込む。8は、刀子であるが細片化しており、1点しか図化できなかった。関部分は、直角に切り込まれ茎部分に柄の木質が残る。

鉄鎌9～14は、腸扶柳葉式の短頸鎌であるが、鎌身の形態から3種類に分けられる。9

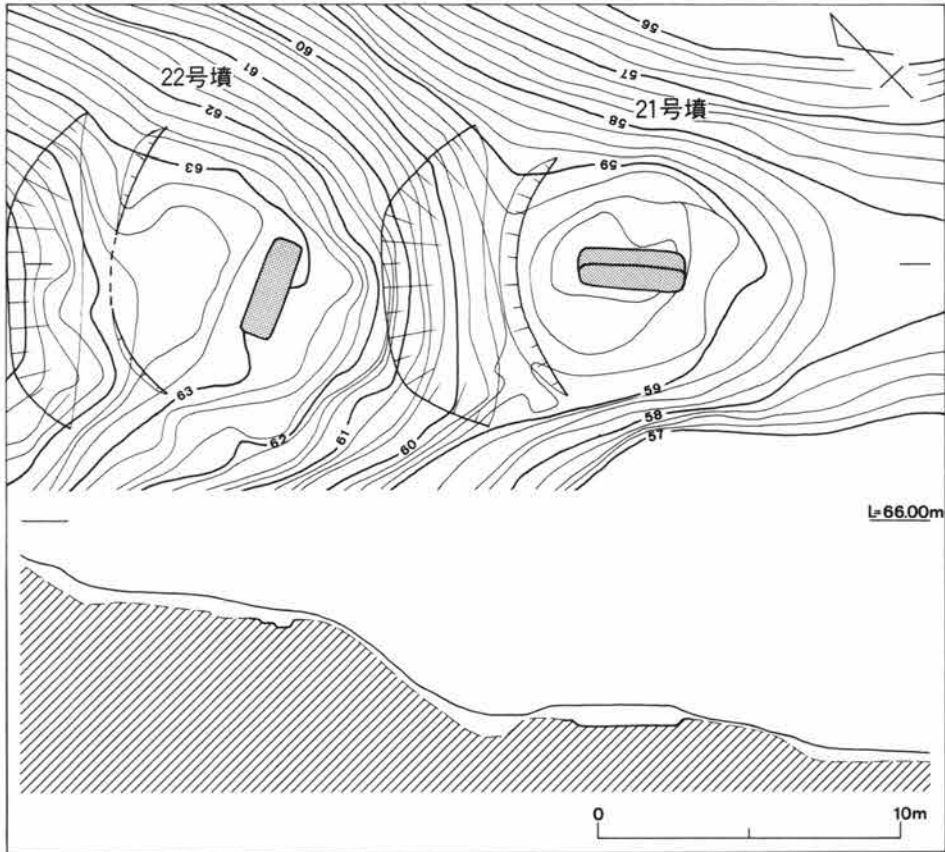


は、大形で鍬身が長く、全長15.2cmを測り、逆刺は大きく外に向かって開く。矢柄の外に出る部分は10cmである。12・13は、鍬身はやや細長く逆刺は小さい。14は、大きな逆刺をもち、鍬身が三角形状をなす。矢柄の外に出る部分は6cmである。15は、長頸鍬で鍬身の片側に両面から刃をつけるもので、関は斜関で、篋被部は関の部分で最大となる。

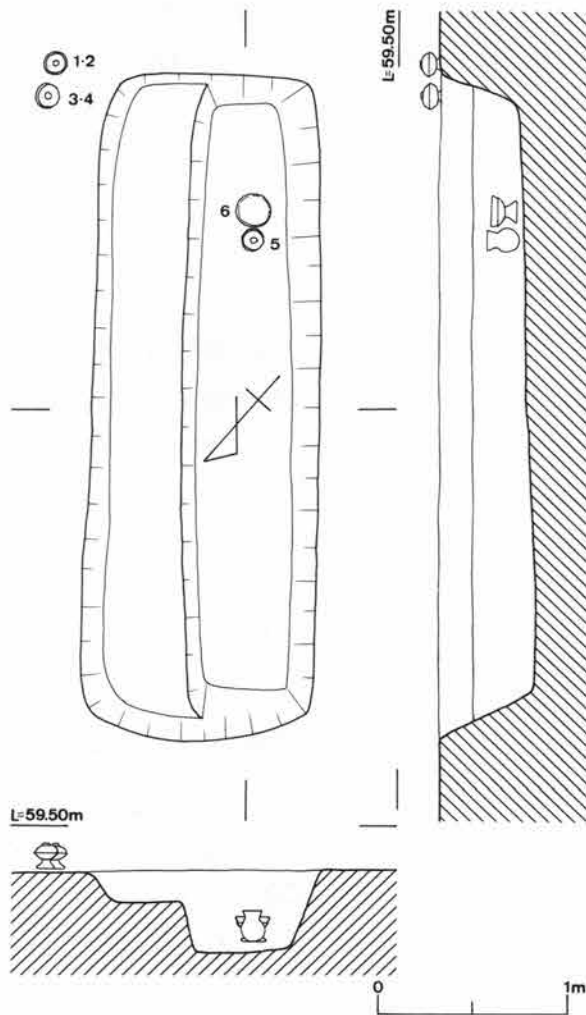
⑭遠所20号墳

墳丘(第51図) 19号墳の北西隣りに位置し、19号墳の平坦部を削り区画溝が設ける。直径8m・高さ0.8mを測る円墳である。区画溝は幅2m・深さ0.6mを測り、内部埋土中より須恵器短頸壺片1点が出土している。保存が決定したため、墳丘の調査しか実施していない。そのため、墳丘の築造方法については、詳細は不明であるが、表面観察する限りでは19号墳寄りの墳丘の1/2は地山を削り出し、高位側は旧表土面に直接盛り土して墳丘を形成しているようである。盛り土は地山削平面上で約0.3m認められた。

15号墳同様、古墳として造営されたと考えられるが、埋葬施設は存在しなかった。



第55図 遠所21・22号墳地形図



第56図 遠所21号墳主体部実測図

⑮遠所21号墳

墳丘(第55図) 20号墳の北西隣りに位置する。20号墳と21号墳とは約7mの空間があくが、丘陵按部となるため古墳は造られなかったようである。墳丘は、大半が地山整形と思われるが、20号墳同様保存されることになり、墳丘の調査をしていない。直径11m・高さ1.5mで、盛り土は約0.5m確認した。尾根高位側に22号墳の墳丘の一部削った幅2.5m・深さ0.8mの溝がある。この溝から22号墳から転落した須恵器大甕片が出土した。

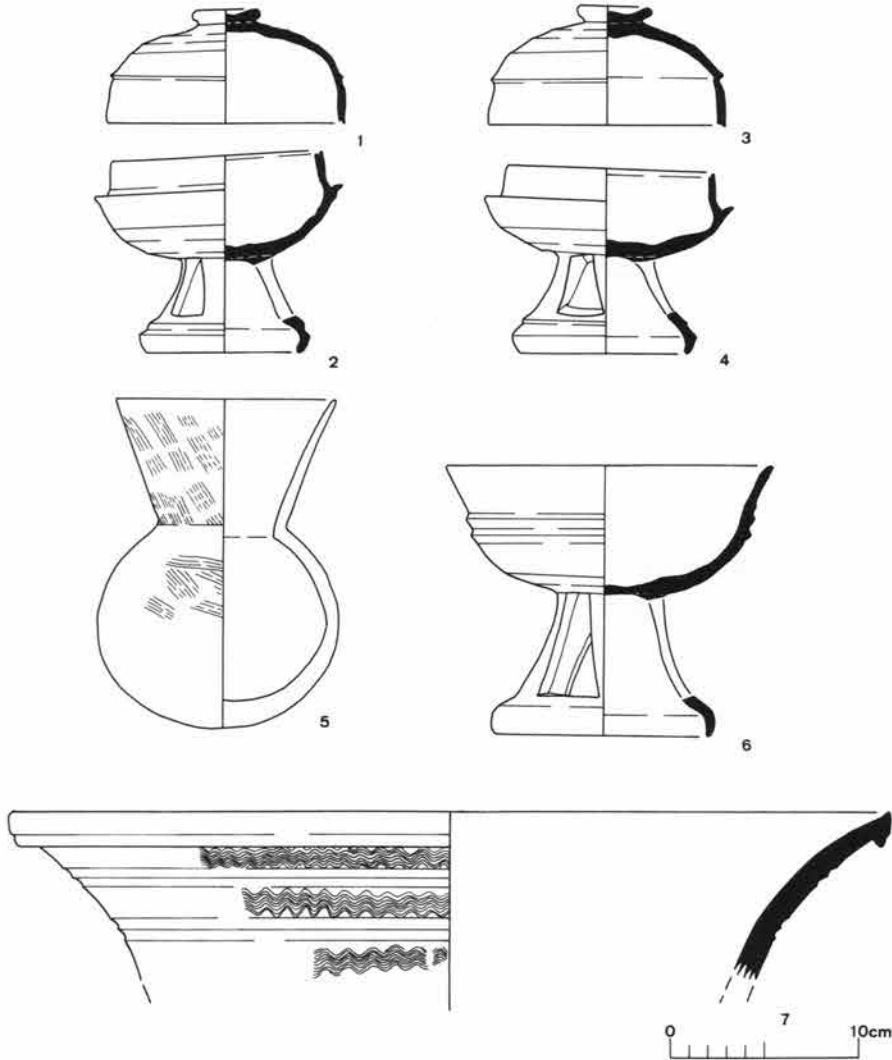
埋葬施設(第56図) 墳頂部中央で墓壙1基を検出した。主軸はN43°Wで尾根に平行する。墓壙は、平面隅丸長方形を呈し、盛り土中から穿たれたようである。二段掘形を有するが、北東側のみ二段で、木棺を南西側に寄せる。墓壙は長辺3.5m×短

辺1.2m、木棺部分は長辺3.2m×短辺0.7m、検出面からの深さ0.5mを測る。木棺部分側壁は「U」の字形をなし、底面はやや南東上がりである。形状から箱形木棺が想定される。

遺物は、墓壙検出面で墓壙東側角付近より、墓壙掘形に平行して置かれた須恵器有蓋高杯2セットが立位で出土した。棺内からは、南東端より須恵器無蓋高杯1点、土師器壺1点が木棺部主軸に平行する形で立位で出土した。木棺内に入れられていたものならば、木棺の腐朽に伴い転倒するはずであるが、立位であることからもともと棺外に木棺とともに、副葬されたものと思われる。

頭位方向、断定はできないが底面の高低差や、遺物の出土位置からすると南東枕であった可能性がある。

(増田孝彦)



第57図 遠所21号墳出土遺物実測図

出土遺物

a 土器(第57図、図版第41) 主体部出土の土器は、蓋(1・3)と有蓋高杯(2・4)と無蓋高杯(6)と土師器壺(5)である。甕の口縁部破片(7)は、22号墳との間から出土した。

蓋1・3は、有蓋高杯の蓋で、蓋1と有蓋高杯2が、蓋3と有蓋高杯4がセット関係になる。器高は高く丸みをもつ。口縁部は下方を向き、端部は平坦である。天井部外面をヘラ削りした後、扁平なつまみを貼り付けている。

有蓋高杯2・4は、杯部は丸みをおびており、立ち上がりは上方を向く。口縁端部は、平坦である。脚部は、「ハ」字状に開き、端部は「S」字状に屈曲する。脚端部は内向する。方形のスカシをもつ。

無蓋高杯6は、杯部は深く、丸みをおびながら立ち上がる。口縁部でわずかに外反し、端部は外上方を向き丸い。体部半ばに断面三角形の凸帯を2条めぐらす。脚は「ハ」字状に開き脚端部で屈曲し下方を向く。方形のスカシをもつ。

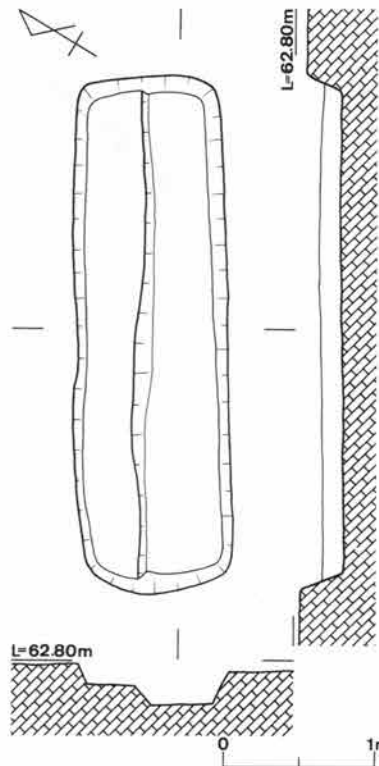
土師器壺5は、球形の底・体部と逆「ハ」字状に開く口縁部からなる。口縁端部は、丸い。口縁部と体部にわずかにハケ目が残るが、ナデ仕上げを行っているため消えている。出土状況から、蓋や高杯と同時期のものと思われる。

これらの主体部出土土器の形態から、田辺編年TK47型式、中村編年I-5段階に併行し、21号墳は、5世紀末に築造・埋葬されたと考える。

(岡崎研一)

### ⑯遠所22号墳

墳丘(第55図) 21号墳の北西隣りに位置するが、尾根が本古墳に至って急傾斜で登り始めるため、21号墳との比高差は4mほどある。墳丘は、19号墳で見られたように、南東側1/2が削平されたような状況を呈していたが、地震等による地滑り痕が周辺に見られることから、それに伴いこの古墳もその影響を受け、盛り土が流出し削平を受けたような状況と思われる。南東側は、21号墳築造時に一部削平を受けているが、直径11m・高さ3mの



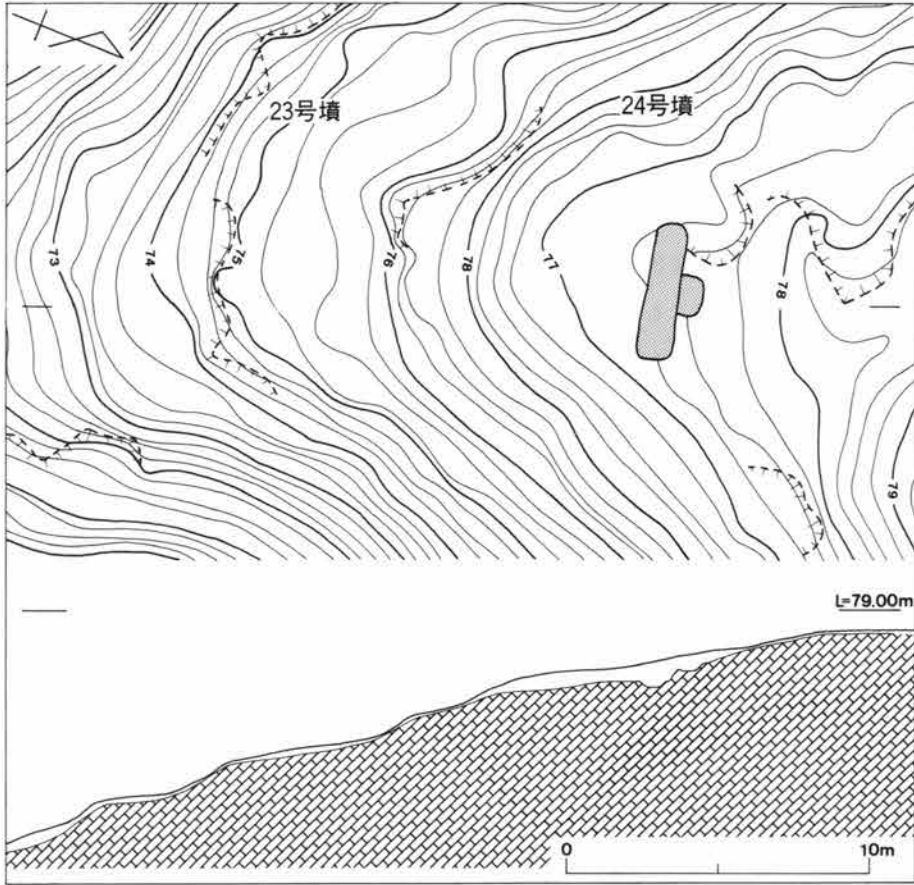
規模を有し、盛り土は地山削平面上で約0.5m確認した。尾根高位側には幅1m・深さ0.3mの溝を設け自然地形と区画している。

墳丘東斜面や21号墳溝中からは、須恵器大甕片(第57図7)の出土がみられ、22号墳でも墳頂部において何らかの儀礼が行われたようである。

埋葬施設(第58図) 墳頂部中央で墓壇1基を検出した。主軸はN60°Eで尾根にはほぼ直交する。墓壇平面は隅丸長方形を呈し、地山削平面より穿つ。二段掘形を有するが、21号墳同様、木棺が片側(南東)に寄せられている。長辺3.45m×短辺1.0m、木棺部分は長辺が3.2m×短辺0.6m、検出面からの深さ0.3mを測る。木棺部分側壁は「L」の字形をなし、底面は水平である。形状から、箱形木棺が想定される。

墓壇内、棺内とも遺物の出土はみられなかった。頭位方向についても不明である。

第58図 遠所22号墳主体部実測図



第59図 遠所23・24号墳地形図

⑰遠所23号墳

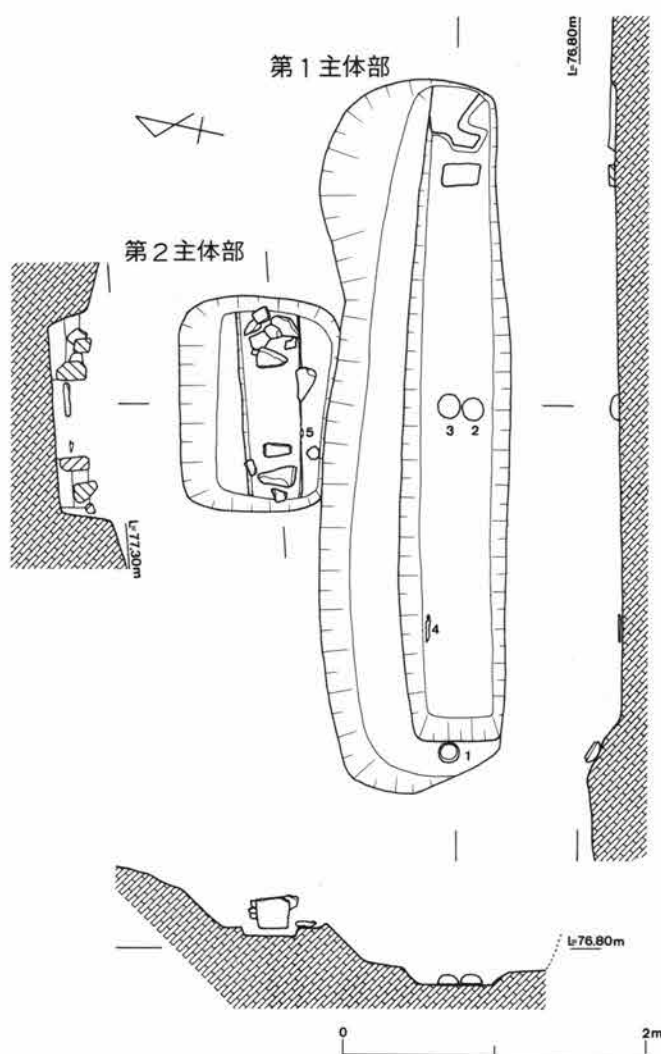
**墳丘(第59図)** 15号墳より南東にのびる尾根の最も低位に築造されていたと思われる古墳で、丘陵稜線や西側斜面は地滑りの痕跡が各所に認められることから、これに伴い古墳も流出した可能性がある。標高74～76m付近に存在していたと考えられるもので、丘陵東斜面から須恵器杯身・土師器甕片の出土が認められた。当初、24号墳からの流出した遺物とも考えたが、24号墳自体墳丘上に遺物が認められないことや、やや距離的にも問題があるため、古墳が存在していたと判断した。墳丘の規模等は不明であるが、地形的にみると直径10m・高さ2mほどの円墳が想像される。

**埋葬施設** 墳丘自体が流出しているため、それに伴い主体部も消滅したと考えられる。

**出土遺物** 破片数としては全体で約40点ほどあるが、大半が土師器甕体部片であり、須恵器にしても図化できないものであり、図示しなかった。

⑱遠所24号墳

墳丘(第59図) 23号墳の北隣りに位置し、15号墳の南低位側でもある。埋葬施設が2基重なり合っていることや、埋葬施設付近で地山の傾斜が急に下降するため、明確な墳丘規模を復原することができないが、ほぼ直径10mで南側墳丘基底は、標高78m等高線付近にくると考えられる。高さは標高78m等高線付近から見た場合、盛り土が約0.5mほどあるため2mほどの高さが復原される。直径10mの規模で円を描くと、隣接する25号墳と墳丘が重なり合うことが起こる。周辺に位置する25・26号墳が直径約7mと規模も小さい。24号墳でも最初に埋葬された第2主体部は規模も小さく、築造当初は25・26号墳同様の規模で、第1主体部埋葬時に古墳が大きく造り直されたと考えられる。



第60図 遠所24号墳第1・2主体部実測図

埋葬施設(第60図) 墳丘中央部と考えられる部分で2基の墓壙を検出した。

a 第1主体部 墳丘規模が大きくなった段階のもので、主軸はN79°Eで尾根に直交する。墓壙は、平面隅丸長方形を呈し、南側は盛り土面より、その他は地山面より穿つ。二段掘形を有し、長辺4.7m×短辺1.25m、木棺部分は長辺4.35m×短辺0.7m、検出面からの深さ0.4mを測る。木棺部東側小口部分は、粘土で固定する。形状から組合式木棺の使用が想定される。

遺物は、西端二段目掘形検出面より、須恵器杯身1点が置かれていた。

棺内中央部よりやや東寄りでは、転用枕として土師器杯が2点伏せ並べた状態で出土した。また、棺内北側側壁西端付近の底面からは切先を西に向ける刀子1点が出土した。転用枕の位置は、やや西側の空間が広い棺のほぼ中央に置かれているが、このことからすると、頭位方向は東枕と想定される。

**b 第2主体部** 第1主体部と切り合い関係を持ち、第1主体部に先行する。主軸は、N79°Eで尾根に直交する。木棺側板を固定する部分のみ浅く掘り込んだ墓壙で、地山削平面より穿たれ、隅丸方形に近い平面形であったと思われる。現状での規模は、長辺1.35m×短辺1.0m、検出面からの深さ0.3mを測る。墓壙内には、木棺両小口部分を粘土と石材により固定していた。

また、側板を安定させるために平行する形で深さ5cmほど掘り下げている。木棺内側に当たる部分は、他の小口部分の固定に用いられた石材より大きく、内側が扁平になるような石材を使用している。また、側板の固定も粘土と石材でなされており、使用された側板の厚さまで知ることができた。それによると、側板の厚さは約4cm、両小口間は約25cmとなる。小口部分の石材が扁平なため、小口板はなかったと思われる。組合式木棺の使用がうかがわれるがその大きさから、胎児・乳児用の木棺墓と思われる。

遺物は、棺外墓壙底面南側板寄りのところで、切先を西に向けた鉄鏃1点出土した。頭位方向を求めるならば、切先方向から東枕が想像される。

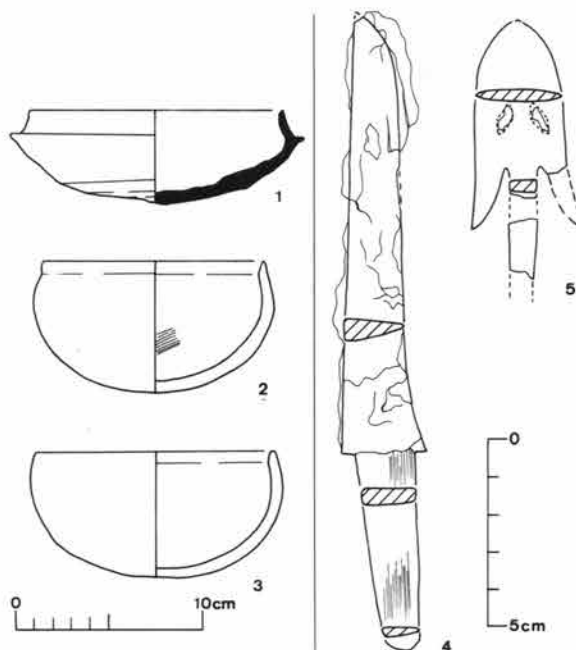
(増田孝彦)

出土遺物

**a 土器**(第61図、図版第42)  
この古墳から出土した土器は、すべて第2主体部から出たものである。杯身(1)と土師器杯(2・3)は、転用枕に使用されていた。

杯身1は、底部が浅く、立ち上がりは内傾する。口縁端部は丸い。底部外面は、雑なヘラ削りを行っている。

土師器杯2は、丸みをおびた底・体部とやや内傾する口縁部からなる。口縁端部は、わずか



第61図 遠所24号墳出土遺物実測図

に屈曲し上方を向き丸い。手法は、かなり摩滅しているため不明である。

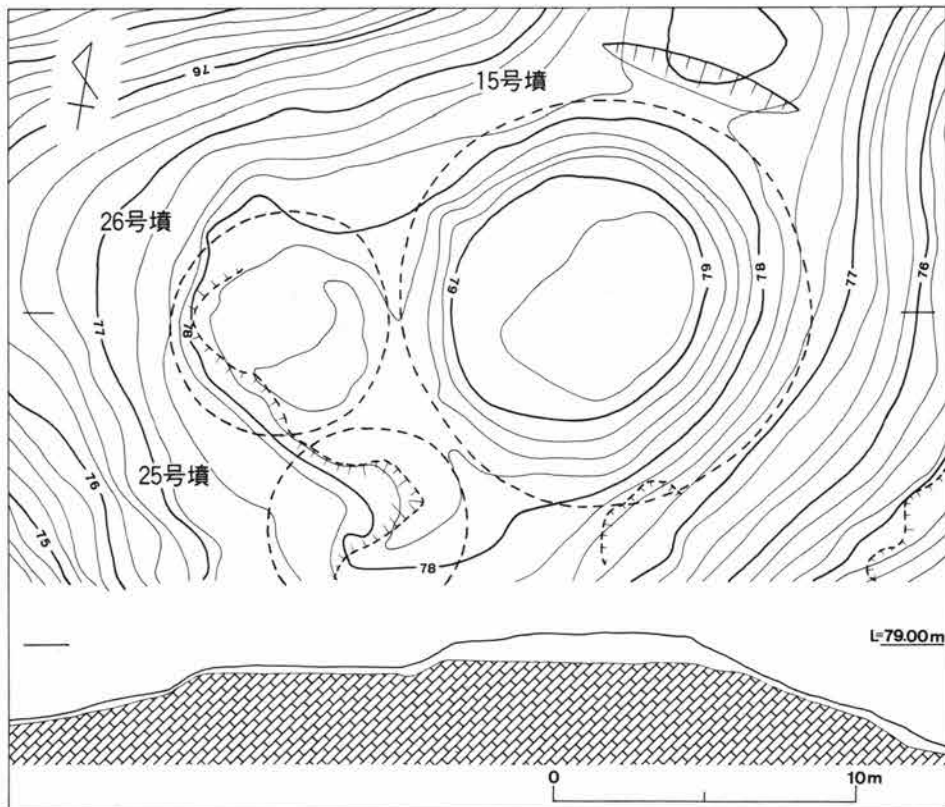
土師器杯3は、丸みをおびた底・体部とやや内傾する口縁部からなる。口縁端部は丸い。手法は、かなり摩滅しているため不明である。

時期のわかる土器としては、杯身1点である。形態から田辺編年TK43型式、中村編年II-4段階に併行すると考える。24号墳の築造・埋葬時期は、6世紀中頃と思われる。

(岡崎研一)

**b 鉄器**(第61図、図版第46・48) 4は、第1主体部から出土した刀子で、切先の一部を欠くが全長16.7cm、刀身断面は二等辺三角形を呈し、関部分がもっとも幅広く、棟側は直線的に切先へと伸びるが刃側は反る。研減りであろうか。関は直角に深く切り込まれる。関から木質が付着しており、関まで柄に挿入されている。

5は、第2主体部から出土したもので、全体を知ることはできないが、平根式の鉄鎌で、逆刺は大きくやや外に開く。鎌身中央部に2孔認められる。



第62図 遠所15・25・26号墳地形図



⑱遠所25号墳

墳丘(第62図) 24号墳の北東側の標高78m付近に位置し、本古墳から26号墳にかけては、地滑りの痕跡が見られ墳頂部中央が大きくえぐられたような状況を呈していた。表土直下が地山面となり、主体部の痕跡は認められず、地滑りとともに流出したと考えられる。

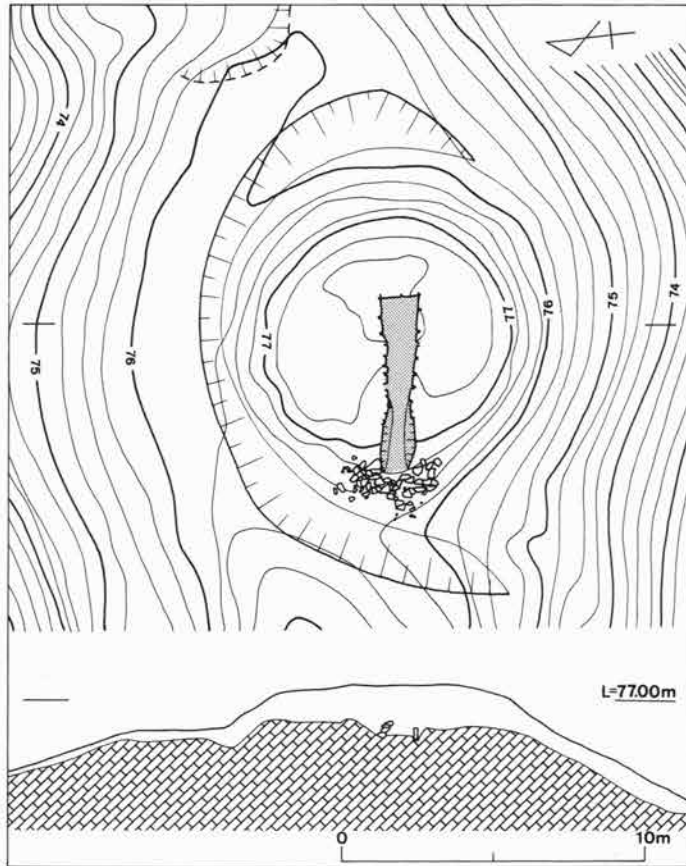
古墳であった痕跡は、墳丘東側にこの古墳を取り巻くような形で、標高77m付近まで幅0.7m・深さ0.1mの溝が認められたことや、26号墳との間には墳丘築造時の円形に回る地山整形痕が認められた。直径約7mの円墳が復原される。高さは不明である。

遺物は、墳丘東側の溝中から土師器片が5点ほど出土したが図化できなかった。

⑳遠所26号墳

墳丘(第62図) 25号墳の北側に位置し、墳丘西側1/4は地滑りで流出したような状況を呈する。墳丘は地山整形により円形台を形成後、盛り土するようであるが、盛り土は地山削平面上で約0.25m確

認した。15・25号墳間は削り出しに伴い生じた浅い溝状の凹みで区画する。直径7m・高さ1mの円墳である。15・20号墳同様、主体部は確認されなかった。遺物は、墳丘北側裾部分から土師器片が10点ほど出土したが、図化できなかった。

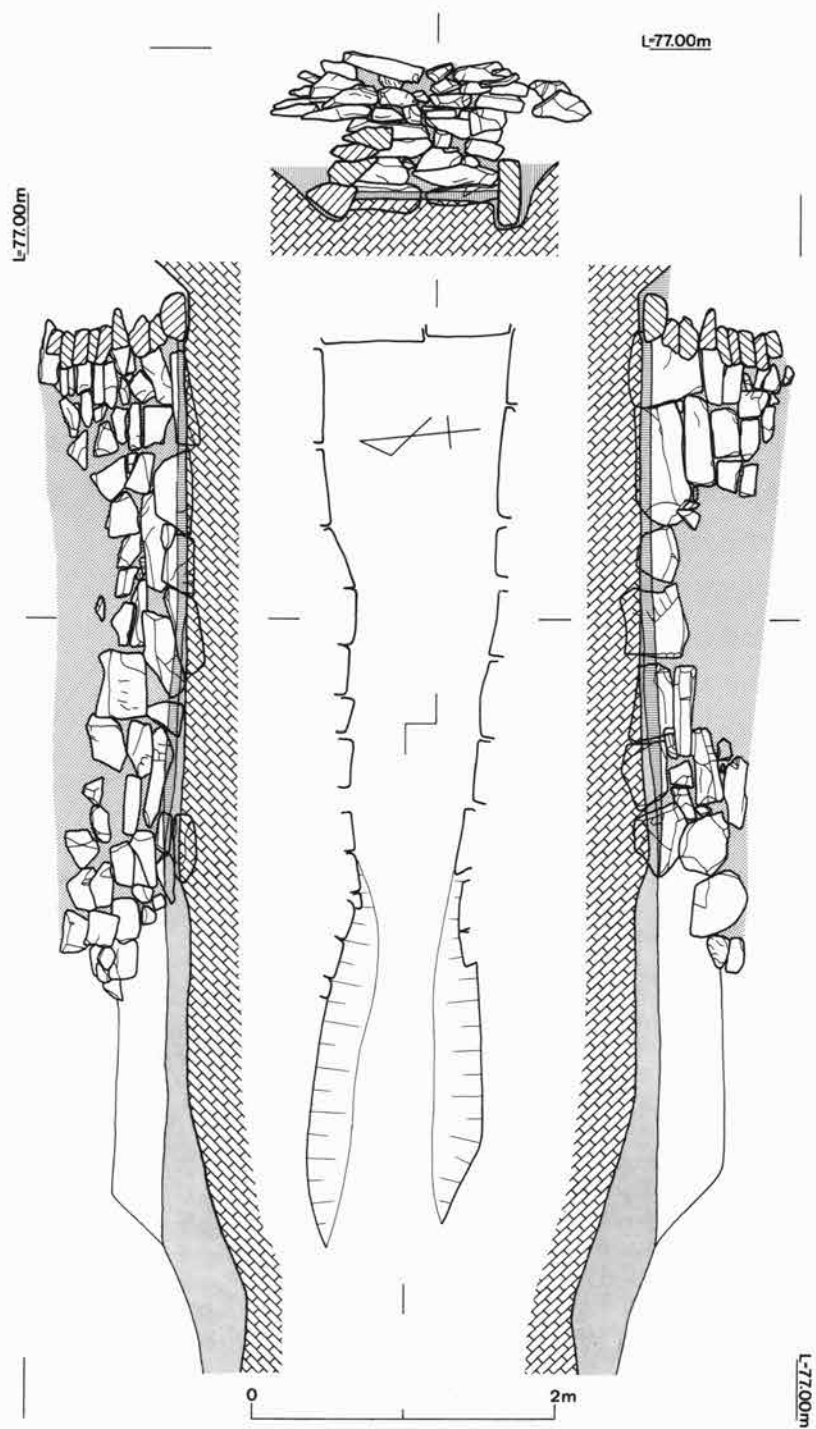


第63図 遠所27号墳地形図

㉑遠所27号墳

墳丘(第63図) 26号墳の西側15mのところ

に位置する。墳丘は、過去の採石等により墳丘中央部が凹み、周辺には石材の散乱が認め



第64図 遠所27号墳石室実測図

られた。墳丘は地山整形により円形台を造った後、墳丘の大半を盛り土により形成する。墳丘自体よく整った円形を呈しており、東から北・西にかけては、墳丘をほぼ1/2

周する幅1.0m・深さ0.4mの溝が設けられている。直径11m、石室前面の溝底面からの高さ2mを測る。

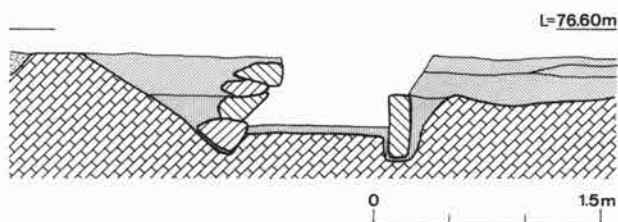
**埋葬施設(第64～67図)** 本古墳の埋葬施設は、無袖式の竪穴系横口式石室である。使用石材は、1・2号墳同様、古墳群南側の谷奥に露出する花崗岩が用いられているようである。石室内には天井石が1石落ち込んでいたが、調査上危険となるため除去した。

石室主軸は、N85°Wでほぼ西に開口する。石室の全長は4.3m、玄室長は3.9m、奥壁幅は1.25m、閉塞部(小口)幅0.8mで奥壁側が広がっている。奥壁での残存高1.0mを測る。地震によるためか、石室全体が極端に内傾している。また、石室より墳丘前面までは、幅1mの墓道状の施設がとりつく。この墓道状の施設の前面には、拳大～人頭大の石材が多数置かれていたが、墓道状の施設を閉塞するようなことはされていなかった。また、積みかた自体に規則性がなく、土砂とともに棄てられたような状況を呈していた。石室構築の際に不用となった石材が放置されたのであろうか。

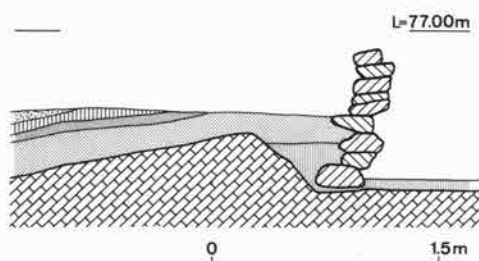
墳丘の盛り土は、石室の構築とともに行われているが、墳丘の約1/2は地山を削り出し円形台を整形した後、「コ」字形の尾根に平行する墓壙を掘る。墓壙掘形は、奥壁・両側壁とも比較的緩やかであるが、玄室内面側は基底石を安定させるため、玄室掘形床面よりさらに約0.2m垂直に掘り込まれている。底面は水平で墓道状遺構前端までほぼ同レベルである。掘形裏込めの状況は、縞状堆積で薄くつき固められている。羨道部は玄室部と異なり、石材安定のために掘り下げず、墓壙掘削面に直接石材を置く。

玄室奥壁は、最下段に大・小の石材2石を据え、二段目以上は基底石より小さめの石材を横積みし、隙間には小石を詰める。

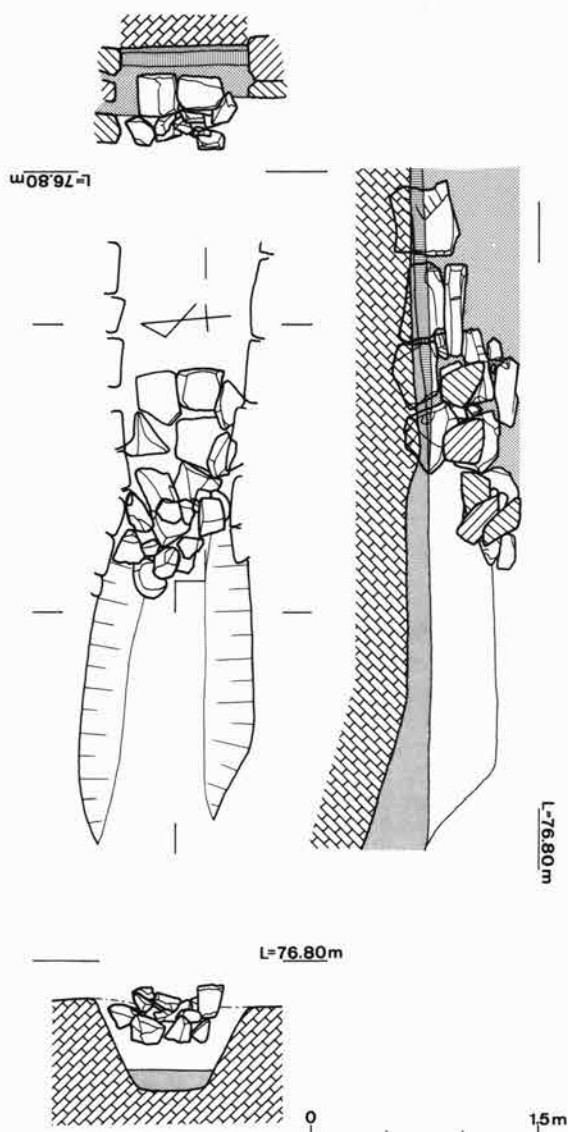
玄室側壁は、北壁が9石、西壁が7石を横置きして基底を構成し、二段目以上は基底石と同じような石材を横積みし、隙間には小石を詰める。過去の採石によるためか、奥壁付



第65図 遠所27号墳石室前面断面図



第66図 遠所27号墳石室奥壁断面図



第67図 遠所27号墳閉塞石実測図

近ほど残りがよく、玄室中央から羨道は4～5段目までしか残存していない。一見すると乱雑であるが、横目地が4段通るのがうかがわれる。

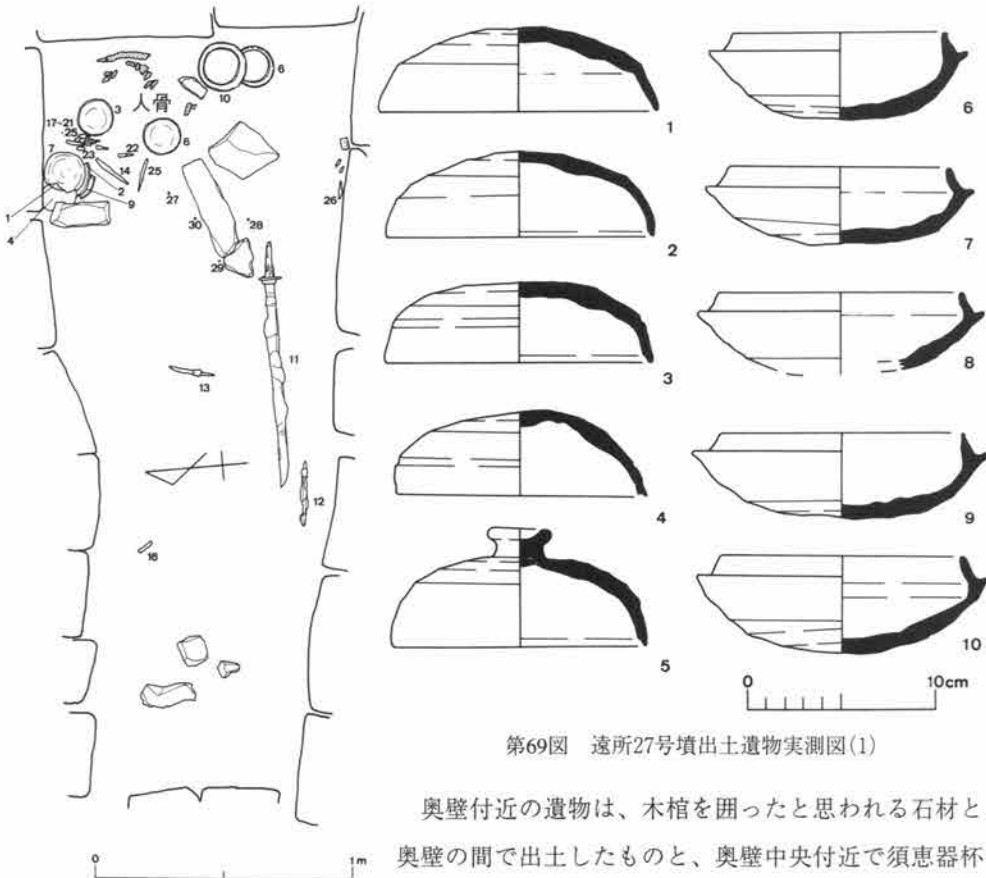
奥壁より前面に3.9mのところの小口部がある。小口部は、玄室側壁が完成した後、墓道状施設前端から墓壙掘形内に盛り土し、羨道部側壁を積み上げる。側壁は、玄室側壁に使用されている石材よりも小さめの石材2石を基底とし、二段目以上は大小さまざまな石材を使用する。この石材の大きさが変わったところに、小口石として2石を2列敷き羨道部と玄室の間に0.35mの段差を設け階段状に降りる構造となる。この小口部分を境に羨道部は急にすばまり、墓道状施設へとつながる。小口部分には、閉塞石3段分残存していた。小口部分完成後、玄室内には約10cm盛り土を施し床面としている。

玄室床面には、棺台となるような石材は認められなかったが、遺物がほとんど出土しない一画があり、それを囲うような形で石材や直刀の出土が認められたため、木棺は玄室中央部の北壁に沿って置かれていたものと考えられる。

奥壁付近に落ち込んでいた天井石の大きさからすると、玄室上には4石架構されていたものと思われる。なお、墓道状施設前端の溝底面との比高は、約0.6mを測る。

**遺物出土状況(第68図)** 本古墳は、4基の石室墳中最も残りのよいもので、埋葬時の状況をよく留めていた。石室内から出土した遺物の総数は約35点である。

石室内の遺物は、奥壁を中心とする一群と南側側壁の一群、棺内と考えられる一群の三群に分けられる。



第69図 遠所27号墳出土遺物実測図(1)

第68図 遠所27号墳遺物出土状況

奥壁付近の遺物は、木棺を囲ったと思われる石材と奥壁の間で出土したものと、奥壁中央付近で須恵器杯身・杯蓋類が重なり合った状態で出土したものがある。石室内の土器類は、すべてここに集中する。須恵器類に混じり、鉄鏃・刀子等の鉄製品・土玉が出土した。また、奥壁中央付近から細片化した人骨と思われるものも出土した。

土玉(27~30)は、直刀東側の木棺を囲ったと思われる石材の周囲から出土した。南側壁周辺から、木棺に平行して置かれていたと考えられる直刀(11)・刀子(12)が出土し、奥壁寄りの南側壁からは、細片化した刀子・鉄鏃が出土している。

棺内と考えられる部分からは、刀子(13~15)が出土した。(増田孝彦)

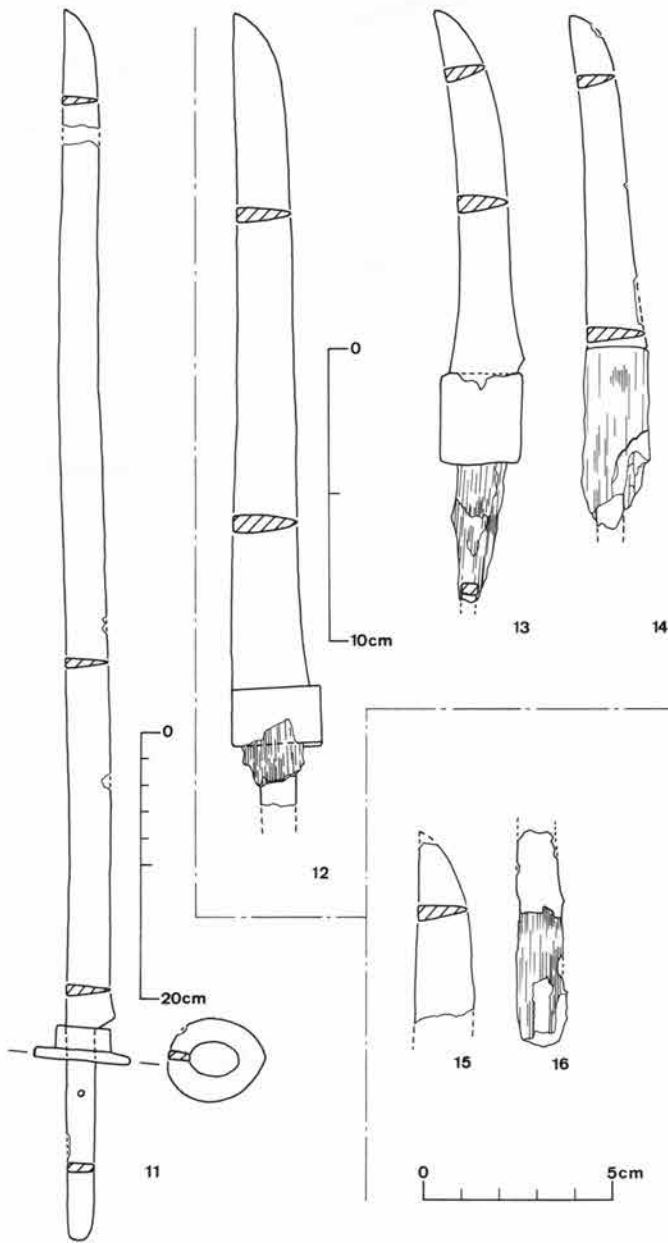
#### 出土遺物

a 土器(第69図、図版第45) 石室内出土遺物は、杯蓋(1~5)と、杯身(6~10)である。セットになるものはない。

杯蓋1・2・4は、器高がやや高く丸みをもつ。口縁部は、外下方を向く。

杯蓋3は、器高が低く平坦な天井部と外下方を向く口縁部からなる。

杯蓋5は、つまみをもつ蓋である。丸みをおびた天井部と外下方を向く口縁部からなる。



第70図 遠所27号墳出土遺物実測図(2)

11は、刀身の一部を欠くが全長92cmほどと考えられる。刀身の断面は、二等辺三角形を呈し、切先近くでの幅2.6cm・厚さ0.7cm、中央部での幅3.1cm・厚さ0.8cm、関近くで幅10cm・厚さ1.1cmを測る。関は、刃側につくが斜めに切り込まれた斜関である。関の部分には、幅3.5cmの鉄板を断面が倒卵形の筒状に曲げたはばきにつつまれている。その一端は、鑿と接している。

いずれも天井部外面はヘラ削りし、口縁端部は丸いものと平坦なものがある。胎土は、さまざまである。

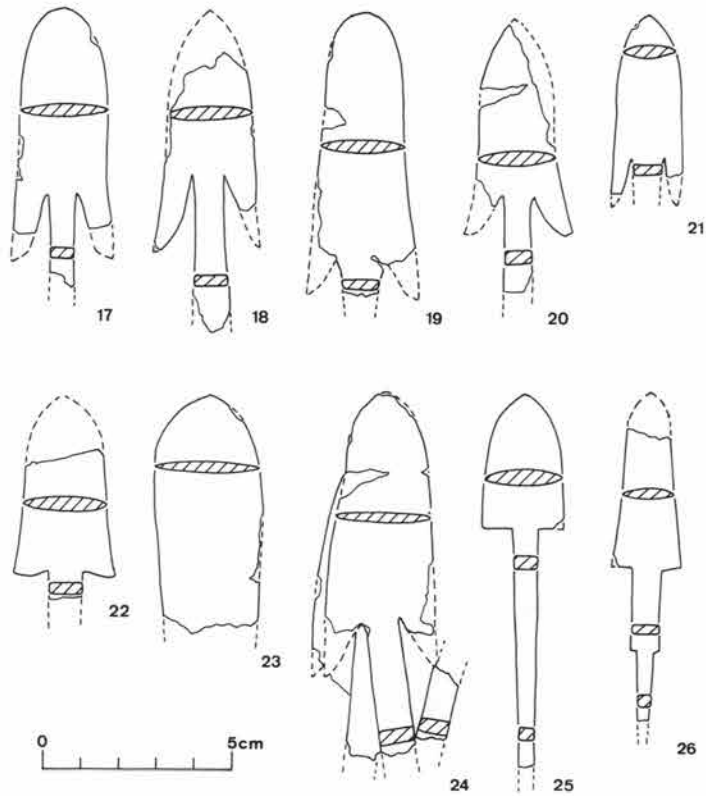
杯身6～10の底部は浅く、平坦に近いものもある。立ち上がりはかなり内傾し、口縁端部は丸い。口縁部から受け部付近がかなり太いものもある。胎土はさまざまである。底部外面をヘラ削りする。

以上の出土遺物の形態から、田辺編年TK43型式、中村編年Ⅱ-4段階に併行すると考えられ、27号墳の築造・埋葬時期は、6世紀中頃と思われる。

(岡崎研一)

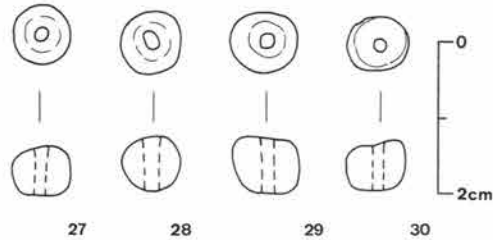
b 鉄器(第70・71図、図版第46・47) 石室内から直刀1点・小刀1点・刀子4点・鉄鎌15点が出土した。

鏝は、長径7.4cmで、短径6.2cm・厚さ0.8cmの板状を呈する。12は小刀で、茎の一部を欠損する。刀身断面は、中央部がやや膨らむ二等辺三角形を呈し、切先近くで幅4cm・厚さ1.1cm、関近くで幅4.8cm・厚さ1.3cmを測る。関は、両関と考えられるものの、柄部分に幅6.8cm・厚さ0.3cmの鉄板を曲げた柄縁金具



第71図 遠所27号墳出土遺物実測図(3)

で締められているため不明である。13～16は刀子であるが、4点しか図化できなかった。13は、関部分から切先にかけて棟側が反り返るもので、関は斜めに切り込まれた斜関である。関から外に出た刃部の長さは9.5cmである。



第72図 遠所27号墳出土遺物実測図(4)

14は、切先付近のみ反り返るもので柄縁金具はなく柄木が付く。関は、刃側につく斜関の可能性がある。関から外に出た刃部の長さは8.6cmある。

付表6 遠所27号墳出土土玉類観察表

No	種	長(mm)	径(mm)	孔径(mm)	色調	備考	図
1	土玉	6.3	7.4	1.85	茶褐色	全体につくりが荒い。漆は塗っていない。	27
2	〃	7.05	8	2.35~1.7	暗茶褐色		28
3	〃	7.1	7.8	2.0~1.6	暗茶褐色		29
4	〃	6.3	7.56	1.7	茶褐色		30

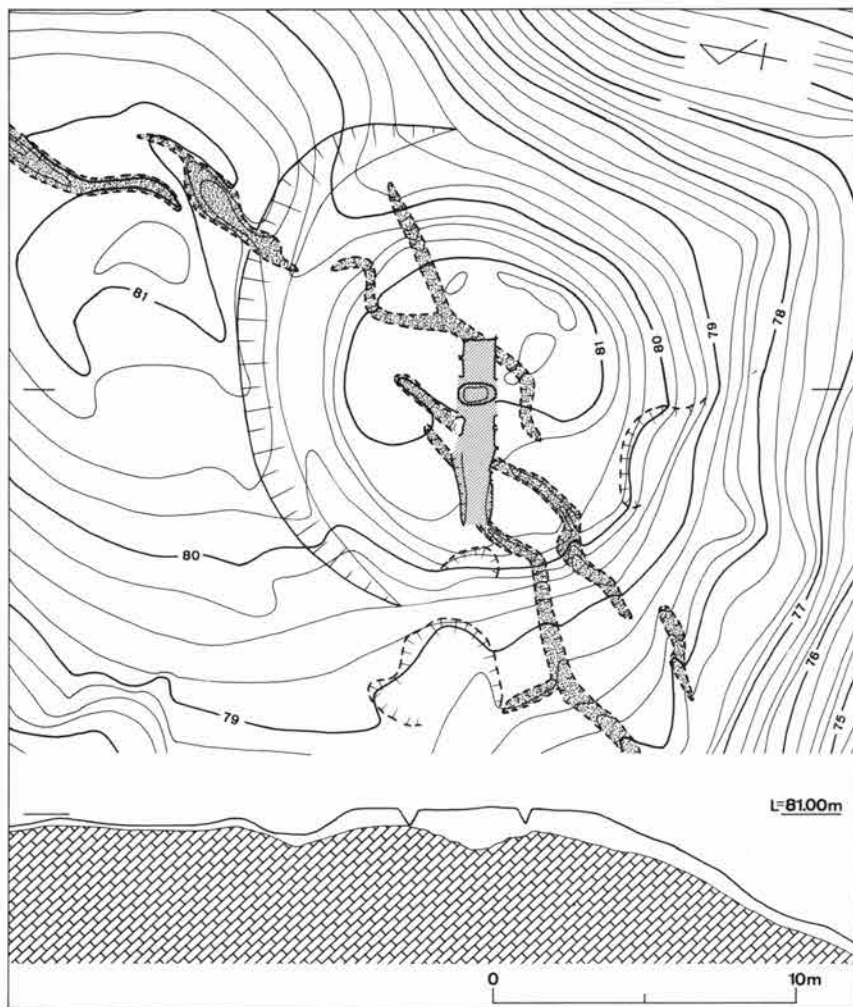
鉄鍔17~26は、腸袂柳葉式の鍔身部をもち、全長のわかるものはない。鍔身に対し全長の短い短頸鍔と思われる。鍔身の幅が比較的狭く縦長である。逆刺は大きく切り込まれる17~20・24と、小さい21、直角ぎみに切り込む22・25・26がある。(増田孝彦)

c玉類(第72図、図版第50) 石室内から土玉が4点出土した。色調は暗茶褐色と茶褐色で、ほぼ円形のものといびつなものがある。5号墳出土の土玉と比べると大形である。

(佐伯英樹)

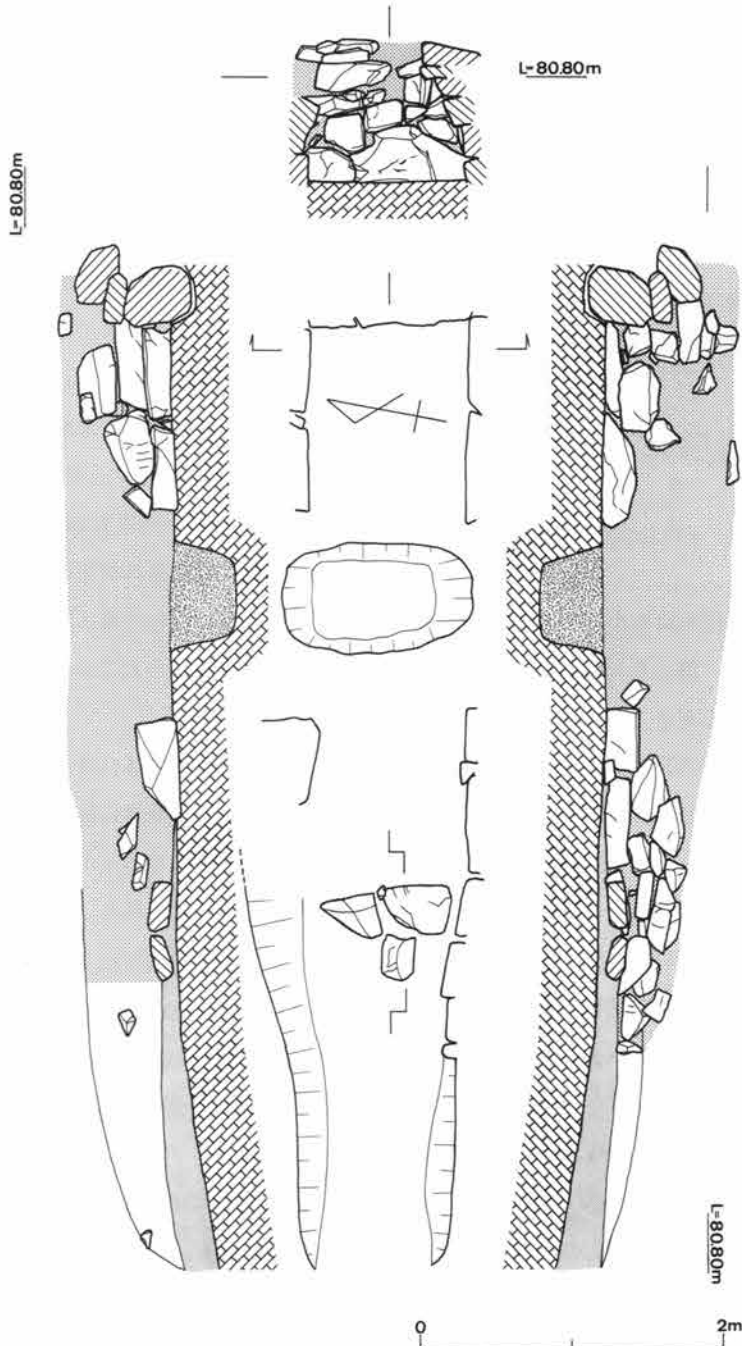
### ②遠所31号墳

墳丘(第73図) 遠所古墳群中最高所に築造された古墳で、標高81m付近に位置する。眺望が非常によく、北は遠く網野町浅茂川海岸(日本海)、南東側は竹野川流域(弥栄町溝谷)

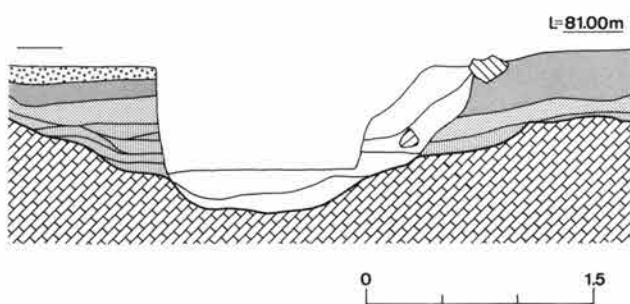


第73図 遠所31号墳地形図

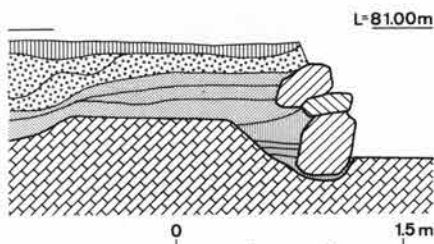




第74図 遠所31号墳石室実測図



第75図 遠所31号墳石室断面図



第76図 遠所31号墳石室奥壁断面図

を望むことができる。32号墳へと支尾根が派生していく分岐点でもある。墳丘はよく整った円墳である。地山削り出し整形後、墳丘の大半を盛り土により形成する。盛り土は、地山削平面上に60m確認した。過去に盗掘や採石が行わ

れたようで、墳丘西側1/2は大きく削平され、西側墳丘裾部分には、その土砂や石材が散乱していた。また、墳丘頂部には1927年の丹後大震災により生じたと思われる地割れが、北東から南西方向に3条認められ、石室を縦断している。この地割れ自体はそれほど深くなく約50cmほどのものである。地割れが完存していることか

ら、盗掘や採石は少なくとも丹後大震災以前に行われたことがわかる。墳丘東から北・西にかけては、墳丘をほぼ1/2周する幅2m・深さ1mの溝が設けられている。直径13m、石室前面からの高さ2mの規模をもつ。

西側墳丘裾部分に棄てられた石材・土砂中からは、多量の須恵器杯身・杯蓋片が出土した。また、墳丘東側肩部から溝中にかけては、須恵器大甕片が多量に出土し、1・22号墳と同様な状況を示している。ただ、1・22号墳では甕が1個体であったのに対し本古墳は2個体分認められた。そのうち、復原できたのは1個体分だけである。

**埋葬施設(第74～76図)** 1・2・27号墳同様の、竪穴系横口式石室である。使用石材は他の石室墳同様、古墳群南側の谷奥に露出する花崗岩が用いられているようである。石室の主軸は、N79°Eでほぼ西に開口する。石室の全長4.7m・玄室長3.6m・奥壁幅1.0m・閉塞部(小口)幅約0.9mで、奥壁側が広がっている。奥壁での残存高0.93mを測る。石室より墳丘前面までは、幅1mの墓道状の施設がとりつく。

墳丘の盛り土は、石室の構築とともに行われるが、墳丘の約1/2は地山を削り出し円形台を整形した後、尾根に平行する「コ」の字形の墓壇を掘る。墓壇掘形は、奥壁・両側壁とも緩やかであるが、基底石の安定のため玄室掘形床面よりさらに約0.15m掘り込む。墓壇掘形底面が玄室床面で、やや西下がり傾斜面を持つ。掘形裏込め状況は、縞状堆積で薄くつき固めている。羨道部は玄室部と異なり、盛り土を施した上に直接基底石を置く。

過去に盗掘や採石が行われているため、石室全体の残存状況は非常に悪く、玄室中央付近には大きな穴が開いていた。

玄室奥壁は、大・小の2石を基底石とし、二段目以上は基底石より小さい石材を横積みし隙間に小石を詰める。約五段分が残存する。

玄室側壁は一部残存しない部分があるが、両側壁とも6石ほどを横置きして基底が構成されていたと思われる。ただ、小口付近の基底石には石材安定の掘形がなく、盛り土の上に直接石材を置いている。二段目以上は基底石より小さめの石材を横置きし、隙間は小石を詰める。横目地が4段通るのがうかがわれる。

奥壁から前面に3.7mのところの小口部がある。小口部は、墓道状施設前端から盛り土し、小口付近の玄室基底石が据えられた後、小口石として2石を敷き羨道部と玄室の間に0.2mの段差を設け階段状に降りる構造をとる。羨道部側壁は、玄室側壁に使用されている石材より小さめの石材3石を基底石とし、二段目以上はさまざまな石材を積み上げる。小口部分を境に羨道部は急にすばまり、墓道状施設へとつながる。小口部分には閉塞石は残存していなかった。

天井石が残存しないため、何石架構されていたか不明である。なお、墓道状施設前端と墳丘裾部との比高は約1.3mである。

**遺物出土状況(第77図)** 石室が荒れているためほとんど遺物が残存していなかったが、奥壁付近と中央部よりやや西側、小口石付近の三群に分かれて出土した。

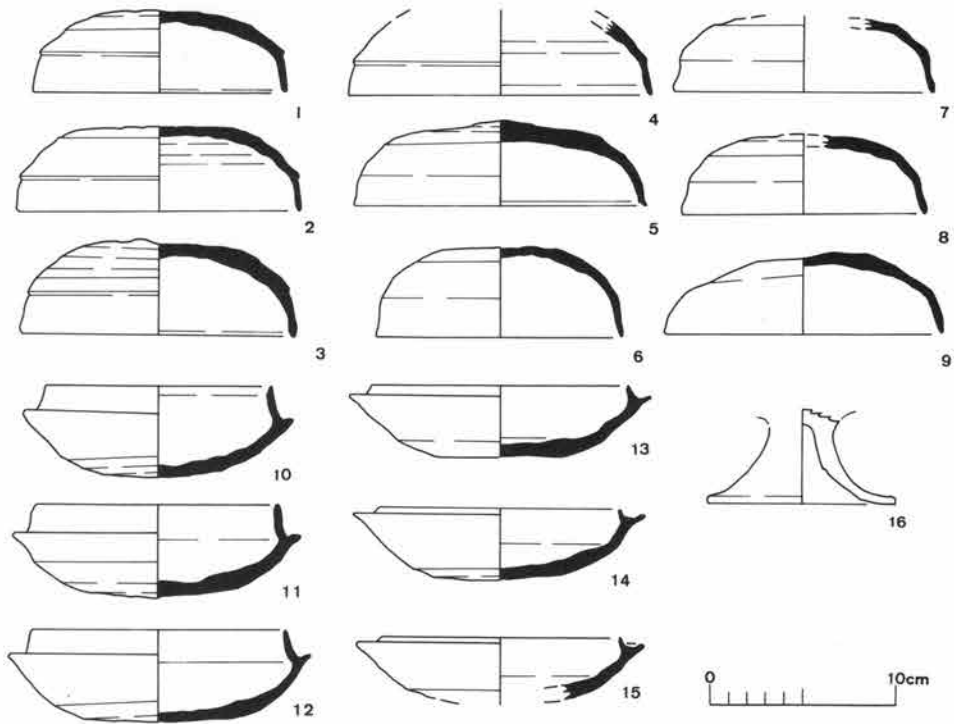
奥壁付近の遺物は、須恵器杯身・杯蓋が1か所に集中しており、杯身・杯蓋がかぶさった状態のものが、1セット(4・12)出土している。

中央部よりやや西側からは、須恵器杯蓋(9)と鉄鏃(4)・刀子(17・18・19)が破損した状態で出土した。小口石付近では、土師器高杯(16)が脚部と腕部が離れ別々に出土しているが、本来は1個体であったものである。



第77図 遠所31号墳遺物出土状況

(増田孝彦)



第78図 遠所31号墳出土遺物実測図(1)

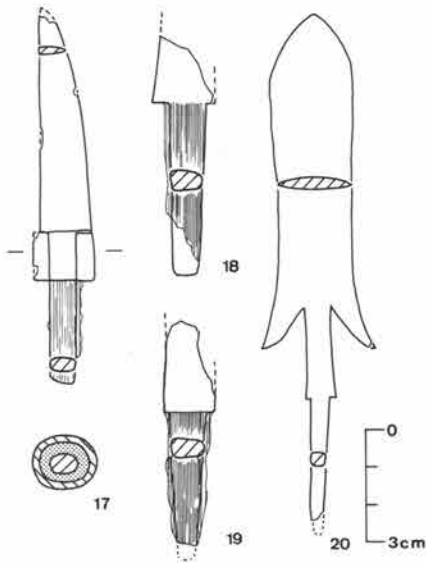
出土遺物

a 土器(第78図、図版第44) 石室内出土遺物は、杯蓋(3・9)と杯身(10~12)と土師器脚(16)である。その他の土器は、盗掘の際に墳丘裾部まで移動しているが、本来は石室内にあったと思われる。したがって31号墳石室内出土遺物は第78図の土器すべてと考える。

出土遺物の形態から大きく2時期に分かれる。杯蓋(1~4)と杯身(10~12)の時期と、杯蓋(5~9)と杯身(13~15)の時期である。

杯蓋1~4は、器高が高く丸みをもつ。稜は、わずかな沈線をめぐらす。口縁部は下方を向き、端部は丸い。天井部外面には、ヘラ削りを施す。

杯身10~12は、底部は深く丸い。立ち上が



第79図 遠所31号墳出土遺物実測図(2)

りは内傾し、口縁端部は丸い。底部外面をヘラ削りする。

以上の杯身・杯蓋の形態から、田辺編年TK10型式、中村編年Ⅱ-3段階に併行するものとする。

杯蓋5~9は、器高はやや高く丸みをもつ。口縁部は外下方を向き、端部は平坦なものも丸いものがある。天井部外面は、雑なヘラ削りを行っている。

杯身13~15は、底部は平坦に近く、浅い。立ち上がりは内傾し、短く立ち上がる。口縁端部は丸い。底部は、雑なヘラ削りを行っている。

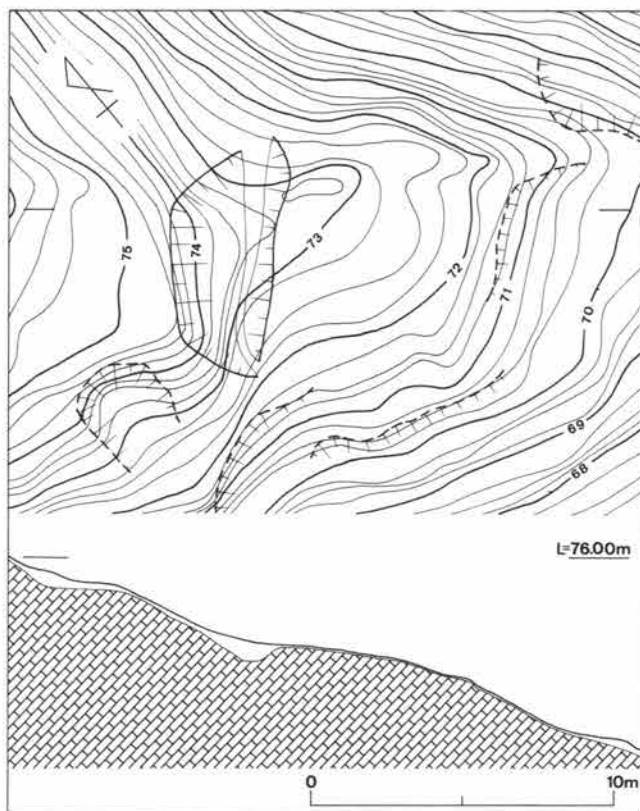
これらの杯身・杯蓋の形態から、田辺編年TK217型式、中村編年Ⅱ-6段階に併行するものとする。

31号墳は、6世紀中頃に築造・埋葬され、6世紀末に追葬されたものと思われる。

(岡崎研一)

**b 鉄器**(第79図、図版第46・47) 石室内より刀子3点・鉄鏃2点が出土した。

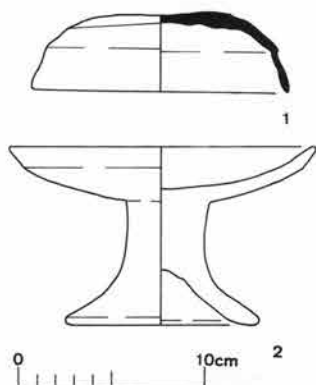
刀子17~19 17は、最も残りがよく、切先の一部のみ欠損する。全長9.7cmで、刀身断面はやや丸い二等辺三角形を呈し、関部分が最も広く、先端に向かうに従い徐々に刃側が細くなる。両関であるが直角に深く切り込む17・18と、浅い19がある。関から外に出た刃部の長さは6cmほどあったと思われる。17~19とも茎には木質が残る。20は、腸扶柳葉式短頸鏃である。全長に対して鏃身の幅が狭く、縦長で大きい。逆刺は大きく外に開く。



### ㊸遠所32号墳

墳丘(第80図) 31号墳から南東に派生した支尾根の、標高73m付近に位置するもので、31号墳とは約30m離れている。墳丘は、地滑りの痕跡が各所にみら

第80図 遠所32号墳地形図



第81図 遠所32号墳出土遺物  
実測図

れ、それに伴い墳丘盛り土も流出したようで、表土直下が地山となっていた。

尾根高位側には自然地形と区画する幅2m・深さ0.8mの直線的な溝が設けられている。明確な墳丘基底は確認されなかったが、溝・地形等から直径約10m・高さ約2m程度の規模を有する円墳が復原される。

この区画溝中には、溝が約10cmほど埋まってから31号墳で使用されているような花崗岩の石材が、溝中央部に約20石ほど棄てられたような状態で出土した。31号墳築造の際に不必要となったものが投棄されたのであろう

か。また、この石材中や石材下の埋土中からは、須恵器杯身・杯蓋・壺・甕、土師器高杯・甕片等が出土した。標高75m付近に平坦部が認められることから、試掘を行ったが遺構・遺物とも検出されなかった。溝中の遺物は31号墳のものである可能性も考えたが、比較的距離があることや、31号墳では出土していない遺物がみられることから、溝中出土遺物については、32号墳のものであると判断した。

**埋葬施設** 流出した可能性があり、主体部は検出されなかった。

(増田孝彦)

#### 出土遺物

a 土器(第81図、図版第45) 主体部は流出しており、古墳周囲の溝から須恵器杯蓋(1)と土師器高杯(2)が出土した。

杯蓋1は、器高はやや高く丸みをもち、天井部は平坦に近い。口縁部は外下方を向き、端部は丸い。天井部外面にヘラ削りを施す。

土師器高杯2は、浅い杯部と厚い脚部からなる。口縁端部と脚端部は、丸い。かなり摩滅しており手法は、部分的にしか確認できない。杯部内面にナデの痕跡があり、脚内面の一部はヘラ削りを施す。

杯蓋1の形態から、田辺編年TK10型式、中村編年Ⅱ-3段階に併行するものとする。

(岡崎研一)

#### 5. ま と め

遠所古墳群は、遠所遺跡群という6世紀後半から8世紀後半にかけての大製鉄遺跡群の中央部に位置する古墳群である。総調査地点39か所中、古墳22基、古墳に伴う人工的な施設と考えられる遺構2か所が確認された。今回の調査成果を簡単にまとめてみたい。

古墳の立地については、竹野川流域から離れた山間部に位置するため、平野部から望むことはできない。しかし、6世紀中頃に築造された古墳のうち数基は、丘陵最高所に位置し、眺望はよいが、5世紀末から6世紀前半に築造された古墳については、眺望のきかない丘陵低位に造られており、視覚的には古墳群周囲の谷部から望むものと思われる。周辺の谷部からは、多量の土器片が出土しており、古墳群と同時期の集落が形成されていた可能性がある。

古墳は、標高41～81mの低丘陵の稜部に墳丘裾を接するかのようにつながして築造されているように見えるが、詳しく観察すると、古墳同士が接するものもあれば、その中に残丘があるものや、古墳間の距離が開いているものがみられる。また、台状墓状を呈していたものについては、山間部の墳丘が整備され整然とした古墳群中では、台状墓的なものは存在しないという結果が出た。今後の分布調査等に、問題を提起したものといえよう。

墳丘には、盛り土がすべて施されているが、盛り土が少ないものでも、尾根の削り出し整形が大きいため、腰高の古墳となり各々が独立性を帯びている。尾根高位側には、尾根に直交する区画溝が設けられており、墳丘裾部は明瞭であるが尾根側面については、大半の古墳が判然としない。

埋葬施設については、竪穴系横口式石室と木棺直葬という異なる主体部を検出した。

竪穴系横口式石室については、1・2・27・31号墳と4基確認した。古墳群中、横穴式石室は1基も含まれないという特徴がある。石材の積みかたは、基本的には横穴式石室であるが、形態は竪穴系であり、本来の竪穴系横口式石室と呼ばれるものとはやや異なる。竹野川流域では、弥栄町新ヶ尾東10号墳、竪穴系横口式石室の可能性が指摘されている峰山町と弥栄町境にあるスクモ塚28号墳の2例が知られている。京都府北部でみると、天田郡夜久野町流尾古墳、福知山市池の奥4号墳、与謝郡加悦町入谷西A-1号墳、宮津市倉梯山1号墳、宮津市と与謝郡野田川町境の霧ヶ鼻古墳群が知られているが、遠所古墳群と新ヶ尾東10号墳・スクモ塚28号墳、倉梯山1号墳・霧ヶ鼻古墳群はそれほど遠くないところに造られているが、その他はその分布が分散している。遠所古墳群中4基も竪穴系横口式石室が存在しており、古墳群を形成した集団がどのような性格を有していたか、類例のある地域との交流の中でその結びつきを考えていく必要がある。また、石室の主軸や、馬具の副葬の有無からみると、丘陵先端の1・2号墳と丘陵頂部に位置する27・31号墳とはその性格が異なるものと思われる。墳丘規模、副葬品などからすると、竪穴系横口式石室については、1号墳－2号墳－31号墳－27号墳の順に築造されたようである。

木棺直葬墳については、総数14基の主体部を検出したが、3・13・24号墳は複数埋葬であった。その他は1古墳1主体が厳密に守られ、単独墳としての独立性が認められる。埋

葬施設が検出されなかった古墳については、天災等により主体部が流出したと考える23・25・32号墳と、調査による限りでは当初から設けられていなかったと考える15・20・26号墳がある。

木棺は、箱形組合式木棺、箱形木棺が使用されていると考えられる。小口部分の固定は、石、粘土、粘土と石を混ぜるものが認められた。このうち、24号墳第2主体部は小口部分の形状から、使用された板材の厚さまで推定できる好資料となった。

頭位方向については、石室の主軸同様、東・南側の2方向に限られており、方向性が決められていたものと考えられる。

出土した遺物は須恵器・土師器の土器類、鉄製武器類(刀・刀子・鉄鏃)、装身具(勾玉・ガラス玉・管玉・土玉)がある。いずれも棺内から出土したものであるが、19号墳の刀のみ棺上に置かれていたものである。

玉類では、16号墳出土の勾玉3個・ガラス玉250個は注目される。小規模な墓塚であり、古墳群中から玉の出土がみられるのは、木棺直葬墳では5号墳だけであり、その量の多さから木棺直葬墳の中でも特異な被葬者と考えられる。また、21号墳に見られるように早い段階で土器の副葬を墓塚内に行うのは、横穴式石室を意識したものであろうか。

また、同じ6世紀中頃築造でも、竪穴系横口式石室と木棺直葬の異なる埋葬が行われており、同じ在地有力者でも格差・規制があったものと思われる。

1・2号墳では墳丘や石室周辺、石室構築に際しての祭祀の痕跡がよく残っており、2号墳からはミニチュア土器の出土もみられ、当時の祭祀の一端をうかがうことができた。また、周辺の集落からは多量のミニチュア土器の出土があり、古墳との関係が問われる。

古墳の築造状況を見ると、遠所古墳群は、1～3号墳の位置する丘陵尾根筋(A支群)と、4・5・8～13号墳の位置する丘陵尾根筋(B支群)と、16～22号墳の位置する丘陵尾根筋(C支群)と、24～32号墳の位置する丘陵尾根筋(D支群)からなる。各古墳の出土遺物の推定年代から、19・21号墳が5世紀末に築造される。6世紀になると13号墳そして4・9号墳が築造されたようである。6世紀中頃になると、広範囲にわたって築造されるようになり、1・2・3・31・32号墳が築造された。その後24・27号墳の築造をもって、遠所古墳群では古墳を造らなくなり、6世紀後半になると、6世紀中頃に築造した石室墳に追葬を行っている。追葬は、6世紀末をもって行われなくなり、遠所古墳群での埋葬は終了する。これを支群ごとに見ると、C支群→B支群→A・D支群となり、6世紀末にはA・D支群の古墳に追葬されていた。

また、内部主体では、6世紀前半までは木棺直葬墳で、6世紀中頃になると木棺直葬墳と竪穴系横口式石室の両者が現れる。ここに副葬されていた須恵器をみると、土器に施さ



れた手法などから、6世紀中頃からは在地窯で焼成されたと思えるものが含まれるようになる。あるいは、弥栄町内かその付近に、この時期の窯跡が存在する可能性がある。

遠所古墳群の調査に起因する現在調査中の遠所遺跡群は、古代の製鉄遺跡やその関連する遺構の密集した遺跡である。この遺跡群のほぼ中央に古墳群は所在し、製鉄関連遺構と古墳の切り合い関係は、現在までのところ認められない。このことは、少なくとも製鉄に従事していた人々は、古墳の立地する範囲を墓域として長く認識していたと考えられる。しかし、古墳群の調査結果をみる限り、被葬者が鉄生産に従事していたことを示す副葬品はなく、また、周辺で調査された同時期の古墳に比べて鉄製品の保有量が多いという事実も認められなかった。しかし、2号墳出土の直刀片を化学分析したところ、遠所遺跡群内で出土する鉄滓等とその成分が似ているという結果がでた。今後、古墳群と鉄生産を関連付ける資料が出れば機会を得て報告したい。

今回の調査では、丹後でも調査例の少ない須恵器導入段階と考えられる古墳の調査を行った。丹後地域においては、近年丘陵上に展開する小規模な木棺直葬墳の調査資料が増加しているが、いずれもこの地域の特色である弥生時代からの方形台状墓の系譜を引く墳墓立地の形態をとる古墳の調査であり、その内容については不明な点が多い。このような中で今回の調査は、丘陵上に展開する墳丘が整備された古墳群のあり方を考える上で、また、その被葬者が、分析結果から鉄生産に従事していた可能性も考えられることから重要な資料を提供したといえよう。

(増田孝彦)

## (2) 太田古墳群

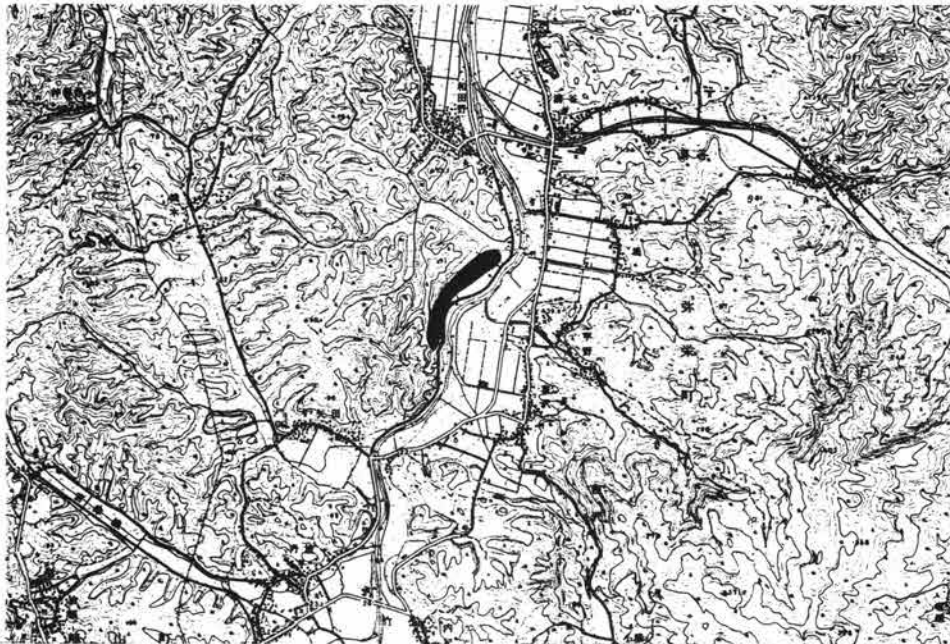
### 1. 位置と環境

太田古墳群は、京都府竹野郡弥栄町大字和田野小字太田に所在する。丹後半島最大の河川である竹野川左岸の丘陵上に展開する古墳群である。中郡峰山町矢田・橋木・竹野郡弥栄町和田野の字境付近に位置し、方墳・円墳計51基が確認されている。この古墳群は、昭和44年度に竹野川衛生センター西側の丘陵上に位置する1・2号墳の調査が行われ、平成元・2年度には3・4号墳と隣接する太田南古墳群と下後古墳群の調査が行われている。

今回の調査は、和田野造成工事に先だち、京都府教育委員会を經由して、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施したものである。今年度造成地内に円墳3基がかかることから、5・6・7号墳と命名し、確認のための試掘調査から行った。調査は、平成3年5月1日から同年6月17日まで行い、調査面積は約60m<sup>2</sup>であった。

### 2. 調査概要

造成にかかる円墳3基は、近接した状態で一つの尾根筋上に構築されており、南から

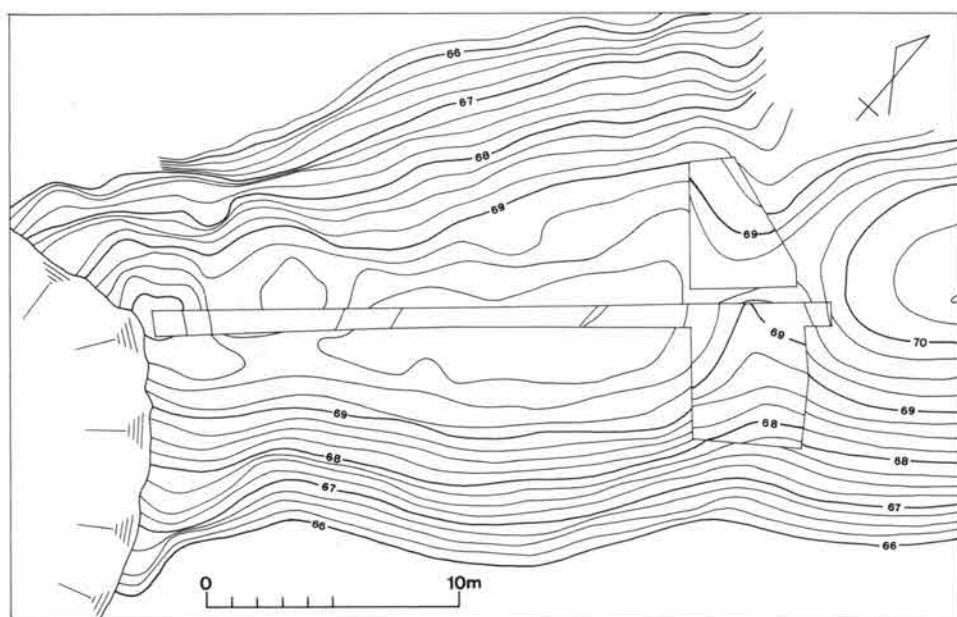


第82図 太田古墳群位置図(1/50,000)



第83図 太田古墳群周辺遺跡分布図

- |         |          |          |          |          |
|---------|----------|----------|----------|----------|
| 1.太田古墳群 | 2.大田南古墳群 | 3.下後古墳群  | 4.古天皇古墳群 | 5.水晶山古墳群 |
| 6.中尾古墳群 | 7.矢田城跡   | 8.柿のさが遺跡 |          |          |



第84図 調査地地形測量図

5・6・7号墳として調査した。太田5号墳は、後世の山道によって半壊の状態で、7号墳においては、墳丘裾部のみ造成範囲にかかるため、その部分だけの調査となった。

丘陵尾根筋上に一本の試掘トレンチを設定し、掘削を行った。その結果、太田5号墳は後世に山道を造る際に出た排土の一部を盛った高まりであり、約1mほど地山である花崗岩の二次堆積が認められた。6号墳は、5～10cmの表土下は地山となり、古墳としての遺構・遺物は認められなかった。7号墳については、中心部が造成地外となるため、古墳であるか否かについては不明であるが、6号墳と7号墳の間から区画溝と考えられる溝が認められた。現地形を見ても7号墳については他の2基よりも明確な高まりがあり、7号墳北東裾部にもくぼみがめぐることから、円墳であるものと考えられた。造成にかかる裾部のみ面的な調査を行ったが、顕著な遺構や遺物は見つからなかった。

### 3. ま と め

今回の調査地は、堤・芋野・吉沢を望むことのできる尾根筋にあたり、わずかな高まりしか残っていなかったものの、当初は古墳であると考えていた。調査の結果、5・6号墳は、人為的あるいは自然による地形であることを確認し、7号墳においては明確な結果は得られなかったものの、まず円墳と考えて間違いはないと考える。

(岡崎研一)

### (3) 通り古墳群

#### 1. 位置と環境

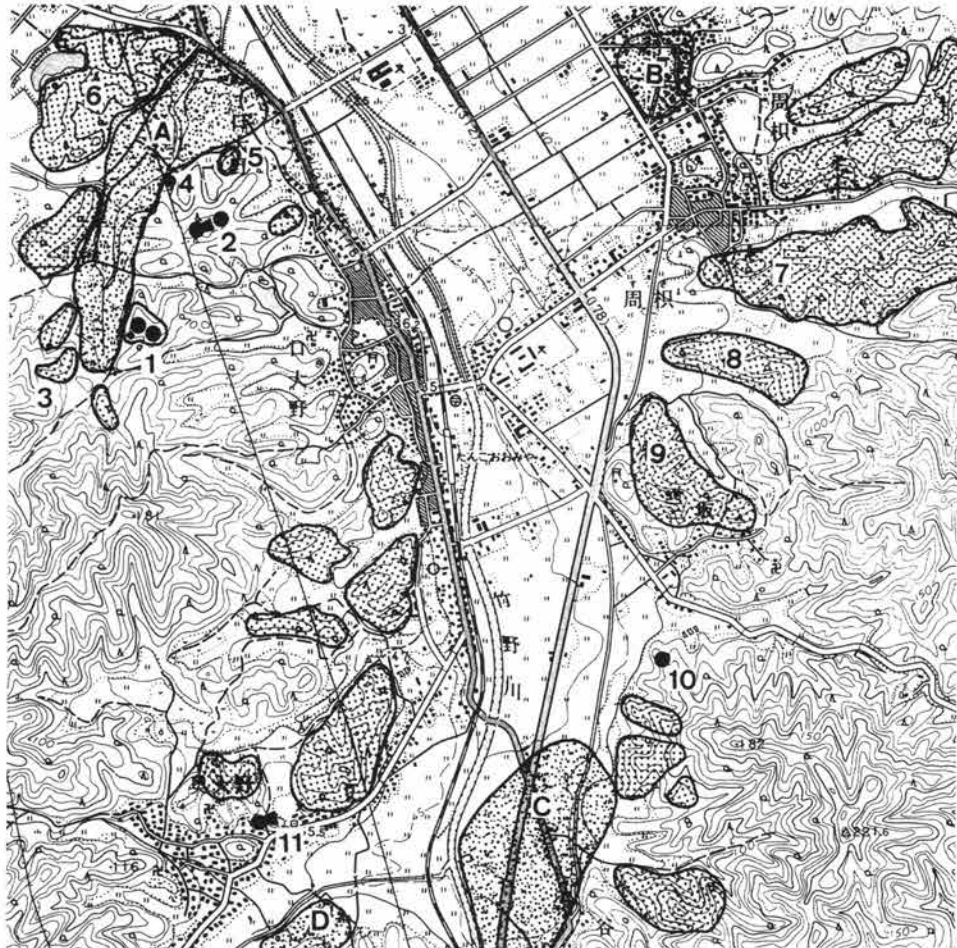
通り古墳群は、京都府中郡大宮町口大野小字通りに所在する。古墳群の分布する丘陵は、丹後半島最大の河川である竹野川上流域西岸に位置し、竹野川の形成する沖積平野に対し、西から東にのびる独立丘陵状を呈する。丘陵の最高所は標高約91mであり、平野部との比高差は約50mを測る。この丘陵上には最高所に位置する通り古墳群、西北方向に派生する枝尾根の先端部分には台状墓<sup>(注23)</sup>2基が分布している。

竹野川流域は、古墳の分布密度の高い地域であるが、周辺の主要な古墳時代の遺跡について概観する。竹野川流域では前期後半以降、丹後町神明山古墳<sup>(注24)</sup>、弥栄町黒部銚子山古墳<sup>(注25)</sup>など、大型前方後円墳が築造される。中流域では竪穴式石室を内部主体とする大型円墳、峰山町カジヤ古墳<sup>(注26)</sup>が前2者の大型前方後円墳に先行して築造されるが、外部表飾を欠く。これら畿内の要素を備えた前期古墳は現在のところ竹野川上流域では確認されていない。

中期の首長墓として中期前葉の大宮町大谷古墳<sup>(注27)</sup>、中期中葉の弥栄町ニゴレ古墳<sup>(注28)</sup>、丹後町産土山古墳<sup>(注29)</sup>など中規模円・方墳が築かれるが、中期は丹後半島全域にわたって大型古墳の衰退する時期と考えられる。これら、首長墓と考えられる古墳とは別に、尾根稜線上に明確な墳丘を持たず、10基以上の単位から構成される群小古墳が数多く造墓される。大宮町内では有明古墳群<sup>(注30)</sup>、左坂古墳群<sup>(注31)</sup>、帯城古墳群<sup>(注32)</sup>などを例示することができる。これら群小古墳は造墓時期も前期から後期前半にいたる各時期の墳墓が確認されている。通り古墳群周辺では総数約60基から構成される小池古墳群<sup>(注33)</sup>をあげることができる。

後期後半になると横穴式石室が導入される。6世紀中葉頃の石室には竪穴系横口式石室の影響を強く受けた石室が認められるが、上・中流域では現在、6世紀中葉に遡る石室は確認されていない。通り古墳群周辺では横穴式石室を内部主体とする古墳として砥石場西古墳群など数基単位で古墳群が造られる。その他、奥大野に所在する前方後円墳、新戸1号墳<sup>(注35)</sup>は石棚をもつ巨石墳であり、丹後半島最後の前方後円墳として注目される。後期の埋葬施設として丹後半島では横穴式石室以外に横穴が数多く築造されている。分布の中心は竹野川中流域東岸にあり、太田鼻横穴群<sup>(注36)</sup>、有明横穴群<sup>(注37)</sup>など10基以上の単位で築造されている。6世紀末葉から造墓を開始し7世紀に最盛期を迎え、8世紀まで造墓が続いている。

これら墳墓の状況がある程度把握可能な状況にあるのに対し、集落の実態は定かではない。古墳時代の集落跡として、大宮町では正垣遺跡<sup>(注38)</sup>、谷内遺跡<sup>(注39)</sup>、大宮売神社遺跡<sup>(注40)</sup>などが確

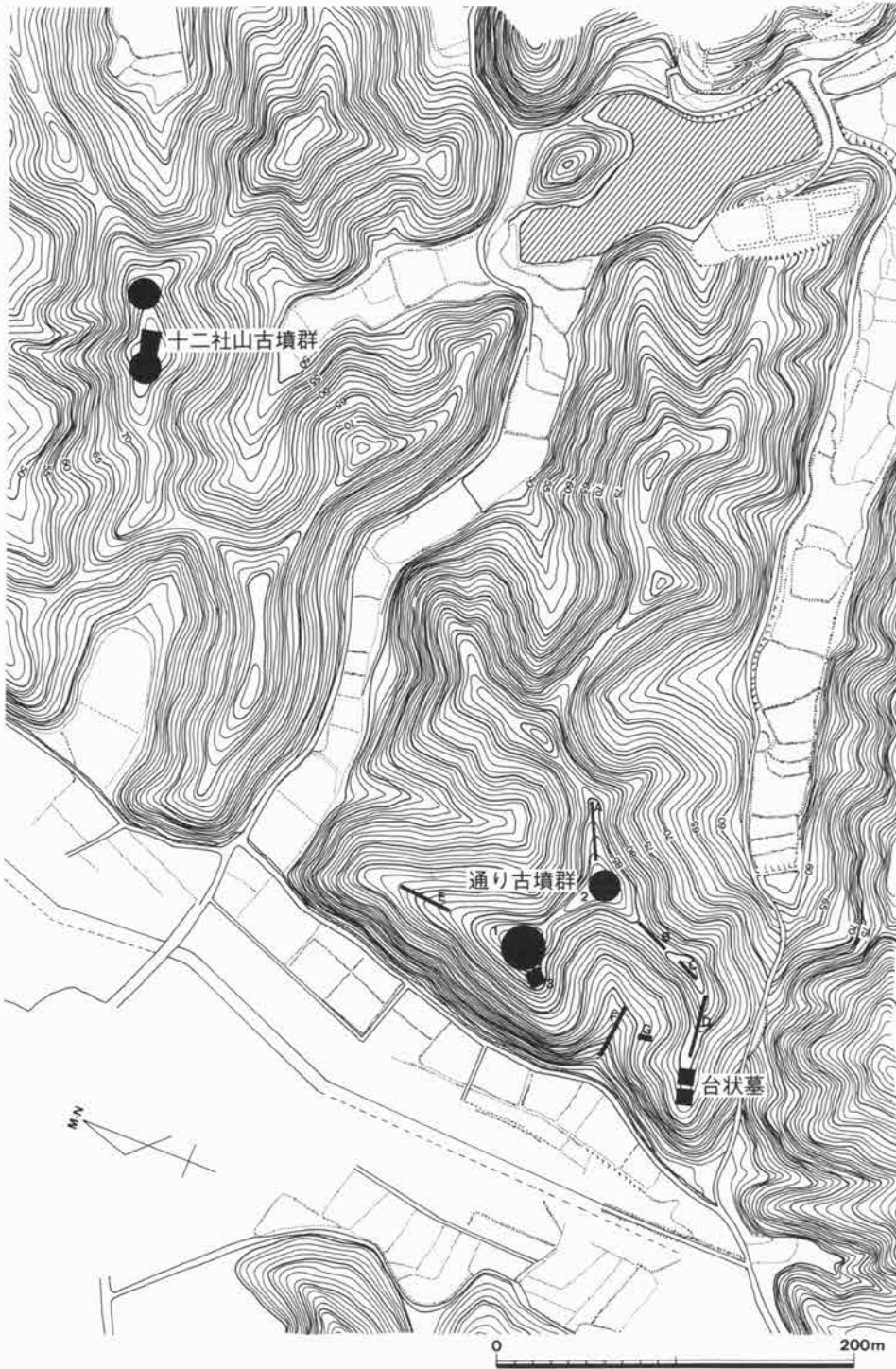


第85図 調査地位置図及び周辺主要古墳時代遺跡分布図(1/25,000)

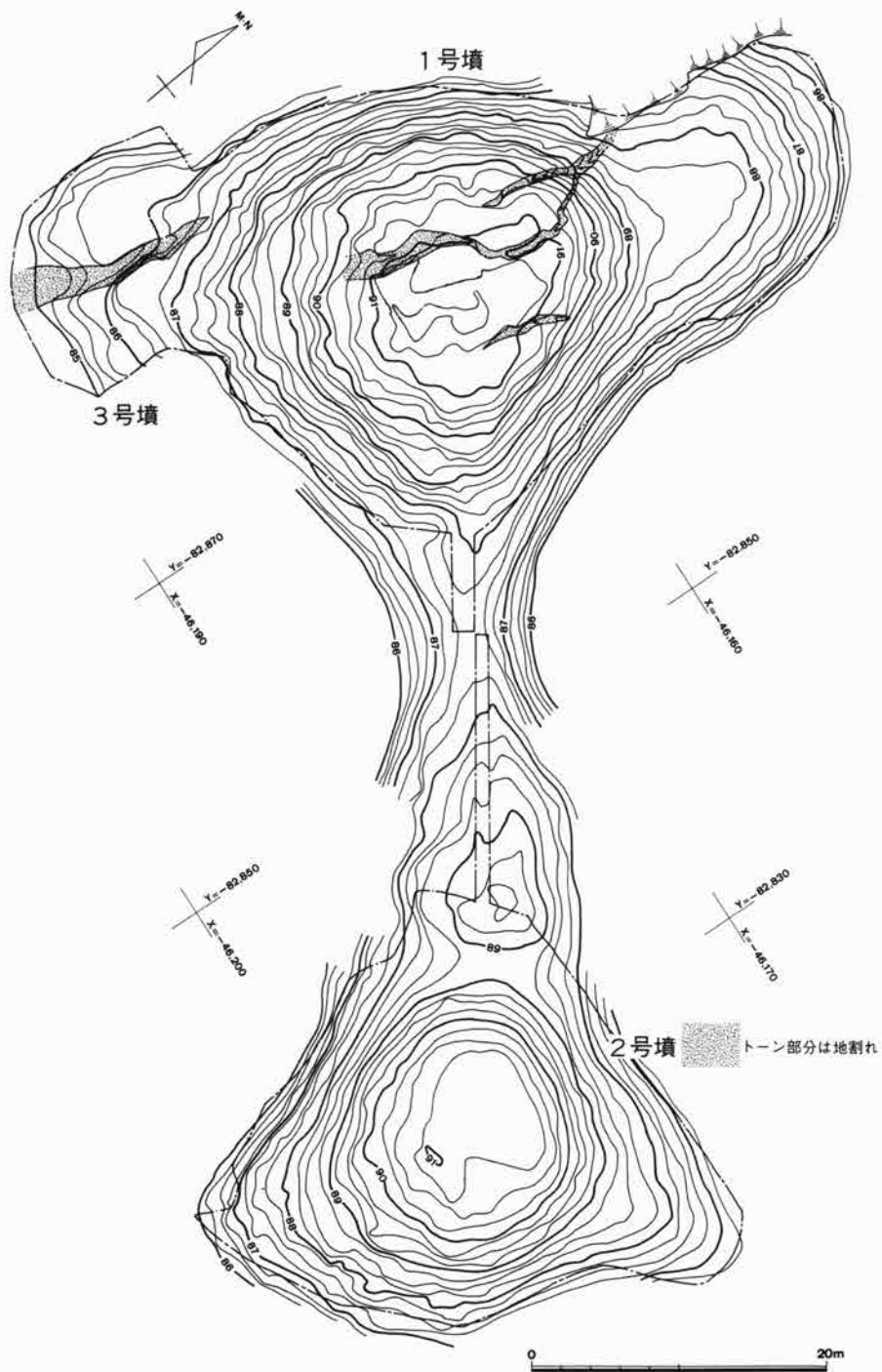
- 1.通り古墳群 2.十二社山古墳群 3.砥石場西古墳群 4.十二社奥古墳 5.十二社古墳群  
 6.小池古墳群 7.左坂古墳群・里ヶ谷横穴群 8.帯城古墳群・太田鼻横穴群 10.大谷古墳  
 11.新戸1号墳 A.菅外遺跡 B.大宮売神社遺跡 C.谷内遺跡 D.裏陰遺跡

認されている。通り古墳群周辺では西側谷部分に広がる菅外遺跡(11)を<sup>(11)</sup>通り古墳群の造墓集団の集落に当てることが可能であるが、詳細は不明である。

以上、簡略に竹野川流域における古墳時代遺跡の概要をみてきたが、通り古墳群周辺では、通り古墳群と同一丘陵上に分布する台状墓、前期の通り古墳群、中・後期の小池古墳群、後期の砥石場西古墳群など、弥生時代後期末葉から古墳時代後期にかけ連綿とした造墓活動を行っている点を注目することができる。また、通り古墳群に隣接する丘陵には前方後円墳と大型円墳からなる十二社山古墳群が存在するが、その築造時期などについての詳細は不明である。



第86図 調査地周辺地形図及び古墳分布図・トレンチ配置図(1/4,000)



第87図 通り古墳群調査前地形図及び遺構配置図(1/500)



## 2. 調査経過

今回の調査は大野団地造成工事に先立ち実施した。調査の対象となったのは、通り1・2号墳及び、戦時中に弾薬庫として造成された際、大量の土器が出土したと伝えられる谷部・丘陵稜線上の不自然な平坦面・古墳状隆起の試掘調査を行うこととなった。

現地調査は、樹木伐採から開始し、樹木伐採の終了した通り古墳群の調査を優先して実施した。古墳群の調査は5月9日から地形測量(1/100・25cm等高線)を行い、地形測量の終了した2号墳から掘削を開始した。また、樹木伐採の段階で1号墳の南北2か所に新たに古墳と考えられる平坦面を確認したため3・4号墳として調査の対象に加えることとなった。周辺部分の試掘調査は古墳群の調査と並行して実施し、谷部分に設定したFトレンチでは遺物の出土はみられたものの遺構は確認されず、丘陵稜線上に設定した5か所の試掘対象地でも遺構・遺物を確認することはできなかった。

埋葬施設は、1号墳で木棺直葬1基、2号墳では木棺直葬2基と土器棺1基の計3基、3号墳で木棺直葬2基を確認した。4号墳は、主体部・区画溝などが存在せず、古墳ではないことが明らかになった。そのため今回は古墳として報告しない。また、1号墳墳頂部では、主体部を切る3基の土坑を確認し、その内2基については土師製筒形容器を埋納した土坑であることを確認した。

遺構実測・写真撮影はその都度行い、遺構の調査は10月24日に終了した。平成3年10月25日には現地説明会を行い、約50名の参加を得た。同日、すべての機材を撤収し現地調査を終了した。なお、調査面積は古墳周辺部分・試掘調査面積と合わせ約2,100m<sup>2</sup>となった。

## 3. 調査概要

### ①1号墳

**立地** 古墳群の立地する丘陵の西端最頂部、標高91m付近に立地する。2号墳とは狭い丘陵鞍部を挟み約30mの距離を置く。丘陵が三方向に派生する頂点にあたる。1号墳からの眺望はよく、遠くは中郡盆地一帯、対岸の河辺・周枳地区などが一望できる。

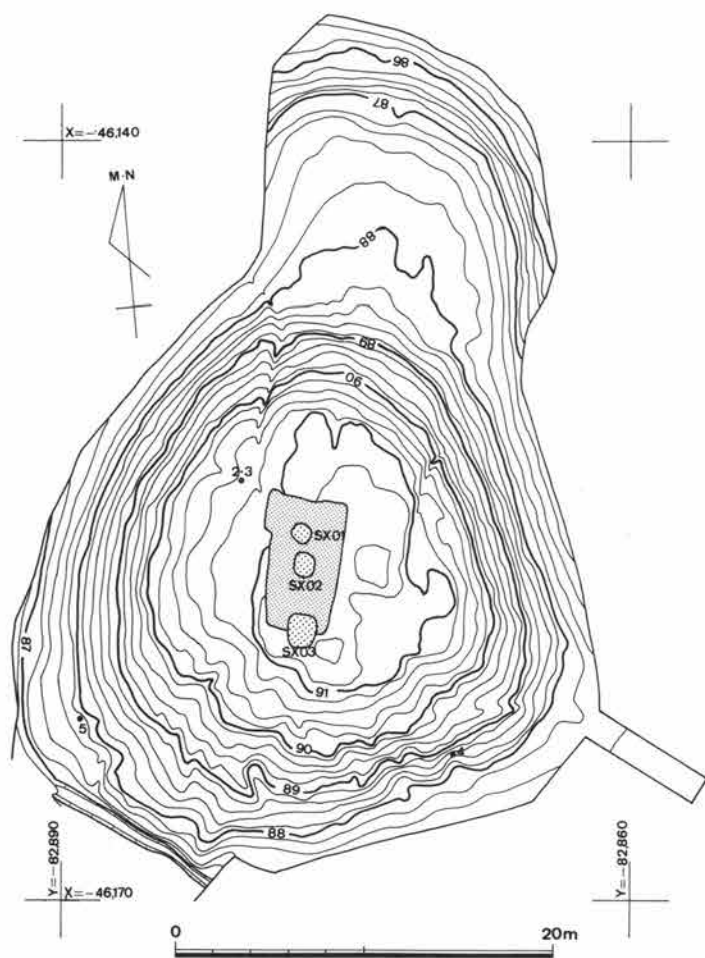
**墳丘の構造**(第88図) 1号墳は地山整形による直径28m・高さ3.5mを測る円墳である。墳頂部及び、墳丘斜面でも盛り土を認めることはできなかった。墳丘の整形は、平野部から望まれる北側はていねいに整形されているが、平野部側から死角となる南斜面の整形は極めて雑である。以上の点から、1号墳は平野部側からの見かけを強く意識した円墳と考える。なお、1号墳北側で南北10m・東西12mの平坦面を確認し、4号墳として調査したが、埋葬施設の認められないこと、後述する3号墳のように区画溝をもたないことから古墳ではなく、1号墳造成に伴い削り出された平坦面と判断した。この平坦面からは土師器

が出土していることから、1号墳に伴う施設である可能性を考慮することができる。また、1号墳の墳丘は南北方向に走る地割れにより大きく破壊を受けている。地割れは墳頂部中央から西側と東側に1条ずつ走っており、西側と東側に墳丘が滑り落ちた状況であった<sup>(註42)</sup>。

主体部(第89図) 墳頂部中央で南北に主軸をとる(N9°E)木棺直葬1基を検出した。主体部は土坑3基に切られていた。墓壙は平面隅丸長方形を呈し、地山から2段に掘り込み、2段目に組合式箱形木棺を設置する構造をとる。規模は、上段が長軸6.6m・短軸3.6m・深さ1.0m、1段目のほぼ中央に掘られた2段目は長軸6.0m・短軸0.9m・深さ0.5mを測る。木棺部分は幅0.44m・長さ5.2mを測る。

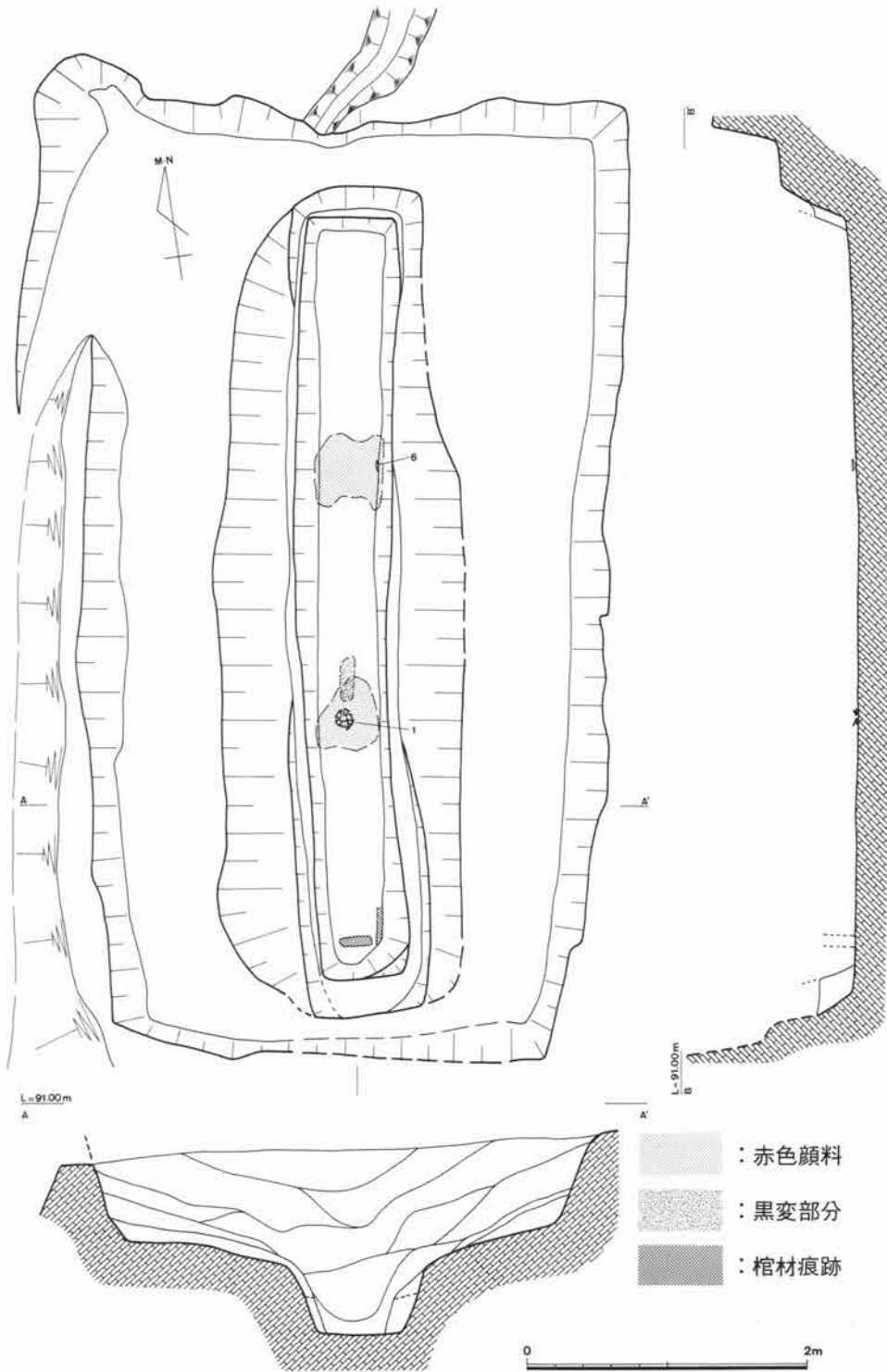
なお、棺内南木口部分で土色変化により、木口板を長側板が挟み込む構造であることを確認した。棺材の厚さは木口板で約8cmを測る。埋葬施設内では木棺痕跡部分を掘り下

げていく過程で赤色顔料を南側と北側で検出した。この赤色顔料を取り除くと、棺内南側で土師器鼓形器台1点を、北側東棺側付近で切先を南に向けた刀子1点を検出した。鼓形器台は受け部の劣化が著しいこと、器台北側に遺骸の腐蝕を示すような床面の黒変か所が認められることなどから、枕として転用されたと考える。枕の存在から1号墳の被葬者は南頭位で埋葬されたと判断される。

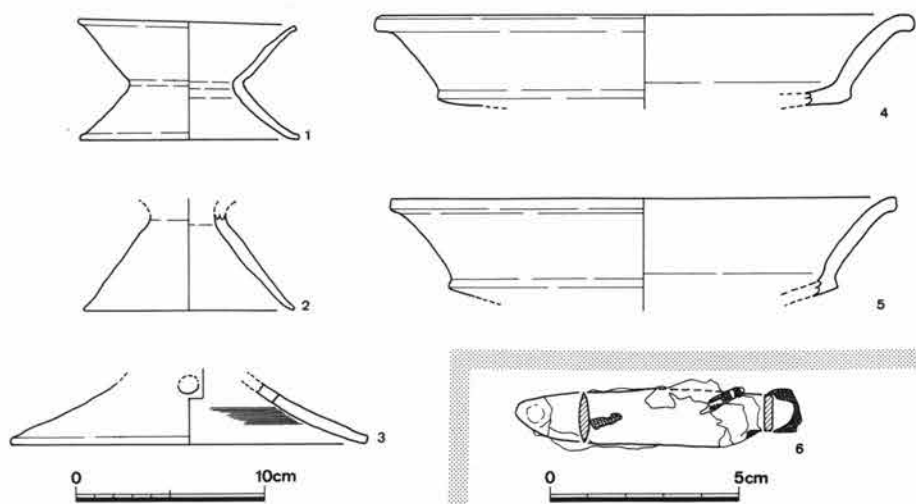


第88図 1号墳地形測量図(調査後 1/400)

●は、土器出土位置、番号は実測図に対応。以下、同様。



第89図 1号墳主体部実測図



第90図 1号墳出土遺物実測図  
1・6. 棺内出土 2～5. 墳丘流土出土

1号墳出土遺物(第90図) 1号墳出土遺物には埋葬施設出土の土師器・鉄器と墳丘から出土した土師器がある。

**a 土師器** 1は、主体部内に枕に転用された状態で検出された鼓形器台である。口径11.6cm・器高6.4cm・底径11.6cmを測る。稜のないタイプに属し、小型品である。調整は磨耗が著しく詳細に観察することはできないが、外面に縦方向の板状工具によるナデが認められる。なお、転用枕に見られる打ち欠きなどはなく、完形品である。2・3は、墳頂部平坦面北西側で近接して出土した。2は、器台の脚部である。細片のため傾き・口径などに疑問が残る。3は高杯の脚部片である。大きく広がるタイプのもので円形の穿孔が1か所のみ確認できる。内面は横方向のハケ調整。4・5は、二重口縁壺の口縁部である。4は南西斜面側流土から、5は南東斜面流土から出土した。4は復原口径28.6cmを測り、5は復原口径26.6cmを測る。口縁部の稜から外反ぎみに立ち上がり、端部を外方に拡張する。ナデにより仕上げられている。

**b 鉄器** 刀子6は、棺内から出土した。全長7.5cm・刃部長5.4cmを測る片関である。全体が布及び革のようなもので覆われている。詳細は観察できないが、先端部の断面はレンズ状を呈する。これは、峰部分にも刃が研ぎだされているためである。刃部には若干の研ぎ減りが観察される。

## ②2号墳

**立地** 古墳群の分布する丘陵の頂部、標高90m付近に立地する。古墳の立地する地点は

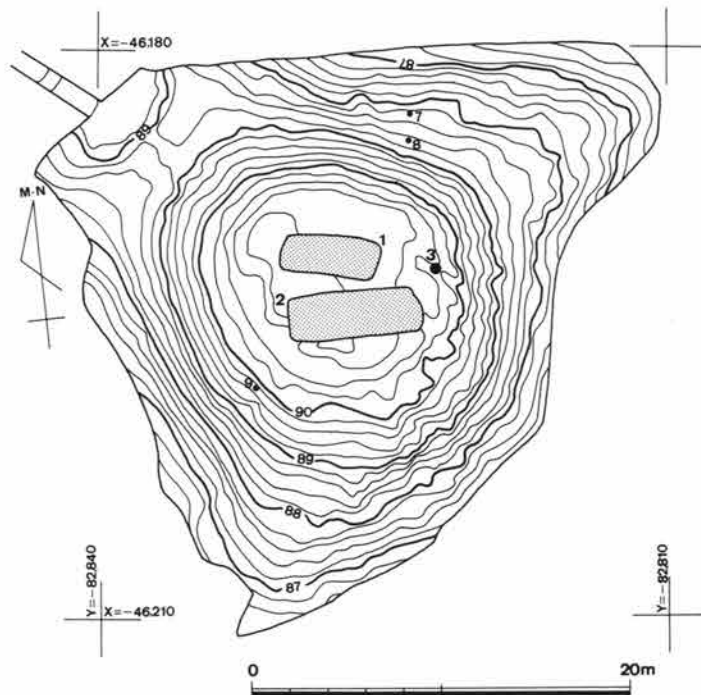
丘陵が三方向に向け分岐する頂点にあたる。2号墳からの眺望はよく、東に大谷古墳、帯城墳墓群などが望め、また竹野川上流域北岸の平野部を眼下にすることができる。

**墳丘の構造(第91図)** 2号墳は地山整形による直径20m・高さ2mを測る円墳である。墳頂部及び、墳丘斜面でも盛り土を認めることはできなかった。墳丘の整形は平野部から望まれる北東側でていねいな整形がなされているが、平野部側から死角となる南西斜面の整形は極めて甘い。また、西側には自然地形と区画する幅約2m・深さ約0.6mを測る溝が認められる。溝底部はほぼ水平に削られている。以上の点から、2号墳は平野部側からの見かけを強く意識した円墳であると考えられる。

**主体部** 2号墳では墳頂部で、2基の木棺直葬及び1基の土器棺を検出した。木棺直葬のうち、北側に位置するものを第1主体部、南に位置するものを第2主体部、土器棺を第3主体部と呼称し、説明を加える。なお、第1・第2主体部は切り合い関係を持たず、ほぼ平行に造られていること、墳頂部平坦面をほぼ二分した中央に各々の主体部が位置することなどから、2号墳は当初から2棺を計画的に埋葬したと考えられる。

**第1主体部(第92図)** 墳頂部中央北側に位置し、主軸を東西にとる(N83°E)木棺直葬である。墓壙は平面隅丸長方形を呈し、地山面から2段に掘り込み、2段目に組合式箱形木棺を安置する構造をとる。規模は、上段の長軸5.1m・短軸2.1mで、深さが0.9m、1段目のほぼ中央に掘られた2段目は、長軸が4.3m、短軸が0.6mで、深さが0.3mを測る。

木棺部分は、幅0.34m・長さ3.5mを測る。棺内及び墓壙内からの遺物の出土は皆無であった。なお、棺内から歯牙4点を検出することができ、被葬者が西頭位で葬られたことを確認した。

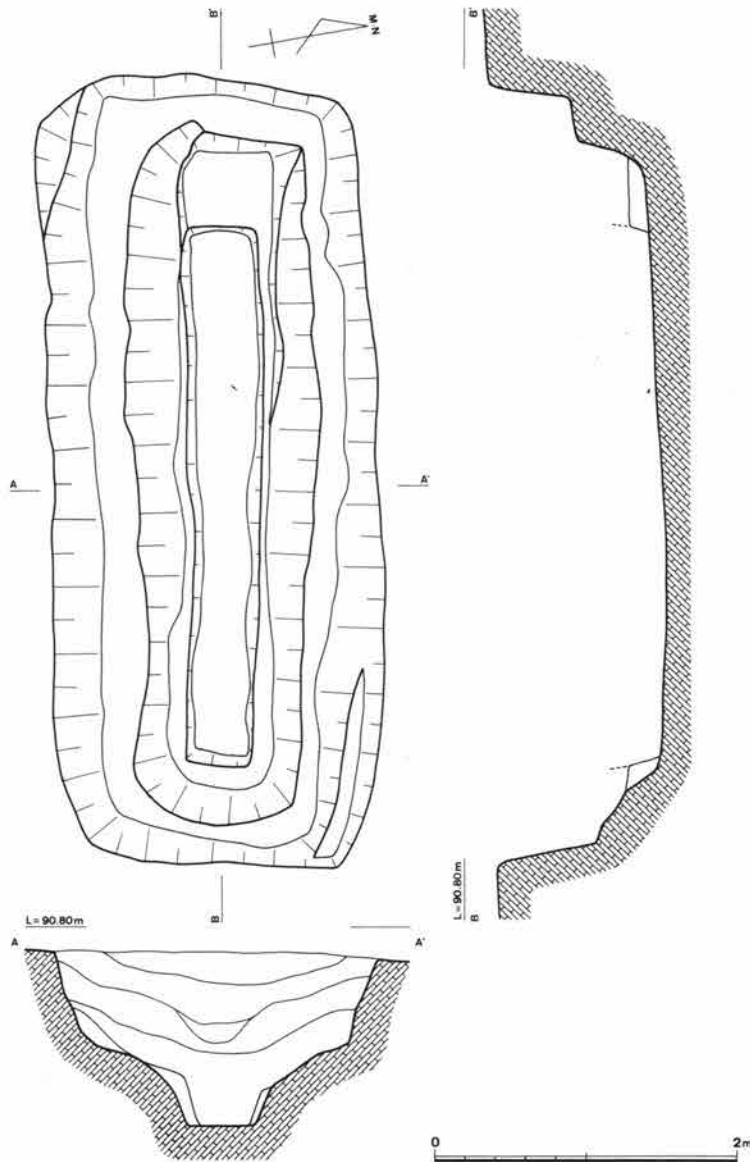


第91図 2号墳地形測量図(調査後 1/400)

第2主体部(第93・94図) 第1主体部の南側に位置する木棺直葬である。主軸は、第1主体部とほぼ平行であるが、やや南に振る(N83°W)。墓壙は、地山面から2段に掘り込まれ、墓壙は平面が隅丸長方形を呈しており、2段目に組合式箱形木棺を設置するような構造をとっている。規模は、上段が長軸が6.5mで、短軸が2.4mであり、深さ0.8m、1段目のほぼ中央に掘られた2段目は、長軸が5.8m、短軸が0.7m、深さが0.1mを測る。棺は、幅0.4m・長さ5.3mと考えられる。また、2段目両木口部分には偏平な石を用いた石積みが見

められた。西木口の石積みは崩れて旧状を留めていなかったが、遺存状況のよい東木口部分では2~3段の石積みを確認した。最下段に偏平な石材を立て置きし、その上段にさらに立て置きの石材を用い、最上段は小型の石材を木口積みにしている。棺の木口板の痕跡については確認することができず、また石積みの構造から、木口板がなかった可能性も考えられる。

第2主体部出土遺物には、棺上と考えられる遺物として、土師器高杯1点・ガラス勾玉



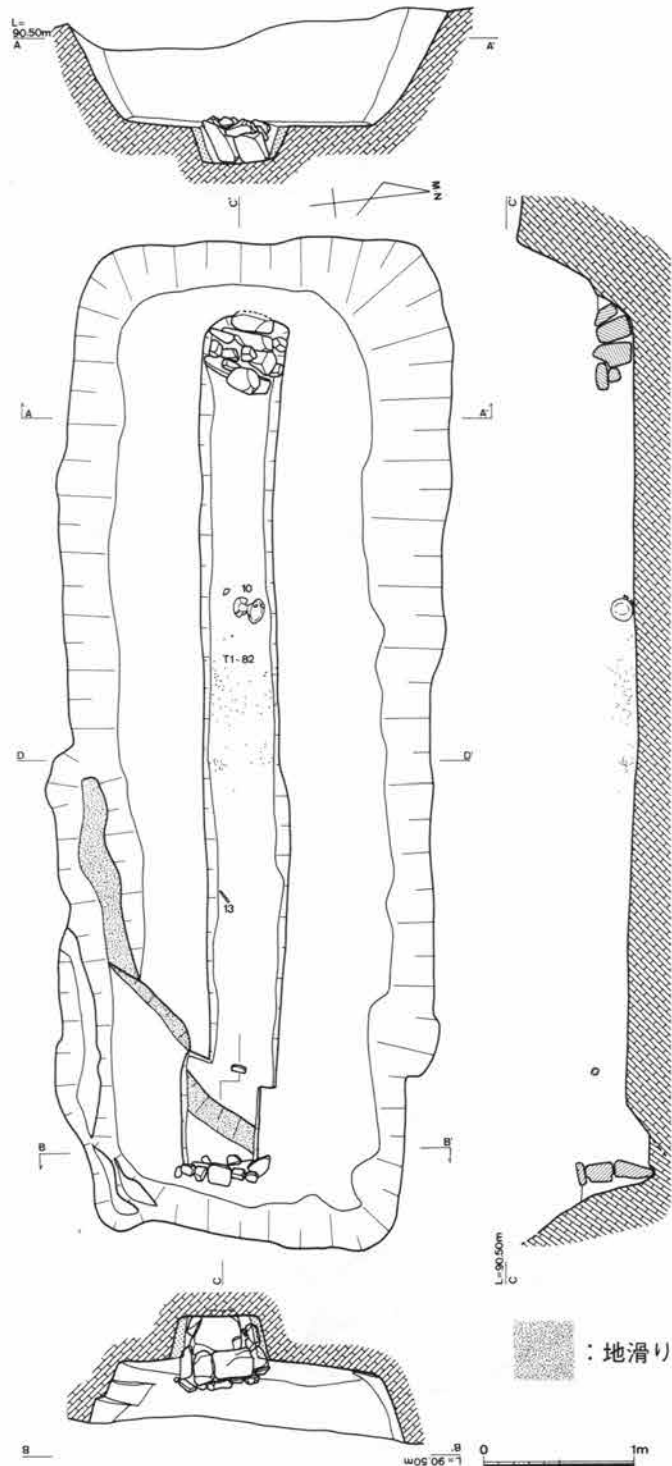
第92図 2号墳第1主体部実測図

1点・ガラス小玉81点、棺内遺物として刀子1点を検出した。

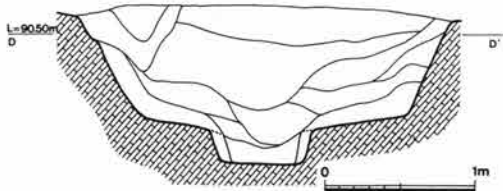
土師器高杯は、棺中央よりやや西側で棺底面から、若干遊離した状態で検出された。その出土状況から高杯は棺蓋上に正位で置かれていたものとする。ガラス玉は、棺中央部付近に散らばって検出された。この出土状況から、玉類は緒を切り離した状態で棺上に播かれたものと考えられる。棺内の刀子は棺中央から東の南棺側部分で切先を東に向けて検出された。この他に高杯の下部で歯牙と思われる骨片を検出したが、風化が著しく取り上げることができなかった。以上の点から、第2主体部の被葬者は第1主体部同様西枕で埋葬されたと考える。

第3主体部(第95図)

第1主体部の東側で、墳頂部の北東端部に位置する。地山面に



第93図 2号墳第2主体部実測図



第94図 2号墳第2主体部断面図

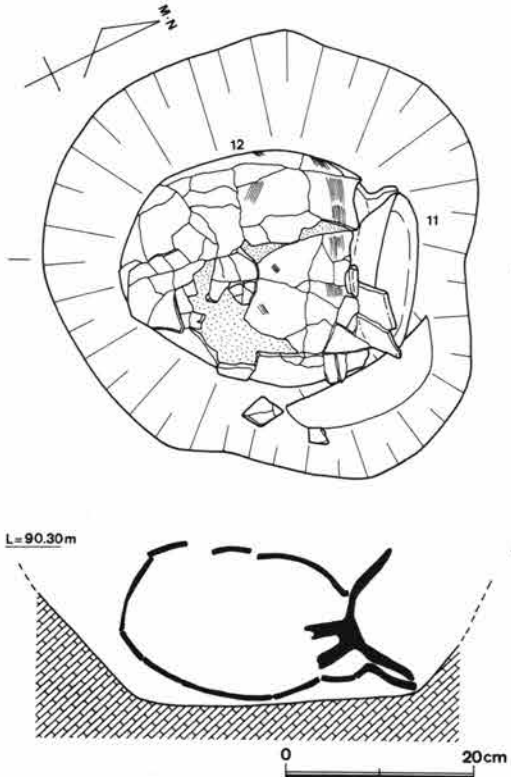
ら掘り込まれた、長軸0.5m・短軸0.4mを測る楕円形の土壌の中に、土師器甕1点・高杯1点を転用した土器棺を安置する。土器棺は身として甕を横に、口縁を北に向け安置し、脚部を欠いた高杯を正位ではめこみ蓋に用いている。副葬品は

認められなかった。

2号墳からはこの他に、墳丘北斜面流土から二重口縁壺片・小形丸底壺1点が出土し、南側斜面からは高杯脚部1点が出土している。

**2号墳出土遺物** 2号墳出土遺物には、主体部出土の遺物として第2主体部棺上出土の高杯・ガラス玉、棺内出土の刀子。第3主体部で棺として利用された甕・高杯、墳丘出土の遺物として土師器二重口縁壺・小形丸底壺・高杯脚部がある。

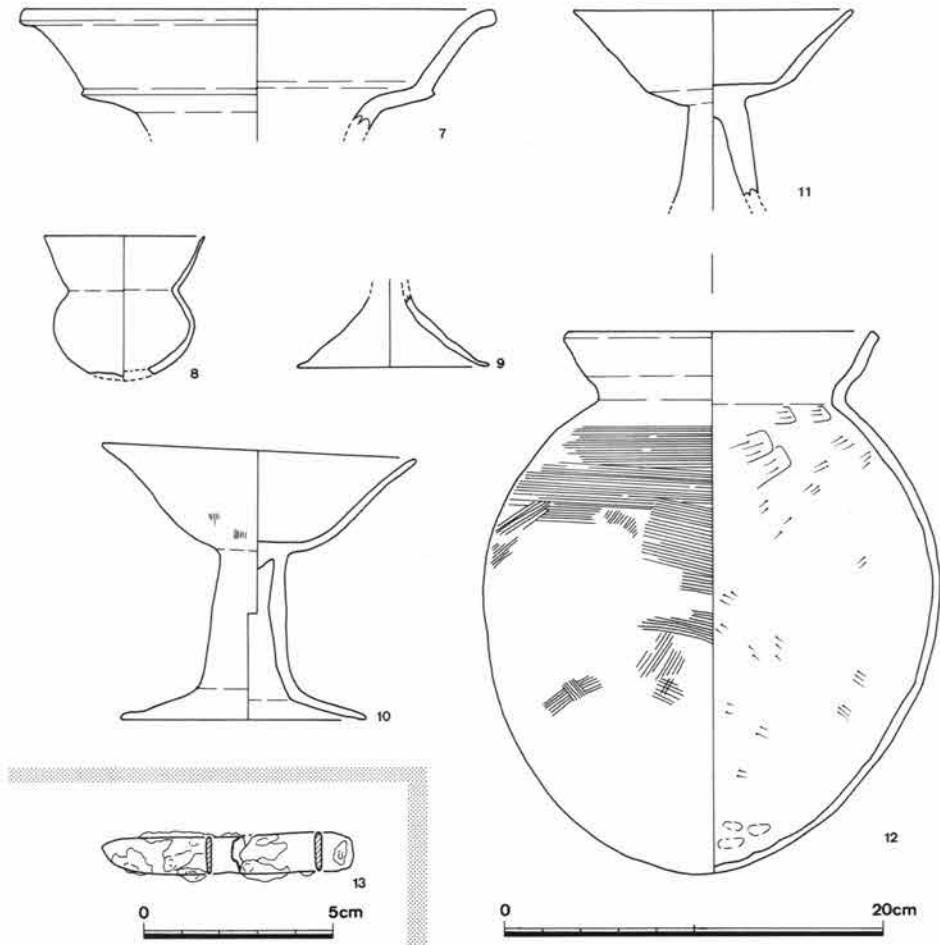
**a 土師器(第96図)** 7~9は、墳丘斜面流土から出土した。7は、二重口縁壺である。復原口径25.2cmを測る。鋭い稜をもち、口縁は外反ぎみに立ち上がり、端部は外方に拡張



第95図 2号墳第3主体部実測図

する。全体をナデにより仕上げている。8は、小型丸底壺である。口縁を欠くがほぼ完形品である。口径25.2cm・器高7.6cm・体部最大径7.5cmを測る。口径は体部最大径に比べやや大きい、長さはやや短い。底部には焼成後の穿孔が施される。9は、高杯の脚と考えられる。外反ぎみに開き、端部はやや外方に広がる。穿孔はない。10は、第2主体部棺上出土の高杯である。やや外反する杯部に、中空の脚柱部、外方に大きく広がる脚部をもつ。磨耗が著しいが、杯部外面は縦方向のハケ調整ののち、ていねいにナデ消してある。口径16.6cm・器高14.7cm・脚部径13cmを測る。11・12は、第3主





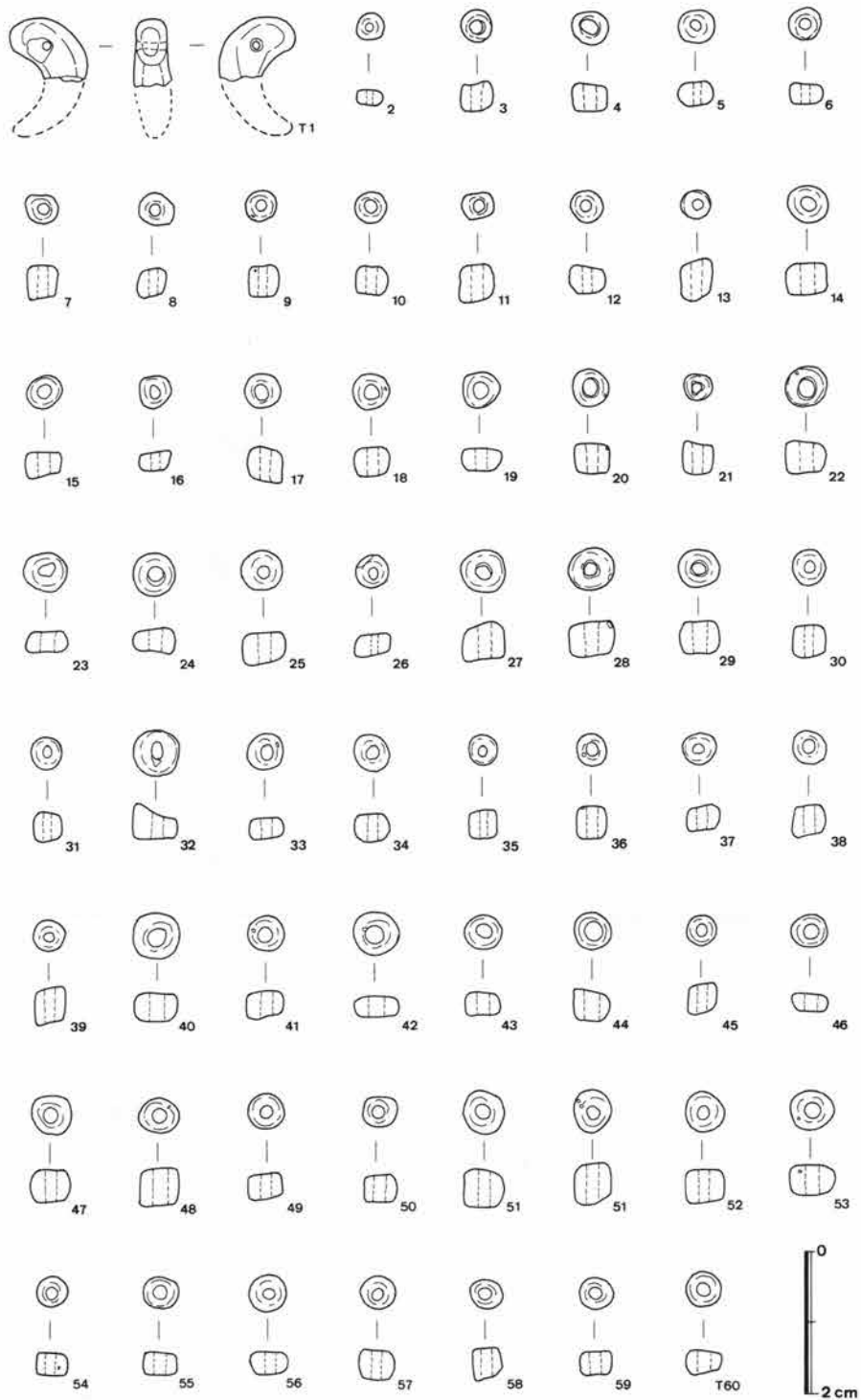
第96図 2号墳出土遺物実測図

7～9.墳丘流土 10・13.第2主体部出土 11・12.第3主体部棺内

体部で棺として用いられていた。11は、蓋に転用された高杯である。やや外反する杯部に中空の脚柱部が付く、脚部は打ち欠かされている。調整は内面にわずかに縦方向のハケメがみられる。12は、身に転用された甕である。口径16.5cm・器高28.8cm・体部最大径24cmを測る。倒卵形の体部に、外反ぎみに開く口縁を持つ。体部最大径は、体部中央よりやや上方にある。調整は、外面肩部に明瞭な横方向のハケメ、内面は屈曲部までヘラケズリが施される。

**b 鉄器**(第96図) 13は、第2主体部棺内出土の刀子である。全長6.2cm・幅1cmを測る。関はなく、木質などの遺存も認められない。

**c 玉類**(第97図) 第2主体部からガラス勾玉1点・ガラス小玉81点の総数82点が出土し



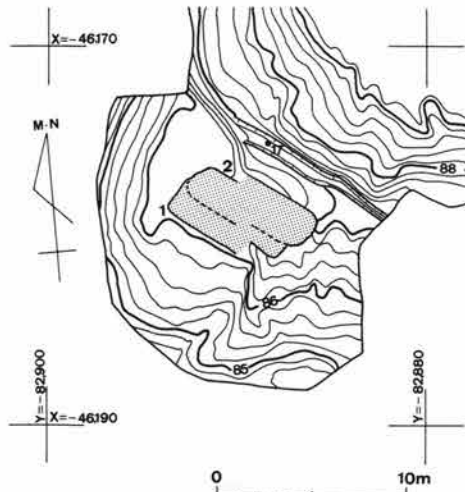
第97図 2号墳第2主体部出土玉類実測図

付表7 2号墳第2主体部出土ガラス玉類量表

No	器種	長(cm)	径(cm)	色調	備考	図	No	器種	長(cm)	径(cm)	色調	備考	図
1	勾玉	—	—	SB	尾部欠損	1	42	小玉	0.55	0.57	SB		48
2	小玉	0.4	0.45	SB		8	43	小玉	0.35	0.48	SB		49
3	小玉	0.42	0.42	SB		9	44	小玉	0.43	0.46	SB		50
4	小玉	0.43	0.45	SB		10	45	小玉	0.55	0.6	SB		51
5	小玉	0.5	0.45	SB		11	46	小玉	0.58	0.57	SB		52
6	小玉	0.4	0.5	SB		12	47	小玉			SB	破損	
7	小玉	0.6	0.45	SB		13	48	小玉	0.48	0.56	SB		53
8	小玉	0.45	0.6	SB		14	49	小玉	0.43	0.64	SB		54
9	小玉	0.4	0.5	SB		15	50	小玉	0.35	0.45	SB		55
10	小玉	0.45	0.45	SB		16	51	小玉	0.3	0.46	SB		56
11	小玉	0.5	0.5	SB		17	52	小玉	0.32	0.53	SB		57
12	小玉	0.4	0.55	SB		18	53	小玉	0.43	0.48	SB		58
13	小玉	0.3	0.55	SB(濃)		19	54	小玉	0.45	0.42	SB		59
14	小玉	0.4	0.5	SB		20	55	小玉	0.33	0.48	SB		60
15	小玉	0.45	0.42	SB		21	56	小玉	0.31	0.52	SB		
16	小玉	0.5	0.6	SB(濃)		22	57	小玉	0.39	0.48	SB		
17	小玉	0.3	0.62	SB		23	58	小玉	0.34	0.45	SB		
18	小玉	0.4	0.6	SB		24	59	小玉	0.39	0.51	SB		
19	小玉	0.45	0.6	SB		25	60	小玉	0.42	0.56	SB		
20	小玉	0.32	0.5	SB		26	61	小玉	0.45	0.53	SB		
21	小玉	0.55	0.6	SB		27	62	小玉	0.35	0.5	SB		
22	小玉	0.5	0.63	SB		28	63	小玉	0.55	0.53	SB		
23	小玉	0.45	0.6	SB(濃)		29	64	小玉	0.28	0.42	SB		
24	小玉	0.45	0.5	SB		30	65	小玉	0.36	0.56	SB		
25	小玉	0.4	0.4	SB		31	66	小玉	0.35	0.46	SB		
26	小玉	0.5	0.65	SB(濃)		32	67	小玉	0.44	0.57	SB		
27	小玉	0.3	0.5	EG		33	68	小玉	0.27	0.37	SB		
28	小玉	0.4	0.5	SB		34	69	小玉	0.37	0.52	SB		
29	小玉	0.4	0.4	SB		35	70	小玉	0.35	0.36	SB		
30	小玉	0.42	0.4	EG		36	71	小玉	0.42	0.6	SB		
31	小玉	0.35	0.45	SB		37	72	小玉	0.47	0.45	SB		
32	小玉	0.43	0.5	SB(濃)		38	73	小玉	0.23	0.4	SB		2
33	小玉	0.55	0.45	SB		39	74	小玉	0.45	0.43	SB		3
34	小玉	0.4	0.65	SB		40	75	小玉	0.4	0.5	SB		4
35	小玉	0.36	0.53	SB		41	76	小玉	0.33	0.5	SB		5
36	小玉	0.32	0.63	SB		42	77	小玉	0.3	0.5	SB		6
37	小玉	0.32	0.49	SB		43	78	小玉	0.5	0.45	SB		7
38	小玉	0.45	0.53	SB		44	79	小玉			SB	破損	
39	小玉	0.42	0.41	SB		45	80	小玉			SB	破損	
40	小玉	0.27	0.47	EG		46	81	小玉			SB	破損	
41	小玉	0.43	0.56	SB		47	82	小玉			EG	破損	

S Bはスカイブルー、E Gはエメラルドグリーンを示す。

図番号は第97図に対応



第98図 3号墳地形測量図(調査後 1/400)

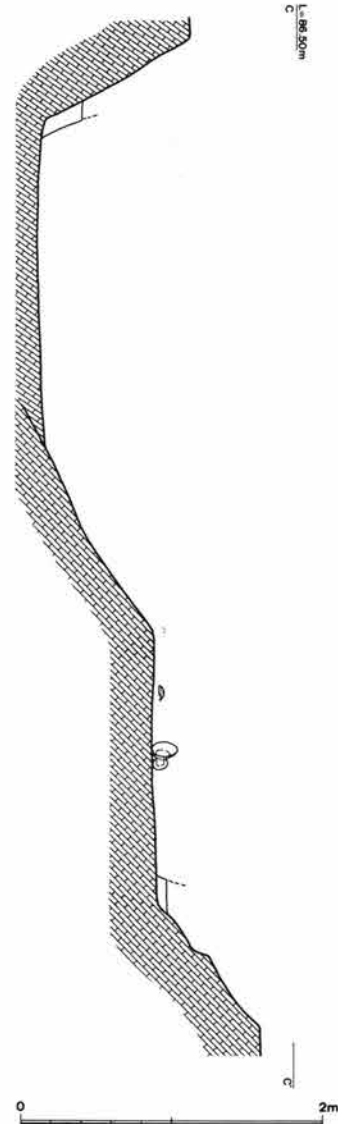
た。図示したのはその内60点である。T1は、ガラス勾玉の頭部である。尾部を欠くため全容はわからないが、丸みを帯びた「C」字形に近いプロポーションを持つものと思われる。色調はスカイブルー。T2～T60は、ガラス小玉である。法量については付表7に一括したが径0.58～0.23cm・長さ0.65～0.36cmの間に納まる。端面を平滑に整形するものはない。色調は、大別して濃いスカイブルー・スカイブルー・エメラルドグリーンの3色が認められる。

### ③ 3号墳

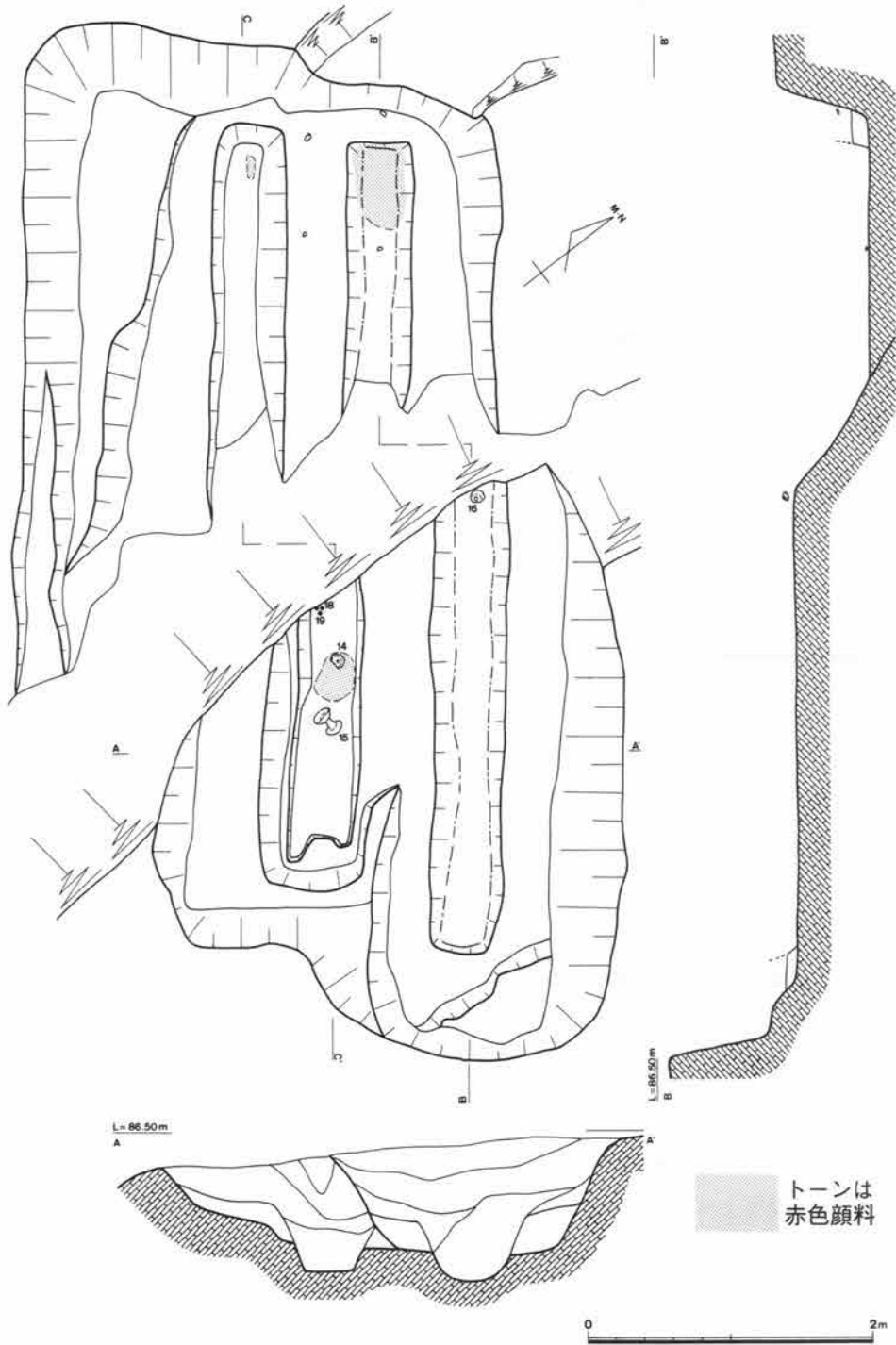
**立地** 3号墳は、1号墳の南側、丘陵稜線上、標高85m付近に位置する。平野側からの視界は全くきかず、菅外遺跡の展開する谷部分を眼下にできる。

**墳丘の構造(第98図)** 3号墳の墳丘は、丘陵稜線を「L」字状に削り出し、高位側に幅0.6m・深さ0.3mを測る直線的な溝を設け、南北8m・東西14mの平坦面を確保しただけのいわゆる「方墳」である。明確な墳丘裾部分は確認できない。墳丘中央には南北方向の地滑りが認められ、最大約50cmの比高で西にずり落ちている。

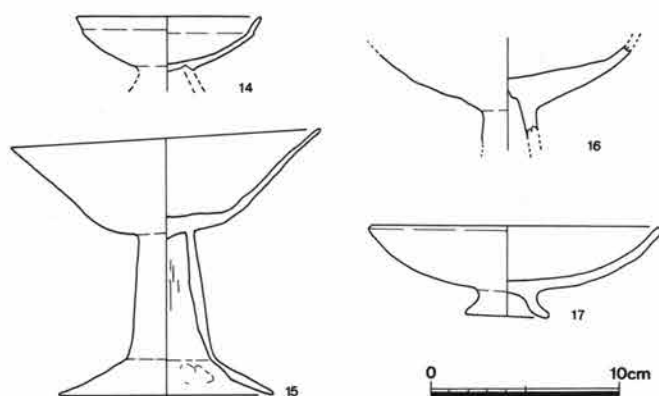
**主体部(第99・100図)** 主体部は、平坦面中央で東西に主軸をとる(N53°W)木棺直葬2基を検出した。切り合い関係が認められ、先行するものを第1主体部、後続するものを第



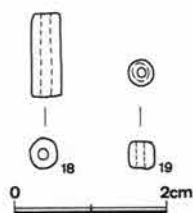
第99図 3号墳第1主体部断面図



第100図 3号墳第1・2主体部実測図



第101図 3号墳出土遺物実測図  
14・15.第1主体部 16.第2主体部 17.溝埋土



第102図 3号墳第1  
主体部出土玉  
類実測図

設置する構造をとる。第2主体部との切り合いは断面による確認であり、平面的に捉えることはできなかった。また、地割れにより大きな破壊を受けているため正確な規模は復原できないが、復原される規模は墓壙上段が長軸5.5m・短軸2.1m・深さ0.7mで、1段目のほぼ中央に掘られた2段目は、長軸4.7mで、短軸0.8m・深さ0.3mを測る。また、その棺は幅0.34m・長さ3.6mと考えられる。遺物は棺上に完形の土師器高杯1点及び、脚部を打ち欠かれた器台1点が、高杯は横位で、器台は逆位で検出された。また、この周囲には多量の赤色顔料が認められた。この他に、ガラス小玉2点・碧玉製管玉1点が棺中央部から出土した。玉類は、棺床面より浮いた状況であったが、そばに松の根が入り込んでおり、本来棺内にあったものが二次的な移動を受けた可能性も考えられる。

**第2主体部** 第2主体部は、第1主体部よりやや北側に位置する。第1主体部同様、墓壙の平面が隅丸長方形を呈し、地山から2段に掘り込み、2段目に木棺を設置する構造をとる。棺底部が緩やかな「U」字形を呈し、「U」の字状底部を有する木棺の使用が考えられる。復原規模は、墓壙上段が長軸5.8m・短軸2.2m・深さ0.9m、1段目のほぼ中央に掘られた2段目は、長軸5.2m・短軸0.6m・深さ0.2mを測る。棺は幅0.5m・長さ4.8mを測る。遺物は墓壙埋土内から細片化した土師器壺1个体分、棺上から脚部を打ち欠いた土師器高杯1点、棺内から微量ではあるが赤色顔料が検出された。

3号墳ではこの他に1号墳との区画溝内から、土師器低脚杯が出土している。溝がある程度埋まった面での出土であり、第2主体部に伴うものである可能性がある。

**3号墳出土遺物** 3号墳出土遺物には、第1主体部出土の高杯・器台・玉類、第2主体

2主体部とする。なお、この主体部も地滑りにより東西に分断された状況であった。

**第1主体部** 第1主体部は、平坦面のほぼ中央に位置する。墓壙平面は、隅丸長方形を呈し、地山から2段に掘り込んでおり、2段目に組合式箱形木棺を

部出土の高杯・二重口縁壺がある。このほかに、溝埋土出土遺物として低脚杯がある。このうち、第2主体部出土の壺については図示しえなかった。

a 土師器(第101図) 14は、第1主体部出土の器台である。脚部を打ち欠かされている。口径9.8cmを測り、受け部に段をもつ。色調は淡黄褐色である。15は、第1主体部出土の高杯である。口径16.4cm・器高14cm・底径11.4cmを測る完形品である。16は、第2主体部出土の高杯杯部である。脚部は打ち欠かれ、端部も残存していない。椀状の丸いプローションを呈する。色調は暗茶褐色である。17は、溝内出土の低脚杯である。浅い皿状の杯部に外反する短い脚部が付く。口径15.3cm・器高4.9cmを測る。色調は燈褐色を呈する。

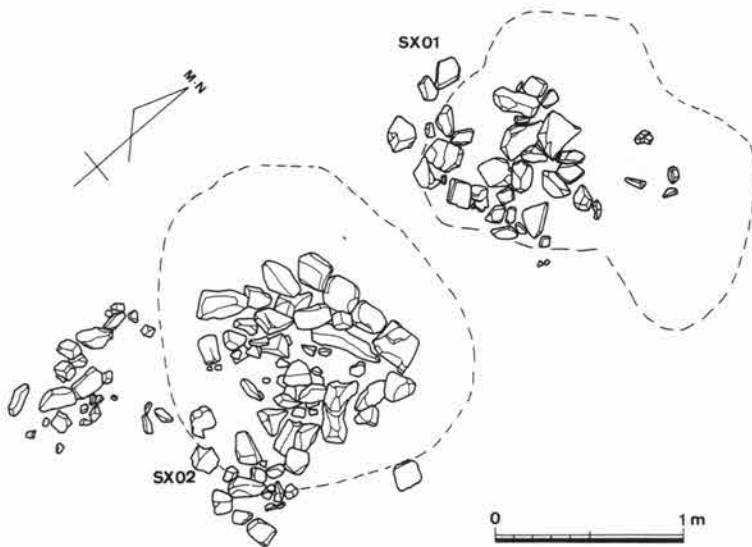
b 玉類(第102図) 玉類は、第1主体部から3点出土したが、図示しえたのは2点である。18は、碧玉製の管玉である。長さ1.1cm・径0.4cmを測る。穿孔は片面穿孔である。色調は淡緑灰色を呈する。19は、ガラス小玉である。径0.35cm・長さ0.35cmを測る。色調はスカイブルーを呈する。

(石崎善久)

#### ④土坑

1号墳の墳頂部で主体部を切る土坑を3基検出した。北からSX01、SX02、SX03とする。

SX01(第103～105図) 上部構造に集石をもち、下部に土坑を掘り、土師製筒形容器を埋納する。SX01は、表土を除去した段階で集石を検出した。集石は、ほぼ径1mの範囲に拳大から人頭大の花崗岩川原石を用い、楕円形に構築されている。

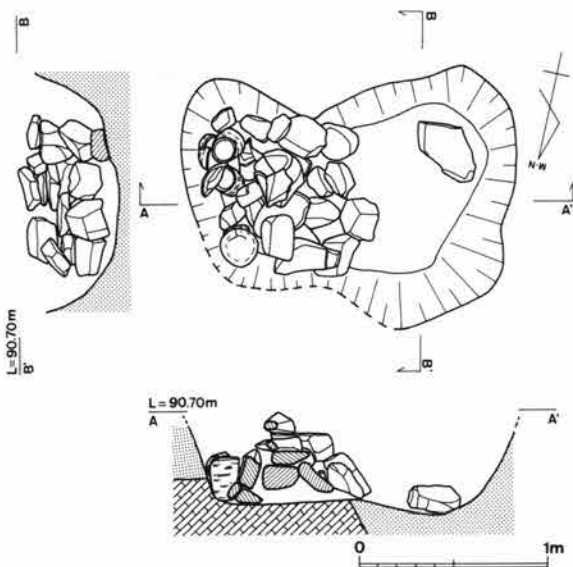


第103図 SX01・SX02上部集石実測図

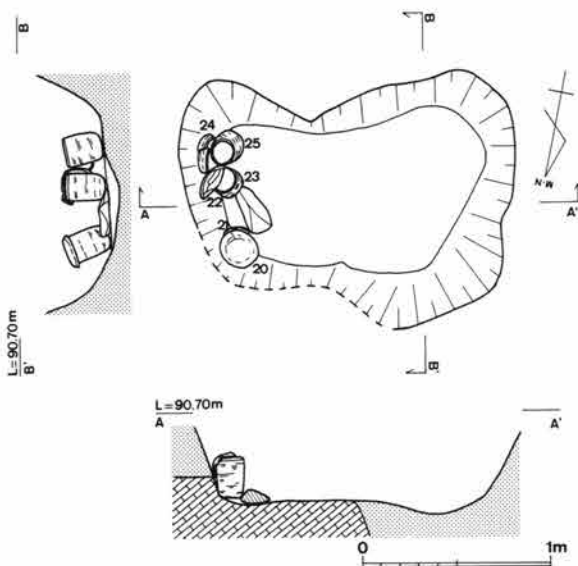
下部の土坑は、集石除去後、主体部を約20cm掘り下げた段階で掘形を検出した。土坑の形態・規模は、楕円形を呈し、径約1mを測る大きな土坑(以下、主土坑と記述)に、東側に小型の土坑が取り付く構造をとる。この小型の土坑については、後述するS X02が横穴構造となっていること、土坑内埋土が天井が崩落した状況を呈していることから、本来は横穴構造であったと考える。土坑底部のレベルは、主土坑の方が横穴部に比べ、約5

cm低い。主土坑と横穴部の間には、閉塞石が認められた。閉塞石は、川原石を4~5段に積み上げている。遺物は、横穴部で、蓋をもつ土師製筒形容器3セットを検出した。このうち、西側の筒形容器は安定を測るためか、底部に石をかませた。このほか、主土坑南辺に偏平な石材が置かれていたが、その性格は不明である。

S X02(第103・106・107図) S X01の南に近接して構築された土坑である。この土坑は、上部に集石をもち、下部には閉塞石を伴う横穴部を敷設する構造をもつ。上部の集石は、表土直下で検出され、南北1.4m・東西1.6mの範囲で認められる。石材は、拳大から人頭大の花崗岩川原石で、集石中央部には小形の石材を、縁辺部には大形の石材を配する。主土坑は、平面楕円形を呈し、その規模は、東西1.7m・南北1.5mを測る。西側に段をもっており、南側を径約0.8mの円形に掘り込む二段



第104図 S X01実測図(閉塞石検出状況)



第105図 S X01実測図(閉塞石除去後)

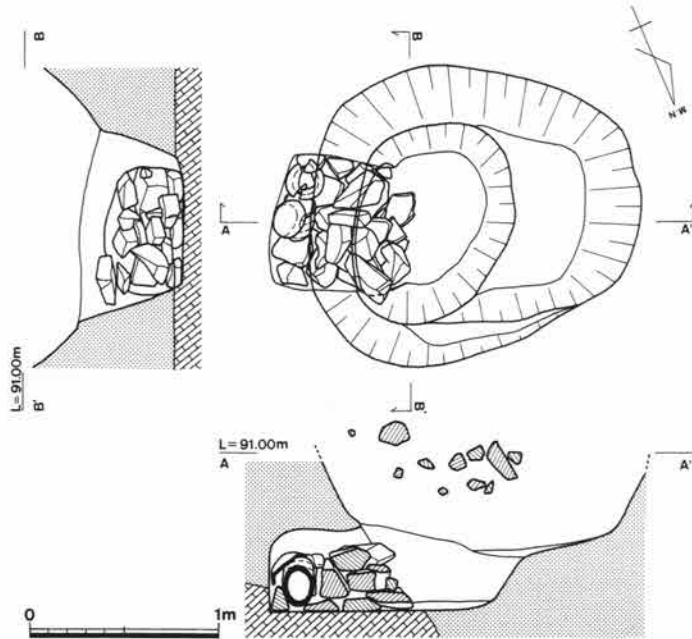


構造をもつ。横穴部は、この主土坑東壁をさらに、幅0.7m・奥行0.5m・高さ0.45m掘り込んで造られている。また、横穴部床面には偏平な石材を用いた敷石が施されていた。主土坑底部のレベルと、

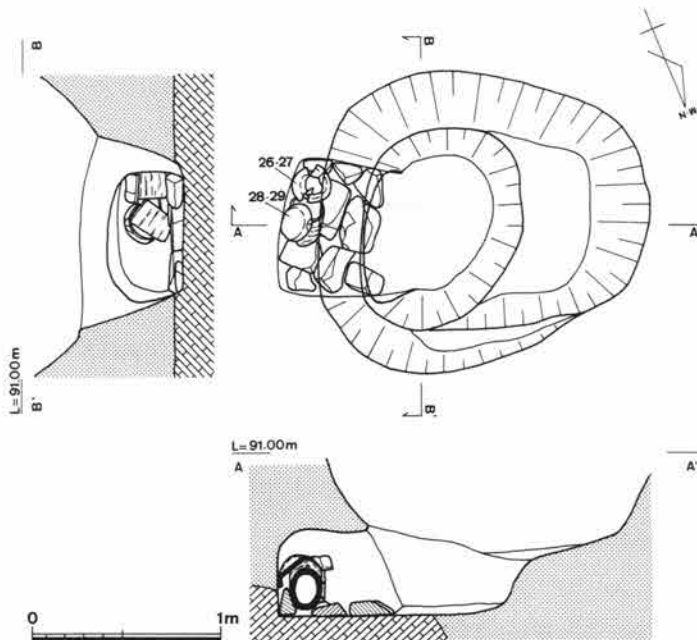
横穴部底部のレベルはほぼ同一であるが、横穴部に敷石が施されているため、実際に機能する面は横穴部の方が約5cm高くなる。横穴部の閉塞は石材を4段に積んでいる。遺物は、横穴部南東側で蓋を伴う土師製筒形容器2セットを検出した。

S X 03 主体部南辺を切る土坑である。平面は、隅丸方形を呈しており、規模は南北1.7m・東西1.4m・深さ1mを測る。埋土は、花崗岩風化土を主体としており、地山を掘り、埋め戻したものと思われる。出土遺物はなく、その性格については不明である。

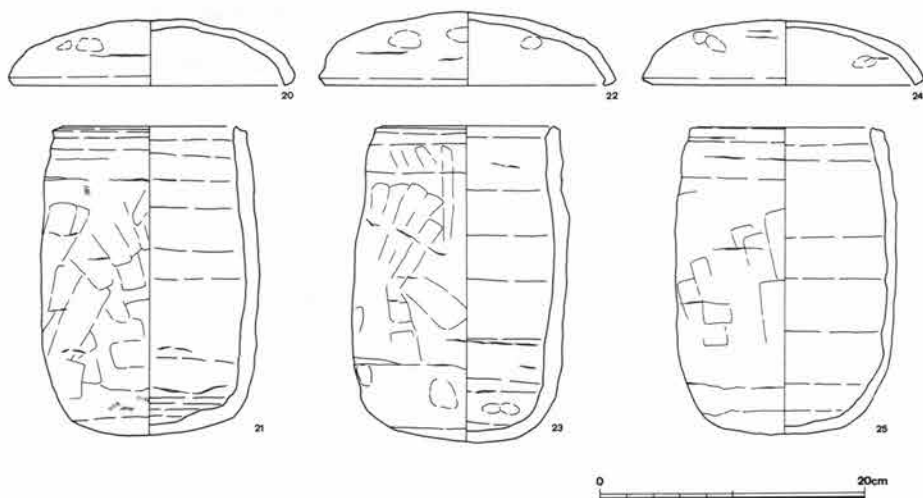
(石崎善久・林田登之)



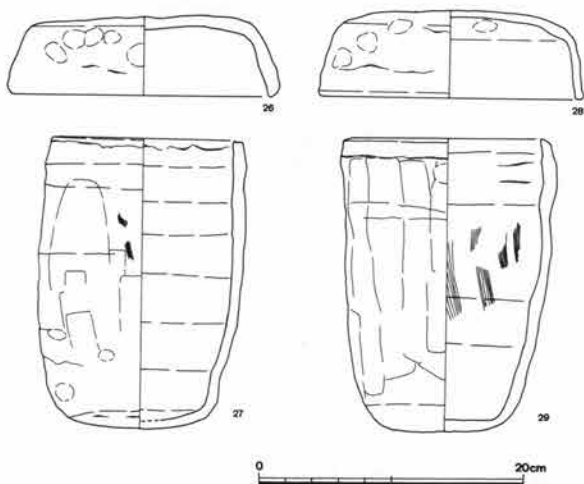
第106図 S X 02実測図(閉塞石検出状況)



第107図 S X 02実測図(閉塞石除去後)



第108図 S X 01出土遺物実測図



第109図 S X 02出土遺物実測図

土坑出土遺物 S X 01から3セット・S X 02から2セットの蓋を伴う土師製筒形容器を検出した。

S X 01出土遺物(第108図) 20~25は、S X 01から出土した土師製筒形容器とその蓋である。20・21、22・23、24・25がそれぞれセットになる。

3点の筒形容器はほぼ同型同大であり、口径13cm・器高

23.2~23.8cmを測る。胴部は丸みをおびた筒状を呈し、口縁端部は段をなす。外面はハケを施した後、板状工具による縦方向のナデにより仕上げられる。内面は横方向のナデによる調整である。また、内外面に接合痕が残る。蓋も、3点ともほぼ同型同大である。天井部の低い偏平なプロポーションを呈する。内外面ともナデによって調整する。内外面に指頭圧痕・接合痕が観察される。法量は口径20.3~21cm・器高4.9~5.6cmを測る。

S X 02出土遺物(第109図) 26~29は、S X 02から出土した土師製筒形容器とその蓋である。26・27、28・29がそれぞれセットになる。土師製筒形容器はほぼ同型同大であり、S X 01出土の筒形容器に比べ直線的な筒形を呈する。内外面ともナデによる調整を行う。29ではナデの前に縦方向のハケ目が観察される。また、内外面に接合痕が観察される。法

量は、27が口径15.7cm・器高22.1cm、29が口径14.4cm・器高22cmを測る。蓋もほぼ同型同大であり、天井部の高いプロポーションである。内外面ともナデによる調整を施す。内外面に指頭圧痕・接合痕が観察される。法量は、26が口径19.5cm・器高6cm、28が口径19.2cm・器高6.7cmを測る。

#### ⑤試掘トレンチ(第86図)

古墳群・土坑の調査と並行して、尾根状に確認された不自然な平坦面や古墳状隆起に対してトレンチを設定し、調査を行った。尾根部分については、遺物・遺構とも検出することはできず、トレンチ断面観察の結果からも自然地形であることが確認された。

谷部分に設定したFトレンチは、戦時中に弾薬庫を造ったときに大量の土器が出土したと伝承される地点である。厚さ約1mに及ぶ弾薬庫造成に伴う整地土があり、この整地土中より土師皿が出土した。しかし、遺構は検出できず、弾薬庫造成に伴い削平されたものと判断される。土師皿は、13世紀頃の所産である。

#### 4. ま と め

今回の調査の成果を、丹後半島の古墳の動向などを参考として簡単にまとめる。まず、古墳群の築造時期についてであるが、細かく出土遺物を検討する必要があると考えるが、概ね古墳時代前期末頃と考えてよいと思われる。丹後半島に所在する前期古墳出土土師器との比較によると丹後町神明山古墳、同町大山9号墳などに近いものと考えられる。

群内での築造順は、さらに詳細な検討を加えなければならないが、3号墳は立地からみて1号墳に後続する点はまちがいない。また、3号墳第1主体部出土の高杯と、2号墳第2主体部出土の高杯とは形式的に差異を見いだせない。これらの点から、1号墳がまず築造され、続いて2号墳・3号墳が築造されたと考えられる。ただし、出土遺物からみて大きな時期幅は考えられず、極めて短期間のうちに造墓活動を終了したとみられる。

個々の古墳をみると、最大規模の1号墳が1墳1主体であるのに対し、2号墳・3号墳は多数埋葬である点が注目される。大規模な墳丘に1つの主体部というあり方は、弥栄町大田南2号墳と共通するあり方で、1号墳の被葬者を首長と考えることができる。2号墳は、2基の木棺直葬墓を計画的に配置している点が注目される。3号墳は、墳丘に限るならば、弥生時代の台状墓の延長上に位置づけることができ、視覚的な墳丘を持つ1・2号墳より従属的な階層が想定できる。特殊な構造をもつ主体部として、棺木口部分に石積み構造をもつ2号墳第2主体部が注目される。前期古墳の中で同様の構造をとるものは現在のところないが、峰山町カジャ古墳では棺木口の一方に石積みをもつ例が知られている。

丹後半島では前期後半以降、埴輪・葺石を完備した、大型前方後円墳(加悦町蛭子山古墳・網野町銚子山古墳・丹後町神明山古墳)や竪穴式石室を内部主体にもつ大型円墳、峰山町カジャ古墳など畿内の色彩を強く帯びた首長墓が相次いで築造される。その一方で、在地的要素の強い、中規模古墳も数例確認されている。例えば、加悦町加悦丸山古墳・同町愛宕山3号墳など、外表施設を完備せず、内部主体も在地的な箱式石棺や木棺直葬を採用する。通り古墳群の所在する竹野川上流域では、畿内的な大型墳の存在は確認されておらず、通り古墳群に後出する首長墓である大谷古墳もまた、鏡・玉・剣をもつものの箱式石棺を内部主体に採用する中規模円墳である。通り1号墳は、墳丘・主体部の規模をとればこれらの中規模古墳に劣るものではないが、副葬品という点で考えた場合、より下位にあると考えざるを得ない。また、鼓形器台を枕に転用している点、3号墳から低脚杯が出土していることなどから山陰地方との強いかわりが推測される。このような点から考えて、通り古墳群の被葬者は山陰地方との強いかわりの中で、勢力を持ちえた在地首長として評価することができよう。

土師製筒形容器を埋納する土坑には、伴出する土器がないため、その造営年代は明確ではない。土師製筒形容器は、杉原和雄氏の研究によれば、丹後半島で13世紀から14世紀後半の遺跡から出土することが多いとされている。試掘地から出土した土師皿がこの土坑に関連するものとすれば、土坑の年代は13世紀頃と考えられる。また、土坑の性格については、いわゆる経塚とする説、墳墓とそれに伴う副葬品埋納スペースと考える説があるが、今回調査した土坑は、埋土断面の状況・上部構造である集石が主土坑内に落ち込んでいる状況などからみて、主土坑内にはある一定時期、空間としての機能が備わっていたものと判断される。この空間は、棺もしくは櫃などが存在していた可能性を指摘できる。このように考えた場合、通り古墳群の土坑は墳墓であり、土師製筒形容器は墳墓に伴う副葬品などを収めた容器と考えることができよう。今後の類例の増加に期待したい。

(石崎善久)

注1 増田孝彦・三好博喜ほか「丹後国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987  
 増田孝彦・森 正・荒川 史ほか「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988  
 増田孝彦・中川和哉・荒川 史・森島康雄「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和63年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第34冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989

増田孝彦・石崎善久・岩松 保・森島康雄「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第39冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

増田孝彦・森 正・石崎善久・森島康雄「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第44冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

注2 調査参加者(順不同・敬称略)

昭和62年度

佐伯英樹・近藤浩一・三木英樹・中鼻新吾・大崎康文・松室孝樹・松井政子・丸山啓子・上田忠志・吉岡 博・松村重明・山副 同・川戸利雄・坪倉勇一・林栄三郎・吉村 保・吉岡輝男・谷口勝江

昭和63年度

吉岡英一郎・横井川博之・三好勝寛・藤田明弘・山本克則・藤原康生・稲岡淳之・下ノ村実・福山 誠・山崎 誠・笠原勝彦・三木英樹・中鼻新吾・井本有二・津金崇樹・岩崎浩一・赤川真弘・大西智也・黒田憲一・松井政子・三井小百合・千葉智子・松浦万弓・戸根説子・山野美奈子・坂井 晶・橋ますえ・田中由美・田中 正・高原与作・山副 同・坪倉勇一・上田忠志・吉岡 博・林栄三郎・川戸利雄・松田正行・吉村 保・山副武志・松村 仁・平林秀夫・吉岡 茂・森岡良策・吉岡富雄・山副登美夫・吉岡武彦・藤原忠雄・行待守夫・深田志郎・平林志げ子・平林好子・平林直美・林 初江・谷口勝江・小谷由利子・藤原恵子・森本須都子・後藤嘉一郎

平成3年度

下ノ村実・山本克則・藤原康生・木全邦之・高井朋樹・佐藤哲也・山本和之介・土田昌人・井上考司・前川 貢・西本健太郎・林 宏一・田中克憲・高原与作・平林秀夫・河戸久夫・松村仁・今西茂満・吉岡 茂・藤原義夫・米田武志・上田忠志・行待守夫・林栄三郎・山副武志・横島 迪・宅見千加・伊藤かおり・二ノ宮優子・平林直美・森野美智代・熊谷千代子・谷口勝江・安達久子・森戸寿美子・入江君子・林 初江・針尾紀子・丸谷はま子・北山貴美子・梅田重子・斉藤 優・中前幸子・杉原美加・林田登之・小椋博之・保坂 亨・大森 円・藤井路子・松村幸子・伊達佳代・田辺隆子・羽生夕紀子・林 祐子・土屋奈巳・山崎とも子・安田由美子・小笠原順子・田中熊治郎・本城義晴・永島俊夫・平井 均・長谷川ハナ・山本久枝・野川操・松田理一・本城智江子・小牧利男・糸井文雄・吉村行雄・鈴木 豊・山添 均・安田トメ・井通敏郎・吉岡喜三二・川竹庄吉・今西英二・田村文代

注3 現地調査ならびに本概報作成にあたって下記の方々からご指導・ご協力を得た。記して謝意を表します(順不同・敬称略)

都出比呂志・杉原和雄・今田昇一・大崎哲人・森下 衛・肥後弘幸・細川康晴・寒川 旭・長谷川 達・高野陽子

注4 釋 龍雄・林 和廣「奈具遺跡発掘調査報告書」(『弥栄町文化財発掘調査報告書』第1集

- 弥栄町教育委員会) 1972
- 注5 金村允人・杉原和雄「いもじや古墳・奈良岡遺跡発掘調査報告書」(『弥栄町文化財発掘調査報告書』第3集 弥栄町教育委員会) 1986
- 川西宏幸・山田邦和ほか「奈良岡遺跡発掘調査報告書」(財)古代学協会 1985
- 奥村清一郎・林日佐子「奈良岡遺跡第3次発掘調査報告書」(『弥栄町文化財発掘調査報告書』第4集 弥栄町教育委員会) 1986
- 注6 平良泰久「丹後竹野遺跡」(『京都府丹後町文化財調査報告書』第2集 丹後町教育委員会) 1983
- 注7 釋 龍雄ほか「途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書」(『峰山町文化財報告』第3集 峰山町教育委員会) 1977
- 注8 田中光浩ほか「扇谷遺跡発掘調査報告書」(『峰山町文化財報告』第10集 峰山町教育委員会) 1984
- 注9 岡田晃治・肥後弘幸・細川康晴ほか「国営農地開発事業関係遺跡昭和61年度発掘調査概要〔1〕帯城墳墓群Ⅱ」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』 京都府教育委員会) 1987
- 注10 田中光弘・林 和廣「七尾遺跡発掘調査報告書」(『峰山町文化財報告』第8集 峰山町教育委員会) 1982
- 注11 平良泰久・常磐井智行・黒田恭正ほか「丹後 大山墳墓群」(『丹後町文化財調査報告』第1集 丹後町教育委員会) 1983
- 注12 中谷雅治・杉原和雄ほか「坂野」(『弥栄町文化財発掘調査報告書』第2集 弥栄町教育委員会) 1979
- 注13 杉原和雄・坪倉利正ほか「カジヤ古墳発掘調査報告書」(『峰山町文化財報告』第1集 峰山町教育委員会) 1972
- 注14 西谷真治・置田雅昭「ニゴレ古墳」(『弥栄町文化財発掘調査報告書』第5集 弥栄町教育委員会) 1988
- 注15 増田孝彦・森 正ほか「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要 (1)高山古墳群・高山遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注16 増田孝彦・森 正ほか「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要 (3)新ヶ尾東古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注17 増田孝彦「丹後の古代鉄生産」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 注18 増田孝彦・三好博喜ほか「丹後国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注19 注18に同じ
- 注20 注18に同じ

- 注21 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981  
 田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ 平安学園考古学クラブ 1966
- 注22 中村 浩「陶邑」Ⅲ(『大阪府文化財調査報告』第30 大阪府教育委員会) 1978
- 注23 通り古墳群調査中に実施した分布調査により確認した。平坦面規模は10m×10m程度であり2基から構成される。丘陵先端に位置する台状墓から擬凹線と円形浮文をもつ壺(?)の口縁を表採している。
- 注24 小沢和義「神明山古墳実測調査報告」(『同志社考古』7 同志社大学考古学研究会) 1969  
 平良泰久ほか「丹後 大山墳墓群」(『丹後町文化財調査報告』第1集 丹後町教育委員会) 1983に神明山古墳前方部出土の土師器が掲載されている。
- 注25 広瀬和雄ほか「丹後地域の古式古墳」(『同志社考古』10 同志社大学考古学研究会) 1973
- 注26 注13に同じ
- 注27 奥村清一郎ほか「大谷古墳」(『大宮町文化財調査報告』第4集 大宮町教育委員会) 1987
- 注28 注14に同じ
- 注29 梅原末治「竹野村産土山古墳の調査(上)・(下)」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第20・21冊 京都府) 1931
- 注30 増田孝彦「丹後国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要 (1)有明古墳群・横穴群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注31 肥後弘幸「国営農地開発事業関係遺跡平成2年度発掘調査概要〔2〕左坂古墳群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』 京都府教育委員会) 1991
- 注32 岡田晃治ほか「帯城墳墓群発掘調査概要Ⅰ」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1985)』 京都府教育委員会) 1985  
 岡田晃治ほか「国営農地開発事業関係遺跡昭和61年度発掘調査概要〔1〕帯城墳墓群Ⅱ」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』 京都府教育委員会) 1987
- 注33 鈴木忠司ほか「京都府中郡大宮町小池古墳群」(『大宮町文化財調査報告』第3集 大宮町教育委員会) 1984
- 注34 弥栄町新ヶ尾東10号墳・同町遠所1・2・27・31号墳などが現在までに調査されている(増田孝彦「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要(3)新ヶ尾東古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988・遠所古墳群については本書で報告)。
- 注35 杉原和雄ほか「裏陰遺跡発掘調査概報」(『大宮町文化財調査報告』第1集 大宮町教育委員会) 1979
- 注36 岡田晃治ほか「国営農地開発事業関係遺跡昭和61年度発掘調査概要〔2〕太田鼻横穴群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』 京都府教育委員会) 1987
- 注37 注30に同じ
- 注38 竹原一彦「府営ほ場整備関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要 (1)正垣遺跡」(『京都府遺

- 跡調査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注39 藤原敏見「府営は場整備関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要 (2)谷内遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注40 梅原末治「大宮賣神社」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第5冊 京都府) 1931
- 注41 今田昇一「菅外遺跡発掘調査概報」Ⅲ(『大宮町文化財調査報告』第7集 大宮町教育委員会) 1991
- 注42 寒川 旭氏から、現地にて、この地震の痕跡は1927年の丹後大震災により生じたと考えてまちがいなく、通り古墳群の所在する丘陵の直下が震源地と考えられるとのご教示をいただいた。
- 注43 杉原和雄「京都府北部出土の土師製筒形容器とその伴出品」(『史想』第19号 京都教育大学考古学研究会) 1981
- 杉原和雄「経塚と墳墓—丹波・丹後を中心とした筒形容器出土の遺跡について—」(『考古学雑誌』第74巻第4号 日本考古学会) 1989



付 載

通り古墳群 2 号墳被葬者の遺存歯について

京都大学理学部自然人類学研究室

片山 一道

通り古墳群 2 号墳の第一主体部の墓壙中から発見された被葬者の遺存歯らしきものについての所見は、以下のようになる。

それらが確かに人の歯であることに相違ない。何個かの歯を含むが、残っているのは、いずれも歯冠だけか、歯冠の壊れた破片だけである。このように保存状態が極めて悪く、非常に脆いうえに外表を破損したりしているため、十分な肉眼観察もままならず、ましてや詳細な検査は望むべくもない。

残存するのは、小白歯が一個と三個分の大白歯の破片である。これらは下顎の右側歯列に並ぶ第二小白歯、第一大白歯、第二大白歯、第三大白歯のようである。しかし実際には、これら大白歯の破片は、一体何番目の大白歯に相当するのか、正確に歯種を同定することはできない。

小白歯は  $8 \times 8$  mm 程度の大きさで、古墳人としては中程度の大きさと言えよう。そして大ざっぱな計測が可能な 2 個の大白歯については、 $11 \times 11$  mm と  $11 \times 12$  mm 程度の大きさである。この 2 個の大白歯が、それぞれ第二大白歯と第一大白歯だとすれば、古墳人としてはやや大きめの値と言える。咬耗の程度は、第二小白歯では偏減りではあるが咬頭が相当にすり減った状態、大白歯では咬頭の大部分がすり減って象牙質が線状に露出した状態である。一般には古墳人の咬耗は弱く、したがって本被葬者の歯の咬耗は古墳人としては相当に進行した状態にあるとみなすことができるだろう。

これだけの材料だけでは、本被葬者の性別と死亡年齢について、何らかの確からしきで判断を下すことは難しい。しかし状況的には、大白歯の歯冠部分がやや大きめのことから、どちらかと言うと、男性である可能性のほうが高いようである。また死亡時の年齢は、第三大白歯が萌出していることから間違いなく成人段階にはあり、さらに歯冠の咬耗の進行程度を思料するに、熟年程度には達していた可能性がある。

1. The first part of the report discusses the current state of the world economy and the impact of the global financial crisis. It highlights the challenges faced by developing countries and the need for international cooperation to address these issues.

2. The second part of the report focuses on the role of the World Bank in providing financial assistance and technical support to member countries. It details the various programs and initiatives implemented by the Bank to promote economic growth and development.

3. The third part of the report examines the impact of the global financial crisis on the world economy and the role of the World Bank in addressing these challenges. It discusses the need for a coordinated response and the importance of maintaining financial stability.

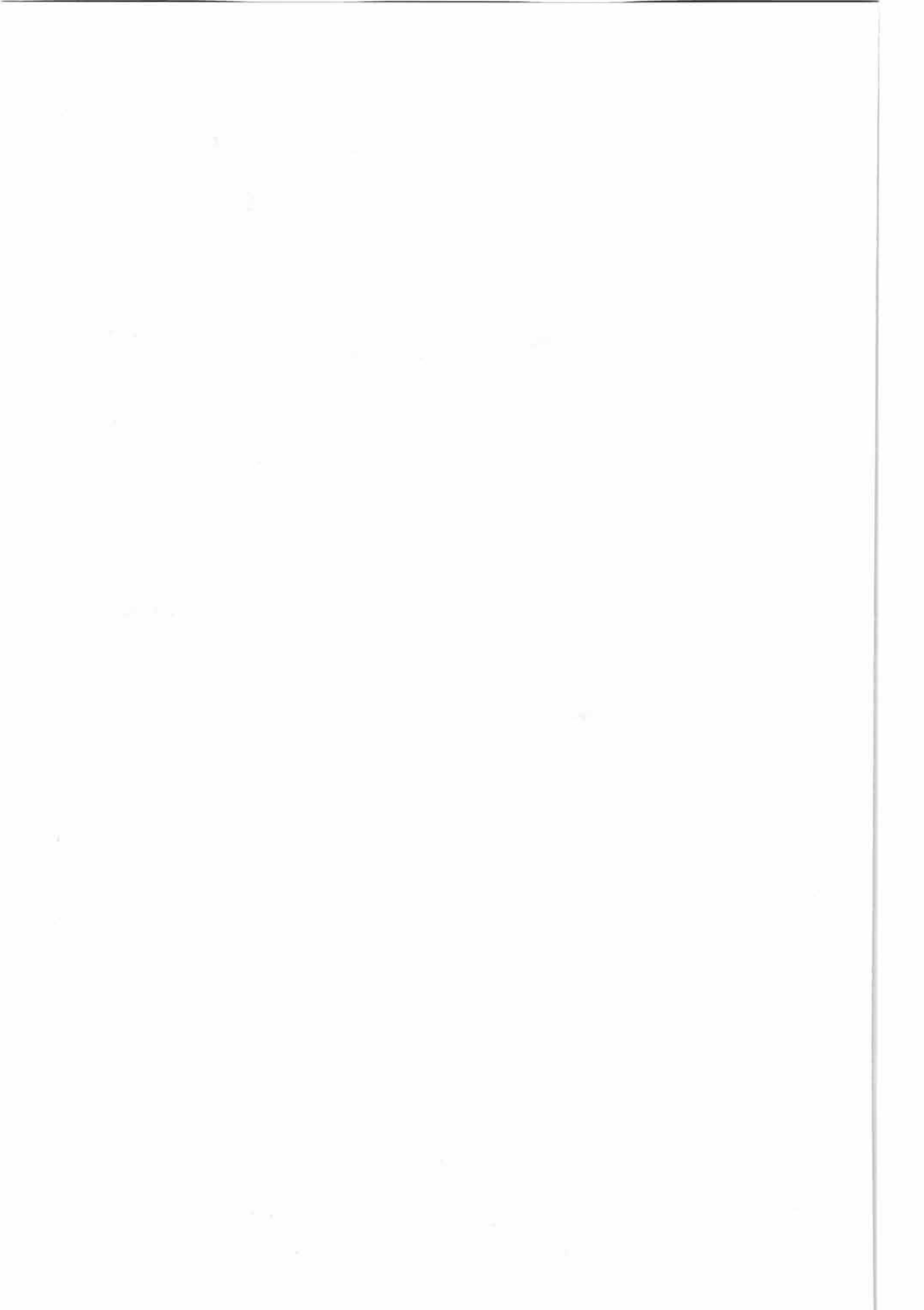
4. The fourth part of the report discusses the World Bank's efforts to support sustainable development and poverty reduction. It highlights the Bank's commitment to promoting economic growth, social inclusion, and environmental sustainability.

5. The fifth part of the report provides a summary of the World Bank's activities and achievements over the past year. It also outlines the Bank's future priorities and the challenges it faces in the coming years.

6. The sixth part of the report discusses the World Bank's relationship with its member countries and the international community. It highlights the Bank's commitment to transparency, accountability, and good governance.

7. The seventh part of the report provides a concluding statement and a call to action. It emphasizes the need for continued international cooperation and the role of the World Bank in promoting a more inclusive and sustainable world economy.

# 版 圖



図版第1 遠所古墳群



遠所古墳群空中写真（北西から）

図版第2 遠所古墳群



遠所古墳群空中写真（西から）

図版第3 遠所古墳群



(1) 遠所1・2・3号墳調査前全景（南から）



(2) 遠所1号墳天井石落ち込み状況（南から）

図版第4 遠所古墳群



(1) 1号墳石室全景 (南から)



(2) 遠所1号墳奥壁北東角細部 (南東から)





(1) 遠所1号墳丘東側盛り土中遺物出土状況(西から)



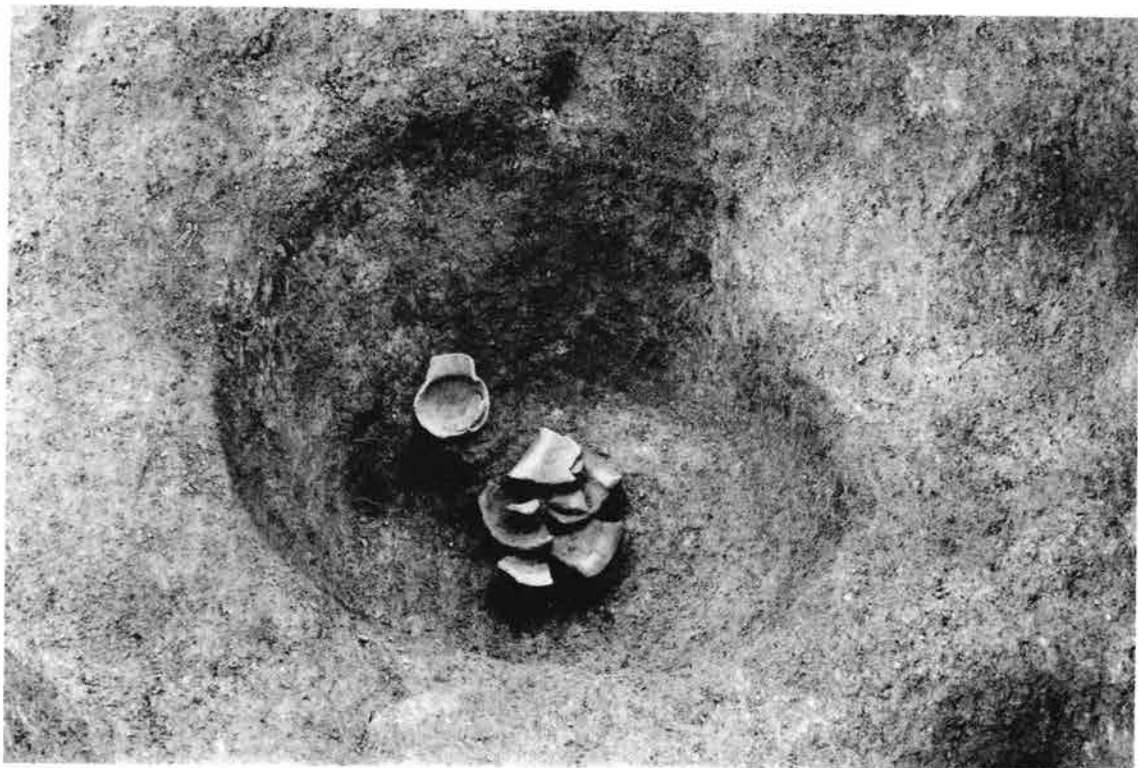
(2) 遠所1号墳西側溝全景(南から)



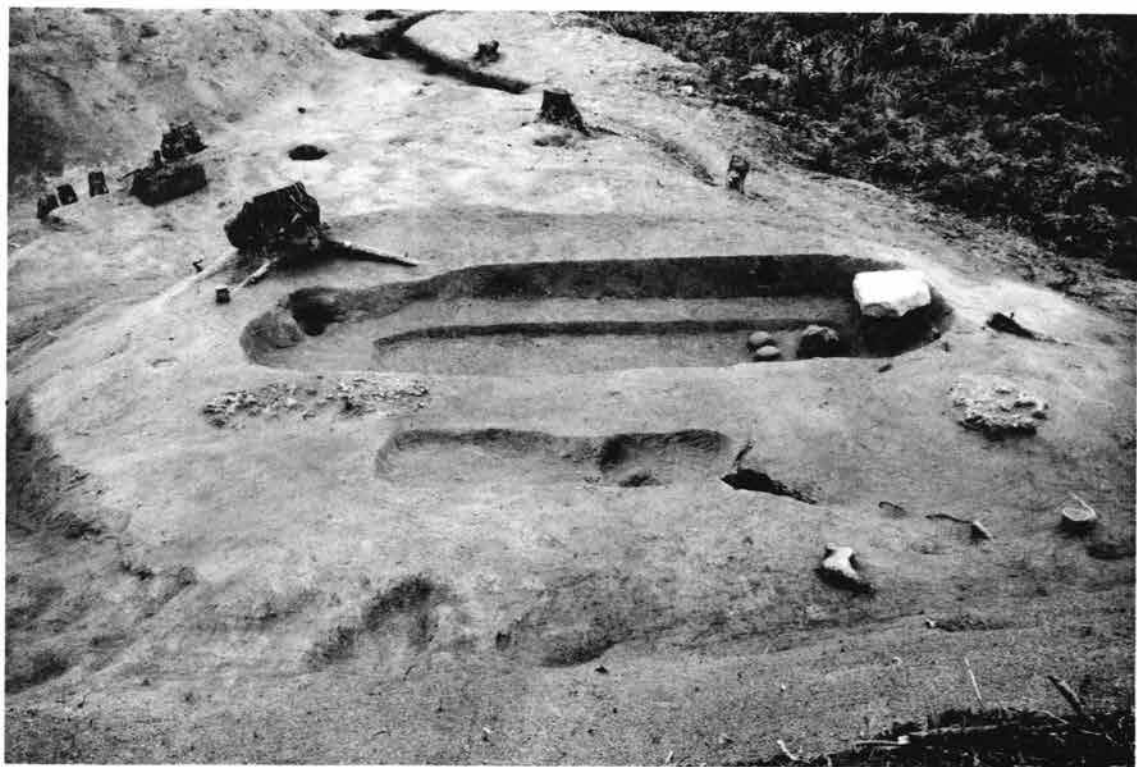
(1) 遠所2号墳石室全景(南から)



(2) 遠所2号墳遺物出土状況(南から)



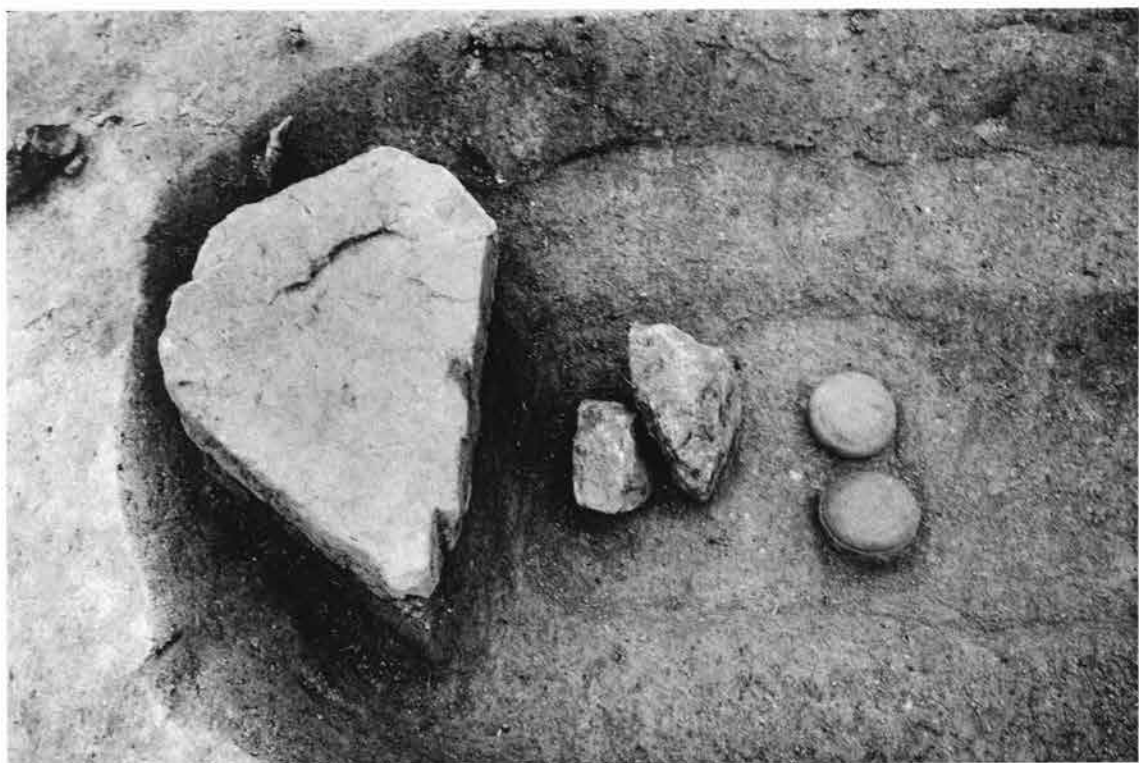
(1) 遠所2号墳墳丘南側裾土坑遺物出土状況(南から)



(2) 遠所3号墳第1・2主体部全景(北西から)



(1) 遠所3号墳主体部全景（北東から）



(2) 遠所3号墳転用枕出土状況（南東から）

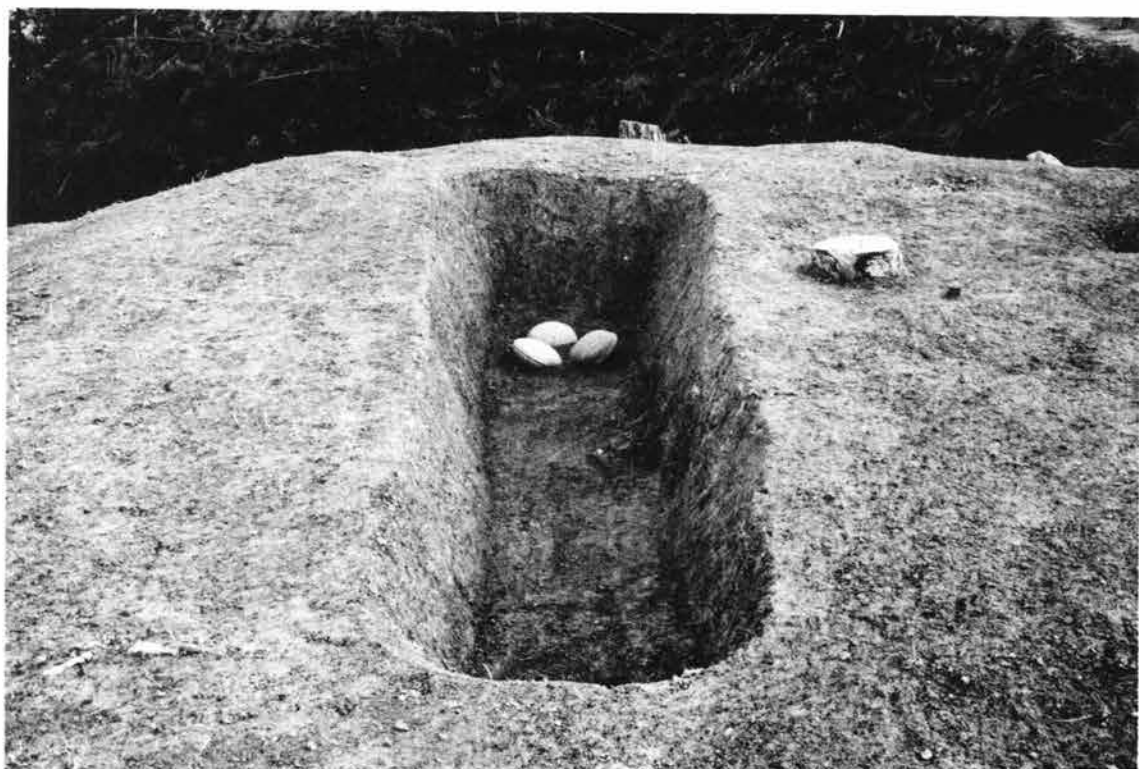
図版第9 遠所古墳群



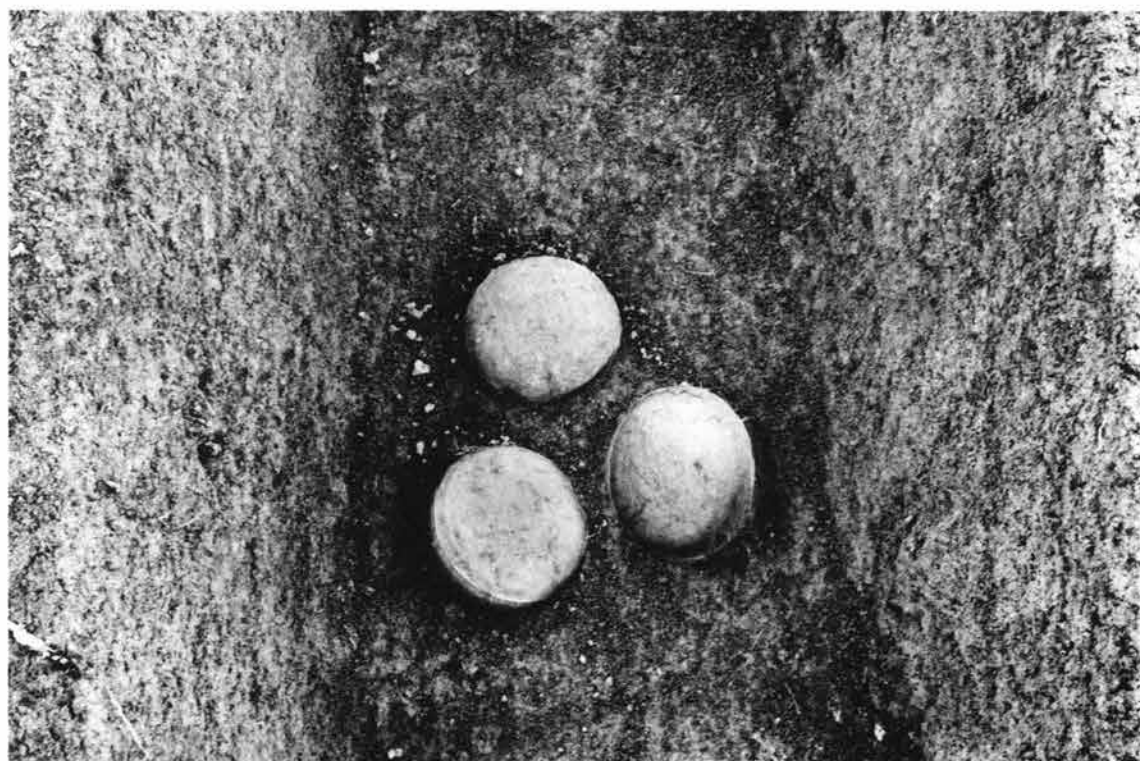
(1) 遠所4・5・6・7号墳調査前全景(南西から)



(2) 遠所4・5号墳全景(西から)



(1) 遠所4号墳主体部全景(北東から)



(2) 遠所4号墳転用枕出土状況(北東から)



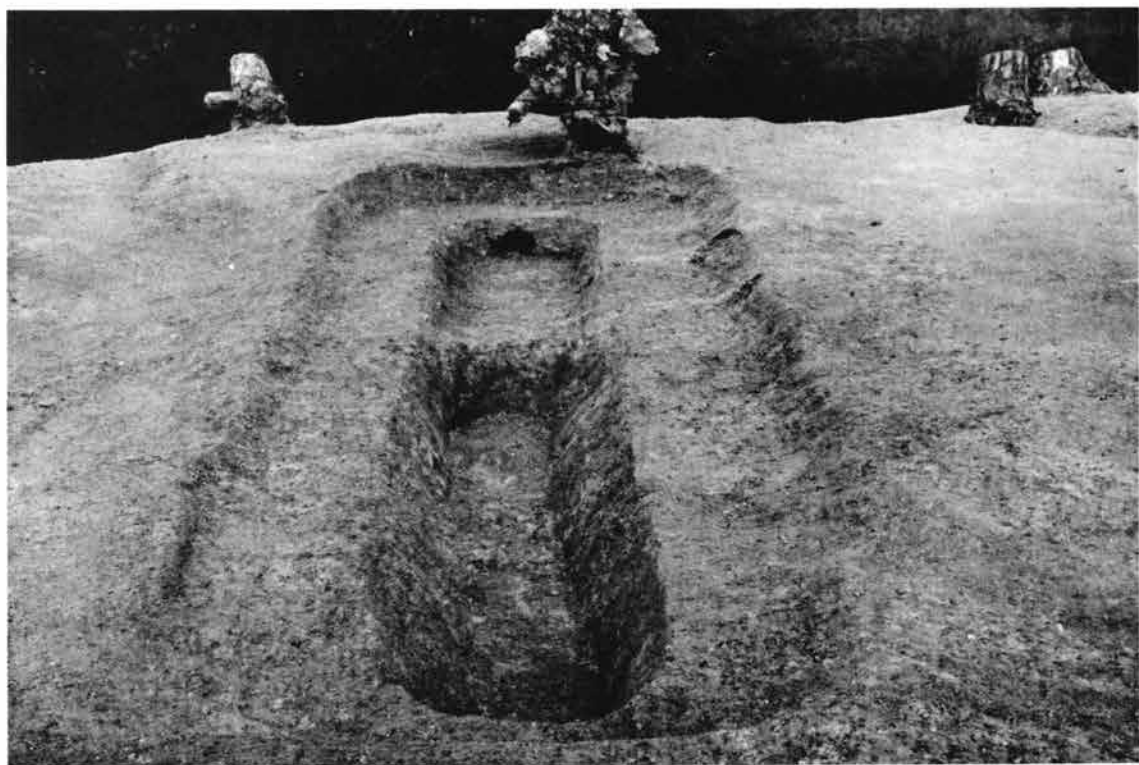
(1) 遠所4号墳溝全景(南から)



(2) 遠所5号墳主体部全景(北東から)



(1) 遠所8・9・13号墳調査前全景（南西から）

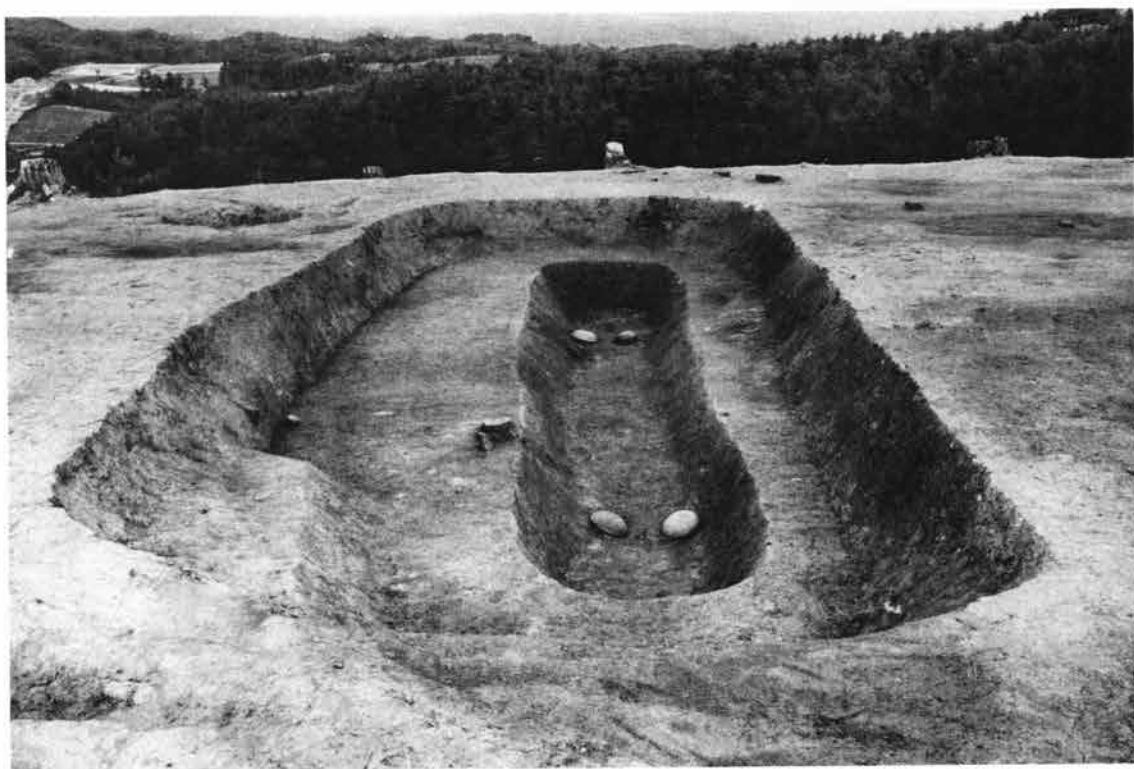


(2) 遠所8号墳主体部全景（北東から）





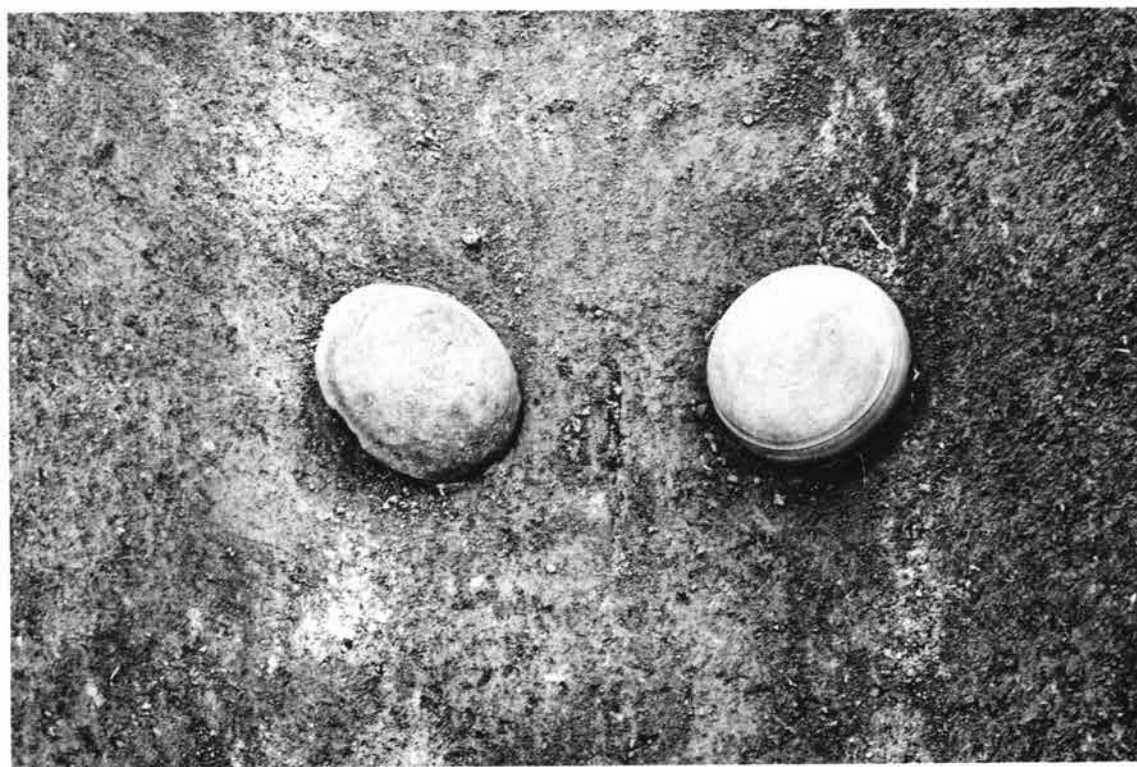
(1) 遠所9号墳調査前全景（南西から）



(2) 遠所9号墳主体部全景（西から）



(1) 遠所9号墳遺物出土状況（西から）



(2) 遠所古墳群遺物出土状況（西から）

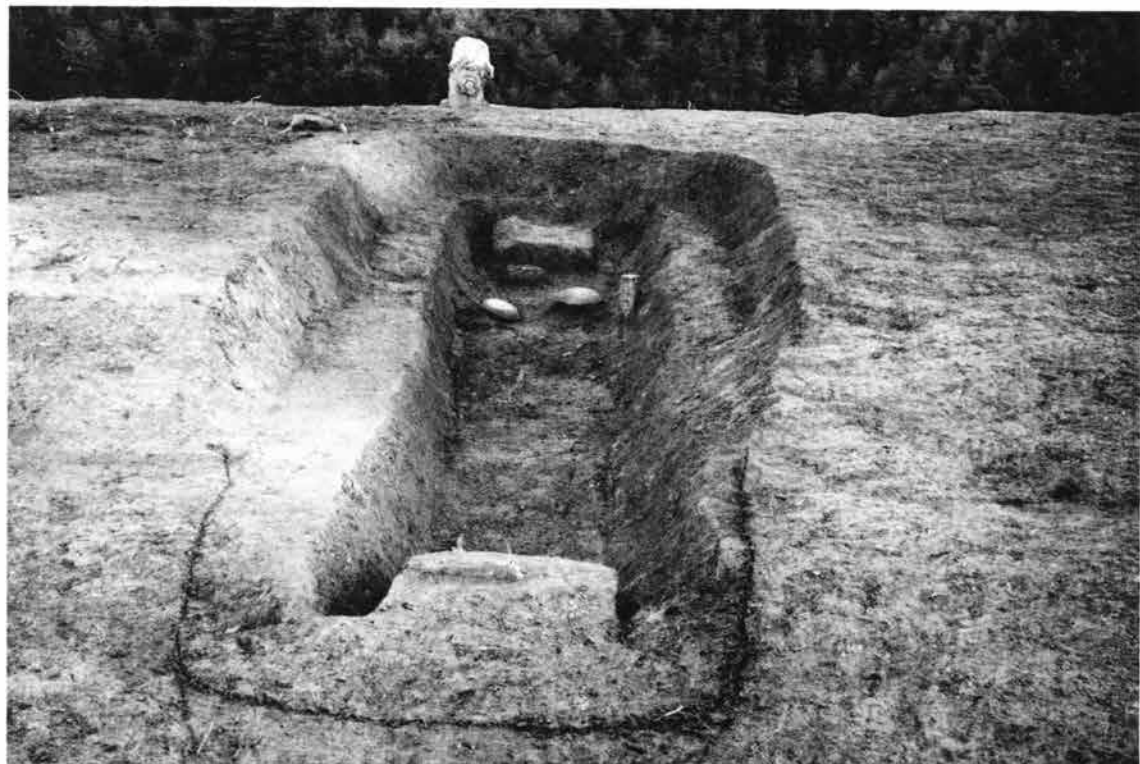


(1) 遠所9・13号墳調査前全景（南から）



(2) 遠所13号墳主体部全景（西から）

図版第16 遠所古墳群

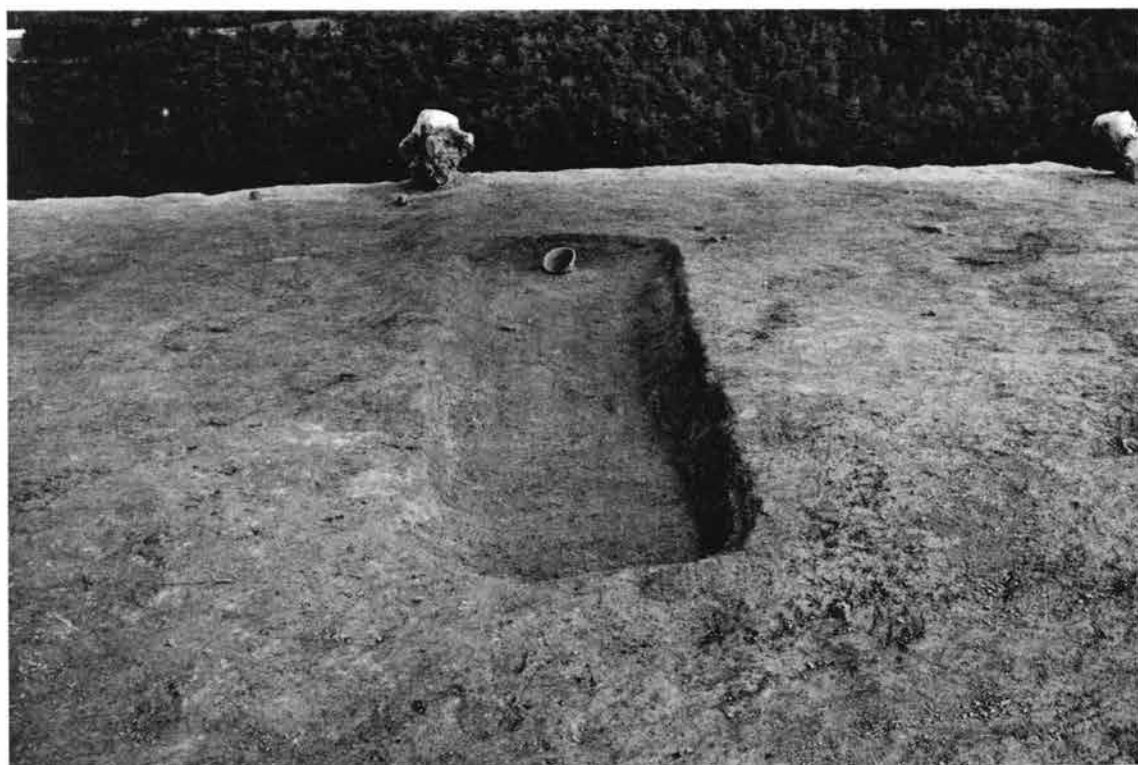


(1) 遠所13号墳主体部全景（北西から）

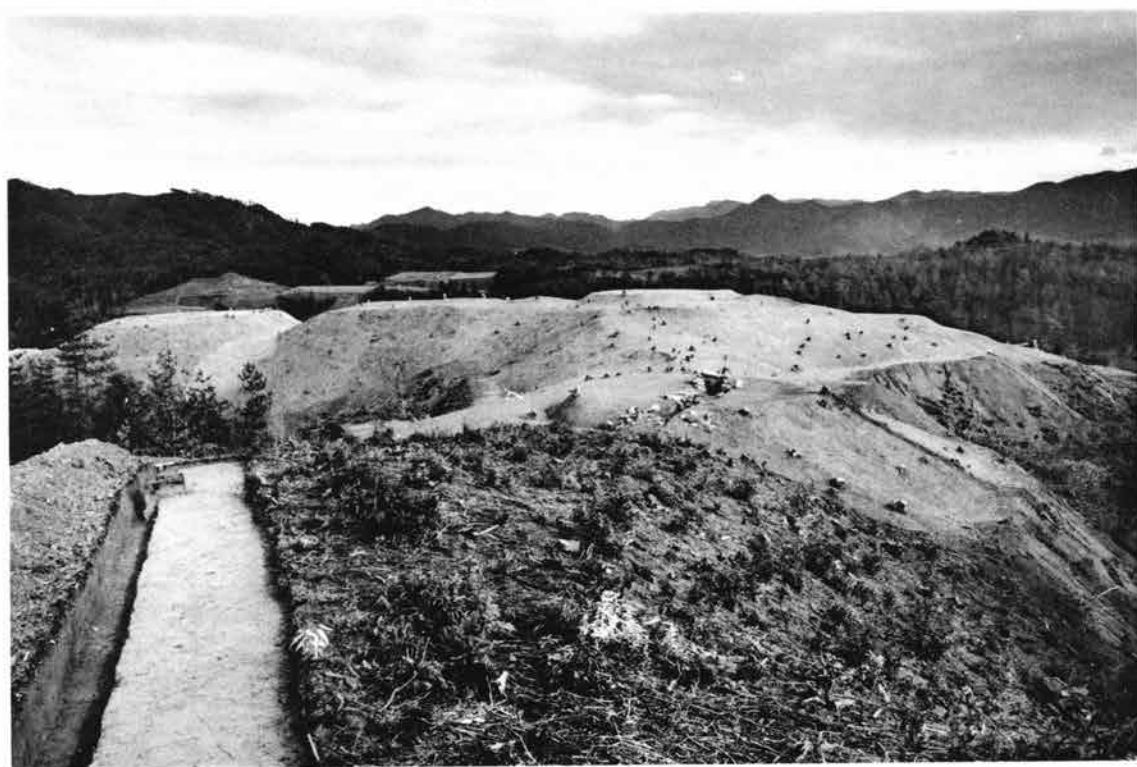


(2) 遠所13号墳北西側小口部分遺物出土状況（北西から）

図版第17 遠所古墳群



(1) 遠所13号墳第2主体部全景 (西から)



(2) 遠所9・13・15・23・24・25・26・27・28号墳全景 (西から)



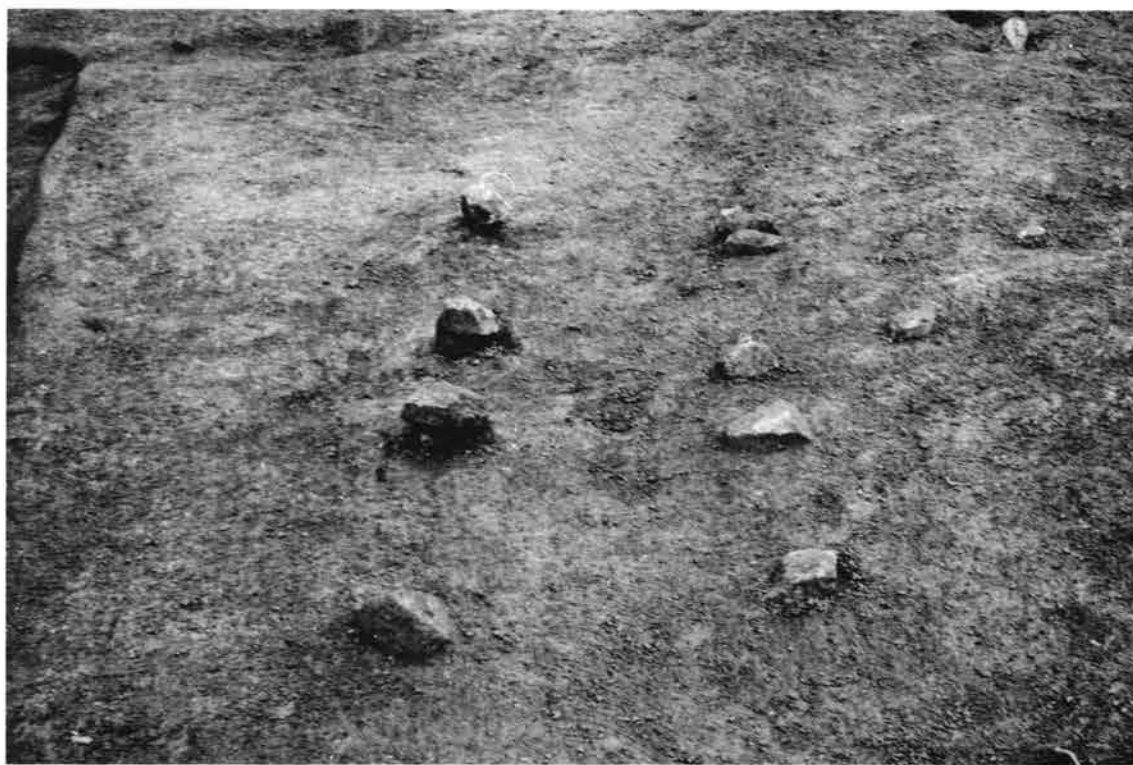
(1) 遠所16・17・18号墳調査前全景（西から）



(2) 遠所16号墳主体部石列全景（南東から）



(1) 遠所16号墳主体部遺物出土状況(南西から)



(2) 遠所16号墳石列全景(南から)



(1) 遠所17・18・19号墳調査前全景（北東から）



(2) 遠所18号墳主体部全景（南東から）

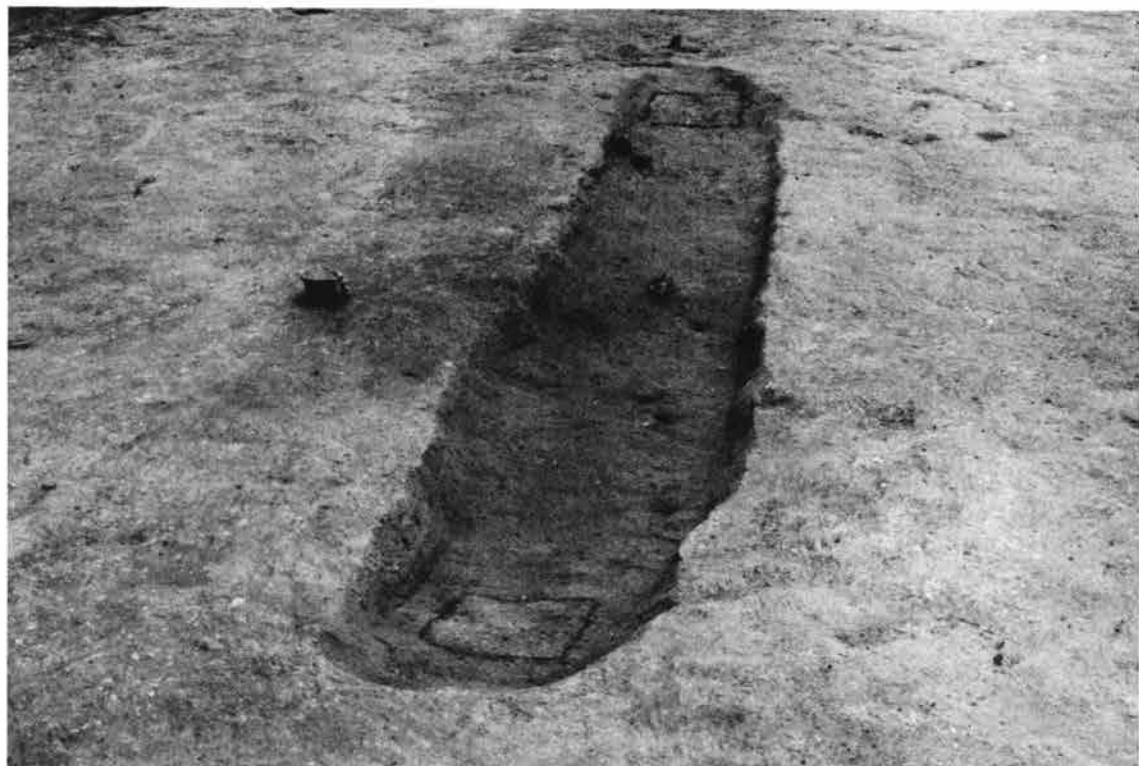




(1) 遠所18号墳遺物出土状況（西から）



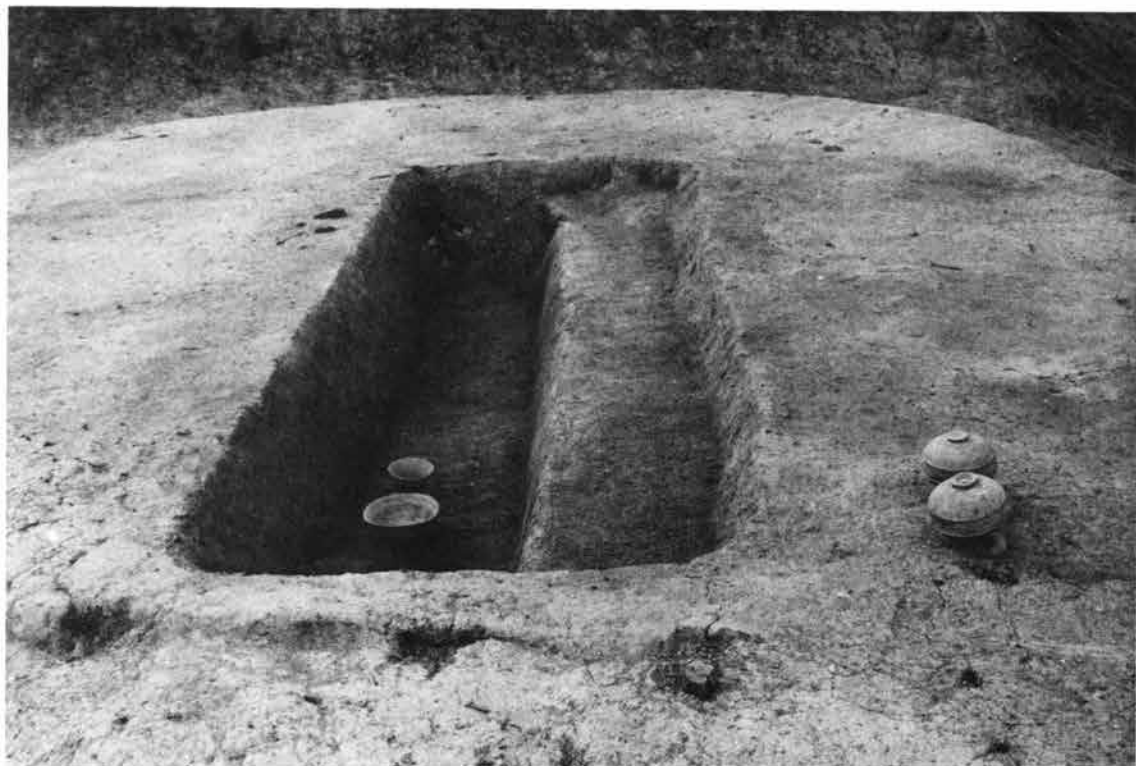
(2) 遠所18号墳遺物出土状況（北東から）



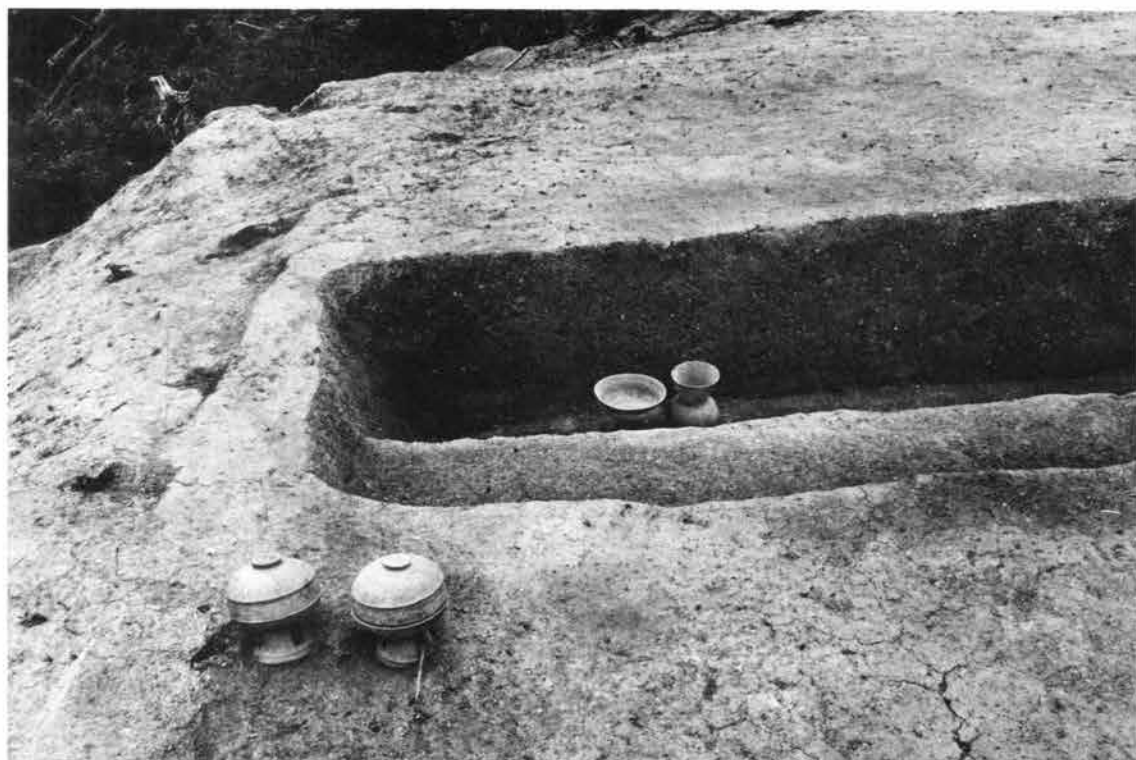
(1) 遠所19号墳主体部全景（西から）



(2) 遠所16・17・18・19・20・21号墳全景（北西から）



(1) 遠所21号墳主体部全景（北西から）



(2) 遠所21号墳遺物出土状況（北東から）



(1) 遠所21号墳墓城内遺物出土状況（北から）



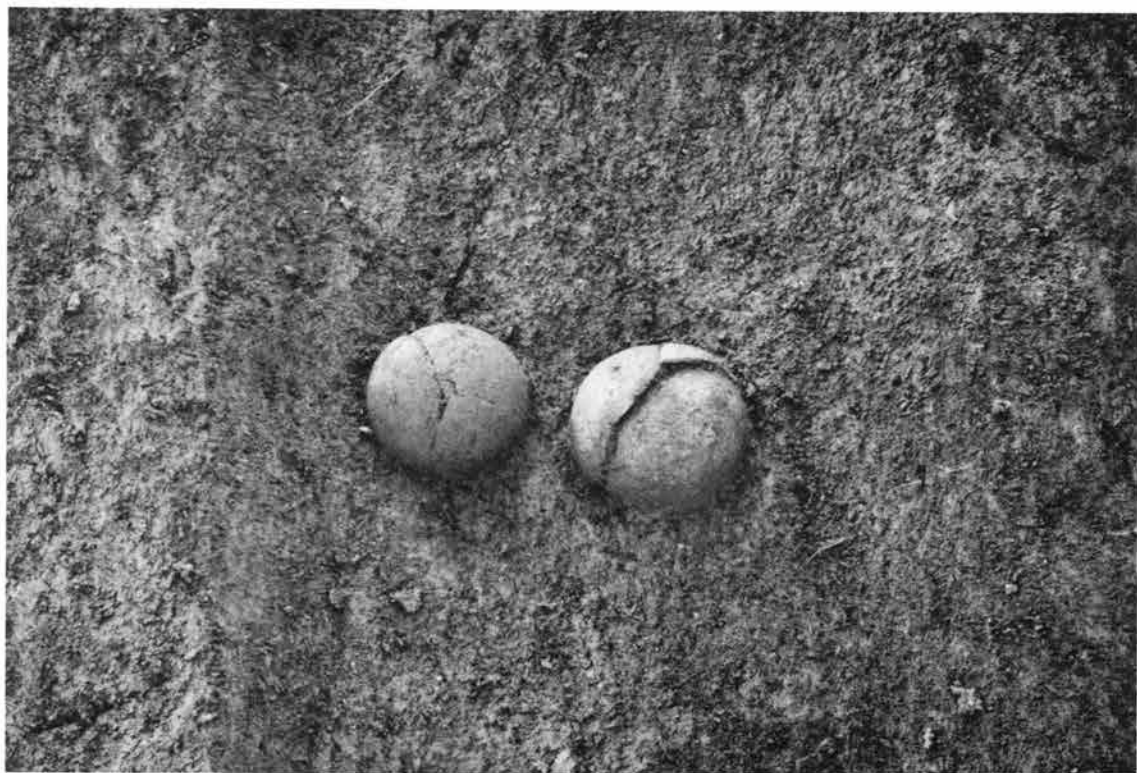
(2) 遠所22号墳主体部全景（南西から）



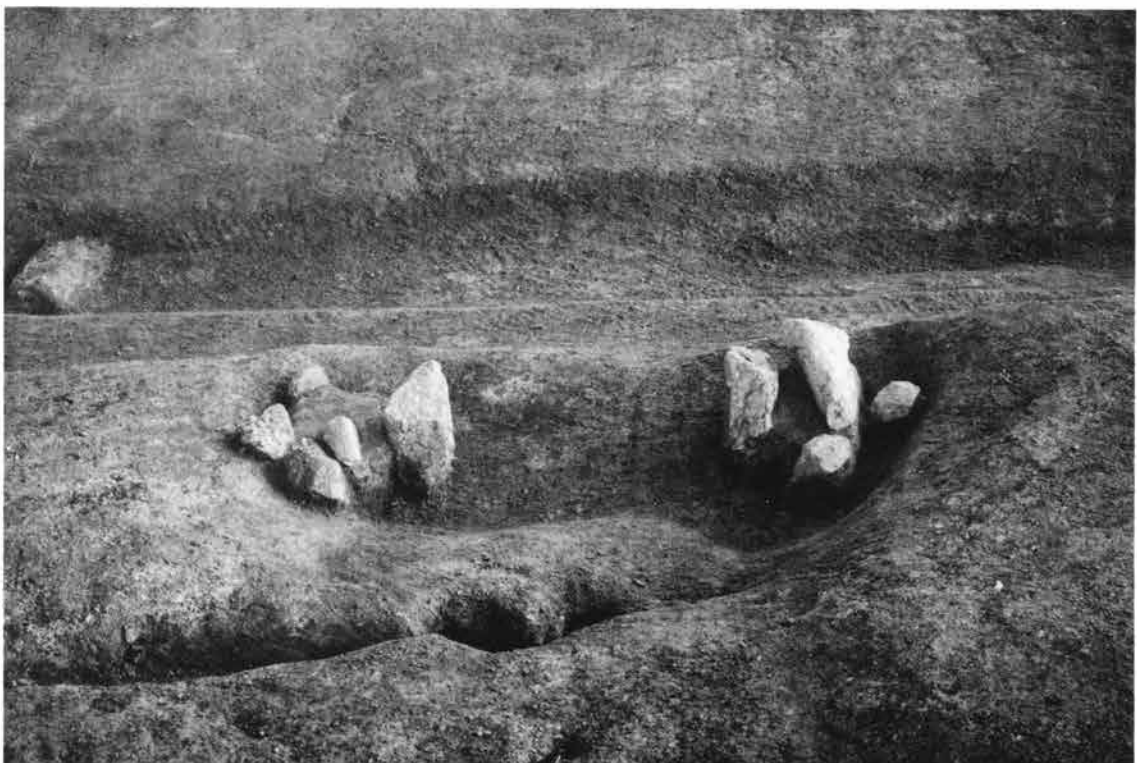
(1) 遠所16～22号墳全景（西から）



(2) 遠所24号墳第1・2主体部全景（東から）



(1) 遠所24号墳第1主体部土師器転用枕出土状況（東から）



(2) 遠所24号墳第2主体部全景（北から）



(1) 遠所27・28・29・30号墳調査前全景（東から）



(2) 遠所26・27号墳全景（東から）



(1) 遠所27号墳石室全景（西から）



(2) 遠所27号墳墳丘斜面石材散乱状況（西から）





(1) 遠所27号墳石室全景（西から）



(2) 遠所27号墳石室全景（西から）



(1) 遠所27号墳小口部閉塞状況（東から）



(2) 遠所27号墳閉塞状況（西から）



(1) 遠所27号墳遺物出土状況（北から）



(2) 遠所27号墳奥壁付近遺物出土状況（南西から）



(1) 遠所31号墳石室全景 (西から)



(2) 遠所31号墳溝全景 (南東から)



(1) 遠所31号墳小口部分 (北から)



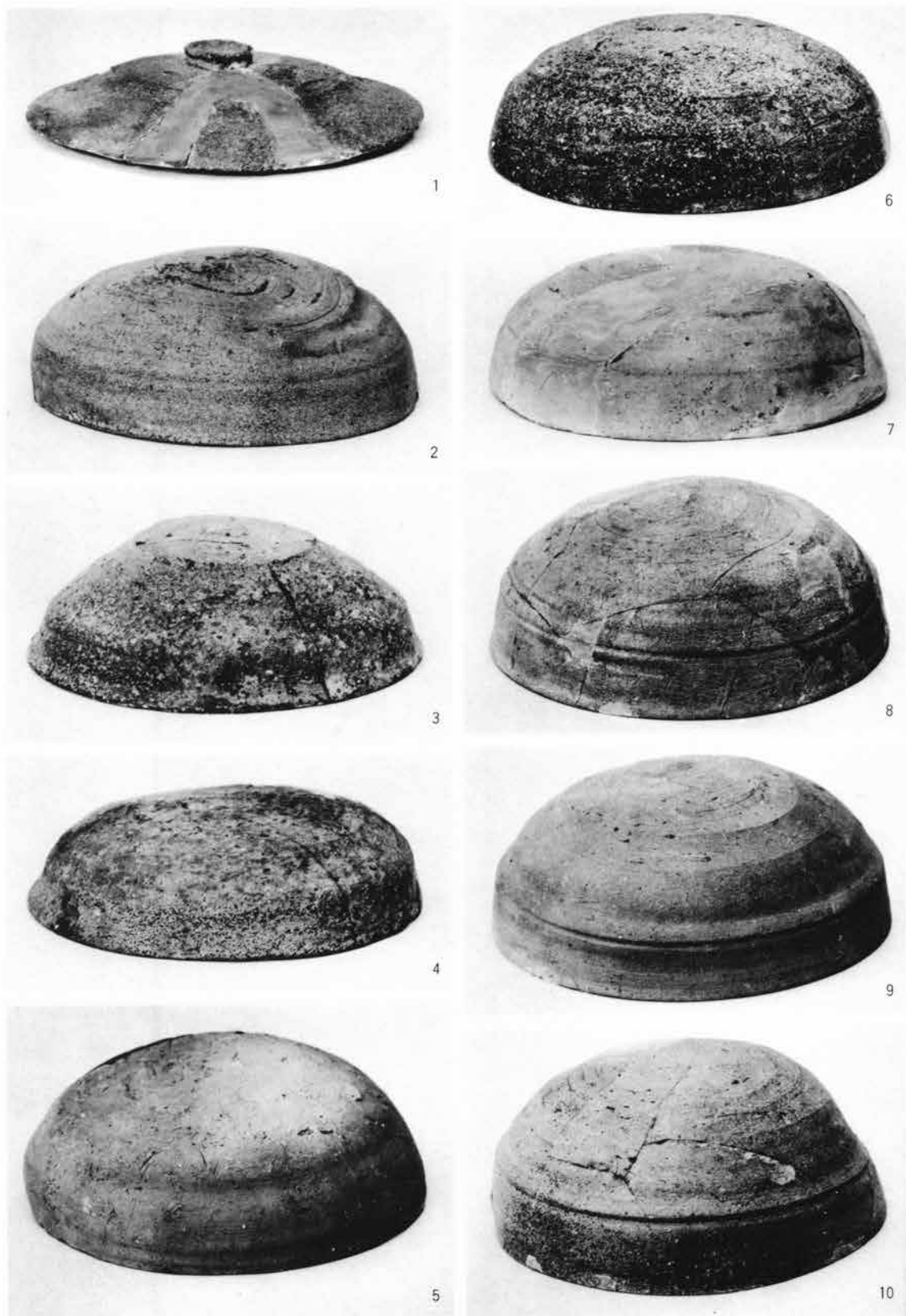
(2) 遠所31号墳奥壁付近遺物出土状況 (南西から)



(1) 遠所31号墳全景（北西から）



(2) 遠所31号墳石材検出状況（南東から）



出土遺物(1) 1号墳







1



3



2



4



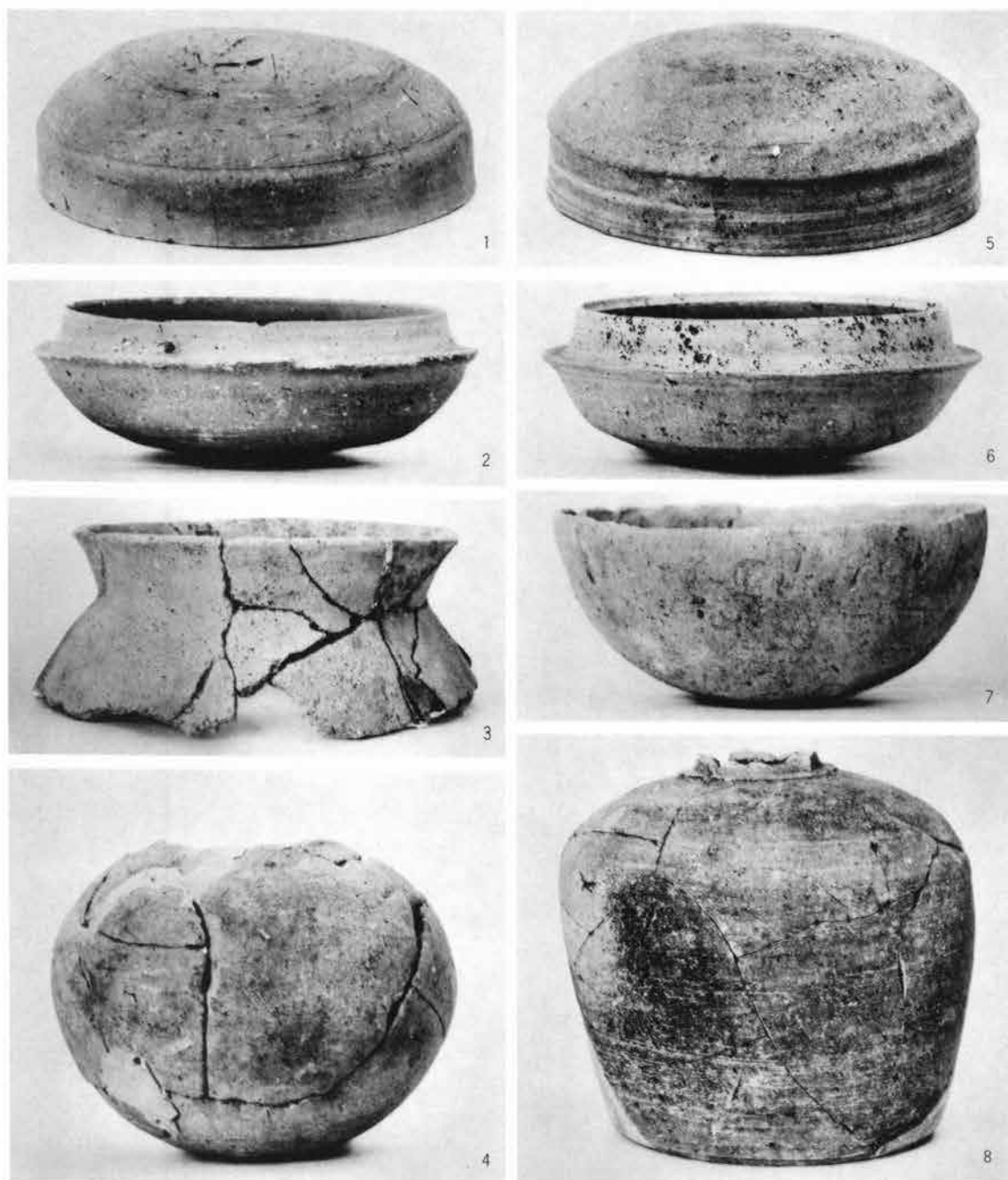
5



出土遺物(4) 2号墳



出土遺物(5) (1. 5号墳, 2. 8号墳, 3~8. 2号墳)



出土遺物(6) 1~4. 3号墳, 5~8. 4号墳



出土遺物(7) 1~6. 21号墳

図版第42 遠所古墳群



出土遺物(8) 1・2. 24号墳, 3~7. 9号墳





1



4



2



5



3



6



7



10



8



11

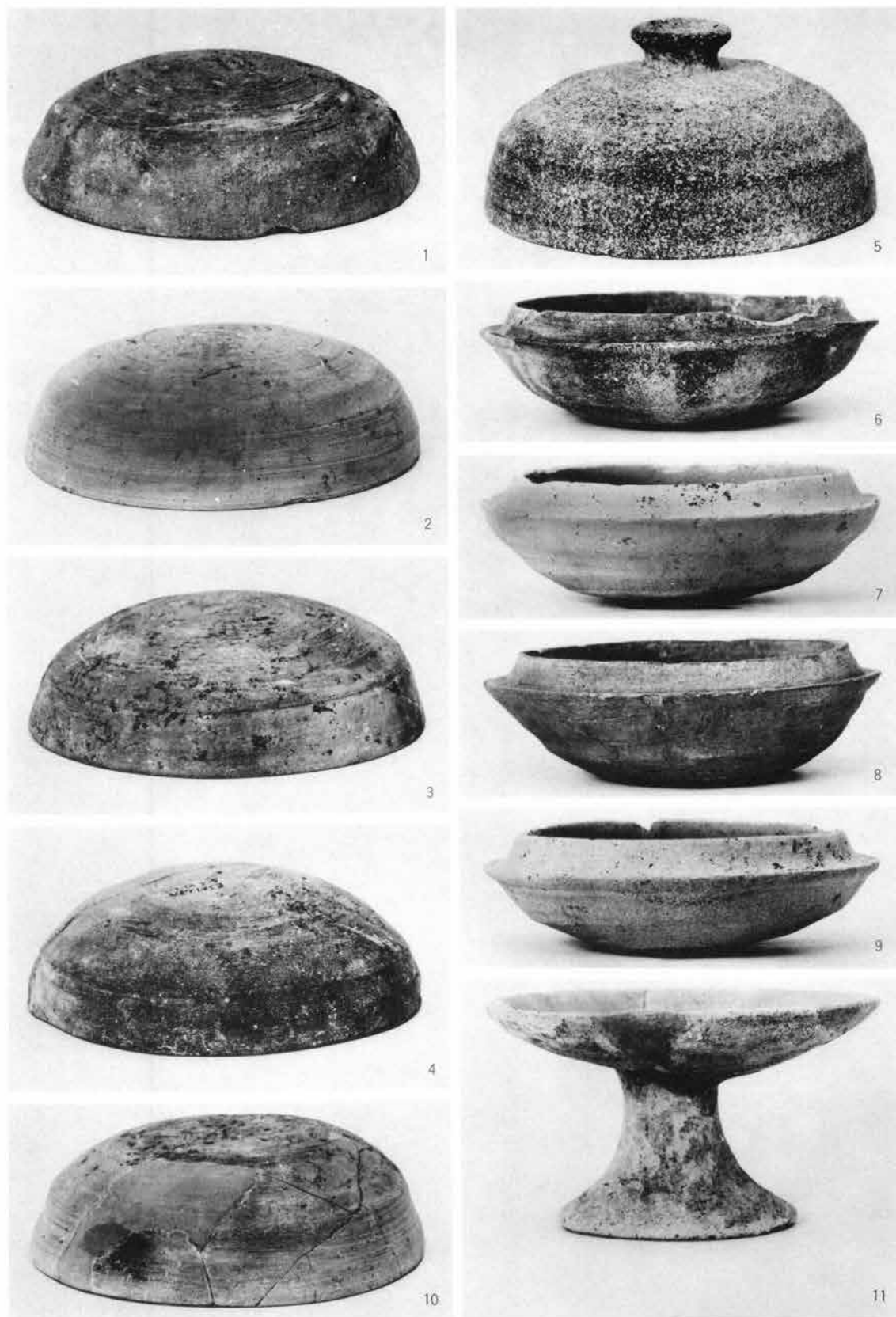


9

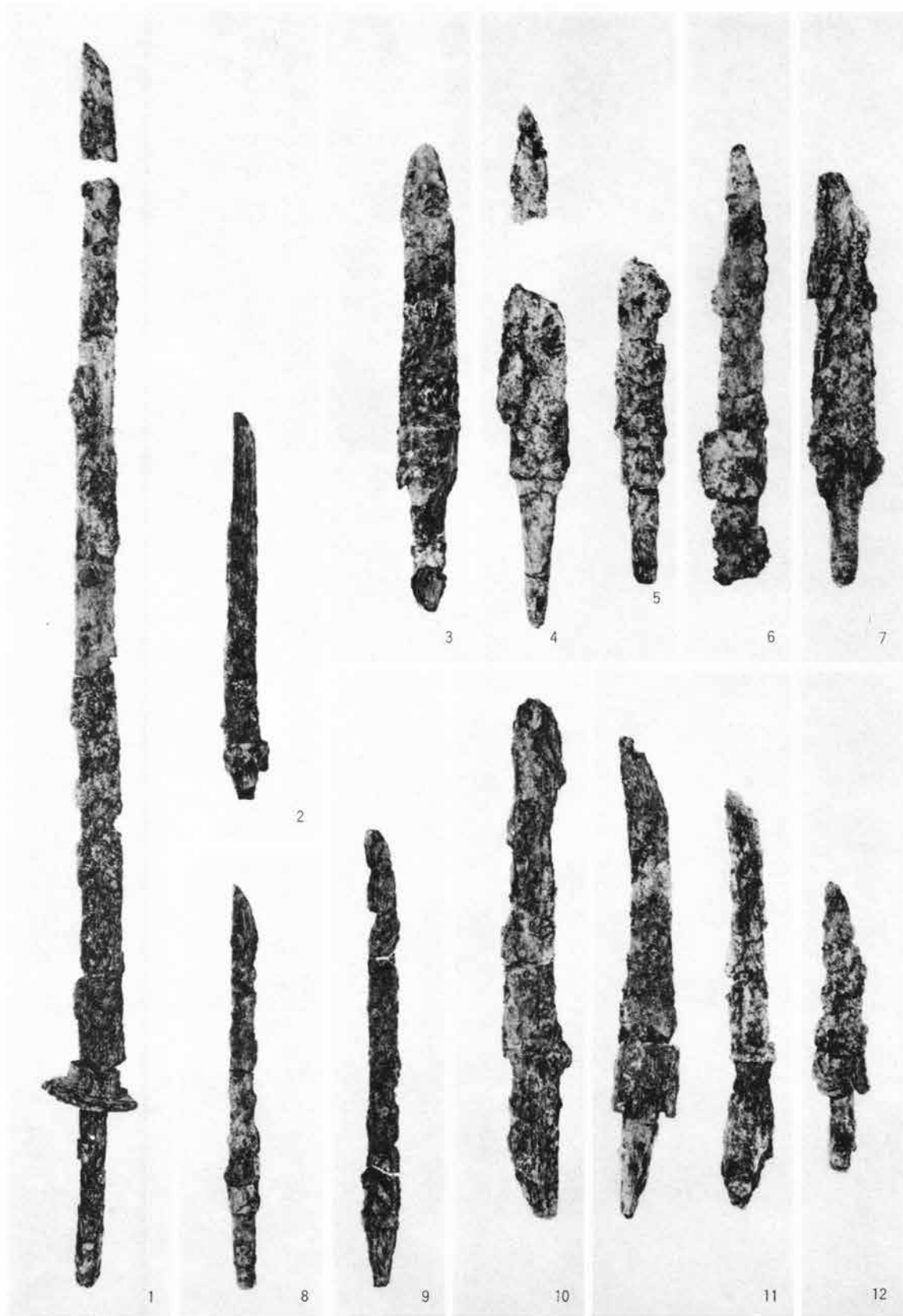


12

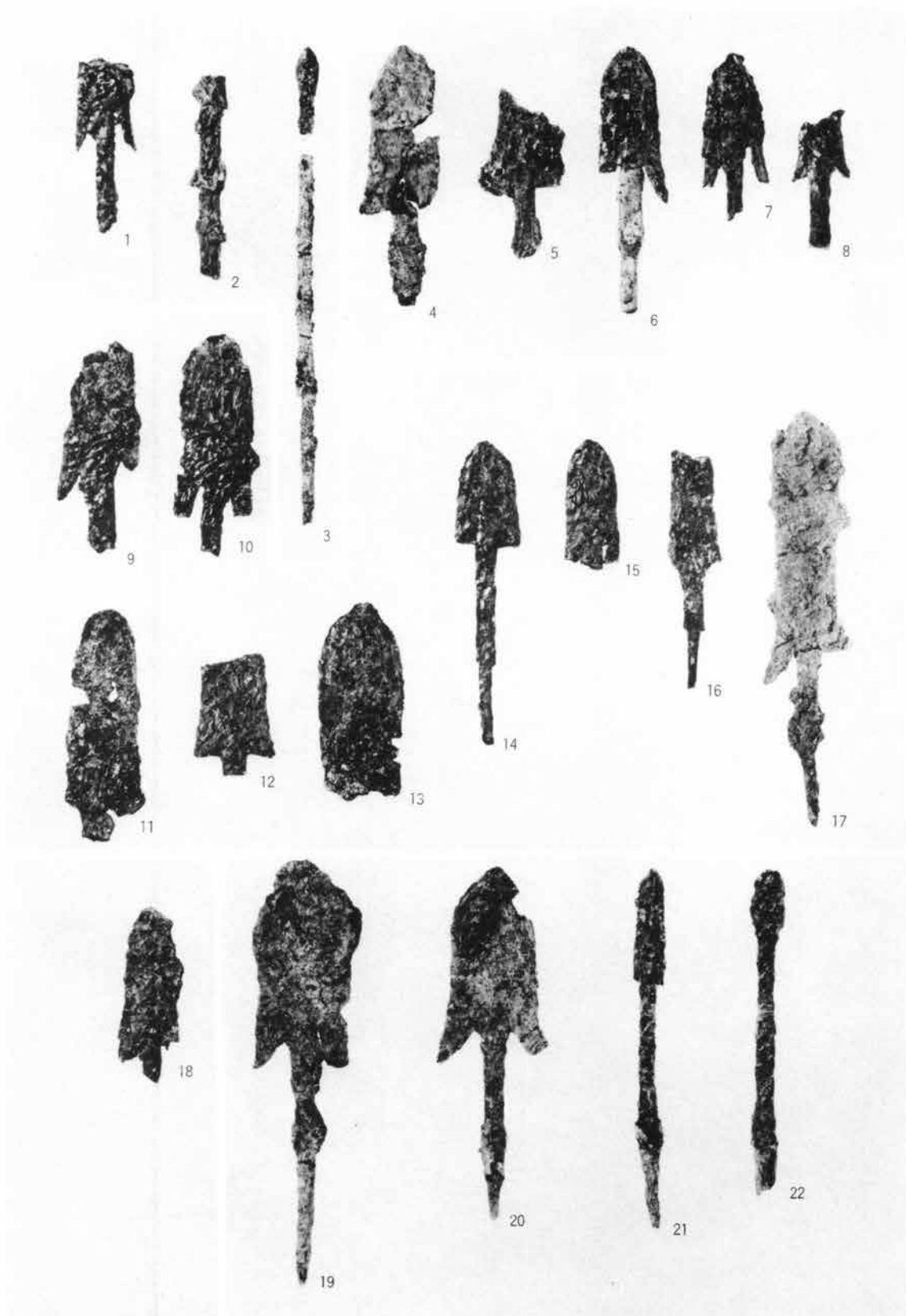




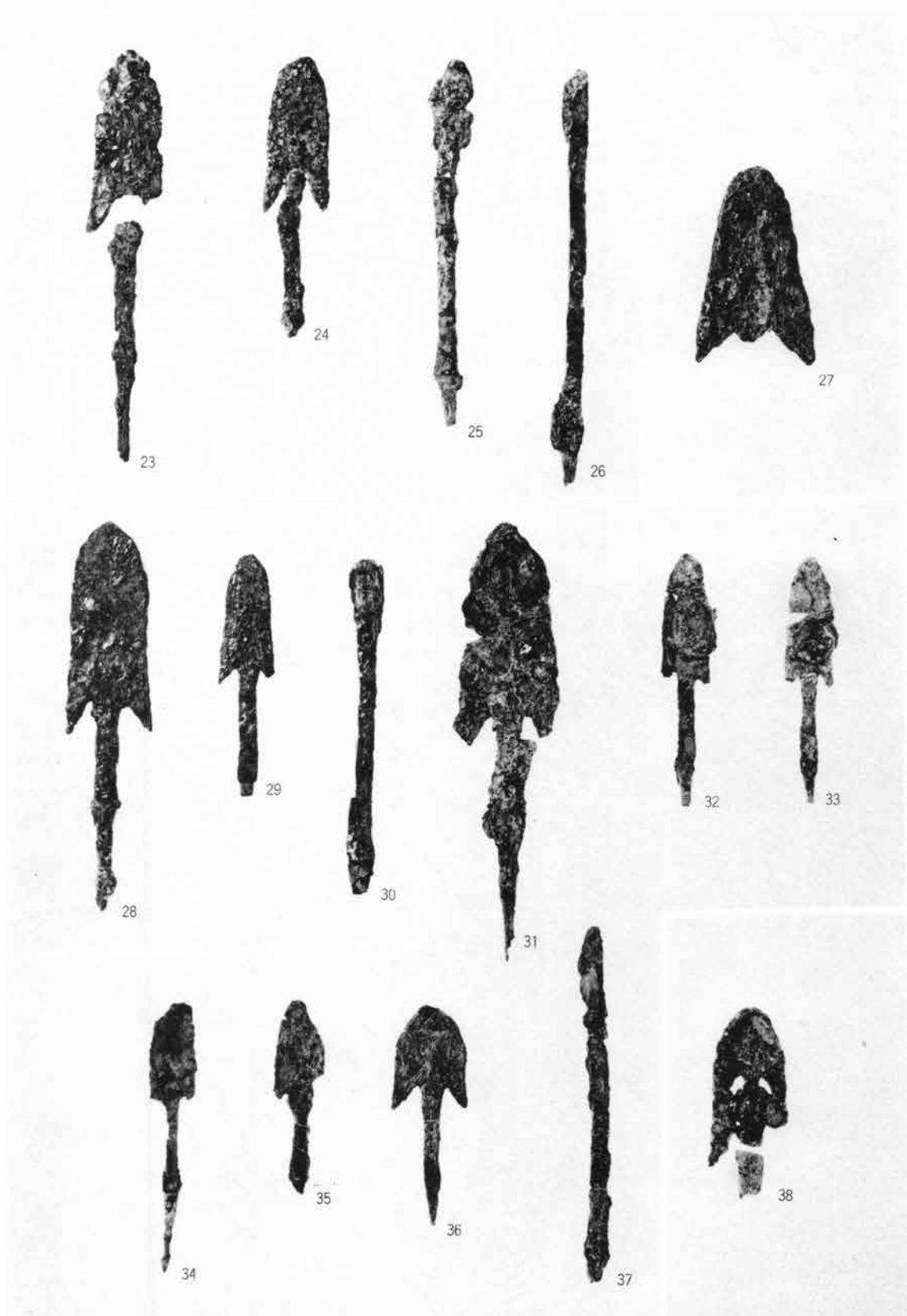
出土遺物(11) 1~9. 27号墳, 10・11. 32号墳



出土遺物(12) 27号墳 1・2・27, 5号墳 3, 9号墳 4・5, 13号墳 6, 16号墳 7,  
18号墳 8, 19号墳 9, 24号墳 10, 31号墳 12



出土遺物(13) 1号墳 1~3, 2号墳 4~8, 27号墳 9~16, 31号墳 17,  
9号墳 18, 13号墳 19~22



出土遺物(14) 16号墳 23~26, 18号墳 27~30, 19号墳 31~37, 24号墳 38



1



2



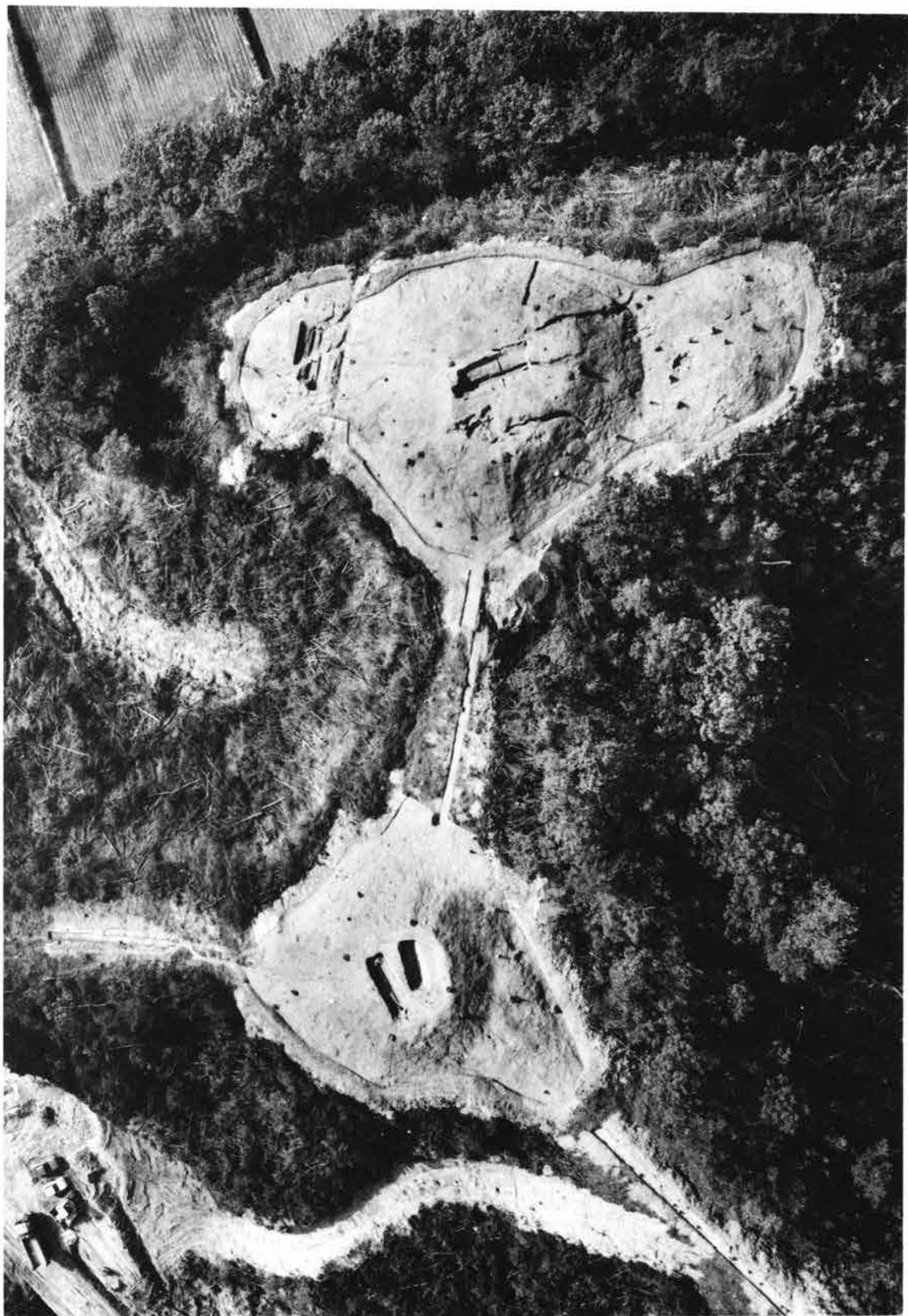
出土遺物(16) 玉類 1. 16号墳, 2. 2号墳, 3. 5号墳, 4. 27号墳



(1) 太田5・6・7号墳試掘状況(南西から)



(2) 太田7号墳近景(南西から)



古墳群全景（上空から）





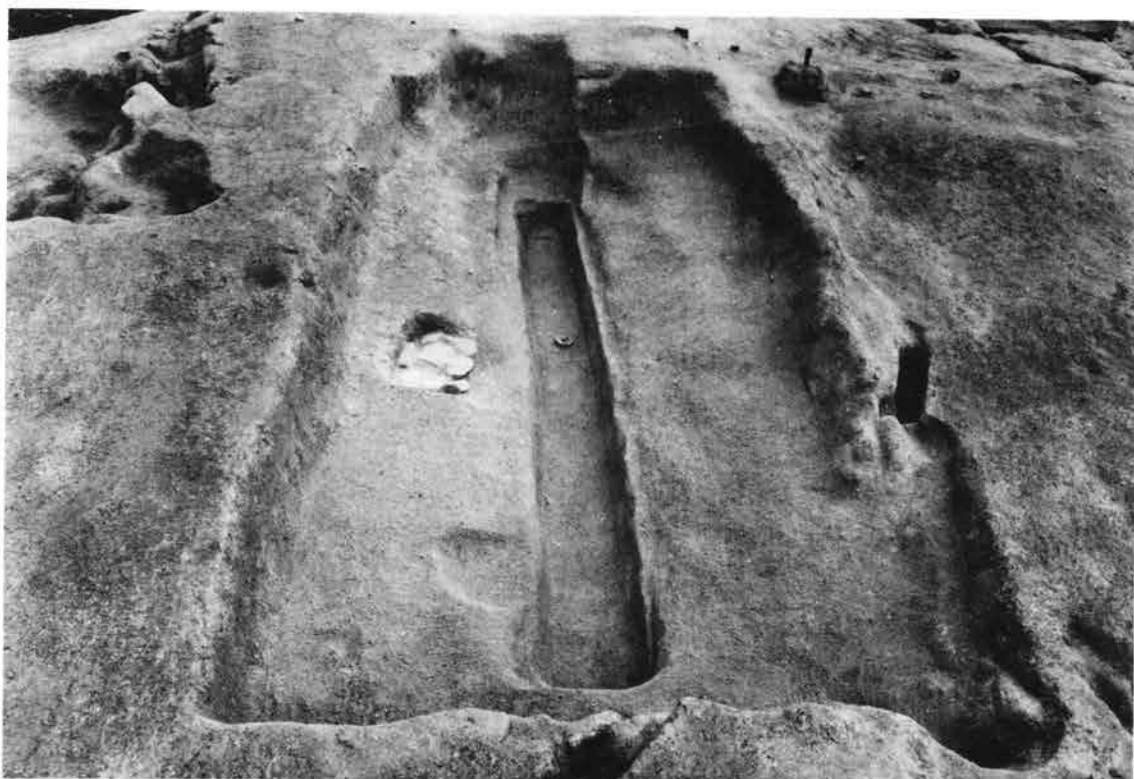
古墳群全景（西から）



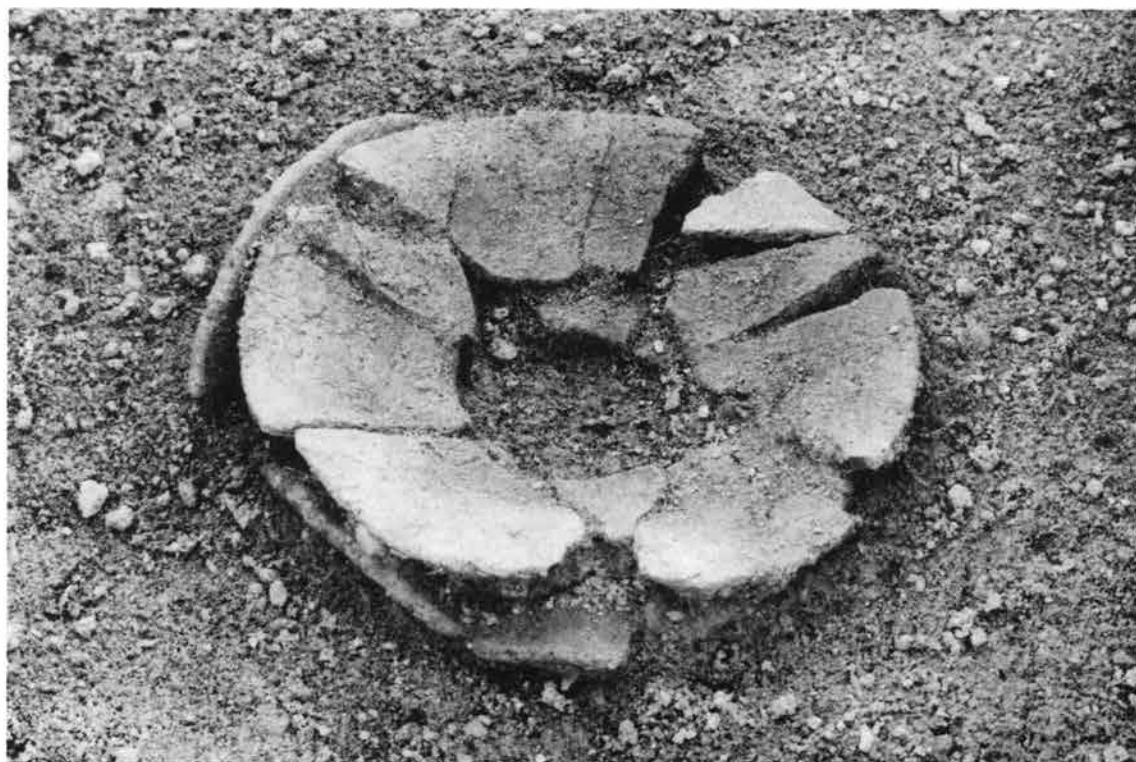
(1) 1号墳調査前全景（東から）



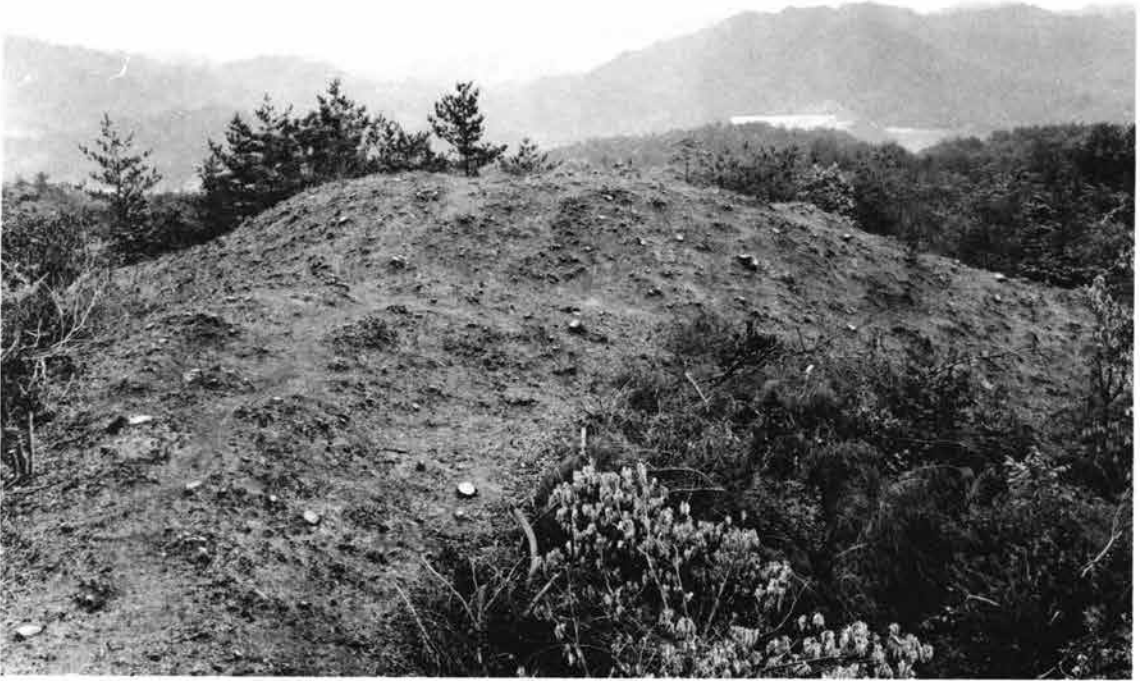
(2) 1号墳調査後全景（東から）



(1) 1号墳主体部全景（北から）



(2) 1号墳鼓形器台検出状況（北から）



(1) 2号墳調査前全景（西から）



(2) 2号墳調査後全景（北から）



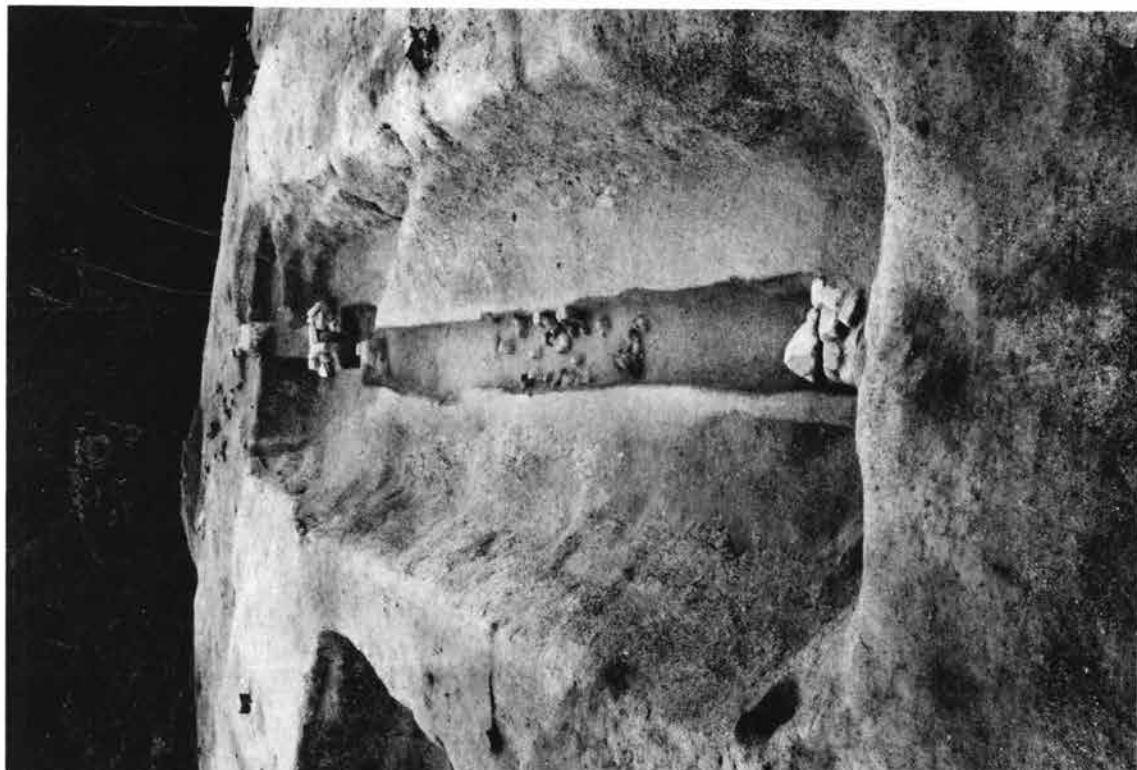
(1) 2号墳第1主体部全景(東から)



(2) 2号墳第1主体部歯牙検出状況(東から)



(3) 2号墳墳丘小型丸底壺出土状況(西から)



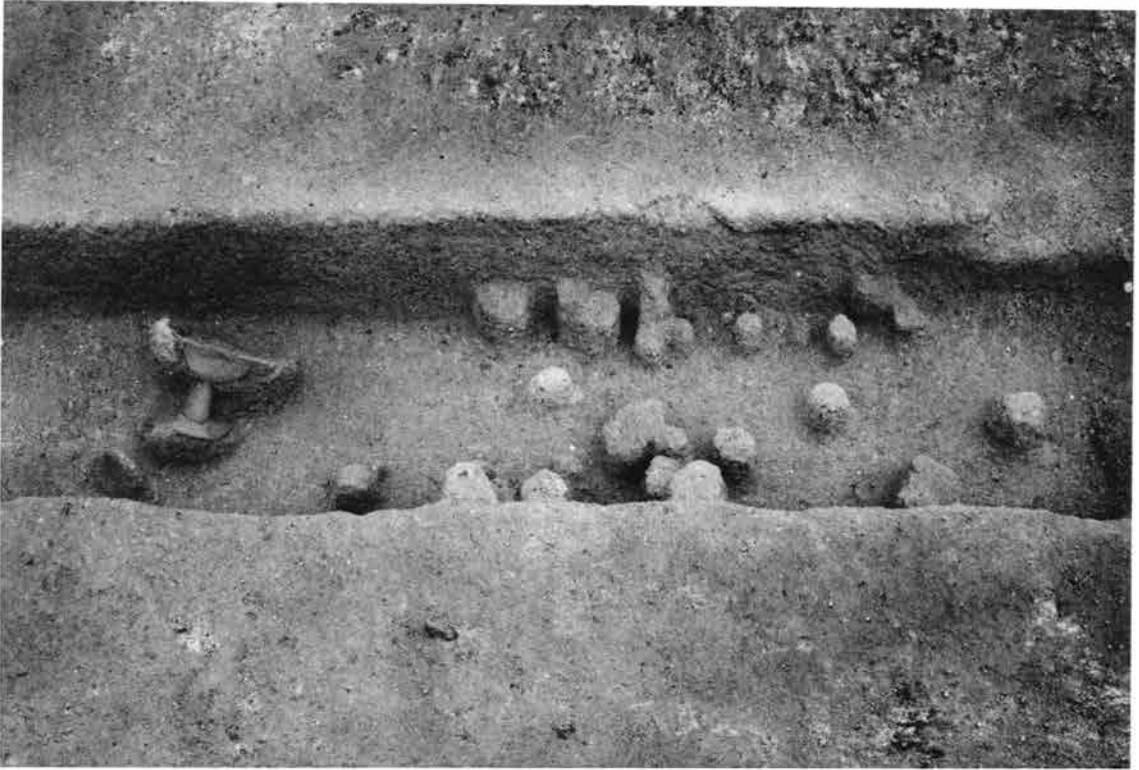
(1) 2号墳第2主体部全景(西から)



(2) 2号墳第2主体部東小口石積状況(西から)



(3) 2号墳第2主体部西小口石積状況(東から)



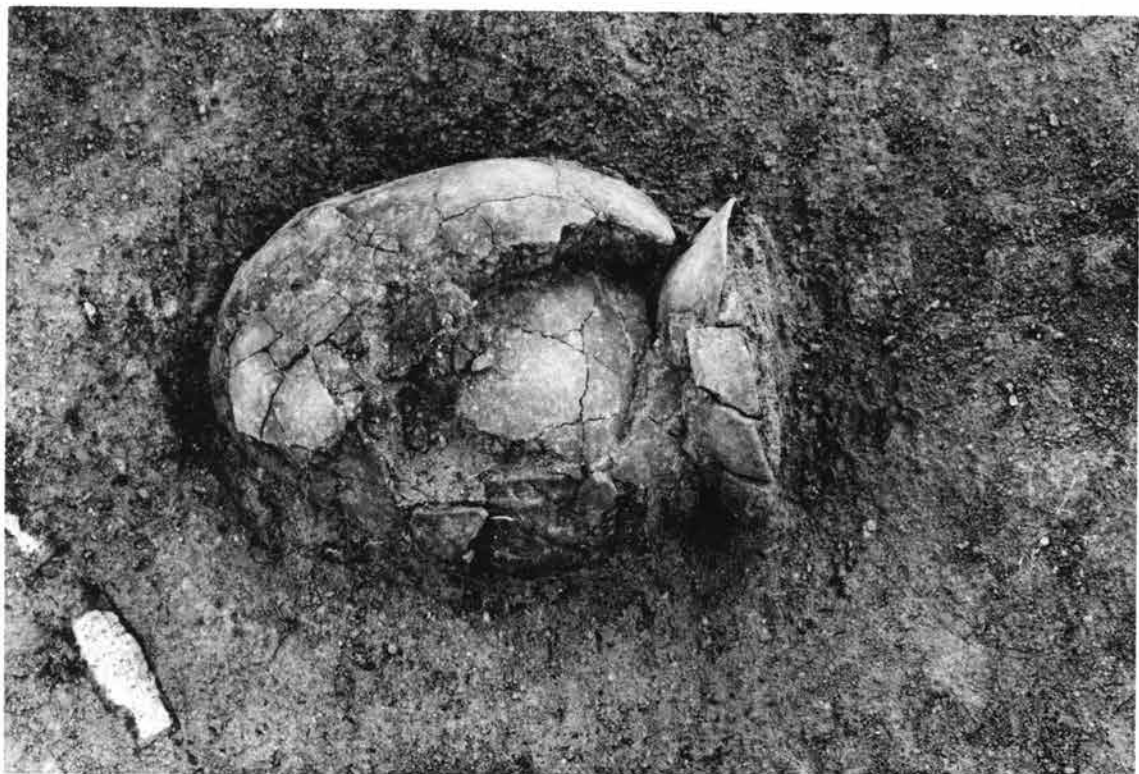
(1) 2号墳第2主体部遺物出土状況(南から)



(2) 2号墳第2主体部遺物出土状況  
細部(1)(高杯、南から)



(3) 2号墳第2主体部遺物出土状況  
細部(2)(刀子、北から)



(1) 2号墳第3主体部検出状況（東から）



(2) 2号墳第3主体部上半除去後（東から）



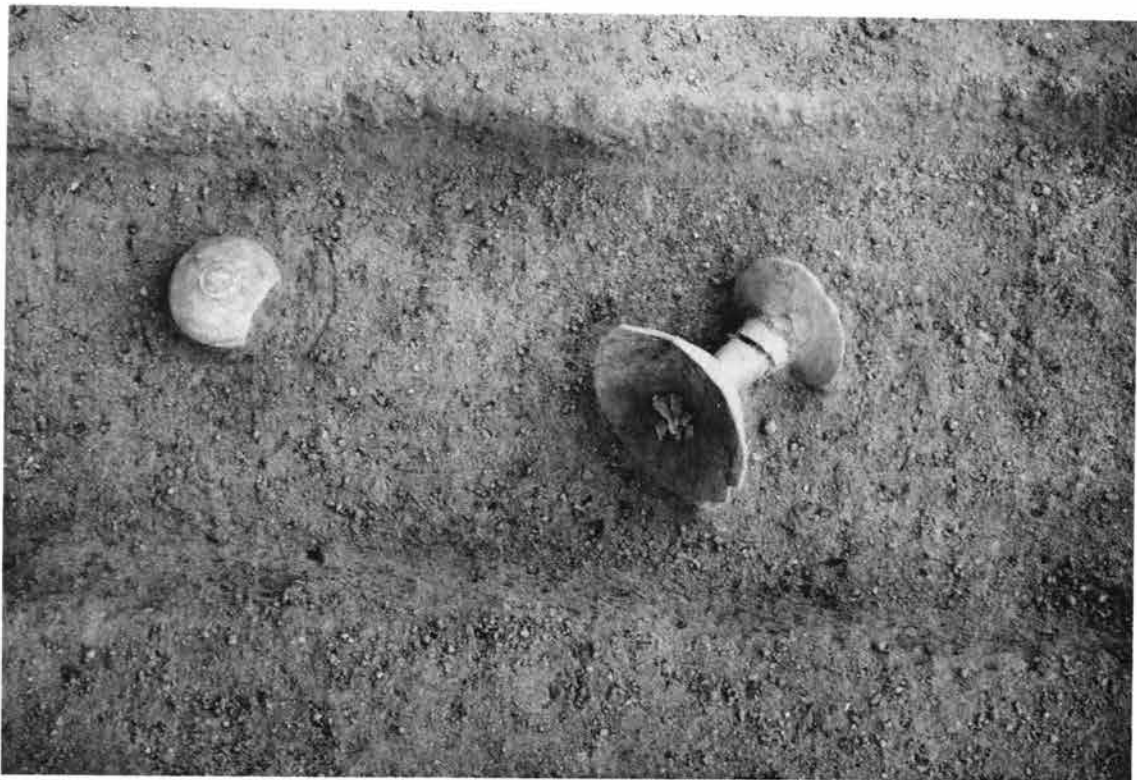


(1) 3号墳調査後全景（北から）



(2) 3号墳第1・2主体部全景（東から）

図版第62 通り古墳群



(1) 3号墳第1主体部遺物出土状況（東から）



(2) 3号墳溝内遺物出土状況（南から）



(1) SX01上部集石検出状況（北から）



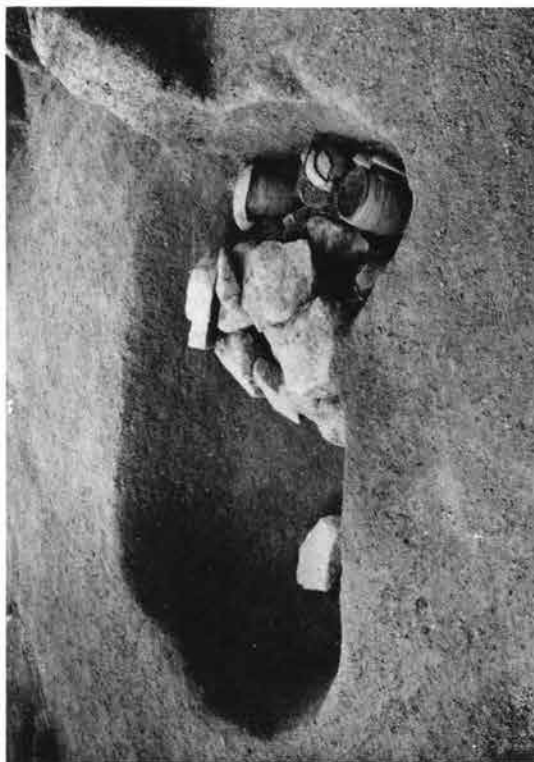
(2) SX02上部集石検出状況（西から）



(3) SX01完掘状況(西から)



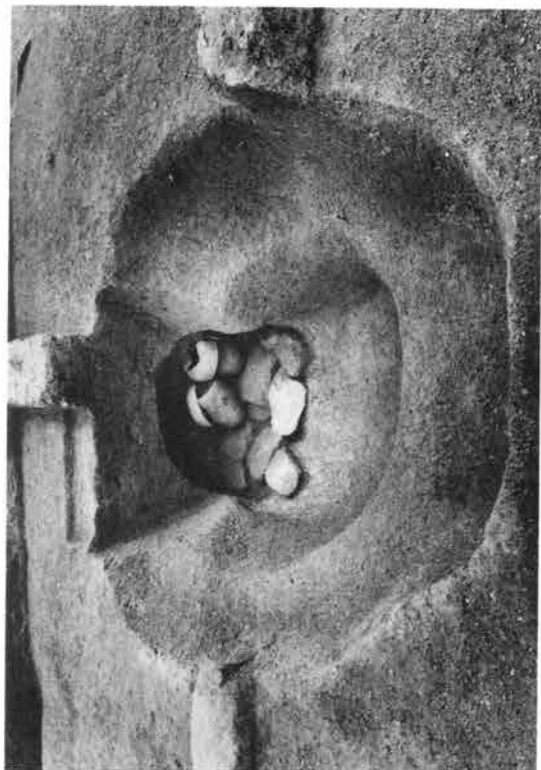
(4) SX01遺物出土状況(西から)



(1) SX01閉塞状況(1)(南から)



(2) SX01閉塞状況(2)(西から)



(3) SX02完掘状況 (西から)



(4) SX02遺物出土状況 (西から)



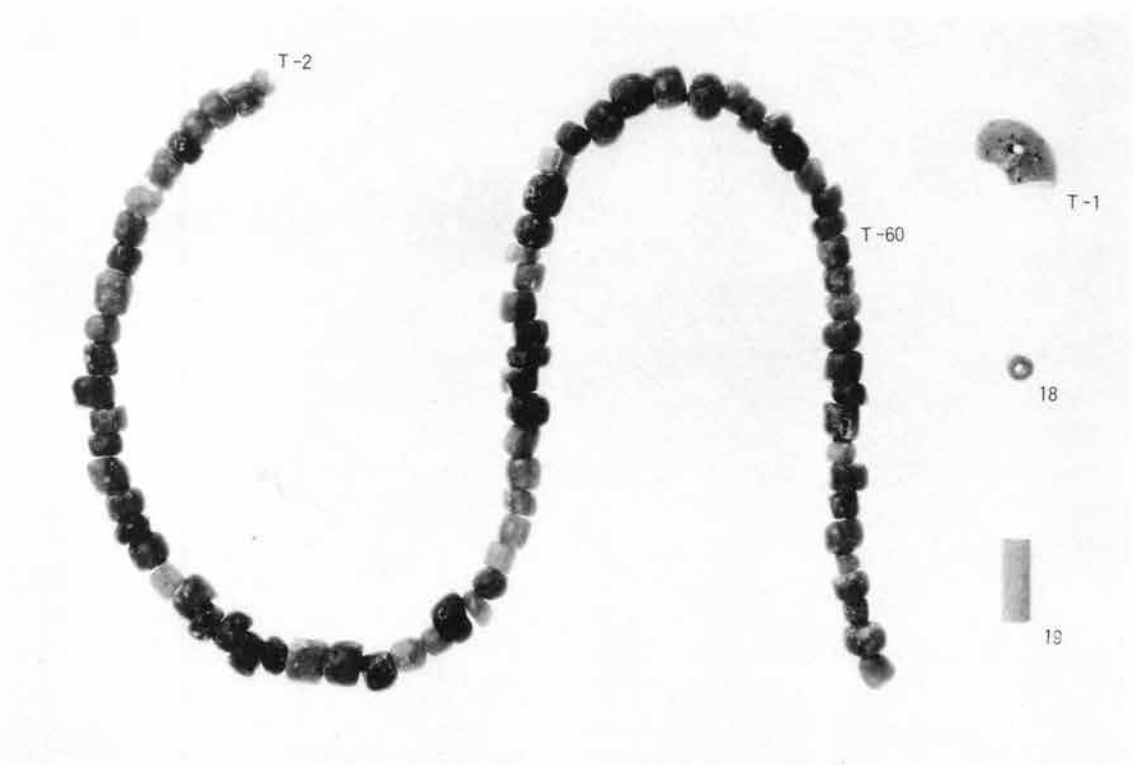
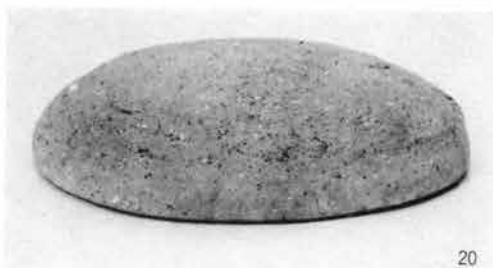
(1) SX02土層断面 (北から)

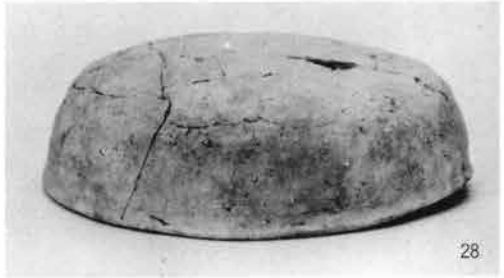
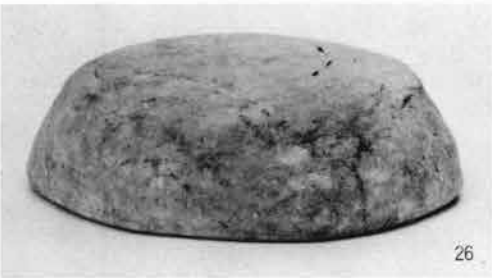


(2) SX02閉塞状況 (西から)



図版第67 通り古墳群







京都府遺跡調査概報 第50冊

平成4年3月28日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40の3  
Tel.(075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入  
Tel.(075)441-3155 (代)